

ピーター・イベットスン

ジョージ・デュ・モリエイ

2020.8.1 初版公開

2022.3.7 最終改訂

目 次

ピーター・イベットスン

ジョージ・デュ・モリエイ

解説に代えて（ダフニ・デュ・モリエイによる序文）

.....

ピーター・イベットスン[。]

彼のいとこレディ・*****による序文付き
(マッジ・プランケット)

本文中の＊は、作中人物(マッジ)または翻訳者による注があることを示す。前者は本文中に文字下げで、後者は見開きの左ページ端に置いた。

O toi qui m'apparus dans ce désert du monde
Habitante du ciel, passagère en ces lieux!

*
君よ、この世の砂漠の中や、私の前に現れた君よ、
この場所を通り過ぎてこへ、天上の住人よ！

ラマルティーヌ

第一部

序文

ほかに類のないこの自叙伝の筆者は、私のいとこです。彼は死にました。彼が三年間収容されていた——犯罪者用精神病院で。

彼は、（幸運にも深刻な結果に至らなかつた）殺人狂の突然の激しい発作の後、そこに移転しました。彼の親類である——殺人の廉で終身刑を宣告され、二十五年を過ごしていた——刑務所から、です。

当初、彼は死刑を宣告されていたのです。

彼がこの回想を書いたのは、——精神病院でした。私はその原稿を、彼の死後すぐに受け取りました。私たちの昔の友情に訴えるような、この上なく感動的な手紙と共に。そこには彼の文学的な遺言の執行者として、私を指名してありました。

*おお、この世の砂漠の……ラマルティーヌの詩『祈り』冒頭。

自分の生涯の物語を書き上げたらすぐに公表されることが、彼の望みでした。

私は、そうするのは不得策であることに気づきました。それは、長いこと埋もれ、忘れられた古いスキャンダルを無益に甦らせ、それによつてまだ生きている人々に苦痛や苛立ちを与えるからです。

彼の記憶は、彼を知つている人々、あるいは多少は知つているという人々——本当に気にかけていた人たちだけですが——の、いずれの中でも名誉回復を必要としないのです。彼の忌むべき行為は、彼が受けた挑発と、彼を挑発した人間の性格を知つている人全員（そういう人は大勢います）に、長い間大目に見られてきました。

熟慮の結果、そして助言を得て、私は（彼の死に際の望みが完全に挫かれないと認め）、若干の改変と修正を施して、この自叙伝を発表することに決めました。

人や場所の名前は、ほぼすべての箇所で変えてあります。まだ存命中の人々の身元確認と迷惑にあまりにも容易に繋がってしまうことがないよう、特定の詳細を伏せ、彼の人生経路のいくつかを省きましたが（例えば、学生時代の逸話や、近衛騎兵連隊の兵卒としての短い経歴などのほとんど）、それは、彼が時にかなり個人攻撃的になり、またおそらく彼が必ずしも公明正大であるとは限らないからです。そして、その他いくつかの出来事（特にオールド・ベイリーでの裁判）では慎重に言い換えをしました

が、真実性をあまり大きく損うことがないように、できる限り注意深く相当語句を選んでおきました。

こうした改変があることを考慮に入れれば、彼自身が書いた彼の自然な方の生活すべての出来事が、私が確認できたとおりに、いちばん小さな細部に至るまで完全に真実であると、今すぐに明言しても差し支えありません。

その初期の部分——彼があれほどの愛情を込めて書いたパッシーでの生活——については、私は個人的に保証することができます。彼が一、二度触れているいとこの「マッジ」とは、私のことなのです。

私は、彼が両親（私の親愛なるおじとおば）と一緒に住んでいた穏やかな住居をよく覚えています。それに、すてきな「セラスキア夫人」とご主人と娘さん、その家「パルワ・セド・アプタ」、それに「デュケノワ少佐」などなど。

彼は十二歳のときに両親を亡くしてロンドンへ行き、それ以来私は（人生の大半を外国で過ごしたこともあって）彼と会っていなかつたのですが、手紙は時々受け取っていました。

彼についての情報は、ほかの人たち、とりわけ彼をよく知っていた故「リントット

*オールド・ベイリー……中央刑事裁判所。

「夫妻」の親戚の一人や、彼を覚えていた連隊の将校たちからも、たくさん得ることができました。彼が「レディ・クレイ」の家で会った「教区牧師の娘」からも得られました。彼女は、ディナーのときに彼と交わした会話や、彼が急に気分が悪くなつたことや、翌朝トネリコの木の下で「タワーズ公爵夫人」と彼との長い会談があつたことなどを、完璧に思い出してくれました。彼女はクロッケーをプレイしていたうちの人だつたのです。

彼は、私が見てきた中で最も美しい少年で、とても魅力的で明るくて気立ての優しい子でしたから、誰もが彼を好きになりました。彼は残酷なこと、特に（その年齢の少年としてはかなり珍しく）動物に対する虐待が大嫌いで、たいへん誠実で勇敢でした。誰に聞いても（私が所蔵する写真で見ても）、彼はこの上なくハンサムに成長したのですけれど、自分の容姿が恵まれたことについては少しも評価していないようでした。他人のそれについてはかなりよく気にかけていたというのに。しかし、彼はまた、並外れて内氣で態度が控えめで、過度に遠慮がちで自己不信にもなりました。憂鬱な氣質で、孤独を愛し、ずっと一人で暮らし、誰にも心を開きませんでした。それなのに、愛情と敬意の両方の念を喚起するのです。それは彼が、言葉、拳動、作法、表情において、常に徹底的に紳士的であるように見えたためです。

彼はそうは言いませんでしたが、まず入隊し、次にやや不運な状況下で職に就いたために、生まれながらに属していた社会階級（というほどのものではありませんが）から自分が脱落したと感じた可能性はあります。また、同僚たちとは気が合わないことに気づいたのかもしれません。

彼の私への古い手紙は、素晴らしく率直で感情剥き出しです。

私が「タワーズ公爵夫人」と呼んだ女性（爵位はそのまま、名前は変えてあります）については、お話しするのが難しいと感じています。二人が二回だけ、彼が書いているような状況で会ったことは、疑う余地のない事実です。

死刑判決を受けた翌朝、董と、彼が言うところの奇妙なメッセージとが入った封筒を、彼がニューゲートで受け取つたこともまた確かなことです。手紙も董も私が持つており、書かれたものは彼女の手書きです。それについては間違いありません。

さらには、いとこの裁判と有罪判決のほぼ直後に彼女が自分の夫から離れ、かなり世間と距離を置いた生活をしたことも確實ですし、二十五年後、彼が突然発狂したことも確かです——刑務所で、彼女の悲劇的な死の数時間後、ことによると通常の伝達経路でそれを聞くことができたのよりも前に。彼が移動させられたのも本当です——

*ニューゲート……ロンドンにあつた有名な牢獄。一九〇二年に取り壊された。

精神病院に。そこで彼は、狂乱が鎮まってから何日も自殺傾向のある鬱状態が続きましたが、それも、ある朝元気いっぱいに起きたかと思うと、深刻なあらゆる精神的症状が治つてしまつたように見え、周囲の誰もが驚いた、そのときまでのことでし
た。彼は死ぬまでその状態のままでした。彼がフランス語と英語で自伝を書いたのは、
その人生最後の年の間でした。

あらゆる状況を考慮すれば、素晴らしい女性、女王や女帝の友人で、高い称号と高
名の持ち主で、美と魅力（と無限の慈善心）で当然のように世に知られ、非の打ち所
のない評判を持ち、英國社会で最も人気のある女性の一人が、私の哀れないところに対し、
この上ない温情をなおも抱いていたとしても、何も驚くことはありません。實際、彼
女がそうしていたことは、「クレイ卿」の家では公然の秘密でした。彼らがいなければ、
彼女は全世界に対して胸襟を開いてしまつていたことでしょう。

死後、彼女は父親から自分に入っていた全財産を彼に残しました。彼はそれを慈善
目的のために使うよう処理しました。彼女は、膨大な量の暗号手稿も残していました
——彼が、長期間の監禁の間に描くことを許された無数のスケッチの、その下の方に
書かれた注解で使っていたのと、どうやら同一の暗号です。その監禁は、（彼女の彼
への関心のため、そしておそらく彼自身の善行のために）彼ができるだけ耐えやす

いような状態にされたのです。（かなり異様な）そのスケッチと、公爵夫人の手稿は、今は私の所有となっています。

それらは、私が詮索する勇気を持てなかつた謎となっています。

両者の所持した書類から、私は、二人の血筋が間違いなく共通のフランス人女性の祖先から来ているという事実を確証することができました（かなり奇妙なやり方で発見されたことです）。私はその人の名前をほんのわずかに変えましたが、彼女の伝承は「サルト県」にまだ残っています。一世紀前、彼女はそこで有名人でした。彼女のヴァイオリンは高価なラマティですが、今は私の所有となっています。

彼の物語の自然ではない部分については、私は多くは語らないつもりです。もちろん、彼が自伝を書く前、完全に、どう見ても救いがたい狂気に囚われていたことは事実です。

長くは続かなかつたけれどもかなり激しい短い発作が終わつた後、彼が狂つていたのかどうかに関して、精神病院当局者の間では意見の相違と言いますか、むしろ疑惑があつたようです。

どちらの場合であつても、私には少なくとも確信があります。彼は空想家ではなく、自分が打ち明けた異様な精神的経験をすっかり信じていた、という確信です。

彼の狂気を私も共有していると思われることの危険を覚悟の上で——もし彼が狂っていたのなら、ですが——、私は、彼が正気であったこと、そして徹頭徹尾真実を語っていたことを、個人的には信じている、と申し上げることで、この序文を結びたいと思します。

マッジ・プランケット。



私はものを書く才に乏しく、たぶん教養ある読者（いつかそういう人がたまたま読んでくれたとして）ならたちまち気づくように、言葉や言い回しを巧みに用いる技能にはほとんど通じていない。

私を気にかけてくれたすべての人にとって、私は長いこと憐れみと軽蔑の対象だった——たった一人を除いては！ それでも、最後まで我慢して読んでくれれば読者も知ることになるよう、この地上に生きたあらゆる存在の中で、私はおそらく最も幸福で最も恵まれていただろう。

私の外面的生活と内面的生活は、まさに北極と南極——それくらいかけ離れていた。もし私が人生のぎりぎりの時期に自分の物語を世界に伝えると決めたにしても、それは、私の仲間の目の前で自分の名誉を回復したい、という理由からではない。彼らも、彼らの良い意見も、私は深く尊重している。私はいつも彼らを愛し、幸福を願つてきたし、できることならば、自分の好意を喜んで表し、彼らのそれを得たいとも思う。これを書くのは、私が最上の幸福を見いだした領域が誰でも到達可能で、私が手が

かりを与えさえすれば、多くの、さらに訓練を積んだ人やより才能に恵まれた人が、私よりもずっと良い目的のため、また人類のさらなる栄光と利益のために、そこを探検するようになるだろうからだ。それをする前提として、私がその手がかりをいかにして手に入れたかを示すために、浮沈に富んだ自分の経歴の話をしなければならない、というかさせてほしい。さらに、その話の中で、私は、最も些細な望みが私の法であつた人の最後の要請に従う。

もし私が必要以上に冗長に書いているならば、それは私の文学的作文術の経験不足——自分が思っているよりも良くも悪くもない自分を見せなければならぬ——という自然な望みに対しての——に帰せられるはずである。それに、魅力、言葉ではとても言いい表せない魅力のせいでもある。私が授かっていない才能や長所を使わないことには、どんなにそうしたいと痛切に感じても他人に知らせることが望めない、いちばんの関係者に対する個人的な追憶の魅力のせいなのだ。

そして、このことは、この回想録の自己中心性に対する謝罪へと繋がる。これは、私が後に発表したいと望んでいる別の、もっと長いその紹介でしかない。人類にとって最も重要な物語（これは事実だ）で、それでいて人の表面的な自己と内面的な自己について何もかも書くためには、しかも少しも利己的に見えることなくそれを行うた

めには、天賦の才と叫ぶべきものが必要となる——そして、私は微力な物書きにす
きないのである。

• • • • •

"Combien j'ai douce souvenance

Du joli lieu de ma naissance!"

「*どんなに甘美に記憶に留めてくる」とだらう
自分が生まれた場所の美しさを!」

この古風な趣のある詩は、私の外的の生活のほぼすべてにわたって、折あるごとに
私の頭の中をよぎってきた。果てしないバラードの中で何度も繰り返される折り返し
のよう——ああ！悲しげで単調なバラード、そのバラードは私のものだ。折り返
し句が甘美な単調まで繰り返される方はシャトーブリアンのものである。

*「どんなに甘美に……シャトーブリアン『フランス各地の思い出』より。」(111)ページも同じ。

私は時々、このリフレインの意味を十分に感じ取れる人は、それが書かれた場所、陽光に溢れたフランスで子供時代を、残りの生活をただのロンドン——あるいはただのロンドンよりさらに悪い場所——で過ごしたに違いないと思うことがある。私がそうであったように。もし私が幼時から後年に及ぶ全生涯をブルーミズベリー、クラークンウェル、ホワイトチャペルなどで過ごしていたら、私の幼少期は、後年それを振り返ったときに追憶する魅惑のほとんどが奪われてしまつたことだろう。

"Combien j'ai douce souvenance!"

「どんなに甘美に記憶に留めていることだろう!」

六月の美しい朝、暖かく甘美な空気がライラックとバイカウツギの香りで満ち、蝶やトンボやマルハナバチで鮮やかに彩られた魅力的なフランスの庭園、自分の外的的生活すべての中でも最も幸福なその日から、私は自分の存在を意識し始めた。

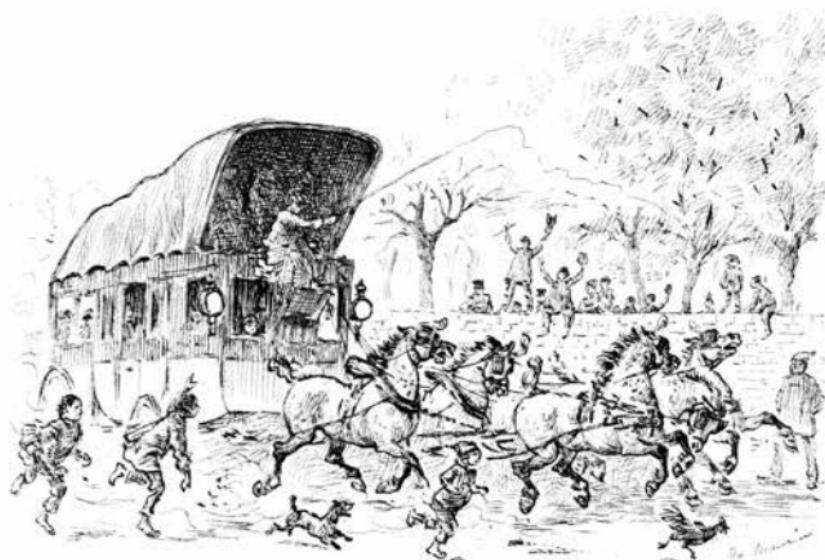
私には、ロンドンの中心部にある薄汚れた家についての曖昧な記憶（間に多くの空白を伴う）があることも事実である。陰気な広場と自宅に通じるもの寂しいまっすぐ

な長い通りがあり、それは私にとつてはほかのどこにも通じていなかつた。それから、昼と夜がごちや混ぜになつたような気がした、騒がしくてわくわくするような旅の記憶。とてもおとなしく控え目で行儀のよい、四頭のひょろりと痩せた茶色の馬たちが引く、青い駅馬車を思い出すことができる。赤いコートを着た車掌と彼の角笛。赤い顔の御者と彼のかすれ声、それに何枚もの肩マント。次に、きらきらとデッキが輝く汽船。美しく白いので、その上を歩くのは完全に冒瀆のようと思われた——その純白清浄さはあまり長くは続かなかつたが。それから、それぞれに灯台がある二つの木のさんばし桟橋、岸壁、青い仕事着を着た労働者たち、赤いズボンの口ひげを生やした小さな兵士たちや、素足の女性漁師たち。皆、私が離れてきたもつと一般的な別の言語と同じくらいよく知つてゐる言語を話していた。しかし、私はその言語を、甘い秘密の交換のためと、部外者を困惑させるために使う、父と母と私の占有的な所有物であると常に見なしていた。ところが、ここでは通りにいる小さな少年少女たちのよくなまつたく普通の子供たちが、私と同じように、私よりも上手に、それを話していたのである。

この後、奇妙で、巨大で、上部が大きい馬車の夢が来る。それは三台の黄色い馬車がくつついたように見え、てっぺんの荷物の山がすごく大きな黒いタール塗りの防水シートで覆われて、そのシートは端が幌ほろになつていた。その幌の下には、コンサー

ティーナのような変わった帽子をかぶり、口ひげを生やし、青い仕事着を着た一人の男が座っていた。彼は、悲鳴を上げて、いる気難しくて喧嘩けんかつ早い白とグレーの五頭の馬の上に大きな鞭むちを振り下ろし、鋭い音を立てていた。馬の首には鈴が、額にはふさふさした狐きつねの尾が付けられており、彼ら自身の尾は慎重に後ろに折り上げられていた。

彼らが両側に果てしない林檎りんごやポプラの木々が並ぶほこりっぽい道を通つて我々を導く間、父母と一緒に座っていた後部特別室から、私は彼らをよく見ることができた。裸足はだしの小さなわんぱく少年たち（彼らのパパたちとママたちは木靴とおかしな白のナイトキャップをかぶつ



「奇妙で、巨大で、上部が大きい馬車」

ていた）が、フランスの半ペニーのために私たちを追つて走ってきた！ それはイギリスの硬貨よりも大きく、持ち歩きが楽だった。我々は丘を上つて下つた。音を立てる木の橋を渡り、きれいな町の大ざっぱに舗装された通りを通つて大きな中庭へ。そこでは五頭の別の喧嘩好きなグレーと白の馬が、それまでの馬たちと交代するために待機していた——古い方の馬たちときたら、疲れ果てているというのに、まだ喧嘩をしている！

そして私は一晩中、眠りを求めて親しんだ膝から膝へと落ち着かず移動しながら、鈴と蹄^{ひづめ}の音と、車輪が転がる音と、絶え間ない鞭打ち音とが織りなす元気な音楽を聞くことができた。うたた寝から目を覚ますと、全力疾走している五頭の馬の白とグレーの背中の上に、赤いランプのまぶしい光を見ることができた。その光は、夏の闇夜の間じゅう、とても勇敢に我々を引っ張ってくれた。

その後、我々が翌日の夕暮れに広い川の岸壁にたどり着くまでには、すべてがかなり見飽きたものになり、また時々光が途切れるようになって、見分けにくくなつていった。岸壁に沿つてよく茂った木々の下を進みながら、我々はまた別の、赤と青と緑のランプを付けた五頭立ての乗合馬車に出くわした。我々の旅の終わりが来ると同時に、その馬車は長い旅が始まるのだ。

そのとき私は、自分たちがフランスの首都に入ったことを知った（なぜなら、私は教育水準の高い少年で、父が「ついにパリだ！」と叫んだのを聞いたからである）——私に非常に強い印象を与えた事実である——あまりにも印象深かつたためだろう、私は三十六時間ぶつ続けて眠り続け、目を覚ますと、自分が先に書いた庭にいることに気づき、現在まで（再び眠りに落ちたときを除いて）休止も断絶もなく連続してそこの自己を保ち続いている。

私の全外面的生活の中で、いちばん幸せな日が来た！

というのは、庭の端、空っぽの家禽小屋かきん（それぞれがそれ自体楽園だった）の間にある、道具や木材でいっぱいの古い小屋で、小さなおもちゃの手押し車を見つけたからである——それまでの自分の短い全生涯の間に遭遇した中では、本当に、最も異様で、まったく前代未聞で、予測不能で、ユーモラスで、優美で、絶妙に魅力的な物体だったのだ。

私は、家畜小屋から家禽小屋へとレンガの破片を運ぶのに何時間もかけ——魅惑的

な時間——、それ全部をもう一度戻すのにさらに魅惑的な時間をかけた。その間、我々が住むことになる家の内外で忙しくしている愛想のよいフランス人労働者たちが、時々「*p'tit Anglais*」「小さなイギリス人」に気さくな質問をするために手を止め、自分たちの言葉についての知識や手押し車の取り扱いについてのすぐれた手腕を褒めてくれた。私は、新たに芽生えた自意識とともに、自分の喜びの激しさ、鋭さ、極端



LE P'TIT ANGRAIS[小さなイギリス人]

さを不思議に思つたこと、また将来もそのような時間が果てしなく続くことを幸福な確信とともに期待していたことを、よく覚えている。

しかし、翌朝、天気は晴れで、手押し車とレンガの破片と愛想のよい労働者たちはちゃんと存在し、香りも風景も音もすべて同じだったというのに、最初の素晴らしい能天氣な有頂天さが再び得られることはなく、輝かしさと新鮮さは失われてしまつていた。

こうして私は、まさに人生の夜明けに、たつた一度押し寄せたこの世の喜びの潮流の最高水準点に達してしまつ——象牙の門のこちら側では二度とそこに達することはなかつた——、人間の幸福の極致を持続させるためには、甘やかなフランスの庭園や、小さなフランスの手押し車や、フランス語を上手に話し、称賛されることを愛していた魅力的で小さなイギリス少年以上の何かがなければならぬと悟つたのである——第四の次元が必要なのだ。

私はそれをやがて発見する。

しかし、最初のような魅惑的な時間はもうなくなつたにしても、私がそれを振り返るときにうつとりするような特質を持つ幸福な七年間が、その後に続くことになつた。

おお、美しい庭！ 薔薇^{ばら}、キンレンカにサンシキヒルガオ、アラセイトウ、スイートピーにカーネーション、キンセンカに向日葵^{ひまわり}、ダリアにパンジーにタチアオイにボピー、ほかに何があるのかは神のみぞ知る！ 私の甘美な思い出の中では、それらはすべて時間や季節に関係なく一斉に咲くのである。

五歳という多感な年齢で、このすべてを初めて見て、嗅いで、摘んだこと！ ガワー！ ストリートとベッドフォード・スクエアでの五年間の後に、このような王国を継承したこと！ 私がこれらに魅了されたのは、すべてのものは相対的で、あらゆることは視点によって変わるからである。チャツツワースの所有者（とその庭師たち）にとつては、私の美しいフランス庭園も小さなものに見えたことだろう。

そして、昆虫の世界——チャツツワースもそれらにはかなわなかつた（実際のこところは、残念ながらたぶん虫はないのだろう）——は、何と美しく、面白く、滑稽で、グロテスクで、恐ろしいことだろう。誇らしげなマルハナバチから、ハサミムシとそ

*象牙の門……ギリシャ神話で、夢の国に通じる門のこと。この門からは逆夢が出るという。
*チャツツワース……イングランドの大邸宅。デヴォンシャー公爵の屋敷。

のいとこ）のアクマサビイロハネカクシに至るまで。それに大きく平らな石の下の湿った暗闇に繁殖する、うじやうじやとたくさんの脚があるすべての連中も。それらすべてと友達になつたことを思うと——薔薇もムカデもすべて——、そしてその後の私の外面的生活のほとんどが、蚤のみや蜘蛛くもとモエ一度と友達になる」となく、剥き出しの白塗りの壁の間で費やされたことを思うと、何と幸福だったことか！

私たちの家（ちなみに私が五年前に生まれた場所である）は、緑の鎧戸とスレートのマンサード屋根のある古い黄色の家で、この庭と通り——長く曲がりくねった通りで、無造作に板石いたいしが敷かれ、互いに長い間隔で吊られた石油ランプがあつた——の間に建っていた。このランプは、月光が弱い夜、夕暮れ時に滑車で下ろされ、油が補充されて点灯され、その後の数時間、暗闇でもものが見えるようにするために再び引き上げられた。

家の向かいには男子校があつた——「Maison d'Éducation, Dirigée par M. Jules Saindou, Bachelier et Maître ès Lettres et ès Sciences, [寄宿制教育施設、文学と科学のバカラア取得者であり教師である]ジュール・サンドー氏の經營による」。サンドー氏はある地質学論文の著者であり、そこには原始時代の軟泥なんぢにおける太古の爬虫類の闘争を描いた、脳裏に焼き付いて離れないような恐ろしい絵があつたため、私はそれを忘れることが

ができないでいる。科学好きの父が、私の六歳の誕生日にそれをプレゼントしたのだ。それで私はたくさん悪夢を見る羽目になつた。

家の窓からは、遊んでいる少年たちの姿を見たり声を聞いたりすることができ——ほどよい距離では、フランス少年たちの声はイギリス少年たちとまったく同じように響くが、青いブラウスと黒っぽい刈り込み頭のため、見た目はそろは見えない——、また運動場にはサンドー氏の誇る体育用器具を見ることができた。「Le portique! la poutre!! le cheval!!! et les barres parallèles!!! 「吊り輪用横木！ 平均台!! 鞍馬!!! それに平行棒!!!!」。サンドー氏の学校案内にはこのように書かれていたのだ。

通り（「ポンプ通り」と呼ばれていた）の両側には、西には目が届く限り、適度な違いはあれど私たちの家と変わらない住宅があつた。マロニエや篠懸の木やアカシアやライムの葉がその上に茂るのが見える庭壁。あちこちの、石の柱で守られた巨大なポータルと鉄の門は、多くが鎧戸を備え、陽の当たる緑樹に囲まれて、神秘的なレンガと漆喰と花崗岩の住居に入る手段を与えていた。

東を見ると、近い距離には、たくさんのガラスが付いた古風な窓のある素朴な店が見えた——リヤールという食料雑貨店、コーバンという家禽商、その他いろいろな店々。そして、この楽しい通りは、ベッドフォード・スクエアや新しいユニバーシティ

カレッジ病院ではなく、一方は凱旋門がいせんもんを通つてパリへと至り、もう一方はセーヌ川へと至る。あるいは、右に曲がればフランス王ルイ・フィリップ一世のブローニュの森を通つてサン・クルーへ——駅馬車と急行列車が違うのと同じくらい、今日のパリやブローニュの森とは違つてしまつてゐるが。

美しい庭の片側にはもう一つ美しい庭があつて、桃、西洋梨、プラム、杏あんずの木々で覆われた高い壁によつて私たちの庭と分離させていた。別の側にはジャスミン、クレマチス、サンシキヒルガオ、キンレンカをまとつたもう一つの低い壁があり、私たちはその小さなドアを通過することで、アーモンドの木、アカシア、キングサリ、ライラック、サンザシなどのある長くてまつすぐな大通りに出ることができたが、それらの木々があまりにもみつしりと植えられていたせいで、鳩つばの絡んだ両側の壁はほとんど見えなかつた。日が照るときにそれらが地面に作る斑点の美しいことと言つたら！ その通りの一端は「ポンプ通り」に接しており、そこからストーン・ポータルの間の精巧な彫刻が施された高い鉄の門で仕切られ、側面にはフランソワおじさんとおばさん、すなわち老管理人とその老いた妻に守衛された「porte bâtarde〔中型の門〕」があつた。彼らの靈よ安らかに、天国があの優しく穏やかな魂に安息を与えられんことを！

大通りの反対側の端は、そちらにも鉄の門があり、所有者が誰もいないと思われる

大きな私有公園に通じていて、そこは自由に出入りできた——まさに歓喜の荒れ地で、天国だった。絡み合った恐怖の茂み、あまり危険ではない白亜の崖、使用されていない古い採石場と暗い洞窟、緑豊かな草地、苔の茂った池、蕪煙、松林、マロニエの木立と並木道、夏の正午には暗くなる胡桃^{くるみ}の木とサンザシの湿っぽい狭間。そこから遠くを偵察できる、草木の生えていない吹きさらしの山岳地帯。獰猛^{どうもう}な野獸や野生動物が隠れたり、小さな少年が危険の多い探検を求めて完全に安全に歩き回ったりするための、あらゆる種類の荒れた恐ろしい場所。

この広大な囲い地（耳慣れない歌のようない音、ブーンという音、ヒューヒュー鳴る音、ブンブンいう音、チ、チという音、低いうなりの音、ゲロゲロいう音、見慣れない飛ぶもの、這うもの、跳ねるもの、よじ登るもの、穴を掘るもの、水をはね散らすもの、水に飛び込むもの、等々でいっぱいの）はすべて、何年も放置されていた——恐れることなく知恵の木の果実を集めて食べ、純真さを失うことなく生き方を優しく学べそうな楽園。自力で新しい処女性を作り直して、再び原始的になつた森。美しい自然が自分自身の甘美な意志を再び主張し、まるで美が百年近くも何からも乱されずに眠っていたかのように、あらゆるものを集結させ、絡み合わせ、おとぎ話の魅惑の王子をただ待っていた場所——あるいは、ああ！ 数年後に判明したように、投機的

不動産開発業者や鉄道技師を——それら現代の王子たちを待っていた場所。

私の独りよがりな記憶はこの領域がほぼ無限であることを私に告げたものだが、私はその境界線も覚えている。特にこのパリ郊外に割り当てられた自然地理学についての私の知識が、この地上の楽園に控え目な境界を与えるよう指示する。そこは、これもまた容易に乗り越えられるフェンスによつて、ルイ・フィリップのブローニュの森から分離されていた。その森については、その名前の由来となつてゐるかなり古い町と、そこにあるサン・クルーの川、橋、宮殿、庭園、山、森などの魔法のような組み合せへと通じる主要通りを除いて、何に対しても境界を与える気にはなれない。

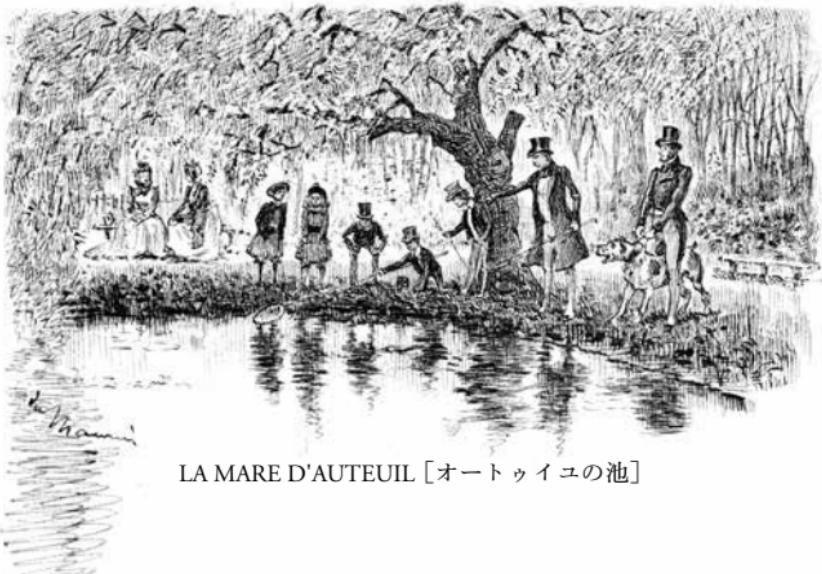
ブルームズベリーのちょうど中心から来たばかりの小さな少年に（そんな新鮮さがあるのなら）、これ以上の何が必要だろう？

その小さな少年の至福でいっぱいのカップに欠いてはならない一滴として、パッセーからサン・クルーに行く途中の池があつた——オートゥイユの池と呼ばれる忘れられない池で、ルイ・フィリップのブローニュの森が誇ることができる唯一の水の宝^{ほう}もつ物である。というのは、あの純真な時代には、人工流路によつて水が供給される人工湖が存在しなかつたからである。プレ・カトランも、アクリマタシオン庭園もまだない。森はただの森であり、それ以上のものではなかつた——何百エーカーにも及び、何千

もの野生の生き物を守り、木々が密集した自然のままの森だったのだ。真ん中は謎のように深いものの、この有名な池（何世紀も前から存在したかもしれない、まだ存在する）は大きくなかった。どこから石を投げてもほぼ対岸まで届くだろう。

森（今は刈り取られている）に隣接する三辺は、木々の外縁部によつてほこりっぽい道路からちょうど隠されていた。恋に悩む少数のパリジャンがその存在を思い出し、その素晴らしさの中で悩みを忘れる日曜午後と木曜午後を除き、そのすべてを楽しむことができた。

そこにいるだけで幸福になつた。あらゆる居住可能な天体の中でも最も隔離され、最も絵のようで、最も美しい池——池の中の池、唯一無二の池——であるだけでなく、世界中にあるほかのどんな池よりもはるかに多くの数および種類の、素晴



らしい昆虫や爬虫類で満ち溢れてもいた。少なくとも、私はそれが事実に違いないと信じていた。生き物たちは無尽蔵だったからだ。

その生き物たちを見て、彼らの方法を学び、彼らを捕まえ（時々これをした）、家に持ち帰り、優しく接し、飼い慣らそうと努め、我々の方法を彼らに教えること（これが変わらず不成功だったのは事実だが、おお、でもすごく愉快な仲間だった！）は、七年間断続的に続いた趣味になった。

オートウェイユの池！　まさにその名前に魔法がある。あの当時その周りに集まつたすべての関連物から、永遠にその名前が離れないようだ。

私はどんなにそれを愛したことだろう！　夜、温かいベッドでうたた寝をしながら、私はそれを畏敬の念をもって思い、一、二時間前、夕暮れにしぶしぶ離れたとき、それがどんなに莊厳に見えたかを思ったものだった。それからもっと後のそれを想像する。星々の下、暗い茂みの中で、深く、冷たく、静かに横たわり、淀んだ表面の下で泡立っている異様で不気味な生命があるだけのそれを。

それから徐々に水が下がり、無防備だった葦^{あし}が不吉に動き、音を立て始め、覆いのないぬかるみの中の根の間から、生きているすべてものが中央に向かって急ぐ——跳ねたり、滑空したり、必死にもがいたりしながら……。

水が減つて下がると、すぐにぬるぬるした泥の底が現れ、数ヤード下のそこには、特大サイズのずんぐりした山椒魚、^{さんじょうぎょ} 魚ほどの大さの、長らく行方不明だった忘れられたオタマジヤクシ、巨大な鼈蛙^{ひきがえる}、大きくて平たい甲虫、それに毛むくじやらのもの、鱗^{うろこ}のあるもの、棘^{とげ}だらけのもの、とろんとした目つきのもの、丸く膨らんだもの、不格好なもの、そのようなありとあらゆる名も知れない怪物たち、何百年もそこで眠り続けてきた泥の色をした泥沼の子孫が目を覚まし、出たり入ったり這い回り、のたうち、身をくねらせ、互いを食い合うのだ。私の『Manuel de Géologie Élémentaire』「基礎地質学の手引き」に載る大きな蜥蜴^{トカゲ}や両生類のように。この本は、子供用のイラスト付きの版で、文学と科学のバカラロア取得者であり教師であるジュール・サンドーの著作である。

それから私ははつとして目を覚ましたものだった。冷たい汗をかき、肌を荒らし、髪の根元をかき回し、体を突き抜ける氷のような寒さの中で。そして私は明日の朝を熱望する。

数年後、遠く離れたクラーケンウェルの冷たい霧の中で、「自分が生まれた美しい場所」を再訪したいという思慕の念にたびたび駆られたものだが、それは私が最も思い焦がれたオートウェイユの池に向けてのものだった。それこそが北極星のような道し

るべの星であり、まさに郷愁を誘う切望の的なのだつた。私の绝望的な空想の翼は常にそこへと私を連れていた。それは、おお！　あの太陽に照らされた草深い水辺をもう一度踏み、陽気なオタマジャクシが群がり、緑色の蛙が小人のように真っ逆さまに飛び込み、ウォーターラットが柳の根元の巣穴まで泳ぎ、ウマビルが睡蓮の茎の間をうねって這うのを見るためだ。そして、私と私のものがいつでもいちばん幸福だったあのすべての場所の、快い、もう戻れない過去の優しい夢を見るためなのだ！

"...Qu'ils étaient beaux, les jours

De France!"

「……何と美しかつたことか、

あのフランスの日々はー」

• • • • •

私が書いた大通り（その大通りという呼び方は、私にとってはいまだにそのままで、
a v e n u e

これからもずっとそうだらう）には、道の半ばくらいの地点の右側に、ペレ夫人といふ人に管理されていた *maison de santé* 「私立療養所」あるいは宿泊施設があつた。私たちが着いてからしばらくして、フランスを侵略しようとした四、五人の紳士が、見えた目が怖い王位要求者を先頭に、集結のための帝国のシンボルのような飼い慣らされた鷺わしを連れ、ほかの者に交じつて賄まかなかい付き下宿にやつて來たことがあつた。

その遠征は失敗していた。王位要求者は要塞に引き渡された。鷺の方は、ブローニュ・シェル・メールの公立食肉処理場に安息の場所を見いだし、長年の間そこに彩りを添え、たぶんそれ以前には食べたことのないような餌えさを食べていた。忠実な従者であるヴォワジール大佐、デュケノワ少佐、オドニ大尉、ロンバル博士（および名前を忘れた者が一、二名）らは、ペレ夫人の家の仮釈放中の囚人たちで、あまり厳しい監禁状態には見えなかつた。

私は、彼ら全員を知り、愛するようになつたが、特にニユーカム大佐のフランス語へのほぼ直訳であるデュケノワ少佐は好きだつた。彼は私のことを、イギリス人であるのにすぐに気に入ってくれ、私に軍事訓練をしたり、ヴィエイユ庭園で行われていた体操を教えたり、新しいおとぎ話を話してくれたりした。七年の間、午後毎日だつ

* ニューカム大佐……サッカレーの小説『ニューカム家の人々』の主人公。



"PRÉSENTEZ.....ARRRMES!" 「[捧げ……銃！]」

たのは確かだと思う。シェヘラザードは絞殺用の綱から自分の首を守るために、ある王様にそれ以上のことはしなかった！^{サルタン}

Cher et bien aimé "Vieux de la Vieille!" 「親愛なる、最愛の「老兵」よ！」大きな鉄灰色の口ひげ、黒いサテンのストックタイ、染み一つないリンネル、ほとんどスカートみたいな、かなりだぶだぶの長い緑色のフロック・コート、ボタンホールには粹な赤リボン！ 彼の記憶が、その敵国人であることを世襲した敵国人や、小さなイギリス人専制君主とその仲間の心の中で、どんなに温かく愛情深い好意とともに永遠に生き生きと甘美に保たれることになるか、彼はほとんど予見しなかった。

• • • • •

ペレ夫人の家の向かい、その大通りで彼女と私たちの家以外の唯一の住居は、ギリシャ風ポーチのある魅力的な小さな白い邸宅で、そこには金色の文字で「*Parva sed Apta* ^{*} *バルワ・セド・アプタ*」と刻まれていた。しかし、私たちが到着してから二年は居住者がいなかつた。

*バルワ・セド・アプタ……「小さながらも調和の取れた」の意のラテン語。

当時のフランスの温和な流儀で、私たちはすぐに彼らやその他の隣人たちと親密な間柄になり、一日中互いに何度も会っていた。

長身で美しく若い母 (*la belle Madame Pasquier* 「美しいバスキエ夫人」、と優雅に呼ばれていたような) は、パリで生まれ、一時期そこで育ったイギリス人女性だった。陽気で愉快な父 (*le beau Pasquier* 「美男子バスキエ」、と呼ばれたが、彼もまた背が高く、見た目がよかつたからだ) は、ロンドンで生まれ、一時期そこで育ったイギリス国民だったが、フランス人だった。恐怖政治時代の、フランスからの *émigrés* 「移民」の子供だったからだ。

彼は、壯麗で目を見張るような声——バリトンとテノールを合わせたようで、驚異的な豊かさ、甘美さ、柔軟性、力強さがあった——に恵まれており、オペラで歌いたいと思っていた。実際、パリ・コンセルヴァトワールで三年間そのための勉強をしており、そこでは向かうところ敵なしで、この上ない期待を寄せられていた。ところが、彼の家族は最も黒いカトリックかつ最も白く染まつた正統主義者で——また極貧でもあり、そのような不敬で軽蔑的な職業に反対していたのである。そういうわけで、世界は一人の偉大な歌手を失い、その偉大な歌手は富と名誉の源を失つたのであった。しかし、彼は生活できれば十分で、持てるものがだいたい同じくらい多くて少ない

妻（異端者！）をもらったのであった。彼は、時間および自分と妻の両方のお金を、科学的な発明に費やした——ほとんど成果はなかつたが、それは彼が、歌唱法は学んだものの、それと同じように発明法を教えてくれるコンセルヴァトワールには行かなかつたからなのであつた。

それで、「自分の船が戻^{成_功}つてくる」のを待つ間、彼は妻を楽しませるためだけに歌つた。ナイチングールが歌う、などとよく言われるようだ。自分の余分なエネルギーを軽減するためと、使用人たち、フランソワおじさんとおばさん、ナポレオンの五人の追随者、聴きたがるあらゆる者たち、そして最後に、持てるものがいちばん少ない（また多い！）私を魅了するために。

というのは、このひどく軽視され、本人がほとんど重きを置かなかつた才能は、すでに私にとつてこの世で最も美しく神秘的なものだつたからだ。これに次ぐのは、母のハープとピアノの快い演奏だつた。彼女は称賛に値する音楽家だつたからである。

夜に演奏するのが彼女の習慣で、私の寝室のドアを少し開いたままにし、応接間のドアも同じようにしたため、私は眠りに就くまで彼女の演奏を聴くことができた。

在宅中、父は時々、新しい発明を追つて部屋の中を行ったり来たりしながら、気の向くままに鼻歌を歌つたり、母が演奏している曲のメロディを歌つたりしていたもの



「私が死んで静かに横たわるとき
おお、私の愛する女性に私の心臓を届けてください！
それは微笑みとワインのおかげで生きていたと告げてください
ここに残っていた間、いちばん明るい色合いの！」

【訳注】トマス・ムーア『遺産』の一節。

だった。

彼は「ピアノ・ピアノ」で歌つたりハミングしたりしているだけなのに、その甘く鋭く雄々しい聲音はあらゆる空間を満たしてしまったように思われた。

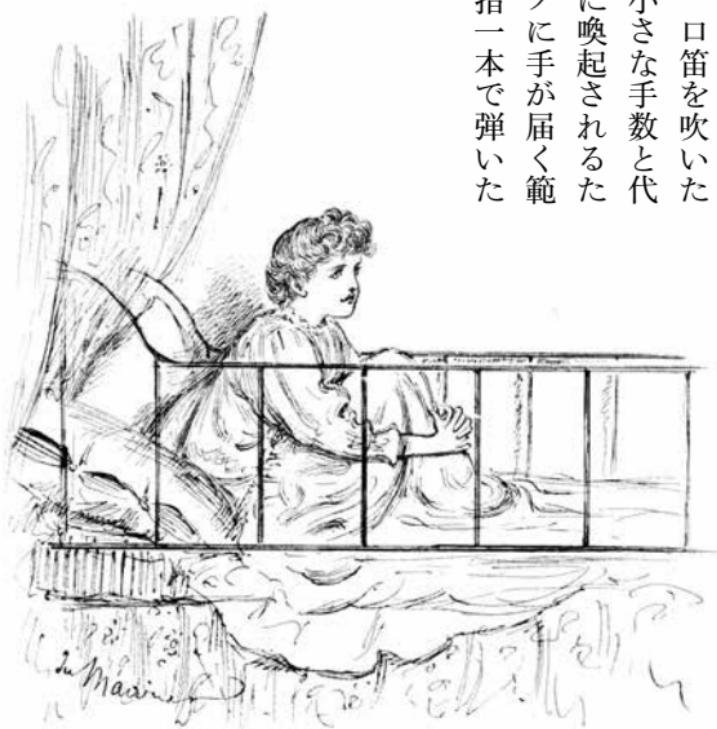
静まつた家が共鳴板となり、ハープは補助的なチリチリ音にすぎなくなり、私の小さく感じやすい体の骨格は、影響を及ぼすことなど自覚していない父の声の波を受け、ぞくつとしたりわくわくしたりして震えたものだった。それに、おお、彼が歌う魅力的なメロディ！

彼のレパートリーは無尽蔵で、彼女のそれも同じだった。素晴らしいメロディの無限の連続が、あの幸福な時代の間じゅう鳴り響き続けた。

人が溺れたり高所から落ちたりするときに、過去の人生全体が一度の閃光のように心の視覚の前に精密に展開されると言っているが、甘美でお金で買えないような家庭の愛の七年間もまさにそうなのだ——質素で活氣ある帝国前のフランスの四季の変化が七回、素晴らしい家具、形、色などすべてを備えた理想的な家、木々と花々でいっぱいの庭、大きな公園とそこに棲息するすべての野生動物たち、町とその住民、歴史的な川の一、二マイル、凱旋門からサン＝クルー（とそこにある池の中の池）に届くほど大きな木、季節の変化がもたらし得るあらゆる風と天候——このすべてが、少な

くとも百の異なる曲のすべての小節に埋め込まれ、防腐処理をされていた。口笛を吹いたりハミングしたりする程度の小さな手数と代償を払うだけで気の向くままに喚起されるために、あるいは——私がピアノに手が届く範囲にいた場合は——ピアノを指一本で弾いたりするためにはえ。

私にとって生涯ずっと続け
るのに十分なほどで——もち
ろん、適度に儉約した生涯だ
が——、過ぎ去ったものの精
髓と、もうなくなつた日々を
保存するためのメロディック
な小節の不思議な力を使い尽
くすことは、頻繁すぎる実験
をもつてしてもないだろう。



「おお、ナイチングールよ！」

おお、ナイチングールよ！ そなたが自分で歌うにせよ、さらに良いことに、そなたの喉の声ではなく燃え立つような心と巧妙な脳で发声するにせよ、またそなたがほかの多くの者が歌うための歌を作るにせよ、そなたの名前に祝福を！ その響きはまさに、どこの国と言葉でも甘美なものだ。ナイチングール、ロシニョール、ウジニヨーロ、ブルブル！ ナハイガルでさえ、ドイツのハノーバー州の人を家庭教師にしていた金髪のイギリス人少女の口では聞き苦しく響かない！ そして、実際、その最高の音楽が作られるのは、ナハイガルの国なのだ！

そして、おお、ナイチングールよ！ そなたの歌を愛する者に、決して、決して出し惜しみをせぬように——そして、それを好まぬ者に歌って浪費することのないよう

に……。

こんなふうにセレナーデを聴きながら、私は目を閉じ、暗闇と温かさと天国的な音に包まれて、眠りに誘われたものだった——おそらく夢を見るだろう！

といふのは、私は幼少期、よく夢に付きまとわれたからである。最初、私はそれを現実だと思い込んだ——忍耐強い読者がやがて認めることになるよう、人類にとつてある程度の興趣と重要性を持つ超越的な夢。だが、それを解明したり説明したりで

*ロシニョール、ウジニョーロ、ブルブル……順にフランス語、イタリア語、ペルシャ語。

きるようになる前に、私の人生は何年も過ぎ去った。

壁に顔を向けさえすれば、すぐに自分が、白い髪で若い顔をした女性と一緒にいることに気づいた——とても美しく若い顔だ。

私は時に彼女と手を繋いで歩き——私が完全に小さな子供なので——、水車場まで続く曲がりくねった小川の近くの塔に棲む数え切れない鳩たちに、一緒に餌をやつた。その夢があまりにも美しくて、よく目が覚めてしまったものだった。

私たちは時に暗い場所に入った。そこにはたくさんの穴が開いた火の入った炉があり、多くの人が働き、動き回っていた——彼らの中に、白い髪と女性のような若い顔を持つ男がいて、靴には美しく赤いヒールが付いていた。そして、彼の指導で、私は炉で色付きガラスの小さくてかわいいコックドハットをうまく作ることができた——宝物だ！ そして、その純粹な喜びが私を目覚めさせたものだった。

白い髪の女性と私は、時に四角い箱に向かって一緒に座った。彼女はそれからすてきな音楽を作り、私のお気に入りの歌を歌つた——大好きな歌である。ところが、この歌の終わりが来る前にいつも目が覚めてしまふのだった。それを聴きながら、耐えがたいほど強烈な至福を感じたからである。目覚めたときに覚えていたのは、「triste — comment — sale 「悲しき——どうして——汚い」」という言葉だけだった。

夢の中ではよく知っていたそのメロディも思い出せなかつた。

まるで私という存在のいちばん深い所にある核のようなもの、子供らしい聖域のようものが、極度に纖細な回想の源泉を分泌しているように思われた。それは、睡眠中、ある刺激のもとで時々活発になり、この奇妙な夢の中に自身を吐き出す——影のように淡くてかすかなものだが、いつも変わらずあまりにも限りなくあまりにも沁みるような至福感を伴うため、私は常に恍惚状態の神秘的な混乱の中で目を覚ましたものだつた。そのわずかな記憶は、それに続く多くの時間を祝福し、幸福なものにするのに十分であつた。

• • • • •

この三人の幸福な家族のほか、近所（タワー通り）にはビダルフ夫人と、私のおばプランケットがいた。おばは未亡人で、アルフレッドとチャーリーという二人の息子と、マッジという娘と一緒に住んでいた。彼女たちもまた見た目が——それはもう——美しく、金髪と白い肌の育ちのよいアングロ・サクソンというタイプで、ざつくばらんで開放的、快い物腰を持ち、忌々しいイギリス的プライドなどは持ち合わせていなかつ

た。

そういうわけで、私たちは、少なくとも身体的には、ちょうどその頃、ワーテルローが忘れられていなかつたパッシー・レ・パリでは評判が芳しくなかつたイギリスの名前に、大いに名声をもたらしたのである。また一方で、やがて私たちの国籍は、見た目がよいという理由で大目に見られた——サンドー氏が、（自分の学校の入学案内を持って）訪ねてきて、芝生の大きな林檎の木の下に私たち全員が集まっているのを見つけたとき、喜んで派手に叫んだように。「non Angli sed angel!」^{*}「イギリス人ではない、天使だ！」】

しかし、パッシーのイギリスの美貌は、セラスキア夫人という人の、その列への記憶に残る追加をすぐに受けることになった。病弱な小さな娘と一緒に、金文字で「パルワ・セド・アプタ」と非常に控え目に書かれている家に引っ越してきたのだ。

彼女はイギリス人、というかアイルランド人で、ハンガリー愛国者で科学者のセラスキア医師（有名なヴァイオリニストの息子でもある）の妻であった。医師はたいへんな長身で痩せた男性で、ほとんど巨人のようであった。真面目で優しそうな顔と、預言者のような頭を持っていた。私の父同様、自分の家族からはかなり離れて生活していた——たぶん協力し合つてそうしていたか——あるいはたぶん（私の父のように）

ただ発明をし、「自分の船が戻^成^功つてくる」のを見張っていたのかもしれない。

この美しい女性の出現は大事件だった——私にとつて、飽きたり風化したりするとのない大事件である。時代はもう「La belle Madame Pasquier〔美しいバスキエ夫人〕」ではなく、「La divine Madame Seraskier〔神々しいセラスキア夫人〕」なのであつた——美しいものに見境のないフランス人がそななりがちなように。

彼女は私の背の高い母を、頭半分ほども超えていた——比喩が全部キッチンと応接間からのものであるペレ夫人が、「あのは、あなたの母さんの頭の上の小さなパテを食べられそうね!」と言つたようだ。その高さは、連続する各インチの等比数列——一、四、八、十六、三十二——の尺度の見苦しさに気品を与へ、美しさを拡大する。私は、五フィート五インチと、そう、五フィート十ないし十一インチ(かそこら)の間が、セラスキア夫人の身長であつたと見なしている。

彼女は、黒い髪、——小説の中で董色と書かれそうな類いの——青い目、美しく白

*イギリス人ではない、天使だ!……「アンゲリではない、アンゲリだ!」という有名な洒落。

*等比数列……ヤード・ポンド法定規の目盛りは、メートル法定規のように $1/10$ のみではなく、 $1/2$ 、 $1/4$ 、 $1/8$ 、 $1/16$ ……といふように刻む。セラスキア夫人はほぼ一七〇センチ台。

い肌、きれいな手足、完璧な容姿、彫刻され、仕上げ塗りをされ、艶立アヤタチを出されたような顔立ちを持っていた。極めて稀で、神々しく、神圣な美を持つ何かを見つめる権利を持つほかの誰かに、心が奇妙な

嫉妬の怒りでいっぱいになるまで見つめに見つめられるような、それほどの並外れた適切さで装われた顔立ちである。

とはいって、女性なら、セラス・キア夫人でなくともこのすべてを手に入れることはできる——彼女はさらに多くのものを持っていたのである。

といふのは、彼女の性質の温かさと優しさが、その目を通して輝き、声の中に響いていたのである。このすべてが彼女と一致していた——純真さ、優雅さ、飾らなさ、虚栄心のなさ。また礼儀正しさ、同情心、陽気さ。



「彼女は私の長身の母を超えていた」

いちばん人を惹きつけるのはどれなのか、私には分からぬ。彼女は、英語を話すときにはわざかにアイルランド訛りなまがあり、フランス語を話すときはそれほど英語訛りはなかつた！

私は、自ら進んでその両方を獲得しようとした。

實際、彼女は、心と脳と肉体において、数十億の我が先見の明のない同胞によつてなされた、ここ数百年の間の（適切な指導下で身に付けるべき）わざかな公共心と自制心の欠乏がなかつたとしたら、私たち全員がそうなつていたはずのものであつた。

不注意や誤りによつてそこに飛び込まれるような美しい魂のための利用可能な醜い枠などあるはずがなく、ヤドカリのように、それを対象としていない美しい殻に這い込むことを許されるような醜い魂もあるはずがない。外面的で目に見える形は、内面的で精神的な美点を示すはずなのだ。が、めつたにそくなつていないということは、否定できない事実である。ああ！　そのような美しさは、その所有者が、王族の王子のように、まさに振り籠から甘やかされ性根を腐らされ、善良で寛大で利他的なあらゆる衝動が、むやみな称賛——あまりにあつさり得られ、あまりに素早く与えられ、当然のものとしてあまりに堂々と受け取られる、自然発生的な賛辞——によつて蝕まれることの、例外なのである。

だから、天の恵みによつて美が善でもあるときだけが、私たちがひそまぢいて、感謝と崇拜の中で祈りを捧げるべきときなのだ。神は、一時的に、私たち哀れな人類の腐敗しやすい似姿として現れることを許されたからである。

美しい顔！ 美しい曲！ 地上はこれらや、それに類するものを凌駕りょうとうするものを何も持たず、さらに良い材料が欲しくて、私たちは天の王国を自分たちのために築き上げたのだ。

"Plus oblige, et peut davantage

Un beau visage

Qui'un homme armé—

Et rien n'est meilleur que d'entendre

Air doux et tendre

Jadis aimé!"

「より多くの恩恵を与えてくれ、そうすればやあぬ」とお多くなる
美しい顔の方が

武装した男よりも――

そして、これを聴くことほど良いものはない
かつて愛した

甘く柔らかい旋律を!』

母はすぐに、神々しいセラスキア夫人に熱烈に忠誠を誓う友となつた。そして私は
といえば、こんな具合だつた。あの人のためなら何だつてする――危険にだつて直面
する――死んだつていい!

まあ死にはしなかつたのだが、私は五十年近くも彼女の新教徒として生きた。五十
年近くもの間、歓喜と苦痛として思い出すこと、それは彼女を見ることなのだつた。
不可解な憧憬の疼き、無口で、美味で、複雑で、無邪気な苦痛。それは最も偉大な詩
人たち以外には表現できなかつたものだ。またおそらく、七、八、九、十、十一、十二歳
という多感な年頃では、彼ら、その口達者で才能ある人々でも、私が感じた半分もそ

*より多くの恩恵を………ミュッセの『歌』第二連（ミュッセに同題の詩はほかにもある）。

の苦痛を敏感に感じることはなかつたことだらう。

彼女には、私と同性の別の奴隸がいた。五人のナポレオン時代の英雄は、それぞれ自分が自分流の敬意を捧げていた。善良なる少佐は、見守るときの、感動的な、甘い父親の優しさのようなものをもつて。ほかの者は、おそらくあまり無私というわけでもない崇拜をもつて。特に勇敢なのはオドニ大尉であつた。彼は、蝶で固めた明るい色の口ひげ、巨大な胸に金ボタンでかなりしつかりと留められた美しい茶色の燕尾服、先端を光らせた真珠色のボタン付き女性用布製ブーツに非常にきつく閉じ込められていた、目に見えないほどの小さな足を持つていた。彼の趣味は、思うに、別の方向でのより成功した試みによつて、戦争の不幸を自ら補償しようとし、することだつたのだろう。とにかく彼は、私の小さな胸を地獄^{ゲヘナ}にしたような熱情を露わにしたのだ。それも、彼女が笑い、つれなくして、彼をして正当な作法と恥じ入つた控え目な態度にさせるまでのことだつたが。

彼女が、この小さな男性世界全体の中では、少なくとも二人に好意を持つていたことがすぐに明らかになつた——少佐と私である。それに、私たちが作る奇妙なトリオ。彼女の氣の毒な小さな娘は、彼女の情熱的な心配の対象で、非常に聰明で早熟な子供であり、赤くまづげのないまぶたを別にすればきれいと言えそうな目を持つていた

けれど、美しいどころかその反対であった。濃い髪を少年のように短く刈り込んだ状態にし、顔色は生氣のない青白さで、頬はこけ、どんよりした顔つきで、ひょろつとして、長く痩せた手足と、かなり哀れを催すような長さと細さの腕と脚を持つていた。無口で陰気な小さな少女で、しそつちゅう親指をしゃぶっており、考えていることを人に言わなかつた。彼女はよく何日も続けてベッドで横にならねばならなくなり、上半身を起こせるほど軽快したときに、私は（母親の方を喜ばせるために）彼女に本を読んでやつたものだつた。『スイスのロビンソン』、『サンドフォードとマートン』、『くつろぎの夕べ』、『ペロー夫人のお話』、『ドン・ジュアン』から難破の部分。これらに私たちには飽きることがなかつた。そして『邪宗徒』、『海賊』、『マゼッパ』。大事なものをお忘れになつたが、『ピーター・パーレーの博物史』。私はこれを暗記するほどよく知るようになつた。

この最後の本から、私は彼女のため、私にとつて常にこの世でいちばん美しい詩で

*本……『スイスのロビンソン』はヨハン・ダビット・ウイース、『サンドフォードとマートン』はトマス・デイ、『くつろぎの夕べ』はジョン・エイキンの著作。『ドン・ジュアン』『邪宗徒』『海賊』『マゼッパ』はバイロンの作品。『ピーター・パーレーの博物史』はグッドリックの著作（ピーター・パーレーはベンネーム）。

あつたものを、よく誇張して朗読したものだつた。おそらく、自力で読んだ最初の詩だつたという理由から、あるいはあの幸福な時代とかなり密接に関係していたという理由からだつたのだろう。野生の鴨の版画（ビューアイックによるものだつたと思う）の下に、W・C・ブライアントの『水鳥へ』という詩が引用されていた。そのときそれを私は魅了し、そこまですっかり魅了するものがほかになかつたがために、今も私を魅了している。そのことを考へると、私は再び子供に戻る。子供の知覚の敏感さや、永遠なる神の漠然とした暗示への魔法のような感受性とともに。

か弱く小さなミムジー・セラスキアは、腫^はればつたい目と素早い理解力をもつて聴いていたものだつた。彼女は、「^{*}妖精タラパタポウム」と「シャルマン王子」（両者とも少佐殿お気に入りのキャラクター）のペアが私たち——彼女と私——にいつでも付き添つていて、二人を等しく好いてくれているという奇妙な空想を持つていた。つまり、「妖精タラパタポウム」は私を好み、「シャルマン王子」は彼女を好み——、私たちを見守り、一生守つてくれるというのであつた。

「O! ils sont joliment bien ensemble, tous les deux — ils sont inséparables!」「おお！ すゞく仲がいいのよ、二人とも——離れられないのね！」彼女は、この空想の存在について（適切にも）大声でよくなう言つていた。そして、水鳥については（適切にも）こ

六一。

「Il aime beaucoup cet oiseau-là, le Prince Charmant! dis encore, quand il vole si haut, et qu'il fait froid, et qu'il est fatigué, et que la nuit vient, mais qu'il ne veut pas descendre! [ノ]の鳥が本当に好きよね、シャルマン王子はー。もう一度読んでよ、アリーベ高々飛んで、冷たくて、疲れて、夜が来たのに、下に降りたがらなかつたみたいねー。】」

それで私は、滔々と再朗読したのだ。

「一日中、そなたの翼は羽ばたく、
はるかな高み、冷たく薄い大気の中を、
それでも降りることはない、疲れていため、歓迎の地に着くまでは、
暗い夜が近づいていたとしてもー。」

* 「妖精タラパタポウム」と「ハヤルマハリナ」……妖精タラパタポウムは、どうやら『ピーターリー・イベットソン』(の少佐)のオリジナル・キャラクターらしい。それに対し、シャルマン王子の方は、二七ページに「魅惑の王子」とあつたのと同じく、おとぎ話に登場する、姫君を救う類型的な王子のこと。英語の「プリンス・チャーミング」。

すると、か弱く、病氣で、早熟で、興奮しきつたミムジーの目は満たされ、瞑想に耽りながら親指をしゃぶり、名状しがたいものを考えるのだった。

それから私は、彼女のためにビューアイックの木版画を模写したりもしたが、そのとき彼女は、私の椅子の肘掛けに座って根気よく見つめていた。そして、「La fée Tarapatapoum trouve que tu dessines dans la perfection! 「妖精タラパタポウムが、あなたが完璧に描いてるのに気付いたわ!」」、この小さな傑作をどうか大切にしておいてほしい——「pour l'album de la fée Tarapatapoum! 「妖精タラパタポウムのアルバムのために!」」と囁くのだった。

彼女がほかの何よりも重んじた一つの線画があった——バイロンの本の鋼板印画で、美しい男女二人が手を繋いで暗い洞窟を歩いている場面を描いたものだ。男性は船乗りの身なりだった。女性は裸足でひらひらしたぼろをまとい、たいまつを持って歩いていた。その下にはこう書かれていた——。

「そしてヌーハはトーキルの手を取つて導いた、

「すると彼女の燃えるたいまつが丸天井に沿つて揺れた」

私は、彼女のためにそれを模写するのに何時間も費やし、彼女はオリジナルよりもその模写の方を好んだ。そして私は、その二人の姿が彼女の王子と妖精の優れた肖像画なのだ、と述べたものである。

時々、こうして芝生の林檎の木の下で読んだりスケッチしたりしている間に、眠っているメドール（巨大でこれといった特徴がなく、フランスのあらゆる品種が掛け合わされ、そのすべての美点はあるが欠陥はないといった犬である）が、その三インチの尾を振り、夢

*そしてヌーハは…………バイロ

ンの詩『島』の一節。



「林檎の木の下で、王子と妖精と共に」

の中での歓迎の弱い鼻音を発する所があった。すると彼女は言うのだ——。

「C'est le Prince Charmant qui lui dit; 'Médor donne la patte!' [シャルマン王子が言ったのよ。

『ヌムール、お手ー!』】

ある所は、年寄りの雄猫がうたた寝から起きて尻尾を上げ、架空のスカートに身を纏う。やねる、——。

「Regarde Mistigris! La fée Tarapatapoum est en train de lui frotter les oreilles! [猫を見てー..

妖精タラパタポウムが猫を殴るやめられないよー。】」

私たちば、英語を完全に忘れてしまふりをひらく心配して、いた両者の両親からの厳しい禁止令にもかかわらず、ほとんどフランス語を話していた。

やがて、私たちは狡猾な妥協案のようなものを作った。術策に富んでいたのはミムジーの方だったが、彼女が新しい言語を一つ、というか二つ発明したのだ。それぞれ、二人がフランス語とイングリッシュと呼んだものである。それは、フランス語の名詞と動詞を英語風にし、それからそれらを英語風に活用せたり発音したり、あるいはその逆にしたりする所で作られていた。

* 例えば、すく寒くて、勉強部屋の窓が開いてると、彼女はフランス語でこんなふうに言つたものだ——。「Dispeach yourself to fern the feneeter, Gogo. It geals to pier-

fend! we shall be inrhumed! 「窓こぢ窓を閉めひ、ハーハー。石も割れちやいそな寒やだねー。風邪ひくやへー」 あるこは、私がすぐには理解できなかつた場合は——「Gogo, il frise a splitter les stonnes — maque aste et chute le vindeau; mais chute — le donc vite! Je snize déjà! 「ハーハー、石も割れそな寒やむ——窓こぢ窓を閉めひ。ねえ閉めて——だかひ窓こぢー。私、あらへしゃみが出来ひー。」」 これはイングルフランクであつた。

*例えれば、トローブ樂劇のハラントキングル（フランス語風英語）とイングルフランク（英語風フランス語）は、英語とフランス語をかなり恣意的にちやんぽんにしているため、じ覽のとおりなかなか厄介である。右の訳文は、訳者の次の推測に基づく。

- ◆ ハラントキングル
 - Dispeach yourself to……Dépêche-toi de 「窓こぢやむ」
 - ferm the feneeter……fermer la fenêtr 「窓を閉める」
 - It geals to pier-fend……Il gèle à pierre fendre 「石も割れそな寒やだ」
 - imrhumed……enrhumé 「風邪を取る」
- ◆ ヤハタニハラハマ
 - maque aste……make haste 「窓こぢ」
 - chute le vindeau……shut the window 「窓を閉める」
 - Je snize déjà……I sneeze already 「あらへしゃみが出来ひ」

この発明で私たちは、英語もフランス語も同じように、この発明を知らない者を当惑させ、煙に巻くことに成功した。このすべてを紙上で見ている知的な読者は、簡単にはだまされないだろうが。

ミムジーが十分元気なときは、私と私のいとこと一緒に公園に行き、楽しい時間を過ごした——インディアンを待ち伏せしたり、卑劣な騎士からマッジ・プランケットを救出したりし、あるいは蛇や野ネズミや蜥蜴を狩ったり、蜥蜴の卵を掘り出して家で孵化したりした。公園は、種々雑多な獣にとっての幸福な避難所であつたが、それは小さな少年少女にとっても同じだった。リス、ハリネズミ、テンジクネズミもいたし、梟、ワタリガラス、猿、白ネズミもいたし、飛べるようになる前に母親の巣から外れてしまつた小鳥たち（彼らは常に死んでしまつた！）、犬のメドール、選ばれたほかの犬などもいたからである。リアルなぬいぐるみポニーで作られた巨大な振り木馬は言うまでもない——かつて存在した中で最も小さいポニーだ！

多くの場合、私たちが共同で発生させた元氣潰刺さは、ミムジーにとつてはにぎやかすぎた。ひどい頭痛が起り、そのため彼女は隅に座つて、片方の手でハリネズミの世話をし、もう片方の手の親指を口に持つていく、というようなことになりがちだった。私と二人きりになつたときだけ、彼女は幸せそだつた。それから、mout

tristement! 「かなり悲しそうだった！」

夏の夜には、大人から子供まで仲間全員で、公園を通ってブローニュの森からオートゥイユの池まで歩いた。私たちは、メドールが水の匂いを嗅ぐのに十分なほど池に近づき、彼は吠えたり歯を剥いたりぐるぐる回ったりし、興奮して狂ったようになつた。

というのは、彼は石を追つて飛び込み、それを見せびらかす才能を持っていたからだ。そこで私たちは、オリーブ色で下部が黄色の巨大な水生甲虫や、腹の赤いイモリや、美しい斑点と素晴らしい放射線状の跳躍を見せる緑の蛙や、紫がかった茶色のまだら模様のある金と銀の魚などを捕まえたものだ。私はこれらを魅力的な順に書いている。魚は、あまりにもおとなしくて簡単に捕まえられ、その美しさがあまりにも上品すぎる種族だったということだ。珍しくて平べったくて御しにくいゲンゴロウモドキが「^{一等賞を取った}ケーキをもらつた」わけである。

私たちは時々、ブローニュを通つてサンリクルーまで歩くことさえあつた。新しい鉄道と列車——驚異と歡喜が尽きることのない対象——を見るためである。それから「テト・ノワール」（有名な事件になつた恐ろしい殺人の現場のホテル）でアイスを食べ、芳香漂う夜を通して帰つてきたものだが、その間、草地ではツチボタルが光り、遠くオートゥイユの池では蛙が鳴いていた。驚いた雄ノロジカが小道を横切つて茂みから

茂みへと短い跳躍で走つていいくともあつた。メドールは再び狂つたようになり、まだ建設中だつた新しいパリの城壁に銛を響かせるのだつた。

彼に雄ノロジカを捕まえる才能はなかつた！

父が一行にいる場合、彼はチロルのメロディをヨーデルで歌い、ボワルデューやエロルドやグレトリの美しい歌を歌つた。あるいはまた、愛する夫が離れるたびに愛する国への郷愁を抱いていたセラスキア夫人のために、『君が目にて酒を酌めよ』や『ダブリン湾の歌』を歌つた。

あるいはまた、私たちは陽気なにわか合唱団を結成し、歌に合わせて行進するのだつた――

"Marie, trempe ton pain,

Marie, trempe ton pain,

Marie, trempe ton pain dans la soupe;

Marie, trempe ton pain,

Marie, trempe ton pain,

Marie, trempe ton pain dans le vin!"

「マリー、パンを浸して、
マリー、パンを浸して、
マリー、スープにパンを浸して、
マリー、パンを浸して、
マリー、パンを浸して、
マリー、パンを浸して、
マリー、ワインにパンを浸して…」

あるこばあた――

"La — soupe aux choux — se fait dans la marmite;
Dans — la marmite — se fait la soupe aux choux."

「キャッシュのスープな——お鍋の中で作られる
お鍋の中では——キャッシュのスープが作られる」

この歌は、私たち全員に夕食への郷愁をもたらしたものだ。

あるいはまたさらに、歌うには暑すぎたり、疲れすぎたりした場合は、少佐殿が、妖精の王国を捨て、歩きながらはげた頭頂部から帽子を取り、ブリエンヌやマレンゴやアウステルリツの偉大な指導者のことなどを、私たちに厳かに恭しく語るのだった——フォンテンヌブローの別れ、百日天下のこと——セント・ヘレナは語られなかつた。彼は、それを私たちに話す自信がなかつたのだ！ そしておもむろにワーテルローへとこぎ着けると、彼は帽子をかぶり、イ



"LA BATAILLE DE VATERLOO"「[ワーテルローの戦い]」

ギリスが事実上どんなふうに敗北したのか、なぜ、どんな理由でそうなったのかを
A + B で論証してみせるのだった。それを聞くと、この小さな一行全員に、厳肅な、
畏敬の念に打たれたような沈黙が訪れ、さらにベッドの甘美な郷愁が訪れた者もいた
のであった！

おお、古き良き時代！

夕闇の中、セラスキア夫人のそばを歩くとき、私にとってその夜は、彼女のガウン
の光・香り・衣擦れの音によつて神聖なものになつた——黄色か薄青か白の光——白
檀の香り——疲れにくい、丈夫で細くて土踏まずの高い足が、軽く元気な足取りで歩
いていることを語りかける音。それは、このような長い遠征に耐えられるほど頑強で
はなかつたミムジーのもとに戻りたいという、母親らしい心からの願望を語つてもい
た。

短い遠征の場合、時々私は帰り道のほとんどでミムジーを背負つて歩いたものだ（彼
女の母親を喜ばせるためである）——もろく壊れやすそうな荷物で、彼女の貧弱で長
くて細い腕が私の首に巻かれ、その青白くて冷たい頬が私の耳に当たつていった——彼
女には体重を感じなかつた！ 私が疲れていたときは少佐殿が交代してくれたが、長
くは続かなかつた。彼女はいつでもゴーゴーに運ばれることを望んだのだ（私の名前

のピーターで呼ばれる場合を除けば、私は何の理由もなくそう呼ばれていた)。

彼女は暗がりに対して青白く輝く樺の木に怯えたり、大枝が彼女の体をこすると震えたりしたものだが、妖精魔王エールキングについてのすべてを私に教えてくれた——「mais comme ils sont là tous les deux 「やあ、いのち」[人一緒にいるから]」(王子と妖精が、じぶんの意味だ)「il n'y a absolument rien à craindre. 「何も怖がることはないのよ」」そしてミムジーは、si bonne camarade 「とても良い仲間」であった。その厳肅さと貧弱な健康状態と多くの苦痛にもかかわらず、小さな親切にとても感謝し、小さな才能をきちんと認め、小さな虚榮心(彼女は母親同様それを持つてはいないようだった)にとても寛容で、その無限の生真面目さにもかかわらずとにかくユーモラスで——彼女は本質的には紛れもなくお転婆娘だった——、私は、母親のみならず彼女自身も喜ばせるためにすぐに彼女を運んだし、彼女のために何でもしたものだった。

少佐殿はといえば、ミムジーが半分は殉教者で、半分は聖人で、この世のありとあらゆる美德を持ってじぶんに徐々に気づいていた。

「Ah, vous ne la comprenez pas, cette enfant; vous verrez un jour quand ça ira mieux! vous verrez! elle est comme sa mère … elle a toutes les intelligences de la tête et du cœur!」「ああ、あなたはこの子のじぶんが分からじこせんねー。じつは健康になる日が来ますー。見てて!」

らんなさい！ この子は私の母のようです……頭も心もすっかり知性でいっぱいです！」 そして彼は、 天国では自分が彼女の祖父——母方の祖父だ——になる喜びがありますようにと願うのだった。

L'art d'être grandpère! 「祖父たるべき方法！」 この風雪に鍛えられ、 戦争に負けた老兵は、 本当の息子や娘を持ったこともなくそれを学んでいたのだ！ 彼は先天的な祖父であった！

そのうえ、 ミムジーと私は共通の多くの趣味と熱愛の対象を持っていた——例えば音楽、 それと同じくらいにビューアイックの木版画やバイロンの詩、 また焼き栗や家庭用ペット。 そして何よりも、 オートウイユの池。 彼女は秋のその場所が好きだった。 茶色や黄色の葉が、 渦を巻いたり、 池の縁を回って駆け巡ったり、 互いを追いかけ合つたり、 あるいは乱れた水面を漂流したりしていた。 そして冷たく湿った風が、 鉛色の空の下、 森のぼさぼさの大枝を通ってヒューヒュー音を立てていた。

彼女は、 そんなときこそここにいて、 家や暖炉のことを考えるのがいいのだと言つてゐた。 もつといいのは、 やつと家に着いたとき、 残されたもの寂しい池のことを考へることだ、 とも。 實際、 蝙蝠こうもりが飛び始めたときに、 アルフレッド、 チャーリー、 ミムジー、 マッジ、 それにメドールと一緒に、 夕暮れ時に森と公園と大通りを通ってとぼ

とぼ帰つていくのは楽しいことだった。私たちは、青葉や枯れた葉を押し分けてがさがさ音を立てたり、割れたクリーム色の殻から美しく熟したマロニエを撒き散らしたり、あちこちでドングリやブナの実を拾つたりしながら進んだ。

そして、家に帰れば、蠟燭が灯される前にしゃがんでおしゃべりをし、勉強部屋の薪たきぎの火で栗の実を焼きながら、独りぼっちになつたはずの mare 「池」がどんなに暗く、寂しく、寒々*しているかを考えるのは楽しい、とても楽しいことだった——entre chien et loup、フランス語で言うところの黄昏時たそがれに——テレーズが茶道具を用意し、情報じょうほうを伝え、パンとバターを切る間に。母は上の応接間でハーブを弾いた。揺れる木々のてっぺんの背後、西側からの濡れたような最後の赤い光が消え、カーテンが引かれ、灯りがつき、食欲が解き放たれるまで。

私は、囚われの身でたつた一人、ここに座つて、あの甘美な時代のあらゆる出来事を回想するのが好きだ——幸福な記憶の疼きさいなに苛まれるために。偉大な詩人たちは、私のような者にとって、それ以上に大きな悲しみはないということを私たちに教えてくれる。この悲しみの中の悲しみの極致は、私の喜びおよび慰めであり、これまでずっとそうちだつた。そして、私はそれを若さや健康や富や名誉や自由と交換する気はなかつた。至福の子供時代そのものを何度も繰り返すためならば、その場合にのみ私はこの

至福の思い出を引き渡すことにするだらう。

• • • • •

私たちも気楽で楽しいいりばかりというわけにはいかず、いとこたちと私はかなり懸命に務めを果たさねばならなかつたが、そのためうんざりすることがよくあつた。私の親愛なる母君は、最初の段階から私を学問の神童にすべく全力を尽くしていたのだ。彼女は私にイタリア語を教えようとした。彼女は英語やフランス語と同じくらい流暢にその言語を話した（イタリアで人生の大半を過^ごしたからだらう）。私は『エルサレム解放』をその両言語に翻訳しなければならず——未完成のままになつてている課題だが——、また『快活な人』と『沈思の人』をミルトン風のフランス語に、『ル・シッド』

*フランス語で「*entre chien et loup*」の黄昏時……*entre chien et loup*は、直訳すると「犬と狼の間」。
これで「夕暮れに、日暮れに」の意となる。

*『エルサレム解放』…………『エルサレム解放』はタッソの叙事詩。『快活な人』『沈思の人』はミルトンの詩。『ル・シッド』はコルネイユの悲喜劇。ピノックは、おそらく教育者のウイリアム・ピノックである。いずれも、十歳前後の子供にはなかなか厳しい課題である。

シッド』をコルネイユ風英語に翻訳する必要があった。それからマスターすべきものとしてピノックのギリシャ・ローマ史があり、もちろん聖書もあった。毎週日曜日には集禱文、福音書、使徒書簡を暗記する必要があった。そう、これはすべて楽しいことではなかつた。

教えることは彼女の喜びだつたが、ああ！ 学ぶことは私の喜びではなかつたのだ。私たちはお互いにたくさんため息を相手に負担させることになつたが、おそらくそれだけにいつそうお互いを愛してもいた。

それから私たち、いとこたちと私は、朝、向かいのサンドー氏の所へ行つた。フランス語文法、ラテン語フランス語翻訳、ギリシャ語フランス語翻訳を習うためである。しかし、週六日中午後三回、パリのケンブリッジ給費生であるスレイド氏が、私たちが朝学んでいたラテン語とギリシャ語を英語化（および無効化）するため、フランス人がそれらとその音量をどんなに残念なものにしていたのかを示すためにやつて來た。おそらくギリシャ語とラテン語の音量は、英國産の贅沢品——上流社会テストにすぎない——で、文字 **h** のように、軽率な詐称者の揚げ足を取るための、我々自身の発明になる小さな落とし穴であろう。でなければ、當時、フランスの教育はそれはもう悲しいほどに安価で、学校教員たちはそのような奇抜な余分品を考慮に入れる余裕が

なかつたのである。それは、その価格では考慮されるべきものではなかつたのだ。

フランスでは、覚えておいてほしいが、王と八百屋が自分たちの息子を同じ学校に通わせていたのである（その学校はたまたまサンドー氏のものではなく、またサンドー氏の学校はほとんどが八百屋で、王はいなかつた）。パブリック・スクールは皆一様に、ベッド代、食事代、授業料で年三十ポンド程度だつた。

その結果、ラテン語は、排他性に起因する区別がなく、貴族的な趣が完全に欠乏して、学者にも無学者にもたいへん心地よく慰めとなるようなものになつた。お金のかかるイギリスのパブリック・スクールのシステム（とイギリスのアクセント）だけが、ラテン語という死語を伝えることが可能なのである。フランス語が死語になつたとき、私たちはそれ以前にはなかつたような洗練をそれに添えることだらう。すでにそのようにしている人もいるくらいである。

これが（おそらく）、最高のフランス人作家たちが、私たちがしているような、ホラティウスやウェルギリウスからの、美しく、人口に膾炙しかいしゃく、その場面にふさわしいようなよくある詩行を用いて、教訓を与えたり、自分の物語を装飾したりといふことを、ほとんどしない理由であろう。そしてまた、ラテン語がフランス語会話にほとん

* 音量……ここでは母音の長短のこと。

ど引用されない理由でもあろう。あちこちのため息をついているくたびれた売り場主任を除いて、だが――

売れ残りの絹を巻き上げながら「Varium et mutabile semper femina!」^{*}「ふつだつて気まぐれで移り氣なのだ、女って奴は！」と語つてみたり、春の最初の晴れた日曜日の朝、アニエール行きの鉄道切符を取りながら「O rus! quando te aspiciam!」「おお田舎よ！いつになれば私は君を見るのだろうか！」と声高に言つてみたり。

しかしまあこれは脱線で、スレイド氏からだいぶ離れた所をさまよつてしまつた。

古き良きスレイド！

私たちは、大通り門外の石柱に座つて、曲がりくねつた通りの、遠くのとある角に彼が現れるのをよく



「古き良きスレイド」

見張つたものだつた。

緑の燕尾服、固いシャツのカラー、ナンキン木綿のチョッキの袖ぐりに突つ込まれた平らな親指、内側を向いた長い扁平足、赤みがかったマトンチョップひげ、頭の後方に載つた帽子、きれいで清潔で若々しく実直そうなイギリス人顔——ついに彼が現れたとき、その様子は同情を感じるようなものではなかつた。

時折、彼にとつては残念だつただろうが、その教授期間中、病氣や家事が彼を拘留し、我々の中心で教鞭^{きょうべん}を執ることがかなわない日があつた。彼がやつて来るのを見張つても無駄なことが徐々に分かつてきて、それを確信したときに、我々が経験した無上の幸福ときたら、あまりにも深すぎて、言葉やら行動やら外に向かつてする何らかの表明やらのいづれでも表現できないほどであつた。その幸福を味わうには、石柱に座つてそれが次第に心を覆つっていくままですれば十分であつた。

そうした無上の幸福の機会は、ほとんどないごく稀なものであつた。たいそう立派な英語教師のたまの欠勤と天使の訪問とを比較することはたぶん不適切だろうが、私たちにはそれをそう感じていたのだ。

* いつだつて気まぐれで……… 「いつだつて気まぐれで………」はウエルギリウス『アエネーイス』から、「おお田舎よ！………」はホラティウス『談話集』からの引用。

欠勤の後、彼は翌日の午後にその埋め合わせをした。良心的なイギリス人だ。そのことは、親たちにとつては十分に公正なことであつたが、私たちにとつてはそうではなかつた。そのとき支払われる、午後の半分のわずかな貸し付けの利子としては、何と余計な厳しさだったことか！ 忌まわしく、硬く、角が取れ、磨かれて艶があり、重い木製で、実務的なイギリス製定規で、インクの染みが付いた指閏節をどれだけ叩かれたことだろう！

英語は何もかも忌まわしい——親たちが、私たちがあまりに好んで使いすぎると思つていた表現である——、そう考えることが、当時の私たちの癖だつた。

しかし、私たちには、この聞き捨てならない感情に対する言い訳がないわけではなかつた。パッサーに別のイギリス人一家がいて——プレンダーガスト家、私たちよりも古い家系だつた——、その家は、親たち（とおじおばたち）は中年、祖母は故人、子供たちは成人していた。私たちはその一家とお近づきになる栄誉を得られなかつた。しかし、それが彼らの不幸だつたのか、私たちの落ち度だつたのか（またはその逆だつたのか）は分からぬ。前者であることを期待しよう。

彼らは私たちとは逆のタイプで、私が言うべきではないのかもしれないが、そのタイプはあまりにも魅力に乏しいものであつた。おそらくそれは、フランスの漫画家た

ちがワーテルローの復讐ふくしゆうをしようと目論んだ、我が同胞のカリカチュアの元になつたものかもしれない。堅苦しく、傲慢こうまんそうで、軽蔑的。出つ歯、高い鼻、長い上唇、引っ込んだ頬。鈍く、冷たく、無感覺な、利己的そうな、緑色の目。その目は、カワカマスみたに右にも左にも向かないけれども、彼らが罪など犯したことないとでもいうようなイギリスの独善の誇りに包まれつつ闊歩かっぽするときには、高い位置から静かに見下ろすのであった。

そういうものが急に目に入ると（特に日曜日）、あらゆる枢要德すうようとくは直ちに憎むべきものとなり、尊敬の念は逃げるべきものになつた。その滑らかにひげをきれいに剃つた清潔さも、あまりに清教徒的に攻撃的だつたため、石鹼を考えることさえ強い嫌悪感を催させることになつた。

（店で）フランス語を話すときのアクセントは、セラスキア夫人のように音楽的で甘美で同情的ではなく、それどころか野蛮でグロテスクで、嫌らしく「ongs」「angs」「ows」「ays」を伴うのだった。態度は威圧的で疑り深そうで軽蔑的だった。そのときそばにいる私たちは、大声の横柄な英語を聞くことができた。長身で姿勢がよく、外見上は崩れていないので、雰囲気をぶち壊す人間のように、不吉で陰氣で空虚なカーニバルの仮面のように、退屈で陰鬱で面白くない笑い者のように見え、ワーテルローはいつか

パッシャーにおいてさえ許される日が来るのだろうが、プレンダーガストにはそんな日は決して来ないだろうと感じられた！

私は世間からあまりにも遠く離れて生きてきたのでよく知らないのだが、こういう古いイギリス人のタイプ、この「険悪で、見苦しく、恐ろしく、不気味で、不吉な昔の鳥」みたいなタイプは、別の、もう少し魅力がある鳥——ドードー——と同じように、絶滅しているのかも知れない。

そうなれば、我が国はもつと優雅になつてゐるだろう。

しかし、当時は若者がしがちなようにやや性急に推論したため、私たちは、イギリスはプレンダーガストでいっぽいに違ひなく、そこには行きたくないと考えるようになつた。



「不吉な昔の鳥たち」

この一般的なイギリスの

忌々しい物事には、私たちがわずかに例外としたものがあつたことも事実だが、そのリストは長いものではなかつた。お茶、マスターード、ピクルス、ジンジャー入りクッキー、そして何よりも、素晴らしい御馳走として、また善行の報酬として週に一度私たちに出された、パッシーのバターと非常によく調和するおなじみのイギリス・パンの塊。これはとにかくおいしかつた！ だが、常に困難とジレンマがあつた——バターを塗つただけにするか、「カソナード」（フランスのブラウン・シュガー）を加えて食べるか、である。

ミムジーは考えがはつきりしていて、フランスのブラウン・シュガーを付けるのが好きだつた。彼女がそこにいなければ、私は自分のスライスの半分を彼女のために取つておき、カソナードを注意深く塗つてやつたものだつた。

一方で私たちは、フランスのあらゆるものを見つさとは逆のものだと思つていた——私たちが知つていた全フランス少年を除いては。サンドー氏の学校にいた二百人ほどと、それからパッシーにいた全少年（同じような者はほかにも大勢いて、彼らはサンドー氏の所に通つていなかつた）とで、私たちはパッシーの少年を全員知つていた。そのため私たちは、善良で、古風で、無愛想で、愛国的な、イギリス的偏見のた

*
陰悪で、見苦しく………………ボーの詩「おおがらす大鴉」からの引用。

めの素材を完全に奪われたわけではなかつた。

フランス少年たちは、お返しに、私たちを忌々しいと考えたり、時々どう考えているのかを表現したりしないわけではなかつた。特に、通りを遊び場にしていた小さな品のない少年たち——*voyous de Passy*「パッシーの不良たち」——がそうだつた。彼らは、私たちの白いシルクハットと大きなカラーとイートンジャケットを嫌い、私たちを「ご立派な畜生めら」と呼んだ。彼らの先祖がジャンヌ・ダルクの時代に我々イギリス人をそう呼んでいたようだ。彼らは時々石を投げた。それから衝突があり、不作法なフランス少年の鼻が血を流し、卑劣なフランス少年の脚が逃走し、イギリス少年たちに追いつかれる、「おいおい、うわわわ——ママン！」というひどい哀哭あいこくが上がつた。時には勝てなくて、ある鍛冶屋かじやによつて私たちの鼻の方が出血させられることもなかつたとは言わないが——いつも同じ若い鍛冶屋だ——ボワタールである！

こういうことをするのは若い鍛冶屋と相場は決まつてゐる——あるいは若い肉屋だ。もちろん、最終的には、グレート・ブリテンの名誉のため、私たちのうちの一人が、その後相手が決して胸を張れなくなるほどひどくぶん殴つてけりをつけた。それは一匹の猫をめぐつてのことだつた。それは、あるクリスマス・イヴの黄昏時、パッシーとグルネルの間にある「白鳥の島」で起つた（猫を救うには遅すぎた）。

私はこの戦いの英雄だった。「今やらなくてどうする」。私はそう思い、激怒し、狂人のように敵に襲いかかった。アルフレッドとチャーリーによつて保持された戦いのリングは、実に奇妙なことに、ブレンダーガスト家の二人の男性に手伝われたのだった。彼らは、その一連の経過について関心を寄せてしまふほど、そうとう我を忘れていた。マッジとミムジーはといえば、傍観



「積年の恨みを晴らす」

し、怯え、そして魅了されていた。

それは長い時間はからず、ホメーロスあるいは『ベルズ・ライフ』紙にさえ書かれるに値するほどのものであった。それが、私がそのことを書かない理由の一つである。二人のプレンダーガストは、それが続いている間はずいぶん楽しんでいるように見えた。終わったとき、彼らは再び我に返り、何も言わずにつかつかと歩き去った。

• • • • •

年齢を重ね、賢くなればなるほど、私たちはムードン、ヴエルサイユ、サン＝ジエルマン、その他の楽しい場所に探索場所を広げることが許された。デュフオ通りにある有名な「乗馬学校」で乗馬を正式に習つた後、借りた馬に乗つてそこへ行く。

セーヌ川の楽しい夏の水浴び場で泳ぐこともあつた。それは「水泳学校」という堂々とした名前で呼ばれていて、私たちは「la coupe「抜き手」」(私たち以外のイギリス人が、それまであまり扱うことができなかつた泳法) の名人になり、逆さ飛び込みの纖細な全「nuances〔ニュアンス〕」——「la coulante〔滑らかに〕」「la hussarde〔粗野に〕」「la tête-bêche〔互い違いに〕」「la tout ce que vous voudrez〔あなたがしたいように〕」——に

おいてもそうなつた。

また、私たちはパリでくつろいだりもした。特に古いパリで。

例えば、セントルイス島があつた。中庭と庭園の間に莊厳な古い邸^{やしき}があり、厳格な石の門と高い壁の背後では、著名な判事や弁護士たちが威厳ある隱遁生活を送つていた——法服の貴族たちだが、かつて、いにしえの時代には、さらに偉大な剣の貴族たち、十字軍や、おそらくブリアン・ド・ボワ・ギルベールのようなテンブル騎士団が住んでいた。

それに、あのさらに有名な別の島、シテ島。パリ発祥の地であり、ノートルダム大聖堂が、オテル・デュ^らの憂鬱で灰色で癩病状の壁と汚れた茶色の屋根の上に、その二つの塔をそびえさせていた。

調和や遠近法から完全に外れた痛ましく荒れ果てた古い家々が、大聖堂の控え壁^{バットレス}の間の古い蜘蛛の巣のように巣を作つていた。正面の小さな広場（ノートルダム大聖堂前の広場）の両側には、高いスレート屋根と精巧に細工された鉄のバルコニーのある古い石の住居が建つっていた。ロマンティックな歴史があるように見えたので、私は飽きもせずそれらを見つめ、どんな歴史があるのであればこれ思いを巡らした。今

*ブリアン・ド・ボワ・ギルベール……ウォルター・スコットの『アイヴァンホー』登場人物。

考えてみると、まさにその住居の一つはオテル・ド・ゴンドロリエであつたに違いない。これまでで最も考証が正確だつた歴史家によれば、かつて哀れなエスメラルダが、踊つたりタンバリンを鳴らしたりして、美しい少女フルール＝ド＝ゴンドロリエやその貴族の友人たちを楽しませた家である。エスメラルダはその誰よりも、美しさ、純粹さ、善良さ、行儀作法においてずっと上だつた（ただし、彼女は無学で、流浪のジプシー少女であり、卑賤の出であつた）。そこで、その貴族の娘たち全員と身持ちの悪い射手隊員の前で、自分の山羊によつて裏切られ、それが最終的な破滅の元となつた。彼女は軽率にも、「フェエビュス」という最愛の名の綴り方を山羊に教えてしまつていたのだ。

すぐ近くにモルグがあり、この陰惨な建物は、偉大なる銅版画家メリヨンが、当時の私にとつてそれが帶びていたのと同種の——今、思い出という魅力的な目でそれを見ているのと同じような——、何かこの世ならぬ恐ろしげな魅力を帶びさせるよう工夫したものである。

モルグ！ その名前にはまさに、何と破滅的な鼻声的響きがあることか！（健全な心のイギリス少年になつたみたいに）中で恐ろしいものをさんざん見つめた後、ポンヌフのアンリ四世の騎馬像までは目と鼻の先だった（ちなみに、ポンヌフと

はパリで最も古い橋である）。彼、女たらしの王様は、長い尾の軍馬にまたがつて微笑みを浮かべていたが、そこは歴史的な川の両岸のちょうど真ん中、最も歴史的な場所だった。そして彼は、^{*なし}梨型の顔とマトンチヨップひげを持つブルジョワ王のパリには背を向けていた。

そして、二つのオート麦袋の間のビュリダンのロバのように、優柔不斷に、呪文で縛られたかのごとく立ち尽くしてしまってもあつた。ポンヌフの南北のどちらの側にも、魅惑的な貧民窟^{くつ}が見つかるからである。よそのそれよりも何もかもが魅力的で、それらはバルザックの『風流滑稽譚』（言わせてもらうなら、私は何年も後まで見た

***歴史家**……オテル・ド・ゴンドロリエ、エスマラルダ、フルール・ド・リス・ド・ゴンドロリエ、フェビュスなど、このあたりの名称はすべてユゴーの『ノートルダム・ド・パリ』に出てくるものである。「歴史家」というのはピーターのジョークであろう。

***モルグ**……当時、ノートルダム大聖堂の裏にモルグ（死体公示所）があつて、本物の死体を一般公開していた。

***梨形の顔とマトンチヨップひげを持つブルジョワ王**……ルイ・フィリップ一世のこと。在位一八三〇～四八年。顔が梨型だと言われ、そういうカリカチュアもあつた。

***ビュリダンのロバ**……ビュリダンは十四世紀のフランスの哲学者。等距離に同じ量の餌袋を置かれたロバは、どちらも選べず餓死してしまう、という例え。

ことも読んだこともなかつた）へのギュスター・ドレによる忘れがたい挿絵のように、曲がりくねつて坂を上がつたり下がつたり、回り込んだり、見えたり隠れたりしていた。

暗く、狭く、静かで、寂れた通りは、後に悪夢となつて現れることになるだらう——その中央には溝が、両側に沿つてずっと小塔しようとうと石柱がある。てっぺんに小さな古い頂銃眼を備えた高い幻想的な壁（défendre d'afficher「貼り紙禁止」であった）があり、そこには篠懸の木とライムの大きな枝が張り出し、その背後にはルイ十世喧嘩王の時代とその前にまで遡る灰色の古い庭があつた！　それに、街角には古い錆びた鉄の文字で刻まれた暗示的な名前——「ヴィドグセ通り」「クープ＝ゴルジュ通り」「ヴィエユ・トリュアンドリ通り」「ネールの塔袋小路」等々。これらはユーゴーやデュマの一章のよう、想像力に訴えかけるものだ。

そして、これらに行くには、長く、曲がりくねつた、にぎやかな道々を通るのだが、その道は、この上なく不規則に旗が立てられ、青いブラウス、茶色いウーステッドの上着、木製の靴、赤と白のコットン製ナイトキャップ、ぼろと当て布などを身に着けた、奇妙で愉快な人々でいっぱいだった。かわいらしく誇らしい足、きらめく目、かぶり物のない自分の髪だけの、優雅極まりない少女たち。派手で太った醜女しゆうじよたちは、

皆微笑んでいた。瘦せた醜女たちは、ぞつとするような邪悪さあるいは悲惨さを顔に浮かべていた。早熟で機知に富む、貧民窟の小さな男女の悪童たち。そして、こんな身障者たちも！ 陽気なせむし、元氣いっぱいの盲目の物乞い、愉快な四つん這いの麻痺患者、自分の腫れ物についての冗談や洒落を飛ばす氣の毒な瘧癪患^{るいれき}い。屈託なく、愛想のよい、腕や脚のない物乞いの奇形人たち。彼らは腹ばいでぬかるみを這うようにして、あるアングラのワイン店から別のそれへと移動していた。青い顎の聖職者たち、裸足の茶色い修道士たち、それに、物静かな慈善会のシスターたち。爪竿を持ち、籠を背負^{せお}つて、あちこちに姿を見せる陽気なくず物商。あるいは、胴鎧^{どうよろい}を着けた騎兵、巨人のような騎銃兵、快活で小さな「アフリカの狩人」、高くそびえる黒い bonnets à poil 「近衛兵帽」をかぶつて並んで馬を歩ませる勇敢な憲兵の二人。あるいは、哀れを催すような、赤いズボンを穿いた二人の兵士。彼らは田舎から出てきたばかりの新米の徵集兵で、無垢で明るい目と麦藁色^{むぎわら}の髪とそばかすのある茶色い顔をして、手を繋いで、全部の豚肉屋の店を見つめながら歩いていた——たまに豚肉屋の奥さんのこ

*暗示的な名前……「ヴィドグセ」は「すり、泥棒」、「クープ・ゴルジユ」は「危険な場所、賭博場」、「ヴィエイユ・トリュアンドリ」は「年寄り乞食たち」の意。「ネールの塔」はアレクサンドル・デュマの戯曲『ネールの塔』でも知られる。

とも見つめていた！

それから、無産階級者の結婚の行列——不格好な晴れ着に身を包んだ花嫁と花婿を先頭にした——では、全員一緒に騒々しく歌を歌っていた。また、貧者の葬列、あるいは布に覆われた担架には、オテル・デューエーへ至る道中、同情的なまなざしが後に続いた。また、鈴と蠟燭を伴う臨終の聖餐の一行は、最期の瞬間に苦しむ低階級者の枕元へと向かうのだった——それが通り過ぎていくとき、私たちは皆帽子を脱いだ。

そして、連続的な音の伴奏。金属音を立てるチャイム、行商人の路上での呼び売り声、*marchand de coco* 「ココ売り」の鈴音、太鼓、狩猟ホルン、バレル・オルガン、どこにでもいるペットのオウム、ナイフ研ぎ、フライドポテト屋の売り声、そしていちばん楽しいのがプードルの毛刈り人とその息子で、**ストロペー*とアンティストロペーよろしく、小さな男の子が甲高い金切り声で一分ごとに「父は三十ステーでプードルの毛をカットして、手に負えない雄猫の扱いを引き受けることができる」と叫び声を上げると、父親は厳かなバスの声で「息子は本当のことを言っている—— *L'enfant dit vrai!*」とうなるのだった。

そして、雑多な不協和音を突き抜けて、ピシッピシッという絶え間ない鞭の音、平らでない石の上を揺れながら進む重い車輪の音、元気のよい小さなフランスの馬車馬

の足音といななき、その馬のたくさんの中と、その御者の罵りと毒づきと「hue! da! 「右だ！ 左だ！」」という声が奏でる音楽！ これらは皆、心を奪われるほど魅惑的だつた。

そこから家——静かで無邪氣で郊外のパッシー——までは、岸壁伝いに、何も見逃さないように（憲兵が見えるまで）、道中ずっと石の防御壁のてつぺんか、さもなくばリヴオリ通り、シャンゼリゼ、サン＝クルー大通り、ミュエット通りなどの大通りを歩いた。何と美しい散歩だったことだろう！　この使い古された古い世紀のうちの快い四〇年代前半の、この非力な筆記者が十代に届く前の、その当時のあのような場所がほかにあつただろうか？

*ココ売り……「ココ」は、ココナツミルクに似た、レモン入り甘草水。

ン＝ド＝マルス、ノートルダムの鐘樓しょうろう、はるか彼方の七月革命記念柱、廢兵院、ヴァル＝ド＝グラース、マドレーヌ寺院、いつまでも記憶に残るような美しい噴水たちのそばに、オベリスクのエキゾチックな先端がそびえるコンコルド広場などを有するパリよ。

たくさんの橋が架けられた曲がりくねった川が流れしており、その川はいつも同じような状態で、満ち干のある我がテムズ川とは違って、常に満水状態であった。そのすぐ向こうには莊嚴で閉鎖的な郊外が、新たに裕福に、最近高貴になつた人々の絶望が広がり、ほぼ一軒おきの家にフランスの歴史の一ページのように読める名前が記入されていた。さらに遠くには、愉快で邪惡なカルチエラタン、厳肅なソルボンヌ、パンテオン、植物園。こちら側の中間の距離にはルーヴル宮殿があり、そこにはフランス王たちが何世紀もの間住んでいた。チュイルリー宮殿には当時の「フランス王」が住んでおり、さらにもう少しの間住み続けた。

私はこのすべてを知つていて、愛していた。そして、太陽が私の背後に沈んでいき、遠くの無数の窓が血のよう赤い西の光彩を反映するときのそれらが、いちばん好きだった。

親愛なるパリよ！

そう、小さな少年のときにそれを歩き回った、ということが重要なのだ——好奇心が強く、何でも知りたがり、疲れを知らない、小さなイギリス少年（すなわち、母親も子守も付き添わない小さな少年）のときに。想像力いっぱいで、その鋭い感覚は、人生の朝のものである銳敏さを伴う。鷹の視覚や、蝙蝠の聴覚や、ほとんど獣犬の嗅覚のような感覚を。

実際のところは、あのパリを理解し、真価を認め、完全に楽しむためには、敏感さと公正さの両方を備えた鼻が必要であった——ガスや電気で明るくされ、現代科学による下水排水を備えたオスマン男爵のパリ、ではなくて、バルザックやウージェーヌ・シューヤ『パリの秘密』の「古き良きパリ」——（かつて貴族たちが絞首刑にされた）鉄の絞首台に吊り下げられたほの暗いオイル・ランタンのパリ、手押し車の水を売り、バケツ一杯一ペニー——飲用、洗濯用、調理用などあらゆる用途に使う——で、(au cinquième 「六階の」) 家のドアにそれを配達した水運搬人のパリ、である。

たくさん通りがあった——それらは少しも魅惑的でもロマンティックでもなかつた——そこではどの家も、書かれることがなかつたその家の記録が家の外側の空氣中に漂っていた——記録全部が味わいのある快いものではなかつたが、常に興味と魅力

* オスマントル：十九世紀後半にパリの都市改造計画に取り組んだ。

で満ちていた！

その家の馬車門を通過する際に、その背後や階上にはどんな人が住んでいるのかを嗅ぎ分けることができた。その人たちが何を食べ、何を飲み、何を生業にしていたか。家で洗濯をするのか、獸脂や蠅を燃やすのか、コーヒーにチコリを混ぜるのか、グリュイエールチーズを過度に好むのか——これは、世界でいちばん大きく、安く、質素で、手ごわいチーズである。オイルやバターで揚げるのか、焼きすぎのオムレツとガーリックをサラダに入れるのを好むのか、カシスを漬けたブランデーやアニゼットをリキュールとしてちびちび飲むのか。鼠が走り回っているのか、その駆除のために猫や鼠捕りを使っているのか、どちらも使っていないのか。季節の菓子や撫子なでしこやアラセイトウを買ったのか、それらを長く保存しそぎたのか。金曜日に赤インゲンや白インゲンやヒラマメだけで絶食したのか、教皇から特免をいただいたのか——あるいはひょつとしたら、教皇の特免さえなしで済ませたのか。

それというのも、こういう内情を暴露してしまうようなものとは、複雑に混ざり合つた悪臭を放つ音の倍音だつたらだ。

私には、その臭気の根音をはつきり定義することはできない——いつも存在し、いつも同じもの。たくさんの世帯に差し迫つてゐる災いへの警告で満ち満ちたもの。彼

らはその波を気に留めない。ノートルダムの大鐘(おおがね)（パリのビッグ・バン）から重要な行事のときに響きわたった音のように、ゆっくりと、だが確実に迫つてくる、不吉なもの。華やかな街中を、昼夜を問わず押し寄せるもの——隅々まで浸透し、最も人目ににつかないくぼみにまで氾濫(はんらん)し、祭台をまわにその香で浸すもの。

"Le pauvre en sa cabane où le chaume le couvre

Est sujet à ses lois;

Et la garde qui veille aux barrières du Louvre

N'en défend point nos rois."

「*藁葺(よぶ)小屋の貧しい人は

 その支配を受けている。

そしてルーヴルの門番は

 我らが王をそれから少しも守ひな」

*藁葺(よぶ)小屋の…………マヘルアの詩『娘(むすめ)の死につじテデュ・ペリエ氏への慰め』の一節。

そしてここで、私はこれを書きながら、かすかで、ほとんど知覚できない幽霊のような香りの感じ——ただのノスタルジックな幻想、混ぜ合わされた、一般的な、合成的な、包括的な香りの幻想にすぎないが——、五十年前の「Tout Paris 「パリ全体」」の抽象的な嗅覚的象徴が、過去から私のもとに再び訪れてきているのを感じる。私は、その素朴な豊かさと生氣のすべてを、喜んで肺の奥まで吸い込むだろう。香りは、楽音と同じく、記憶の本質を純化する類い稀なるものであり（これは驚くほど素晴らしいフレーズだ——私はこれが何らかの意味を持つことを願っている）、過ぎ去った場面や日々の魅力を思い出すためには、香りはそれ自体が魅力的である必要はないのである。

ああでも！　香りは自由に甦らることはできないのだ、この詩のようには。

「かつて愛した

甘く柔らかい旋律を！」

おお、古いフランスの匂いをハミングしたり口笛で吹いたりできれば！　そうすれば、パリのあらゆるもの、甘美な帝政前のパリを、一吹きで呼び起こすことができ

るのに！

こんなやり方で、（当時その偉業の名声がフランス全土を埋め尽くしていた）三銃士のような私たち三人の小さな少年は、後年、遠く離れ、ばらばらになつたときにそれについて反芻するため、甘美な思い出を書き集め、積み重ねた。

あの *bande joyeuse* 「愉快な一団」全体——老いも若きも中年も、少佐殿からミムジー・セラスキアに至るまで——は、私以外は全員——我が親愛なるマッジも除く全員——、もう死んでしまつた。マッジはとてもかわいくて屈託のない人だつたが、私はあれ以来彼女とは会つていない。

• • • • •

*帝政前……八五ページに「四〇年代前半」とあつたので、このピーターの少年時代は一八四〇年代前半のことであり、よつて「帝政前」とは「第二帝政前」のことである。

以上、私は自分が操れる限りの速さであの幸せな時代を素描しようと試みた。その時代は、私が十二歳のとき、唐突に、極めて悲劇的に終わりを迎えた。

我が親愛なる愉快で楽天的な父は、自分の発明した安全ランプの爆発で、一瞬にして死んでしまった。そのランプはサー・ハンフリー・デービーのものに取つて代わり、一財産作ることになるはずのものだったのに！ 何という冷酷な運命の皮肉だろう。

彼は自分の成功を信じており、最後にはお金が入ると確信していたため、アンジューにあるマリエールという名の魅力的な小さくて古い領地（お似合いの魅力的で小さくて古い大邸宅がある）を得ようと交渉中だった。それは彼の先祖の所有だったもので、我が家は名前をそこから取つた（私たちはパスキエ・ド・ラ・マリエールで、完全に古き良き家系だったのだ）。私たちは田舎貴族として、永久にフランス人として、私たちをフランスの伯爵や男爵や貴族にしてくれそうなアンリ五世シャンボール伯が再び自分の地位に戻るまでの一時しのぎの、父権的で梨顔のブルジョワ王のもとで、自分の土地に住む予定だった——何のためかは誰にも分からぬ！

悲しみのあまり気が転倒していた母は、この悲惨な事故が起きたロンドンに向かい、やっとそこに着くと死産児を出産し、ほぼすぐに死んだ。こうして私は、一週間足らずで孤児になり、無一文になつた。というのも、父はこのときまでに自分のお金と母

の資産を全部使つてしまつていて、さらには借金でひどく苦しんでいたことが判明したからだ。私は若すぎ、悲しみに打ちひしがれすぎて、悲惨な死別であるということ以外の何も感じられなかつたが、自分の生活様式に莫大な変化がもたらされることがすぐに明らかになつた。

母方の親戚であるイベットスン大佐（裕福な人だった）がパッシーにやつて来て、私のために最善を尽くし、近隣で生じていた負債を支払い、私の悲惨な状況を解決してくれた。

しばらくして、彼およびほかの家族によつて、私は彼と共にロンドンに戻り、彼の価値基準に従つて、そこで最良の身の振り方を決めるべきだということが決定された。かくて、私の幸福な幼年時代は、それが始まつたのと同じように、ライラックとバイカウツギが強く香り、トンボや蝶やマルハナバチで鮮やかに彩られた美しい六月の朝に、終わりを迎えた。私の別れの言葉は（私にとって）胸の張り裂けるようなものだつたが、愛情を呼び起こすこともそれを感じることもでき、それが私の悲哀の埋め合わせであつたことを示した。

「Adieu, cher Monsieur Gogo. Bonne chance, et le Bon Dieu vous bénisse, (もしよろなら、ゴー
*サー・ハハフロー・ルードーのやうな……トーラー灯は一八一五年に発明されていた。

ゴーさん。お幸せに、神があなたを祝福されますように」とフランソワおじさんとおばさんが言つた。涙が少佐の鷺鼻から口ひげの上に滴り、今やほとんど白くなつていた。

セラスキア夫人はその優しい胸に私をしつかりと抱き締め、何度も何度も祝福してキスをし、私の顔に温かい涙を降らせた。ロンドンへと向かう過程で、私たちの馬車がトゥール通りに入つたときに見た最後の人物は、彼女のものだった。イベット・スン大佐は大声でこう言つた――

「何とまあ！　おい小僧、おまえのことをかなり気に入つていたような、あの美人の若い大女は誰なんだ？」



「パッ西ーよ、さらば」

いやはや！ なあ若造ドン・ジョヴァンニ、俺がおまえの立場ならいろいろしてやつたところなんだがな！ それと、長い緑のコートと赤いリボンを着けた見目のいい爺さんは誰だ？ 老兵だと思うが、ほとんど紳士みたいだった。あんなふうになれるのはごく少数のフランス人だけだ！」

イベットスン大佐とはこういう人だった。

そして、彼が話すと同時に即座に、私の守護者と恩人への不機嫌で冷たい嫌悪の小さな滴が、彼の声、顔つき、顔の表情、ものの言い方から、突然私の意識の中に滴つてきた——決して拭き取られることのない滴が！

とてもか弱いミムジーはどうしていたかというと、彼女はあまりにも悲しみに打ちのめされていたため、外に出てくることも、ほかの人たちのように私にさよならを言うこともできなかつた。これは後で聞いたことだが、このことが彼女を、それまでにないほどひどく長い病を患わせることになつた。彼女が回復したとき、その美しい母親はもういないことを知ることになつた。

セラスキア夫人はコレラで亡くなり、フランソワおじさんとおばさん、ペレ夫人、そしてナポレオン時代の囚人の一人（少佐殿ではない）、私たちが知っていたほかの何人かの人々、我が家の使用人テレーズも同じ病氣で死んだ。献身的なテレーズには、

そのお返しに私たちは全力で看病した。私がノートルダムの大鐘と比較したあの悪臭の警鐘が、警告し、また警告し、さらに警告したが、無駄だった。

私立療養所は解散となつた。少佐殿とその友人たちは仮釈放され、失われた指導者が戻ってきて——まずフランス共和国の大統領として、後に彼らフランス人自身の皇帝として——留まる、彼らにとつてよい時期が到来するまでの間、どこかよそへ行ってねぐらを得た。その後は、さらなる仮釈放は必要なかつた。

私の祖母とプランケットおばとその子供たちは怖がつてトゥールへと避難し、ミムジーは父親と一緒にロシアへ行つた。

こうして幸福すぎた七年間は悲惨な終焉を迎えたため、

"Le joli lieu de ma naissance!"

「自分が生まれた美しい場所！」

は、今はもうないのである。

第二部



私の外面的生活の次の十年間は、自分自身にとつてさえあまりにも面白くないので、できるだけ素早く済ませてしまつつもりである。私としては、読んでも退屈であることが判明するだけで終わるのではないかと懸念している。

イベットスンおじ（当時私は彼をそう呼んだ）は私を気に入り、教育と、社会人としての出発と、

私を「紳士」——「イギリス紳士」——にするための手配をした。その一方で、私は自分の名前を変え、彼のそれを取り入れなければならなかつた。理由は知らなかつたが、彼は私の父のあの名前を嫌っていたようだつたからだ。おそらく、彼は私の父を長年、生涯にわたつて傷つけ、父の方は常に彼を許していただからであろう。まことにもつともな理由だ！ またおそらく、彼は私の母が少女だった頃に三回プロポーズして、三回拒まれたからであろう！（三度目の後、彼は七年間インドに行つたが、その

出発の直前に父と母は結婚し、一年後に私が生まれたのだつた)

そういうわけで、ムッシュード・ゴーゴーことピエール・パスキエ・ド・ラ・メリエルはピーター・イベットソン氏となり、グレーの上着の学校であるブルーフライアーズに行って六年間——特にあの時代、人生で最も重要な一部——を過ごした。

私はその服装を嫌い、環境を嫌つた——背後に大きな病院、牛市場の残酷な臭い、酔っぱらい、汚物——ほかの建物といえば食肉解体場、安酒場、あるいは質屋などで、時々月曜日の朝に公開絞首刑を行つた陰鬱な向かいの刑務所が何よりも嫌だつた。この陰気な監獄は、夢でパッサーの親愛なる父と母とセラスキア夫人を見たいときにょつちゅう出てきて、私を悩ませた。

最初の一、二学期の間、彼らは私の思考の中にずっと存在し続け、私はいつも彼らの横顔を机や石版や書き方帳に描こうと試みていた。描いたものから類似点がとうとう消えてなくなつたようと思われるまで。次に私は少佐殿を描いた。彼の横顔が完全に困惑させられるものになり、描くのが不可能になり、生きたもののようではなくるまで。それから私はほかのものに頼つた。フランソワおじさんと、そのいつも変わらぬ bonnet de coton 「綿の縁なし帽」と藁を詰めた木靴。犬のメドール、振り木馬、その他の動物たち。パリから私を引き離した乗合馬車。重いジャックブーツを履

き、輝く帽子をかぶったお下げ髪の伝書使。彼らは、白い乗馬用ズボン、銀のボタンで覆われた尾の短い青いコートを着て、チュイルリーとサンリクルーの間を行き来する途中のパッシーを、首の周りに鈴を付けられ、尾を折り上げられ、いななきを上げている、エルギン・マーブルズの馬の頭のように美しい頭をしたグレーの小さな雄馬に乗って通り抜けていた。

私のスケッチでは、彼らはいつも同じように見て、歩いて、駆けていた。左向き、あるいは地図上で言うなら西向きに。少佐殿、セラスキア夫人、メドール、乗合馬車、伝書使たちは皆、満場一致で西を目指していた——どうやら、全員がロンドンへ行こうとしているようだ。彼らを熱愛している私の面倒を見るために。

少年たちの中には、このスケッチを褒め、保存した者もいた——大きい少年の何人かは、私が理想化した（！）セラスキア夫人の横顔を評価してくれたものだった。まづげがたっぷり一インチもの長さがあり、目は口の寸法の三倍もあつた。こうして、私はしばらくの間芸術家として名を成した。しかし、それは長くは続かなかつた。私の手法は限定的だつたからである。間もなく別の少年が学校にやつて来て、彼は多様性と対象への利益において私を凌駕した。彼はどちら向きでも同じように簡単に横顔を描くことができた。現在彼は著名な学士院会員で、昔の腕前をほぼ維持しているよ

うである。（＊）

*注——私はここで、いとこの「ブルーフライアーズでの」生活の詳細な説明を含む数ページを省略しました。そこには彼が先生方や少年たちについて書いた人物描写（実物よりも良く書いているとは限りません）も含まれています。その人たちの多くはまだ存命中で、有名になつた人もいます。とはいって、それらのスケッチは、名前も一緒に出すのでなければ特に興味を引くものにはならないでしょうし、それをするのは多くの理由から得策ではないでしょう。さらに言えば、私が除外した中には、彼のその後の人生や人格の発達に影響があつたものは多くありません。

マッジ・プランケット。

・
・
・
・
・

こういう具合で、私の学歴は全体として幸福でも不幸でもなく、また何らかの形で頭角を現すことも、（どちらかと言えば好かれた方だと思うが）素晴らしいつたり長続きしたりする友情を育むこともなかつた。一方、恥ずべき振る舞いをしたことなど

いし、知っている者の中に誰一人として敵を作ることもなかつた。珍しいくらい背が高く、非常に頑強に成長したことを除けば、（芸術的な手法が枯渇した後の）私は、周囲に見えていたに違いない少年像よりは平凡な少年で、パブリック・スクールには決して行かなかつた。ブルーフライアーズでの私の外的的生活についてはこれくらいにしておく。

しかし、私は自分の内なる世界を持つていた。その首都はパッシーであり、その動物相と植物相はリージェンツ・パークやロンドン動物園に劣るものではなかつた。

私はまだ夢を見る方法を学んでいなかつたのだが、昼間はそれを考え、夜はそれを夢見るのはすてきなことだつた。

しかしながら、すぐに別の、あまり排他的でない領域ができて、私はそれをあの過ぎぎ日別の少年たちと共有した。自由と歓喜の領域、そこでは鹿猟師のライフルの不吉な射撃音が聞こえ、私はチンガッチグックと彼の気高い息子——ああ！ モヒカン族の最後の一人だ——の友人だつた。ロビン・フッドとフライヤー・タックが陽気

* チンガッチグックと彼の気高い息子……ジェームズ・フェニモア・クーパーの五編の連作小説『草脚絆物語』の登場人物。「気高い息子」はアンカス。とすると、その前の「鹿猟師」は、この連作の共通主人公ナティ・バンボであろう。

に騒ぎ、緑に茂る森の中でリチャード獅子心王と拳を交えた。真夜中に、絞首台があつてジプシーが出没するトゥレーヌの森を、貴婦人の幸せな従者であるクウェンティン・ダーウォードの横に並んで馬で駆けていく……ああ！ 私は騎士の夢を見ていたのだ！

幸福な時間と国々！ その懐かしさを知るためには、霧深いロンドンの中心でグレーの上着を着た男子生徒である必要がある。

実際のところは、ロンドンにメリットがないわけではない。サム・ウェラーがそこに住んでいたし、チャーリー・ベイツや魅力的なアーチ



騎士の夢

トフル・ドジャーもいた——ディック・スヴィヴェラー、彼の愛らしい侯爵夫人もいた。彼女はレベッカ・オブ・ヨークや魅力的なダイアナ・ヴァーノンとともに、私の忠誠を分け合つた人である。

あの当時にイギリス少年であること、そしてこのような友人たちを愛することは素晴らしいことだつた！　だがまた、フランス少年であることも素晴らしいかった。パリのことを知つてること、真にフランス的な感じ方——それに言語——を持つこと。

実際、バイリンガルの少年——生まれつき二か国語を話す少年（特にフランス語と英語）——は、ある稀な特権を享受している。もし二つの母国出身で、二つの母国のうち彼がたまたまいない方の国への望郷の甘い思いに時々耽ることができるとしたら、それは男子生徒（彼は男子生徒になるはずなので）にとって悪いことではない。そしてブルーフライアーズの回廊で『三銃士』を、あるいはフランスの、非常に多くのリ

*クウェンティン・ダーウオード……ウォルター・スコットの同名小説の主人公。
*サム・ウェラーが…………このあたりはディケンズの作品の登場人物。サム・ウェラーは『ピ

クワイック・ペーパーズ』、チャーリー・ベイツとアートフル・ドジャーは『オリヴァー・こつとうツイスト』、デイツク・ペイ・ヨークや…………レベッカ・オブ・ヨークとダイアナ・ヴァーノンは再び

スコットの作品のヒロイン。前者は『アイヴァンホー』、後者は『ロブ・ロイ』。

セの運動場の代用となる、どんよりとほこりっぽい刑務所の運動場で『アイヴァンホー』を読むことも！

傾聴しなくとも、彼は毎日の退屈な言語を自分のあらゆる周囲で耳にし、学友たちの、嫌というほどほどよく知っている声のやかましい叫びを耳にする——彼らの甲高いソプラノ、声変わりしたバリトン、蛙みたいなバス！ 彼らは学校へ行き、泣きそうな声、元気のない声、わめき声を発する。ディック、トム、ハリー、あるいはジュー、エクトル、アルフォンス！ その声はどれほど漠然として、些細で、陳腐であることが——あまりにも耳慣れた音である。それでも、言語的にはまったく異なるけれども、同じように慣れた言葉の流れであるがゆえに、そのうつとりした目を通じて静かに意識に流れ込んでくる本の言葉に、その音たちは何と付加的な魅力を与えてくれることだろう！ 豪華な精神的排他性と自己隠遁の感覚が、その対照によつて二倍完全なものにされるのだ！

そして、この不思議な魅惑が申し分なくすっかり感じられるためには、両言語がともに母国語でなければならない。どんなに完璧でも、後天的に身に付けたのではだめなのだ。すべての単語が、あまりにも遠い昔であるためほとんど記憶されていないような個人的過去に、深く根ざしている必要がある。それぞれの音や印刷されたときの

様相が、子供っぽい家庭の記憶を豊富に含んでいなければならない。それを甘美なものに、新鮮なものに、強力なものに、土の香りのするものにする、数え切れない、言いやうのない、金で買えない連想性に富んでいなければならぬのだ。

おお！ ポルトス、アトス、ダルタニヤン——私がどんなにあなたたちを愛したことか、そして不滅の従者たち、ランシェ、グリモー、ムースクトン！ あなたたちは、私が深く愛した言語を、何と上手に、才氣煥發かんぱつに話すのだろう——ブルーフライアーズの優れたフランス語教師、ラルマン先生をさえしのぐほどに。先生は、いちばん不規則な仮定法の動詞を、まるで羽のように——空気みたいに軽いもののように——軽やかに使いこなしていたのだ。

次にモンテ・クリスト伯がやって來た。彼は私に、憎しみと復讐という恐ろしい教訓を（教えすぎるくらい）教えてくれた。それに、『^{*}パリの秘密』『さまよえるユダヤ人』など。

しかし、私の初恋の人、哀れなエスメラルダの静かに紡つむがれる忘れられない物語が、私の涙でかすんだ目とかき乱された魂の深奥を初めて通り過ぎたときに、私が感じた

* 『パリの秘密』『さまよえるユダヤ人』……前者は八七ページに既出。いずれもウージェース・シューの小説。

ものを表現できると考えられる言葉は、いずれの母語の中にもない。（＊）彼女の残酷な運命は、私の学校での生活の最後の学期を、同情と悲哀と憤慨でいっぱいにした。それは、私の学校生活中で最も重要で、最も厳肅で、最も画期的な出来事だった。私はそれを読み、読み直し、さらにもう一度読んだ。あれ以来、私はこの作品を読むことができていない。かなり長いのだ！ それでも、我ながら何とよく覚えていることか、当時はどれほど短く感じられたことか！ そして、おお！ 有意義に使われた時間は、何と短いことだろう！

*『ノートルダム・ド・パリ』ヴィクトル・ユゴーによる。

あの謎めいた言葉「Avayki!」「アナンケー！（＝必然、宿命）」を、私は自分の全部の本の遊び紙に書いた。机の上にそれを彫った。反響する回廊でそれを詠唱した！ いつの日かノートルダムに巡礼に行くことを誓い、すべての穴や隅にそれを探し、自分の目でそれを読み、自分の人差し指でそれを感じられるようにと思つた。

それから、鬼婆^{おにばば}のような老女が暗い貧民街で歌つてゐるあの恐ろしい予言の歌——私はこれにもどれほど取り憑かれたことだろう！ 何か月もの間、不安に苛まれた自分意識からそれを振り払うことができなかつたのだ。

"Grouille, Grève, grève, grouille,

File, File, ma quenouille:

File sa corde au bourreau

Qui siffle dans le préau.

「動け、悲しませよ、悲しませよ、動け、

紡げ、紡げ、我が糸巻き棒よ。

中庭で口笛を吹く

死刑執行人の縄を紡げ。」

• • • • • • •

"Avdykn! Avdykn! Avdykn!"

「ナンケー！ ナンケー！ アナンケー！」

• • • • • • •

そう。フランス少年であったのはほんの数年間だけだったが、その価値はあった。

特にブルーフライアーズで定常に過ごしたときの休暇の間に、私はそのことに気づいた。

というのも、近くのホルボーンにはフランスの貸本図書館があつて——樂園だったからだ。

それは昔は裕福だった感じのよいフランスの老婦人によつて維持され、彼女は私にとても親切で、私が求めた本をすべて貸してくれるとは限らなかつた！

こうして私は、堕落した時代のこれらの光の魔法使いたちに



"NOTRE DAME DE PARIS" 「[ノートルダム・ド・パリ]」

抗しがたく魅せられて、学校生活のほとんどを夢見がちに過ごした。さらに年長の妖術使いたち——ホメーロス、ホラティウス、ウェルギリウス——の声には、まったく耳を貸すことなく。この人たちと親しくなるために私は学校に送られたというのに、ほかの劣等生たち同様、彼らに耳を塞いだことに結果的に後悔したときには、もはや遅すぎた。

そして、私が夢を見るのは昼だけではなかつた——夜も夢を見たのだ。私の眠りは夢に満ちていた——恐ろしい悪夢、絶妙に美しい光景、不可解な回想に満ちた奇妙な場面。従来の人間の夢全部がそうであつたように、何もかもが曖昧で支離滅裂だった。というのは、私はまだ夢を見る方法を学んでいなかつたからである。

広大な世界、恐ろしく美しい混沌^{こんとん}、絶え間なく変化する人生の万華鏡、これらはあまりにも影がちでぼんやりしているため、多忙な、覚醒した心には永続的な印象を残すことができない。あちこちで恐怖や歓喜のより鮮明なイメージを伴い、人はそれを、奇妙な驚きと疑問とともに、数時間は覚えている。コールリッジが、ダルシマーを奏

でアビシニア人の乙女（魅力的で最も独創的な組み合わせだ）を覚えていたように。全宇宙が人間の脳の中にある——少なくとも人間の脳が保持できる限り。おそらくそれはほかのどこにもない。睡眠が意志を弛緩させ、注意をそらすための世俗的な諸状況がない場合——義務も、苦痛も、それを人に強要する喜びもない場合——、人が乗っていない幻想という馬がはみを噛んで制御を振り切り、全宇宙が狂気に走り、その野性の意のままに私たちを振り回す。

言葉では言い表せない偽の喜び、言葉では言い表せない偽の恐怖と苦悩、ぼんやりと、ガラスの中に見えるようにしか見えない奇妙な幻影たちが、わけも分からずお互いを追いかけ合い、薄明かりの領域を横切り、私たちの曇って不完全な意識の暗いくぼみを通ってかくれんぼする。

そして、偽の恐怖と苦悩は、言葉で言い表せないとしても、覚醒している人間全員にあまりにも頻繁にあるような、あるいはもっと悪いケースもあるような、本物の恐怖や苦悩ほどには悪いものではないのである。しかし、言葉で言い表せない偽の喜びの方は、それらが続いているほんのわずかの間、考え得るあらゆる人間の至福を超えるのだ！ 私たちは目覚め、^{いぶか}詫しみ、そのような超人間的な無上の歓喜に基づいたように思われる、かすかなよりどころを思い起こす。もし無上の歓喜が存在しないの

なら、そして脳がそれを感じる神経を持つていなければ、そのよりどころなど何になるだろう？

激しい苦痛の神経には実に豊かに恵まれていて、苦痛と悲嘆のためにには実際に見事に組織されている哀れな人間の性質は、喜びへの備えの方は貧弱なものにすぎない。

私たちは、らいせ來世のためには、どんな地獄も発明してこなかつた！ 結局、実際のところはどんな地獄も、自分と他人の両方のために、本当に実に小さな創意工夫のみを費やして、こちらの世界を頻繁にそれに変えてきたのだ！

おそらく、最も大物かつ最も無知蒙昧もうまいな愚か者たちが、最高の地獄製造者だったのだろう。

私たちの天国のうち最高のものがお粗末でいいかげんな概念でしかないというのに、それでも私たちのうち最も崇高で最も賢い者が、それを飾つて美しくしたり、そこで生活を送る価値があるようと思えるものにしたりするのに最善を尽くしてきた。私たちの経験の範囲を超えて想像したり発明したりすることは、まず不可能である。

さて、偽物だが言葉で言い表せない喜びを伴う私の（多くの人に共通する）これらの夢は、人間の脳内の隠れた能力、これまで思いもよらなかつた、無上の喜びという

*ダルシマーを奏でるアビニア人の乙女……コールリッジの詩『クーブラ・カーン』に登場。

活動していない潜在能力が存在し、おそらくいつか開発され、覚醒者も睡眠者も等しく全員の手が届く範囲内に置かれる日が来る、ということの証拠ではないだろうか？思のままに到達でき、強度や持続時間において（例えば）坐骨神経痛の発作に相当するような、言葉では言い表せない喜びの感覚は、私たちがその条件下で生きている悲惨で一方的な状況を、均一なものにするのに役立つことだろう。

だが、男子生徒だったとき、私が夢見ることがなかつたことが一つある——すなわち、私と、たいまつを持つてゐるもう一人とが、ある日、申し合わせにより、脳の神秘的な洞窟を探検することで幸福を見いだし、以前は無秩序でしかなかつた場所に秩序の基礎を作り、その非現実的で荒廃した^{はかな}儚い幻想の全領域を、そこに駆け込もうとする全員が到達できそうな、現実的で安定した居住できる世界へと進展させるであろうこと、である。

ついに学校を永遠に去る日が来て、ホプシャーのイベットソンおじを訪ねた。そこで彼は、自分の土地に新しく快樂的な豪邸を建てているところだった。一、二年前に相続した古い家は、もはや彼には十分ではなかつたからである。

北海沿いの面白みのない海岸で、岩も崖も桟橋も木もなかつた。波が打ち寄せるための冷たい灰色の石さえなかつた——砂以外は何もない!——ブルジョワ的な海とでも言おうか、最高の気分のときでも魅力がなく、激怒しているときでもたいて怖くはない。そのブルジョワの海が雇い、あまり気前よく報酬を与えていたとは思えない、たまに見つかるわずかな漁師に対して以外では。

内陸も、事情はほぼ同じだつた。その田舎はずつと灰色だと思つていた。見て、緑であることに気づくまでは。あのとき、もし老いて賢くなつていたのなら、それについてももう考へず、視線を己の内面に向けたところである。そのうえ、雨が絶え間なく降つてゐるようだつた。

しかし、それは田舎と海だつた。ブルーフライアーズとその回廊に続く——ニューゲート、セントバーソロミュー、スマスフィールドに続く。

結局、魚を釣つたり、海水浴をしたり、田舎を馬で走つたりすることはでき、少し

後には獵犬を追うことさえできた。そのことは、私がフランスの仕立て屋のように乗馬していると思い、私にそう言つて、完璧に乗馬している魅力的な若い女性たちの面前で、ふざけて私のまねをしたおじの恩恵を受けていなければ、比べものにならないほどの喜びになつたところである。

実際、以前のものと比べるとそれ自体は天国だった。私を紳士——イギリス紳士——にするためのイベットサン大佐の努力がなかつたら、もつとずっと長くそのままだつただろう。

紳士とは何か？ それは威厳ある古い名称である。しかし、どういう意味なのか？ あるときは、ある男性について、彼は紳士だ、と言うことは、私たちが考へ得る最高の名誉称号を彼に授けることである。たとえ私たちが王子のことを話しているとしても。

またあるときは、ある男性について、彼は紳士ではない、と言うことは、彼がいるような人間集団にはふさわしくない、社会的のけ者という烙印らきんを押すことであると言つてよからう——たとえ雑貨小間物商が、別の同業者について話しているだけだとしても。

紳士とは誰なのか、そして誰がそうではないのか？

魔王もそうだったし、ジョン・ハリファックスもそうだった。彼らを最もよく知る人々を信じるならば。それに、故サー・エドワード・ブルワー、リットン伯爵等によれば、「^{*}ペラム」という人もそうである。そして確かに、まるで彼は当然そのことを知っているかのように思われた。

そして、私は別の人間になることになつていた。イベットスン館の、——を引退した大佐、ロジヤー・イベットスン殿に従つて。そして、彼もまたあたかも知つていて当然であるかのように確かに思われた！　その語は、（「私」に話しかけるとき）絶えず彼の唇にあつた。女王陛下の任務を負う代わりに、まるで働くなくとも暮らせるだけの財産を得たばかりの、美容師の助手になつたかのように。

この授業講座は、私がロンドンを離れる前に、彼が私を自分の仕立て屋に送つてくれたことにより、十分快適に始まつた。彼らは美しいスーツを何着か仕立ててくれた。特にイヴニング・スーツは、ああ、私にとつて一生ものだつた。グレーの上着の学校の制服の後に続くそれらは、自由と成年男性の輝く世界への入門のようだつた。

イベットスン大佐——私の普段の呼び方ではイベットスンおじ——は、私の母のい

*ジョン・ハリファックス……ダイナ・クレイクの『紳士ジョン・ハリファックス』の主人公。
*ペラム……エドワード・ブルワー・リットンの『ペラム、あるいはある紳士の冒險』の主人公。

とこであつた。私の祖母のビダルフ夫人は、彼の父親、故イベットソン助祭長の姉妹である。非常に敬虔^{けいけん}で学のある模範的な聖職者で、良家の出であつた。

しかし、彼の母親（助祭長の二番目の妻）は、メンドーサという名のたいへん裕福な質屋の一人っ子で、女子相続人であった。ポルトガル系ユダヤ人と言われ、さらに静脈にわずかに色の付いた血が流れていると言っていた。實際、この遠いアフリカの家系は、イベットソンおじの厚い唇、大きく開いた鼻孔、黄色い白目と大きな黒目——特に、ロンドン最高の靴屋と彼自身の両方に多大な苦労をかけた彼の長くて広くて肉厚のかかと——などに、依然として顕現していた。

その他の点では、その醜い顔にもかかわらず、彼は非常に背が高くて頑健な体格をしていたため、兵士のような特徴的な雰囲気がないわけではなかつた。彼はコルセット、それに若はげだつたため素晴らしいウイッグを着用していた。帽子を片側にかぶつていて、それは（私の無教養な目には）かなり「洒落者」のようには見えたが、あまり紳士のようには見えなかつた。

帽子をかぶつて片目の上で粋に傾けても、まだ「紳士みたいに見える！」

何とかなる、と言われる。かつてそれをして、今もまだやつている！ たぶんそれは、たいして高尚な達成ではない——だが、その程度のものでも、着用者には社会的

才能と肉体的才能との何かしら稀な組み合わせが必要となる。そして、ユダヤ人ないしアフリカ人の血を持つことは、その一つであるようには思われない。

イベットソン大佐は、何でも少しだけすることができた——スケッチしたり（とりわけ穏やかな海に浮かぶ蒸気船と、その美しく濃い煙が水に反映している様子を）、ギターを奏でたり、フランスやイタリアの小唄を歌つたり、上流社会向けの娯楽詩を書いたり、ド・ミ・ユッセを引用したり——。

"Avez-vous vu dans Barcelone

Une Andalouse au sein bruni?"

「*バルセロナで見ましたか？」

褐色のアンダルシア人を」

彼は、可能な場合はフランス語を話した。イギリス人馬丁に話しかけるときでさえそうしてしまふことがある、そんなときは急に気づいて自分の軽率さを謝罪した。英

*バルセロナド………“ユッセの『アンダルシアの女』冒頭。

語を話すとかわる。
彼はそれを^{*}「へ
安っぽいフランス
語の常套句や慣用
句で刺繡^{じようとく}したも
のだつた。」[Pour
tout potage 「全部
らべべぬめり」]
[Nous avons changé
tout cela 「我々は
そらべべりふ全部
を変えてしまつた」] [Que diable allait-il faire dans cette galère? 「一体全体何だつてそんな
ガレー船に乗り込んでしまつたのだ?」] 等。あることはイタリア語の「Chi lo sa? 「誰
が知つてらぬべ?」] [Pazienza! 「仕方なしー 我慢しろー」] [Ahimè! 「ああらぶらなー」],
*またラテン語の「Eheu fugaces 「ああ、つかの間だ」] [Vidi tantum! 「私は見たー」] 等。
いうふうがであるの^ア、彼はイートン校の生徒だつたからである。私でも全部理



"PORTRAIT CHARMANT, PORTRAIT
DE MON AMIE..."
「[魅力的な肖像、我が友の肖像……]」
【訳注】マリー・アントワネットの詩

解できたことから考えれば、かなり安っぽいラテン語だったに違いない！ 彼は、ドイツ語とギリシャ語には一線を引いて踏み込まなかつた。幸いなことに、私もそうだ。彼は独身で、家の中の整頓状況は乱れていたが、そのことに立ち入るつもりはない。だが彼の家は、あの時点では良いものになる見込みがあるようと思われた。

彼の建築家リントット氏は、並外れて小柄な人で、非凡な才能に溢れ、完全に自分の力だけで地位を築くのに成功していた。彼は私の友人になり、タバコの吸い方やジョンの水割りの飲み方を教えてくれた。

彼は自分の仕事をうまくやつた。しかし、夕方になると、彼は自分にとつての適量よりも多く酒を飲み、彼の唯一無二の詩人であるシェリーを激賞するのが常だつた。

*「よく安いボジョーランス語の常套句や慣用句……『Pour tout potage』は、直訳すると「ボタージュ全部ド」。『Nous avons changé tout cela』は、ヤラホールの『いやいやながら医者にやれ』の第二幕第四景スガナレルのセリフ。「Que diable allait-il faire dans cette galère?」は、エドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』第五幕第六景のシラノ、あるいはモリエールの『スカパンの悪だくみ』第二幕第十景のスカパンのセリフ。「一体全体何だつてそんな危なういにかかわりあつてしまつたのだ？」の意で使われる。

*またラト・ハ語の……『Eheu fugaces』はホラティウスの『歌集』から、「Vidi tantum」はオウイディウス『悲しみの歌』から。

彼は『わぱり』（彼の唯一無二の詩）を、^{*} **h**をあややにした、ややロ^コンド^クン^ニ訛^リの発音でよ～暗唱していた――

"Ail to thee blythe sperrit!

Bird thou never wert,

That from 'eaven, or near it

Po'rest thy full 'eart

In profuse strains of hunpremeditated hart."

「あ～りや、陽気な精霊よ。」

そなたは鳥とは思えない、

天国かその近くからや～て来て、

い～ぱいの心を注ぐ

即興技法の豊かな歌声に乗せて。」

夜がゆ～り更けて～づれ、彼の朗読は「低俗喜劇風」になり、アクセントと

ユーモアはまったく称賛すべきものになつた。彼はロンドンの全俳優（私が見たことのある人は一人もいなかつたが）をまねることができ、それがあまりにも上手なので、私は喜びと驚きで夢中になつた。私たちが「イベットソン・アームズ」の彼の部屋で、一緒に座つてタバコを吸つたり酒を飲んだりしていたとき、彼が繰り広げるゝすべてを見る観客は、私以外にはいなかつた。

私は愛情に感謝した。

やがてその後、彼は再び感傷的になつたものだつた。結婚生活の喜びや、リントット夫人の並外れた知性と美貌を、私に長々と話してくれた。初め、彼は彼女の心の美しさを私に説明し、「L·E·L^{*}」やフェリシア・マンズと彼女を比較した。次に彼は後退して、彼女の肉体的な完璧さを拠点とした。その点において彼女と比較できる者は誰もいなかつた——が、述べるのは差し控えておく。

* 「ヒをあやふやにした、やや口ハドハ詠りの発音……」ヒリーの詩は英語だが、リリヤは小説の原文を載せた。『ひばり』原作の綴りは「Hail to thee blithe spirit! ＼ Bird thou never wert, ＼ That from heaven, or near it, ＼ Pourest thy full heart ＼ In profuse strains of unpremeditated art.」。比較するふう、ヒが落ちたり加わつたり^レヒらぬのが分かぬ。
* 「・山・」……女流詩人レナ・マリザックス・ハハムの「ヒ」。

彼はとてもうぬぼれが強かつた。自分がすること、好きなこと、自分に属することは何であれ、世界のほかの何よりも優れていると思つていた。彼はほかの誰よりも賢かつたが、リントット夫人は除いて、なのだつた。彼は夫人の方が上であることを認めていた。その後は元気になり、また愉快な人になつた。

実際のところ、彼の自己満足はまったく異常なものだつた。そして、さらには異常だつたのは、それが少しも不快なものではなかつたことだ——少なくとも、私にとつては。おそらく、彼がとても小柄な人だつたためだろう。あるいは、彼のその虚榮心のほんどが、



「私は愛情に感謝した」

あまり強固な基盤を持たないようと思われたためなのかもしれない。彼の虚栄心の強さは、私が彼について最も称賛していた才能ではなかつた。またあるいは、虚栄心が顔を出すのは彼がいちばん酔っぱらつたときで、愛想のよいほろ酔い状態がその欠点をかなり相殺したため、ということもありそうだ。さもなくば、彼が最も誇つたものが私が私自身について決して誇りそうもないことだつたため、ということもあり得るだろう。他人においていちばん容赦できない虚栄心とは、自分がそれを意識しているか否かにかかわらず、自分自身が内心抱いているそれなのだ。

そのうえ、彼は私がそれまでで初めて会つた道化者だつた。何という贈り物！ 彼は、人が自分と一緒に笑つてゐるか自分のことを笑つてゐるかを問わず、そうあらうとしたときにはいつでも道化者だつたし、私はそのために彼を愛してゐた。この世で、まだ道化であらうとし、もうそれがうまくいかなくなることほど、痛ましいまでに哀れなものはない。

リントット鉱脈が掘り尽くされた瞬間、彼は話をやめて泣き始めるという判断力を持つていたが、それはそれで面白いものだつた。それから私は彼が階上の自室に行くのを手伝い、彼は自分の服から飛び出して自分のベッドに入り、あつという間に眠つてしまつたものだつた。まだ小さな鼻から涙が滴り落ちてゐる状態で——それさえも

面白かった！

だというのに、翌朝になると、まるでジンや詩や夫婦間の愛などなかつたかのように、また戯れなどは死に値する罪でもあるかのように、彼は厳格で、油断なく、疲れ知らずになるのだった。

イベットソンおじは、彼を建築家としては高く評価していたが、それ以外はそうではなかつた。彼のことは単に活用しただけである。

「もちろん、あいつはひどい俗物だ。頭にhを付けないしな」（まるでそれが死に値する罪みたいだ）「だが、実に独創的だ——あの鐘楼を見てみろ——それにな、あいつは安いんだよ、なあボーイ、安上がりなんだ」

イベットソン・ホールからさほど離れていない美しい公園に、素晴らしい家が何軒か建つていた。しかしイベットソンおじは、名前や富や社会的地位においてその所有者たちと同等であるように見えたのに、私が知る限り、彼はその誰とも親密な仲にはならず、知人ですらなかつた。彼はその人たちを軽蔑して、野蛮人だと言つていた——彼とは何の共通点もなかつた人々を。たぶんその人たちも、この合いそうにない人間を知り得なかつただろう。特に女性たちは。というのは、男子生徒みたいな私も、別の性別の人間にに対する彼の態度が、必ずしもその人たちやその夫や父親や兄弟

たちを喜ばせるようなものではないということを発見するのに、長くはかからなかつたからだ。彼の異性の見方は、まづまづ十分なものだった。実際彼は、その女性の友人と知り合いの大半が、生涯を通じて *corps de ballet* 「コール・ド・バレ」や *the demi-monde* 「ドゥミモンド」など——この世の礼儀作法を学ぶには最良の学校ではないと思う——に所属していたのだ。

一方で、彼は町に非常に親しくしている家族があった。医者、教会主管者、自分の代理人（体を壊した戦友で親友だった人で、給料を受け取つてからは彼を愛することをやめてしまつていた）らのそれである。彼はリントット氏と私をそれらのパーティによく連れていった。そして、彼はそのパーティの中心人物だった。

彼はフランス語の小曲を歌い、音楽的な声は出ないけれども、かなり上手なフランス語のアクセントを付けていた。またたいした急所もないような小さな逸話を話したが、フランス語とイタリア語だった（そのためその急所が外れることはなかつた）。私たちは皆、わけも分からず笑い、称賛した。分かつていたのは、彼が領主であるということだけだった。

*生涯を通じて………「コール・ド・バレ」は群舞の踊り子たちのことだが、この当時のバレエ界には売春も多く、暗にそれを指している。「ドゥミモンド」は高級娼婦界。

これらの楽しい機会において、気の毒なリントットの人を面白がらせる自信と能力は、完全に彼から去ってしまったようだつた。彼はむつりとして隅に座つていた。急進的で懷疑的で、また絶対平和主義の人であるというのに、彼は軍隊と教会の社会的地位にはひどく感銘を受けていた。

医者については、非常に怜俐れいりで教養ある人物で、数マイル四方で最も学識高い人であつたのだが、彼はほとんど何とも思わなかつた。しかし、教会主管者、大佐、今はただの地所管理人である哀れな船長らは、敬意のこもつた畏怖の念で彼を満たしたようだつた。彼は、骨を折つた甲斐もなく、船長夫人や教会主管者夫人、それにその特に美しくもない娘たちには、無慈悲に冷たく待遇された。彼女たちは、彼がどんな才能を隠し持つてゐるのかなどほとんど考えもせず、彼を平凡な小男としか思つていなかつた。彼は、彼女たちの音楽の譜めくり役にはまったくふさわしくないのだった。間もなく、イベットソンが、ビール醸造者じょうぞうの未亡人であるディーン夫人にこの上なく熱を上げてゐることが、すっかり明らかになつた。その人は実際、自他共に認めるたいへんな美人で、私もそう評価してゐたのだが、リントット氏だけは別だつた。彼は言つてゐた。「へん、俺の妻を見てみろってんだ！」

彼女の母親のグリン夫人は、イベットソン大佐への称賛にかけては私たちの誰より

も上だつた。

例えは、デイーン夫人が箸はしにも棒にもからぬようなくよくある安っぽい小ワルツを演奏すると、グリン夫人は叫んだものだつた。

「いい曲じやない？」

するとイベットスンは言うのだ。「いいです！ いいです！ 誰の曲ですか？ ロッ

シーニ？ モーツアルト？」

「あらまあ、違いますよ、大佐つたら。覚えていらっしゃらないの？ あなたの曲ですよ！」

「ああ、そうでした！ すっかり忘れていましたよ！」かくて、我らが偉大な人物によつてなされたそのような天然の誤りに対し、ありきたりの笑い声と拍手とがどつと起ころである。



「イベットスンおじのワルツの一曲」

まあ、私は演奏も歌もできなかつたし、この頃にはもうフランス語よりも英語を話す方がずっと楽だと、特に自分たちの言語以外を知らない英語話者に対しては英語の方が楽だと感じるようになつていて。それでも、イベットソン大佐は時々、私のことをかなり誇りに思つてゐるよう見えたものだつた。

「Deux mètres, bien sonnés! 「1メートルは優に超えて います！」」彼は私の身長をほのめかして言つた。「et le profil d'Antinois! 「それに、アンティヌスの横顔です！」」彼は*uの上の二つの点を外して発音するのだった。

その後は、もし彼が自分の夜会を心地よいものと感じたなら、また彼が知つているものを全部歌つたなら、あるいはまたディーン夫人が普段よりも愛情深く献身的な態度を示してくれたなら、さらには彼女の母親がピアノを弾くときに私が巧妙な譜めくりによつて勲功^{くんこう}を立てたなら、私たちが徒歩で家に帰るとき、彼は私に言つたものだ。「おまえは俺の評判を高めてくれた。おまえが décrassé 「洗練」を身に付けたら、たちまちこの世で最も優れた人物になることだらう。おまえは俺の仕立て屋でもう一着ドレススーツを作る必要がある。後ろの尾の部分を八分の一インチだけ長くしてな。おまえは俺の昔の連隊（第十一近衛ならず者隊）で任務を得るのがいいだらう。ものすく優秀な騎兵連隊だ。そして世界を見て、心が張り裂けるような思いを味わうがい

い（我々の友人たちにきれいな妻と姉妹がいるのは理由がないことではない）。そして最後に、若く美しい爵位相続人の誰かと結婚する。俺が哀れな孤独老人になつたとき、俺のための家を作ってくれ。俺のために最小限のことをしてくれればいい。バンの耳、ワインと水のグラス、きれいなナップキン。部屋は二つで、古いピアノとわずかな良書があればいい。もちろん、イベットスン・ホールはおまえのものだ。あの家が俺がこの世で持つてゐる全財産だ』

このすべては内緒のフランス語で——雲さえ私たちの話を聞かないように——、また血縁者どうしの親しいおまえ・俺呼びで語られた。私の方はそれで応じたいとは思わなかつたが。

これはディーン夫人へのかなり真剣な結婚の意思を予示するものではないように思われ、彼女の母親を喜ばせることはありませんでした。

あるいは、もし何かが彼を苛立たせたならば、あるいはもしディーン夫人がほかの誰かとやたらといちやついたならば、はたまたもし彼が歌うよう頼まれなかつた（か、

* 「上の二つの点を外して発音する……Antinous は、フランス語の発音だと「アンティノウス」、口のトレマを外すと「アンティヌス」のようであろうか。アンティノウスは、古代ギリシャの美少年。ローマ皇帝ハドリアヌスの寵愛を受けたが、ナイル川で溺死した。

ほかの誰かが頼まれた）ならば、彼は、おまえはいつも客間を汚したり人の財産を食い潰^{つぶ}したりする最悪の無骨者で、俺はおまえにうんざりだし恥ずかしく思っている、とかなりきつい英語で私に断言したものだった。「なぜ歌えないんだ？ おまえはフランスの腰抜けクソ野郎か？ おまえの親父のクソ・ルラード屋は、ほかには何にもできなかつたにしても、歌だけはそうとう速く歌えたもんだ、あのド畜生でも！ どうしておまえはフランス語で話せない？ イギリスのクソ野郎。何で茶とマフィンを配れない？ こん畜生！ グリン夫人は何だつて二度ハンカチを落として自分で拾わなければならなかつたんだ！ なあ、おまえは『部屋の反対側に』いたんだろう？ ながら、おまえは部屋を跳ぶように横切つて、そいつを拾い、紳士のようにきれいな言葉とともに彼女に渡してやるべきだった！ 俺がおまえの歳だった頃は、女性のハンカチが落ちるのをいつでもずっと見張つていた——あるいは扇が落ちるのを！ 俺は——つも見逃したことはない！」

それから彼は、私を銃の狩猟に連れ出した（イギリス紳士はスポーツマンであることが必要不可欠だつたからである）——私たち両者にとつて恐ろしい試練であつた。私が少しも殺したいと思わなかつた鳴^{しき}は、時々稻妻のように上昇して左右に飛んだものだつた。それで私は撃ち損ねる——いつもそうだ。彼は、しようもないフランス

人^{*}ミューバーの息子だと言つて私を罵り、次に自分が撃ち損じると烈火のごとく怒り出し、自分の犬を打ちのめした。私はそのポインター犬が大好きだった。一度、彼があまりにもひどく彼女を打ったため、私は激怒し、彼の広い背中に自分の二連銃の銃身両方の中身を叩き込んでやりたいという衝動にもう少しで屈してしまいそうになつたことがあつた。もし私が本当にそうしていたなら、結局は単なる事故と受け取られ、未来のたくさんのいざこざを取り除くことになつただろうに。

ある日、彼は野原で何かをつついている小鳥に私の注意を向けさせた——すごくきれいな鳥だった——私はそれをひばりだと思った——そして、この上なく嫌味なやり方で私に囁いた。

「そこを見てみろ、うすのろピーター。おまえがひざまずいて、音を立てずにこの門におまえの銃を楽な感じで載せて、注意深く狙いを定めれば、止まつてゐるあの鳥を何とか撃てると思うんだが？ フランス人にはそれができる奴がいるという噂だ！」

*ルラード屋……「ルラード」は、一音節の中で素早く歌われる一連の装飾音。「ルラード屋」で技巧的な歌手のこと。

*ミューバー……ディケンズの『ディヴィッド・コパフィールド』に登場する楽天主義者。

私はやつてみると言つて、彼が言うように銃を載せ、二、三ヤード離れてそこの鳥の頭を注意深く狙い、心の中で出し抜けにこう言つた。

「ようこそ、陽気な精霊よ！」

私は両方の銃身から発砲し
(イベットソン)



「ようこそ、陽気な精霊よ！」

への不慮の事故を恐れたためである）、鳥は当然飛び去った。

その後、彼は二度と再び私を狩りに連れ出ることはなかった。そして私は、自分が実は血を見るに耐えられない人間であることに気づいて困惑した——特に自分によつて流された血と、自分の娯楽のために流された血はダメだった。私、鹿撃ち名人ナティ・バンポの友人兼称賛者兼自称競争者で、モヒカン族の最後の一人と、頭の皮を剥ぐ彼の父親の親友である、その私が。

イベットソンおじと狩りに行つていた間に私の銃撃に倒れた獸は若い兎うさぎだけで、まぐれ当たりもいいところだったが、イベットソンおじにはそうは言わないでおいた。それを地面から拾い上げ、貧弱で小さくて温かくてほつそりした胸と、弱々しい肋骨こうの下にある心臓の最後の鼓動を感じ、毛皮の上に付いた血を見たとき、私は憐憫れんびんと恥辱と自責の念に苛まれ、心が壊れそうになつた。そして、英國紳士になるためには、生きる価値が十二分にあると思われる幸福な生を送る、罪もない野生動物を殺害すること以外の道を見いだそうと、自分の中で話を付けた。

私は彼らを食べなければならないとは思うが、自分ではこれ以上彼らを撃つことはない。少なくとも自分の手は、今後は血とは無縁の状態にするべきだ。

だが、ああ、運命とは皮肉なものだった！

これらすべての結論として、彼は自分の青二才の甥おいを一人前にする仕事をディーン夫人に託すことにした。彼女は望ましい善意をもつて引き受け、まずはダンスの方法を私に教えてくれた。次の狩獵家舞踏会で私が彼女と踊れるようになります。本番で、私はほぼ一晩中そのようにして無限の喜びと勝利感を味わい、私よりもはるかに上手に踊れるイベットソン大佐の反感を買った——それどころか、赤や黒のコートの多くの洗練された男性の反感も買うことになった。彼女はその晩の最高の美女と見なされていたからである。



ダンス・レッスン

当然のことながら、私は彼女に恋した、あるいは恋したような気になつた。彼女の母親はひどく心配していたが、彼女は、一つには面白半分に、一つにはどうやら彼女が嫌悪するようになりつつあったイベットスン大佐を苛立たせるために、私をいちいち激励してくれるのだった。実際、彼がしばしば彼女のこと（あの英國紳士どもの訓練者、と）私に話す口ぶりからすると、彼は彼女に嫌われるという罰を受けるにふさわしかつた。彼には彼女と結婚する意思は少しもなかつた——それは確かだ。それでも彼は、彼女のことをこの辺りの噂の種にしていたのである。

ここで、イベットスンは、女性に対する致命的に抵抗できない熱狂に悩まされる人生を歩む、あの奇人たちの一人なのだ、と明言することもできるだろう。

彼は彼女たちを追いかけることに決して飽きることがなかつた——思うに、それは色事それ自体への特別な愛のためではなく、ただ単に他人の目にドン・ジョヴァンニとして映りたいという願望からなのであろう。その部屋の中でいちばん美しい女性と隅で意味ありげに囁いているのを見られることほど、彼を幸せな気分にするものはなかつたのだ。彼は、彼の馬鹿げたしつこさを喜ぶほど愚かでうぬぼれが強くて下品な一人の女性のために、十数人がまさに彼のその姿をひどく嫌悪し、それを十分はつきりと表明していたことに気づかないようだった。

この虚榮心は年とともに増加し、非常に危険な様相を帯びていた。彼は無分別になり、さらにいつそう悲惨なことには、彼は嘘をついたのだ！死者——名誉ある、非難の余地のない死者——は、墓の中では安全ではなかった。それは忘れられない侮辱への彼の復讐なのだ。

懇ろになつてからその秘密を暴露する彼、懇ろになつてもいないので暴露する彼——彼のためには何を言うことができ、彼に對しては何がなされるべきだろう？

イベットソンはある日、この下劣な熱中を身をもつて償つたのだが、それを彼にもたらした人間——意図的というよりも運の力であつたことは事実だ——は、自分の心のどこを探しても、それに対する良心の呵責^{かしゃく}や後悔を感じる気持ちが見当たらないままなのである。

• • • •

そうこうしているうち、イベットソンと私の間でひどい口論が起つた。彼はあらゆる方法で私を呪い、困惑させ、口汚く罵つた。そして、私の面前で父を罵り、最後には私を殴つたのである。私の方は、彼を殴り返さないよう十分に自制していたのだ

が、自分がかき集められるだけの威厳を保ちつつ、その場ですぐに彼のもとを去った。こうして、私の短いイギリス田舎生活の経験は失敗に終わった——わずかな猟狩りと猟銃狩りと釣り、わずかなダンスと異性との戯れ。私にはこのすべてが合わないことを示すのに、どれも十分だった。

恥だらけのほろ苦い思い出だが、魅力がまったくないというわけではなかつた。海と広々とした空と変化する田舎の天候の美しさがあつた。それに、ディーン夫人の美しさも。彼女はイベットスン大佐が自分を笑い者にしようとしたことへの復讐として人前で私のことを笑い者にして、それにより、大佐は少なくとも九日間は近隣のお笑いぐさになつた。

そして、私は両者に復讐した——考えたとおり、英雄的に。どこに英雄的行為があつて、どこに復讐があるのか、あまりはつきりとは見えないのだが。

というのも、私はロンドンに逃れ、英國近衛騎兵团に入隊したからだ。私はそこに十二か月留まり、十分に幸せな思いをし、害悪よりもずっと良いことを学んだのである。

その後、私はお金を積まれて除隊となり、建築家で不動産鑑定人のリントット氏の徒弟になつた。私の親族会議は、私に年九十ポンドを三年間与えることに同意した。その後は、全員が私と完全に縁を切ることになつていた。(＊)

*注——いとこの兵卒としての短い経歴の説明は、全部省いた方がよいと思いました。それは主として、まったく偏見がないというわけでもない個人の記述を内容としています。彼は、学校でも軍隊でも、自分より上の権威に位置する人たちをまったく好まなかつたようです。

とはいゝ、私の夫の親友の一人である将軍が——私の哀れないところが近衛騎兵团にいたとき第一連隊の旗手だった人ですが、その人が私への手紙にこう書いています。「彼のことはよく覚えていてます。連隊全体でも群を抜いて長身かつハンサムな若者で、限界知らずの体力の持ち主で、素行は良好で非の打ちどころがなく、頭のてっぺんから足のつま先まで完全に紳士でした」

マッジ・プランケット。

• • • • •

それで私は、リントット氏宅の近く、ペントンヴィルに小さな下宿を借りて、三年間新しい職業に懸命に取り組んだ。その間、私の外面的生活に何も重要なことは起らなかつた。その後、リントット氏は私を定額従業員として雇つた。彼に私のことで



ベントンヴィル

不平を言うべき根拠があつたとは思わないし、彼が文句を言つたこともなかつた。自分には報酬分の価値があり、それ以上のものもあつたと思うが、その分は得たことも要求したこともなかつた。

私の方も彼に不満はなかつた。虚榮心や短気さや利己主義やある種のけちくささといった小さな欠点はあるにしても、彼は善意の人であり、非常に賢い人だつたからである。

彼の、妻の鑑かがみだという人は、決して彼が言つていたような美人ではなく、そう思つてゐるらしい彼以外は、誰もそうは言わなかつた。

彼女は彼よりも少し年長だつた。かなり大きい人で、どつしりして、厳格そうだが乱れた顔立ちではなく、かなり広い額を持つていた。幾分薄毛の傾向があり、色のない髪が顔の両側の飾り気のない巻き毛へと伸びてゐる。威嚇いかく的な小さな鬚まげが後頭部にある。以前の彼女はユニテリアン派信者で、女教師だつた。ジョンソン博士のように

*ジョンソン博士……サミュエル・ジョンソンのことか？

かなり長い言葉遣いを好み、非常に批判的だった。

彼女の夫の、文法やアクセントの問題についての時折の怠慢は、そうとう彼女の気になっていたに違いない！

彼女は、お日様の下のあらゆるものについて自分なりの考えを持つており、他人もそれを知っていて、自分と同じ考え方を持つことを期待していた。それでも、彼女は思ひ上がつてはいなかつた。それどころか、気性の激しい謙虚な女性といったような人で、損なわれた柔軟さを闘争的な美德といふレベルにまで引き上げていたという印象である。そして、自分の家でどうすれば女主人として実権を握れるかをよく知つていた。

しかし、このすべてをもつて、彼女はリントット氏の優れた妻であり、素直で控え目な子供たち（父親を尊敬していた）に対しては献身的な母親であつた。そういうわけで、妻のことをヴィーナスとディアナとミネルヴァが一体になつた存在と思つていたリントットは、ペントンヴィルでいちばん幸せな男なのだつた。

そして、彼女はおおむね私には親切で思いやりがあり、私はいつも彼女を喜ばせるために最善を尽くした。

そのうえ、彼女は私に古いスクエア・ピアノをプレゼントしてくれた（いくら感謝しても、し足りないくらいの贈り物だ）。それは彼女の母親の元所有で、彼女の勉強

*
*

部屋で任務を果たしていたものである。リントットが彼女に新しいものを与えるまでには（彼女は最も厳格なクラシック・タイプの、高度に訓練された音楽家だったからである）。それは私の小さな居間の主たる装飾品になつたが、部屋はそれでほとんどいっぽいになつてしまつた。私はその鍵盤で音符を学ぼうとし、母のハープ伴奏で父がよく歌つていた古い最愛のメロディの音を指一本で拾つたものだつた。

自分で歌うことは、どうやら問題外のようだつた。私の声（ただ話すだけで満足していたときは、それほど不愉快なものではなかつたと信じてゐるが）は、歌で自分を表現しようと努力したときはいつでも、毛布の下のウシガエルみたいな声になつた。

私の喉頭は、心の中でかなり正確に保つていた音を実際に出すことを拒絶し、結果は大惨事であつた。

その一方で、私は心の中でなら極めて美しく歌うことができた。ある雨の日には、イズリントンのバスの中で、心中『アデライダ』^{*}をシムズ・リーヴス氏の声で歌つた——言語道断なことを言わせていただければ。それに、私が言うべきではないのだが、

*スクエア・ピアノ……十八世紀から十九世紀前半に多く用いられたコンパクトなピアノ。
*『アデライダ』をシムズ・リーヴス氏の……『Adelaide アデライダ』は不詳。ベートーヴェンの『Adelaide アデライーデ』か？ シムズ・リーヴスは十九世紀のテノール歌手。

私は彼よりも上手に歌うことさえあつたのだ。自分自身に涙を流させたし——反対側に座っていた老紳士風の人が、私にいたく同情していたように見えたくらいだし。

私はまた、一度聴いた曲を覚えてしまう才能も持っていた。そしてその後ずっとその曲を正確に口笛で吹いたものだつた——イベットソンおじのワルツの一曲でさえ！このことで思い出すに値する例としては、こんなことがあつた。ある夜、ギルフォード・ストリートで、（道の反対側でたつた一人）遅れて付いてくる別の人と同じ方向に歩いていることに気づいた。その人は、ちょうど月が雲から現れるときに、口笛を吹く気になつた。

彼は絶妙に口笛を吹き、さらに重要なことには、私が聴いたことのあるうちで最も美しい曲を完全に吹いたのだ。私は、まるでフル・バンドが伴奏するためにそこにいたかのように、その曲の転調も抑揚も、長調も短調もすべて感じ取ることができた。それほどまでに熟練した表現力ある口笛吹き、それが彼なのだつた。

あまりにも魅せられたため、私は道を渡つてそれが何という曲かを彼に尋ねようと決心した——「命が惜しくば曲名を言え！」しかし、彼は四十八番で急に立ち止まと、私が謙虚な要求を申し出るよりも前に、自分の鍵で中に入つてしまつた。

まあそれで、私は次の日の一日中、またその後何日にもわたつて、曲名を調べもせ

ずにその曲を口笛で吹き続けた。ある晩、リントット家にたまたまお邪魔するまでは、私は（たまたまピアノに向かっていた）リントット夫人に、この曲を知っているかと尋ね、もう一度それを口笛で吹き始めた。私が喜び、驚いたことには、彼女はそれ从最初から最後まで即座に伴奏を付けてみせたのだ（厳格な純粹主義者の驚くべき気さくさだ）。私の方も一音も間違えなかつた。

「そう」リントット夫人は言つた。「きれいだし、覚えやすい小品よね——すぐに人気が出るような」

ここで私は、この脱線話を読者に心から謝罪したい。だが、もし読者が音楽好きなら、私を許してくれるだろう。というのは、その曲はシューベルトの『セレナーデ』だったからだ。私はシューベルトの名前さえ聞いたことがなかつたのである！

こうして正式に謝罪したことでもあるし、私はあらためて罪を犯して脇道に逸れ、ここでメロディの病氣とでも言おうか、私が罹りやすい、無意識的音楽大脑作用と呼べそうな、おかしな強迫観念について触れておこうと思う。

私は、頭の中で何かしら旋律が鳴つていないということがないのである——一瞬も。それにいつも気づいているわけではない。もしそうなら、私はその存在に耐えられないと。私の脳のどの部分がそれを歌つているのか、というより脳のどの部分でそ

れがそれ自身を歌つてゐるのか、想像もできない——たぶん、このほかにぴつたりなことが何もない、蜘蛛の巣や材木でいっぱいの無用な片隅なのだろう。

それでも、これは決して止まらない。あるときはある曲が鳴つていて、またあるときは別の曲になる。あるときは歌詞の「ない」歌が、またあるときは歌詞の「ある」歌になる。それは時には、いわば表面近くにあって、ものを読んだり仕事をしたり、話したり考えたりしながら、私はそれを漠然と意識することがある。また時には、それが存在することを確認するため、私は自分の中に深く潜らなければならぬこともある。その場合、少し時間をかければ、それを見つけて表面に持ち上げることに失敗したことはない。それは例えば『ヴェニスの謝肉祭』である。それから私は再びそれを沈ませる。すると知らないうちに別の曲に変化する。こういう具合で、次の潜水を行うと、『ヴェニスの謝肉祭』が『Il Mio Tesoro「私の宝」』になつたり『ラ・マルセイエーズ』になつたり『プリティ・ポリー・パークインス・オブ・パディントン・グリーン』になつたりするのである。その間、聞こえることも気づかれるものもない、この体内バーレル・オルガンが鳴らしていた曲が何なのかは、神のみぞ知る。

時々それは、あんまりしつこく押し付けられて迷惑なものになるのだが、そうなると取り除く唯一の方法は、口笛で吹くか自分で歌うか、なのである。私は、例えば自

分の慰めと快樂のために、『水鳥』や『涙よ、無益な涙よ』や『碎けよ、碎けよ、碎けよ』のようなお氣に入りの詩を心の中で暗唱するかもしれない。すると、その間じゅう、行と行の間で、この大脳下の歌手の惡魔は、遠くの廣場にいるさすらいのミンストレルのように、『チア！　ボーアイズ！　チア！』や『トミー、マイク・ルーム・フォー・ユア・アンクル』（これららの曲には私は我慢できない）を歌詞やら伴奏やらもろもろ全部付きで、それでいて私が望むほどには十分に洗練されていないアクセントで、歌うことを主張する。そうすると私は暗唱をやめて、それを払いのけるために、口笛で『J'ai du Bon Tabac 「僕は良いタバコを持っている』を、まったく異なる調で吹かなければならぬのだ。

しかし、ここで私は、この決して静まる」とのない自分の小さな声を、一応は弁護

*それは例えば…………『ヴェニスの謝肉祭』はイタリア民謡。『私の宝』は、たぶんモーツアルトの『ドン・ジヨヴァンニ』第一幕の、ドン・オッターヴィオのアリアであろう。『プリティ・ボリー・パーキンス・オブ・バディントン・グリーン』は、ハリー・クリフ顿が作った

流行歌。

*自分の慰めと快樂のために…………『水鳥』は五一ページに出ていた『水鳥へ』と同一か。

『涙よ、無益な涙よ』『碎けよ、碎けよ、碎けよ』はテニスの詩。ミンストレルの二曲は詳細不明だが、実在の曲であろう。『僕は良いタバコを持っている』はフランス民謡。

しておこうと思うのである。調音は常に完璧だ。それは理想的な時間を保ち、その特質は、ややか細くいくらか鼻にかかるつており、そうとう独特なものなのだが、共感できないわけではない。それどころか、時には（イズリントンのバスでのよう）、私はそれに、私が最近耳にした歌手の声を *à s'y méprendre* 「それと取り違えるほど」そつくりまねするよう強要し、嫌悪されることのない影のような音楽を自分のために作り出すことができる。

また時には、それはまったく強要されることもなく、私が作った曲の心の中にあるメロディを、小さな即興を付けて声を震わせて歌う。それらは私には、しばしばとてもなく美しく古風で趣あるものに思われる。だが、自分は自分で作ったものの公平な審査員にはならない。とりわけインスピレーションの熱氣がある間は。それに、音符の書き方を学んだことがなかつたため、私にはそれらを記録する手段もなかつた。何という世界の損失！

ところで、この小さな声の主を見つけるまで、私はその後何年もかかった。それは私の声ではなかつたからである！

-
-
-
-
-
-
-

このような私の中の珍しい特技と資産にもかかわらず、私は幸福な若者でも満足した若者でもなかつた。が、そこにある人間の靈的なものに不満があるわけでもなかつた。私は自分の職業が嫌いだつた。特別な才能を感じていなかつたからで、進んで別のもとに従事したかつた——詩、科学、文学、音楽、絵画、彫刻。これ全部、生得の才能から見ればもつと自分にふさわしいと、私が甚だ恥知らずにも自任していたものである。

ペントンヴィルも嫌いだつた。清潔だし道徳的だし上品だし、形、色、ロマンティックな伝統、地域的な魅力などの点で望ましいものがたくさん残つていたというのに。

私はすぐにでもどこかほかの場所に住みたかつた。例えはシャンゼリゼ——そう、実際、凱旋門を離れるときに左手に見える三番目の木の五番目の枝さえ、アンリ・ミュルジェールの『ボヘミアンの生活』の、あの古典的な主人公たちの一人のようだつた。

私は自分の兄弟弟子たちも嫌いで、彼らとはうまくやれていなかつた。特にジャドキンスと呼ばれる、非常に賢いけれども意地悪で醜い若者は、最初から私に嫌惡の情を抱いていたようだつた。彼は現在、英國美術院の準会員である。彼らは、私が彼らの遊興に付き合わなかつたため、私が気取つてゐると思つていたのだ。私が受け入れ

る余裕があるような遊興は、實際は安からう悪からう程度のものだったのだが。

ところが、そのような卑俗な遊興は彼らを満足させるように見えた。彼らはそれを好んだだけでなく、誇りにも思っていたからである。

彼らは偏頭痛にさえ誇りを持ち、それを好んだ。それが前夜の道楽の結果であるならば。また彼らは、アーガイル・ルームズでつまらない喧嘩に加わり、その結果片目にできた痣あざについて、尊大な見せかけの謙遜といった態度で誇った。あたかもそれがヴィクトリア十字勲章であるかのように。留置場で夜を過ごすというのはたいへんな栄光だったので、それが真実ではなかつた場合でも、それをしてふりをするのには価値があつた。

彼らは私を不器用者、意氣地なし、物知りぶつた奴と見なし、最大級の軽蔑を感じていた。彼らがもしそれを大っぴらに見せないとしたら、それはただ彼らが作つたような目の痣を、彼らがあまり好まなかつたということであろう。

それで私は、費用のかからない歡樂は彼らに任せ、自分は自分自身の追求、とりわけ近衛騎兵第一連隊で学んだ方法にならつて肉体強化に専念した。私は体操とフェンシングとボクシングのクラブに所属し、その中ではそうとう勤勉に顔を出すメンバ一となつた。私以上に辛抱強くダンベル挙げや体操用棍棒挙げをする人はなく、私はや

がて万能スポーツ選手になった。グレーハウンドと同じくらい屈強で贅肉のない体躯で、十五ストーン弱、身長は六フィート四インチ、これは三十年前だとかなりの長身だと思われていた高さだ。特にペントンヴィルでは、この特異性が尊敬よりも侮辱を私にもたらした。

総じて、極めて威嚇的な人間に見えたのだ。ところが私は臆病な性格で、傷つくことを恐れていたし、この世で最も平和を好む生き物なのであった。

貧民街に対する昔の愛が復活し、私はロンドンで最下層の場所を見つけ出して、そこをしばしば訪れた。そこはとても良い貧民街だったが、パリの貧民街ではなかつた——フランスではこういうものをもつと上手に管理しているのだ。

カウクロスでさえそうである（今はメトロポリタン鉄道がキングス・クロス駅とフアリンドン・ストリート駅の間を走っている、その辺り）——カウクロスは、昔は屠殺じょうじょうやジン・ショップや泥棒のねぐらの迷宮で、有名なフリー川がその地下を流れ続けており、中世のロマンスの魅惑や神秘に欠けていた。そこには乞食の王様やグラン

*十五ストーン弱…………十五ストーンは九五キログラムほど。六フィート四インチは一九三七年くらいである。一二八ページに「二メートルは優に超えてます！」とあったが、ピーターの身長はそこまで高くはなかつたようだ。

ゴワールやエスマラルダのような魅力的な人々の記憶はないのであつた。人はため息をついて、^{*}フェイギンやビル・サイクスやナンシーの空想に頼らなければならなかつたのだ。

Quelle dégringolade! 「何という下落！」

そして、実際の住人についてはどうか！　人は、ぼんやりした、驚いたような同情をもつて、哀れな、青白い、よろよろした子供たちを見つめる。まず笑うことのない（飲んだときは除く）だらしなく下品な女たち。元気のない、氣難しそうな、貧弱な男たち。彼らには、フランス人の奇形にある優雅さが、フランス人の堕落にある安樂と陽気さが、フランス人のグロテスクさにある同情的な特質が、どれほど不足していることだろう。音のない、陰湿なナイフよりも拳の方を好んだ彼らは、何と怖さがないのだろう！　彼らは、足も使わず手だけで戦うのだ。実に義理堅く。底に鉢釘びょくくぎを打つたブーツでのキックは、彼らの言うことを聞かない妻たちのために取つておかれるのだ。そのうえ、モルグもなかつた。モルグがないのはとても寂しかつた。

そして、スマスフィールド！（少佐殿がよく言つていたように）特定の日に、食肉解体場へ行く途中での忌まわしい牛市場に短い滞在をしに来る哀れな獣を見ることは、本当に私の心を引き裂いたものだつた。

田舎の陽光を防ぐためにまづげで分厚く縁取られた目、当惑して呆然としたその美しく従順な目に、またはるか彼方の野原の香氣とひどく不快な悪臭で混乱させられた鼻孔、柔らかく湿つて敏感なその鼻孔に、どんな棍棒が振り下ろされるのを見たことか！ 愚かな羊たちと、温和に冷笑する豚たちへの、何という拷問！

犬たちでさえ堕落しているように、またその主人と同じくらい残酷に見えた。ある日、私は冒險して、殴り合いでの下劣な勝負をやってみた。結末は私にとつて最大級に屈辱的で、騎士的な人物が若くて大きくて強くて殴打を学んでいるときでさえ、騎士道とは、美德のように、しばしばそれ自身が報酬なのだとということを示した。

粗野な若い家畜商人が理不尽に羊を蹴ったのだ。すると、私が思ったとおり、羊は後ろ脚を骨折した。私は憤り、彼の耳をつかんで振り回し、泥と汚物の山の上に投げつけた。彼は立ち上がり、極めて氣骨のあるやり方で私に対しファイティング・ポーズを取った。彼はほとんど私の頸にも届かず、それで私は彼と戦うことを拒否した。群衆が私たちの周囲に集まり、私が喧嘩の原因を野次馬に説明しようとすると、彼はひどく冴えないパンチで私の顔をどうにか打つた。

「ブランキー、ちっこいの！」群衆は叫び、彼は再びファイティング・ポーズを取つ

*フェイギンや…………三人とも『オリヴァー・ツイスト』登場人物。

た。私は情けないくらい恥ずかしいと感じ、彼のすべての攻撃をかわしながら、あんたのことは殴れない、殴つたら殺してしまう、と告げた。

「ようよう！」また群衆が叫んだ。「やつちまえ、ちっこいの！　ぶん殴れ！　でつかいのは臆病風に吹かれてやがる！」等々。最終的に、私は彼に軽い逆手打ちを入れ、それで彼は鼻血を出し、士気が完全に挫かれたように見えた。「ようよう！」群衆が叫ぶ。「同じ大きさの奴とやりやがれ！」

私は絶望と激怒を感じて周囲を見回し、見えた中で最大の男を選び、言つた。「あなたなら十分大きいですよね？」群衆は爆笑した。

「うざなあ、旦那^{だんな}、まあいざとなつたらやつてもいいぜ」。彼は答えた。それで私は彼の顔に平手打ちをしようとしたのだが失敗し、耳にあまりにもすごいパンチを食らつたために一、二秒の間目が回つていた。立ち直ったとき、彼が相変わらず私に向かってにやにやしているのが分かった。私は彼を何度も打とうとしたが、全然だめだった。最終的に、彼は私に特にダメージを与えることもなく、さっき私が家畜商人を投げつけたあの汚物の山の上に三回連続で私を倒し、群衆は熱狂的に拍手をした。呆然として、帽子が脱げ、息切れし、汚物にまみれた私は、絶望的な無力さを感じながら彼を見つめていた。彼は手を差し伸べて言つた。「大丈夫かい、旦那？　俺ああんた

を傷つけたくはねえ！ 僕の名前はトム・セイヤーズ。もしあんたが俺を打っていたなら、俺はナインピンみてえにぶつ倒れたはずで、そうなつたらもう一度起き上がれたとは思えねえよ』

彼はこの後、イギリスで最も有名な格闘家になるのだ！

私は彼の手を握り締め、感謝し、ソザリン金貨を差し出したが、それは拒否された。それから彼は私を近くのパブの一室に導き、そこで私を洗ってブラシをかけ、グラス一杯の水割りブランデーをおごってやると言い張った。

それ以来、私は格闘家に好意を寄せるようになり、以前には感じたことがなかつたボクシングに対しての敬意を抱いている。彼は私よりも何インチも背が低く、とてもヘルクレスのようには見えなかつた。

彼は、「脚がかなりひょろ長い」ことを除けば、私を、若者の割には、それまで見たうちでいちばんがつちりした体格の男だと言つた。彼が本当のことと言つたのかどうかは分からぬが、それ以上に私をうれしがらせることができる贅辞はなかつた。

*トム・セイヤーズ……実在のボクサー（素手のボクシングである）。ただ、今は一八五〇年代の半ばだと思われるが、実際のトム・セイヤーズはその頃にはもうかなり有名になつていた。このように、この小説には実在の人物がよくセリフ付きで登場してくる。

若者の虚榮心とはそういうものだ。

そしてここでは、いくらか自慢氣味ではあるものの、私は同種の、しかし自分がもつと大きな強みを見せた別の冒險を物語る誘惑に抵抗できないのである。

それは（まことに奇妙なことに）ボクシング・デーのことだった。私はリントットと彼の息子の一人と、ハイゲート・フィールズでの散歩から帰るところだった。カレドニアン・ロードを通って、家路へのぬかるんだ道をとぼとぼ歩いていると、あるパブの外側で群衆によつて足止めされた。巨人の荷馬車引き（彼らはいつでも実際よりも大きく見える）が、彼の大きさの半分もない哀れなぐずの酔っぱらい作業員に喧嘩をふつかけていたのである。酔っぱらいは戦う意志を見せていたが、自己防衛のためにすらそれを試みることがまるでできなかつた。彼はほとんど腕を上げられなかつた。最初、私はそれをただの馬鹿騒ぎだと思つた。小さなジョー・リントットが見たがつたので肩車してやつたちょうどそのとき、ほとんど悪魔みたいに残忍な顔の、飲んではいたが酔つてはいなかつた荷馬車引きが、哀れな千鳥足男の目の間を力いっぱい殴つて、（去勢牛を斧^{おの}で倒すように）倒したのだ。群衆を喜ばせるために。

とても優しくて敏感な少年であるリトル・ジョーは泣き出した。ブル・テリアのような勇気を持つ彼の父親は、その小さな身長にもかかわらず介入したがつた。私も憤^{ふん}

怒で我を忘れ、コートと帽子を脱いでリントットに渡し、荷馬車引きの前に出た。彼は群衆の中の誰か三人の男と戦いたいと提案していたが、誰も応じていなかつた。

「おいこら、この卑怯なスカ
ンク野郎！」私はシャツの袖を捲り上げながら言つた。「か
かつてこい。歯を全部叩き
折つてその醜い喉に沈めてや
る」

彼の顔はまだらのスタイル
トン・チーズ色になり、どんな手出しをするつもりなのかと尋ねた。リングが自然と形



大きな馬車引き

成され、群衆の共感が、今回は私の方にあることが感じられた——実に快い感覺だ！

「さあ、腕を上げてみろ！　おまえをぶちのめしてやる！」

「俺はあんたと戦うつもりはねえよ、ミスター。誰ともやるつもりはねえんだ。放つ
といてくれ！」

「それはそれは。おまえは戦うか、でなきやひざまずいて、残忍で臆病なスカンク野郎であることを詫びるか、だ」。そして私は彼の顔に平手打ちを食らわしたが、それはピストルの発砲音のように響いた——今回のは、ほぼ申し分のない、満足のいく、好結果の平手打ちであった。私の指先は、このことを思い出すだけでうずうずする。

彼は逃げようとしたが、私の反対側で拘束された。彼はめそめそと泣き声を出し始め、自分は私に手出しをしていないと言い、私が彼にどんな手出しをするつもりなのかとまた尋ねた。

「では、ひざまずけ——すぐに——今すぐだ！」私は、直ちに、確実に、深刻な作業を始めようとしているかのように振る舞った。

彼は膝をガクンと折り、過剰な情動のせいだけで、その場で本当に氣を失った。コートを着るのを手伝われている間、私は一生に一度の大衆受けという甘美さを味わい、群衆のアイドルになることがどんなものなのかを知った。

小さなジョーイ・リントットと彼の兄弟姉妹たちは、それ以前には私に特別な敬意を抱くことはなかつたそつだが、その日以後は私を崇拜するようになつた。

そして、かつてのこの出来事のときに私が自分自身にかなり満足していたことを告白しないとしたら、本音を隠しているとのそしりを免れまいが、あの巨大で不格好でビールを飲み過ぎたけだもの（遠目には恐ろしく手ごわそうに見えた）に對峙したあの瞬間、私は、快い安堵感とともに、彼にはチャンスがないことを感じ取つたのだ。彼はただ大きいだけだつたし、その点でも私は彼をしのいでいたのである。

あの日の真の栄光はリントットのもので、私は確信しているのだが、あのゴリアテに対するダヴィデを演じる心づもりが彼にはあつた。彼は戦いに対する真の欲望を持つっていた。そうとう背が高い人間はしばしばそうだと言われるように、それは私は欠けているものだつた。

そして、おそらくそれが、私があの出来事をあまり素晴らしい武勇伝とは思えない気持ちが強い理由である。確かに、私は肉体的には臆病者ではない——少なくとも、そうは思わない。もし自分がそうだと思ったら、我々すべてを臆病者にする脆弱な消化器官や虚弱な心臓を持っていることを公言する以上の恥を感じることもなく、私は

*ジョーイ……ジョーの別称。

そのことを率直に認めているところである。

私は、口論や、暴力や、流血——鼻からのものでさえ、自分の鼻だろうと隣人の鼻だろうと——が、大嫌いだということだ。

ロンドンの東端に、もうこのときには上流社会の多くの人々に多少は様子を知られるようになっていた貧民街があつた。私はそれを暗記するほど知るようになった。そこにはただの貧民街の魅力に加えて、船乗りの要素という永遠の魅力があつたのだ。陸おかに上がった船乗り——その独特なファッショニで着飾るもの以外には心を動かすことのない、愛すべき存在だ。

私はしおりドックを訪れた。タールの臭いとロープやマストの光景が、海への——遠い国々への——私が宿命的に行かざるを得ない場所以外のどこかへの——言いようのない憧れで私を満たした。

私は船長や航海士や水夫たちと話をし、読者も十分想像できるように、多くの驚くような話を聞いた。雲一つない空、サファイア色の海、珊瑚礁さんごじょう、香辛料の木立、彩

色された羽を付けたさ
まよう浅黒い若者たち、
そして半裸で裸足の美
しいヌーハがたいまつ
を振って、私、トーキ
ルの手を引いて至福の
洞窟を導いてくれる、
友好的な島！

私は特にロンドン、
ブリッジの波止場に足
繁く通った。そこから
は二つの汽船——セー
ヌ号とドルフイン号だ
と思う——が、ブロー
ニューシュルメールへと
隔日で出発していた。



ブローニュの汽船

私はよくフランスへ向かう幸福な乗客たちを見つめたものだつた。彼らの中には、休日気分で、すでに陽の当たるデッキで互いに親交を結んでいる者たちがいて、折り畳み椅子や雑誌や小説やビター・ビールのボトルについてごちやごちやと言い合つたり、和陸のしるしてあるパイプを吸うために煙突の前へと退いたりしていた。

蒸気を上げるボイラーの音——それは何と耳においしい音楽であつたことか！　いつか私のために蒸気を上げてくれるだろうか？　船室のあの匂いや、しんちゅう真鑑の通路や、桦を真鑑で補強されオイルクロスを張られた階段のあの感触は心地よい。階下の、雪のように白いクロスの上には、コールドビーフとハム、美しく新鮮なマスター・ド、ペールエールとスタウトビールのボトルが置いてあつた。おお、幸福な旅行者たちよ！　これ全部を買う余裕があつて、おまけにフランスに行けるなんて。

すぐに大きくて白い天幕が後部甲板を樂園にし、そこから間もなくテムズ川の素早く滑りゆくパノラマ眺めることができるだろう。私のような、乗客でない者が上陸するためのベルが鳴る——「*Que diable allait-il faire dans cette galère!*」「一体全体何だってそんなガレー船に乗り込んでしまつたのだ？」ヒベットソンおじが言つていたよう。汽船は、男らしい喉から発せられる快活なヨーホーというかけ声と、外輪のゆっくりした断続的な水音とともに波止場から自らを引き離し、明るく日が照る東方への

道を、川に浮かぶ小さな船舶の間で注意深く選んでいった。その間、わずかなハンカチが、友情のこもったさよなら芝居の中で振られていた——アウフ・ヴィーダーゼー エン！

おお、外輪の所の、時を得ない暴風雨帽をかぶつた男のそばに立つて、セント・ポール大聖堂とロンドン・ブリッジとロンドン塔が視界から消えていくのを見ること——それらを二度と再び見ることはない。私にはそんなアウフ・ヴィーダーゼー エンはないのである！

私は時々西に歩みを向け、ハイドパークの楽しげな夏の行列の光景を自分の飢えた羨みのまなざしに注いでそれを満たしたり、ケンジントン・ガーデンズでバンドを聴いたり、美しく身なりのよい女性を見たり、彼女たちの甘く洗練された声や幸せそうな笑い声を聞いたりした。すると、海やフランスや遠い国々への憧れよりもさらに熱烈な、完全に言語に絶するほどの憧れが、私の心に入り込んできたものだった。すると私は、ヌーハとそのたいまつさえ忘れてしまう。

その後、独りぼっちで十ペソスの食事を取りに行き、ペントンヴィルの一人暮らしの下宿で一冊の本で締めくくるのは、まことにわびしい急転落だった。その本が、自らが読まれるよう仕向けることに成功したことはなかった。それはふてくされ、放棄

されなければならなかつた。私と印刷されたページの間に、「美しい女性！ 美しい少女！」が自ら自身を綴つたためである。これららの語句をフランス

語に翻訳してほしい、おお、ショイタスピアをフランス語のアレクサンドランにやえ直せる汝らよ——「*Belle femme ~. Belle fille ~.*」ハ！

ハ！

それにやれるだけ近づけたければ、もう書く必要があるだらう。「*Belle Anglaise*」または「*Belle Américaine*」。ハハシト初めてフランスでも理解やれるだらう。

ああー、*elle était bien belle* 「素晴らしい美し



「ハムステッドは私のパッシー」

かった」、セラスキア夫人は！

またあるときには、もつと幸福な靈感のようなものに動かされて、田舎への長距離の散歩で自然への渴望を満たしたものだった。ハムステッドは私のパッシーだった——レグ・オブ・マトン池は私のオートウイユの池。リッチモンドは私のサンリクルー、そこの中庭園はブローニュの森の代わり。ハンプトン・コート宮殿は非常に美しいヴエルサイユ宮殿のようだった——ヴエルサイユがそれよりどんなに比較にならないほど美しいかは、リントットの弟子できえ知っていたであろうが。

そして、そのような健康的な疲労と香り高い印象の後では、十ペンスのディナーはよりおいしくなり、ペントンヴィルの小さな客間兼居間はいっそう我が家のようになり、本はさらに友人のようななった。

入手できる英語かフランス語の本なら何でも読んだということもある。小説、旅行記、歴史、詩、科学書——あらゆる書物がひどく憂鬱な私の心の糧になつた。

私は文字を書いてみた。絵を描いてみた。むさ苦しくて平凡で見苦しい外面的生活から離れた内面的生活を、自ら作ろうとした——自分自身の私的なオアシスを。そして、心の中だけでも、運命の女神が私を置こうと思った環境から、自らをわずかでも引き上げようとしたのである。（＊）

*注——ここで、私のいとこが、生涯のあの期間、人の心を奪うことができる最も重要な問題について抱いていた嘆かわしい見解を説明している部分に達しましたが、この部分の紹介には本当に気が進みません。

私は多くを省きました。しかし、これは完全に隠蔽し、道徳的趣旨の全部を彼の悲しい物語から剥奪すべきだと感じます。というのは、彼の不幸の大半は幼少期の不完全な宗教的しつけのせいであることは疑うべくもないからです。彼の両親（その他の点では私がかつて知り合った中では最も善良で親切な人々です）は、心が

「受け入れるには蟻、保持するには大理石」

であつた敏感で多感な年齢において、彼を、彼曰く「先入観がない」ままにしようと決めたとき、重大な責任を背負い込んだのでした。

マッジ・プランケット。

言うまでもなく、憂鬱気質で、金がなく、自分の運命に不満を抱き、（空きつ腹で）

頻繁に強いタバコを吸ってしまうような、物思いに沈んだ多くの若者と同じように、私は存在の問題に絶えず悩まされていた——自由意志と決定論、人間はどこから来て何のために存在しどこへ行くのか、惡の起源、魂の不滅、生命の無益さ等。私はそのような問題に対しても非常に惨めな気持ちになつた。

好奇心旺盛な通行人が、夜遅く、ペントンヴィルのウォールトン・ストリート○○番のブラインドからのぞき見たとしたら、多くの場合、巨大で痩せこけた元近衛騎兵第一連隊兵士の憐れむべき光景によつて、その好奇心は報われたことだらう。彼は、スクエア・ピアノ（彼はピアノを弾けないが）の黒と黄色の鍵盤の上に頭を突っ伏して、孤独と厭世えんせいとが結びついた苦い涙を落としている。

教会の懷に安らぎを求めるることは、私には一度も浮かばなかつた。

人の類型の中には、生まれつきのもので、作られたのではないものがある。私は「不信心」に生まれついた。先天的な不可知論者がいたとして、生まれたその瞬間から不可知論的な性分の持ち主だとしたら、それが私だった。私は不可知論アンソースイシズムといったような表現は聞いたことがなかつた。それは近年の発明なのである……。

*受け入れるには蟻…………バイロンの詩『ベッボ』の一節。「受け入れるときは蟻のよう

柔らかく、保つときは大理石のように堅固に」くらいの意。



「厭世」

"J'avais fait de la prose toute ma vie sans le savoir!"

「私は、それを知らずに生まれてからずのと散文を作ってきたのです!」

不可知論はともかく、私が思い出すことができるほんの初めての嫌悪の意識は、聖職者たちの黒い人影に対するものであり、パッシーにはそういう人影は数体あった。

少佐殿は彼らを *maîtres corbeaux* 「カラスの親方」と呼び、多少は尊敬の念を抱いていたようだ。セラスキア医師は彼らを嫌っていた。彼の優しいカトリックの妻も彼らに不信感を抱くようになった。私の愛する異教徒の母も彼らを好きではなかった。私の父はカトリックとして生まれ育ったというのに、やはり同じような嫌悪の情を持つていた。あの者たちは、父にとっての神々——思想家、哲学者、科学上の発見者たち——ガリレオ、ブルーノ、コペルニクスら——を迫害してきたし、宗教裁判やサン・バルテルミの虐殺の残酷さを彼に思い起こさせたのだ。私は常に彼らのことを、

*私は、それを知らずに…………「あることを自分でも知らないうちにやってしまう」の意。

モリエールの『町人貴族』第一幕第四景のジュールダンのセリフが元になつてゐる。

その気になれば小さな異教徒たちを火あぶりにする者として想像していた——イートン・ジャケットと白いシルクハットの全員を！ 実際はあの人たちが極めて善良で親切な人間であつたことを、私は少しも疑っていない。



ペントンヴィルの日曜日

牧師（牧師はペントンヴィルでは不足していなかつた）は、青い頬と青い顎のパッサーの聖職者ほどは、知らないうちに不快感を与えることはなかつた。しかし、彼は私は決して絵になるような、あるいは共感を覚える幻影ではなかつた。妻帯であること、頬ひげ、黒いズボン、フロックコート、山高帽、小さな白いタイ、職業柄「紳士」であるという意識。いちばん魅力に乏しいのは、ここでもまた、安っぽくて革新らしい教会で、その中で退屈そうにしている日曜日用の服を着た信者たちに、彼が神の言葉を聞かせることであった。その中には、彼の妻と一緒にディナーのテーブルに着く者はほとんどいなかつただろう——特に彼女が彼らの中から選ばれ

ていた場合には。

日曜日の朝・昼・晩、鐘の召喚で押し寄せ、長い礼拝と陳腐で熱の入っていない説教の後に再びどつと出てくるその群れを見ると、憂鬱になつた。ペントンヴィルでは、平日も憂鬱になるに十分だつた。だが、日曜日は言語に絶するほどの憂鬱さなのだ。それなのに、私以外の誰もそうは思つていなかつた。幼い頃からの訓練が、彼らを順応させたのだ。

私は、若造の頃のそうした身体的な嫌悪感は乗り越えている。それどころか、英國国教会の主教の様子さえ、私にはもう不快ではない。枢機卿の美しさを無条件に祝福することもできる。

実際、私は現在、牧師と司祭の両方と友人になっており、二人のどちらの方が好きでより尊敬しているかは自分でも分からぬ。彼らは私を憎悪するべきなのだが、そんなことはしない。彼らは私をものすごく憐れんでいるのだと思う。私があまりにも消極的なので、どちらも神学的な深い憎悪がかき立てられないのだ。そして、愛と慈愛の実践が彼らの優しい心に残した小さな憎悪のすべてが、互いのために蓄え置かれ——彼らが喜びを感じているように見える、消せない憎悪である。そしてそれは、隠されねばならないことでいつそう荒れ狂う。私が彼らの間の争いの種であると考え

ると、悲しくなる。

とはいへ、不信仰にもかかわらず、聖書は私のお気に入りの本であり、詩篇は私の崇拜的的だった。私の精神的姿勢がずっと崇敬と謙遜を中心とするものであったことは、かなり真実であると断言できる。

しかし、かつてキリスト教に対して進められてきたあらゆる議論（私は、今はもうそのすべてを知っていると思っている）が、私の中で自然発生的に湧き上がり、それらはいずれも私には答えられないようと思われ、今までのところ実際にまだ答えられない。かつて聞いたことがある宗教的教義は、私には信用できるとも魅力があるとも道理にかなっているとも思われなかつた。神格的存在の中心人物——いかなる場合も自分のものにできなかつた、ある神——を除いては。

私が意図したかどうかはともかく、私の自覚に向かって徐々に形成された、畏敬の念を起こさせるような不变の概念は、人類の天才がそれ自身のイメージを追つて、また人類自身の心の必要性から発展させたものよりも、どこまでも抽象的で、よそよそしく、近づきにくい、絶対的存在のそれであつた——不可解で、想像することも言い表すこともできないような、人間のあらゆる情感を超越し、人間の訴求が届く範囲の外について、その特質を推測しても無駄な——その呼称が **H**e であつて、**He** ではない、

そういう存在の概念である。

すべてのものは滅びるというという考え方は性に合わなかつたが、恐怖を抱いたことはなかつた。

私は、子供の頃でさえ、地獄などわんぱくな少年少女向けの俗っぽい脅しにすぎず、天国など人を抱き込むための俗っぽい説得手段にすぎないと、狡猾に疑つていた。いずれも、私の振るまい方に応じて、召使いやそのような人たちによつてあり得る運命として私に与えられたものだが、その行き当たりばつたりなやり方からそう思つたのだ。そんなことは、父や母、あるいは少佐殿やセラスキア家の人々——私が信頼していたのはこの人たちだけだ——からは言われたことがなかつた。

聖職者に対する偏見を別にすれば、私は敏感で多感な年齢においては先入観がないままにされた。私は、自分の教理問答書を学び、自分の聖書を読み、寝るときには主の祈りを唱え、「パパとママにお恵みがありますように」などという言葉を言つたけれども、習慣的でおざなりなやり方だった。

私が子供時代に信頼を置いていた少数の人々は、宗教に逆らうような言葉を、私に聞こえるように言つたことはなかつた。その一方で、誠実さ、勇気、寛容さ、無私無欲さ、礼儀正しさ、それにとりわけ、社会的地位も問わないし人間か動物かも問わな

いような他者への思いやり、といった諸美德には与えられていた重要性が、宗教に対するはどうやら与えられていないようだつたのだ。

私は、両親がそれらの間の問題に折り合いをつけ、私が自分で考えられる年齢になつたとき、存在についての重大な問題すべてを自力で何とか解決するべきだと決定したに違ひないと想像している。自分自身の善惡の判断力や、私が獲得しそうな人生の知識や、もし彼らが生きていたなら、自分たちなりに間違いなく私に与えたであろう助カ力などを材料にして。

私はそのようにして、従うべき道徳規範を自分で作つた。その中では、宗教はほんの小さな部分しか占めなかつた。

私にとっては罪は一つしかなく、それは残酷さだつた。私がそれを憎んだからだ。自然の女神は、彼女自身の不可解な目的のために、それをほとんと美德であるかのように教えているけれども。残酷さを含まない罪はすべて、単に健康や味覚や常識や公共の便宜に対する罪でしかなかつた。

自由意志などあり得なかつた。私たちは自由に意志を働くかせるように見えるだけで、それは小さな三角形の範囲内でのみ、その各辺とは遺伝、教育、そして環境であつた——私自身のやや幾何学的な配置には少なからず誇りを持っていたが、それは四つ足

で歩いたりはしない——たぶん、三角形にすぎないからだろう。

つまり、私たちは十分に堅固な状態を望むことができた——変わらなすぎるくらい。だが、それを望むための方法を望むことはできなかつた——幸い、私たちは今までのところまだ、そしてこれからの長い間も、信頼されるにふさわしいとは言えないでの、今ままの状態だらう！

小説の登場人物でさえ、彼らの創造主である小説家が彼らに与えた性質、教育、動機に従つて行動しなければならない。そうでなければ、私たちはその小説を置いて、何か別のものを読むに違ひない。人間の性質は、物語であつても現実と同じくらいそれ自身に矛盾があつてはならないからだ。狂気においてさえ筋道があるべきで、それでどうして意志が自由でいられるというのだろう？

個人的な恩恵や惡の赦免しゃめんのための祈り——遺産、好機、自分の成功した努力などを経験し、自分に訪れた世俗的な幸福への祈りや感謝のためにひざまずいたり声を張り上げたりすること——は、私の目にはまったく無用なものに映つた。無用さはともかくとしても、それは来たるべき恩恵への強い期待に疑念を持たないわけでもない、奴隸的な思い込みの行為、あるいはおべつか的で無礼な発語行為であつた。

私には、それはまるでユダヤ人——迷信的で実務的で、自分が欲しいものを知つて

いて、それを手に入れる方法には無頓着な人々——が、そのように祈ることを私たちに教えたに違いないように思われた。

それは、明日は休暇で晴れますようにとか、サンタクロースが気前よくありますようとかを無邪気に懇願するような、かわいくて単純な子供ではなかつた。それは、過剰でごますり的な礼賛とともに、へつらい、お世辞を言い、ご機嫌を取り、贈賄する、狡猾な商人（侮辱そのものだが）であつて、その時点と今後の自身の成功と敵の狼狽のために機能する、焼かれた生贋でもあつた。

それは犬の卑屈な伏せであり、そこには犬の二心のない愛情などはなく、犬の恐怖や利己心よりも強いものでさえあつた。

神がご自分のイメージに倣つて造られた人間にしても、何という態度だろうか！——自分の創造主に向かつてさえこのありさまだ！

• • • • •

許される唯一の祈りは、勇気または忍従のための祈りであった。それは内へ向かう祈りであり、私たち自身の中にある最高のもの——正直さ、禁欲、自尊心——への訴

求であつたからだ。

そして、細かいことを言えば、食前食後の感謝の祈りは、祈りを唱えるための食事がほとんどの人が大勢いたことを考えると、私には特に自己満足的で不正であるようと思われた。唯一のまともで適切な態度は、自分の食事の半分を分配することだつた——実際には、私にそんなことをする習慣はなかつた！ だが少なくとも私は、慈善心の欠如のために潔く自分を責めるくらいのことはしており、それが私の唯一の祈りであつた。

• • • • •

幸運にも、私たちには自身の自由意志がなかつたので、私たちを驅り立てる傾向は火花のように上向きで、それが否応なく私たちを導いた——善と惡、最惡と最善。

これをはつきりと理解して、心にしつかりと留めておくことにより、その上昇傾向の促進においてできることをすべてするための動機が私たちに与えられた——pour aider le bon Dieu 「神様のお役に立つため」——もし神がおわすのなら、より速く上昇し、より早く神に到達してもよい！ そして、人間の意志がひとたびロケッ

トや時計や蒸気エンジンのように始動させられ、正しい方向を取りさえすれば、達成できないことなどあるだろうか？

私たちは、やがては環境を制御すべきである。それに制御されるのではなく。教育は、一つの一貫した目的に、日々より適応するようになるだろう。そして最終的に、気が咎めつつも、遺伝を、まったくの偶然のままにしておくのではなく、自分の手で導くべきである。実際は、十分な指導を受けた温情主義の政府が賢明に政治を行い、不適応者の正当で注意深い排除の後、互いにすっかり恋に落ちている人々の結合だけを認可する、というのではない限り。

かくして、少なくとも残酷さは馬具で繋がれるべきであり、その貴重なエネルギーを、自然の女神によるような無慈悲な実験に浪費する必要はない。

またかくして、少年が人の父親になるように、人類はいつか父親になるべきである
——何の父親に？

ここがまさに、私の思索が決まって阻まれてしまつた箇所である。それは三数法の合計Xであり、ペントンヴィル、ウォールトン・ストリート、建築家兼測量士のピーター・イベットソンによつて解かれることはなかつたのである。

オランウータンがシェイクスピアに対応するとき、シェイクスピアが対応するXと

は……？

雌のチンパンジーがミロのヴィーナスに対応するとき、ミロのヴィーナスが対応するXとは……？

最後に、これら二つのXを互いに掛け合わせて、結果を想像してみてほしい！

• • • • •

こうしたものは、私が当時、未熟にも抱いた単純な信条であった。まあこの程度のものだつたわけだが、私は外部からの助けなしで、自力でこのすべてを何とか解決した——貧弱なものではあるけれども、自分自身の解決法だ。あるいは、私がド・ミュッセの次の言葉で表現したような。「*Mon verre n'est pas grand — mais je bois dans mon verre.*」
「私のグラスは大きくはない——それでも私はそのグラスで飲むのである」】

そのようなアイディアは有益な雲のように空気中にあつたのだが、それらはまだ大衆のために印刷された文字に凝縮されていなかつたからである。人々は、大衆小説や

*三数法……比例式の解法。 $a:b = c:d$ で、 d が分からなことき、 $bc \div a$ で出すことができる。

*私のグラスは…………ミュッセの戯曲『盃と唇』冒頭の献辞の中に見える。

安っぽい雑誌——そこに駆け込む誰もが読み、自分自身について少しだけ考えることを学び、聖職者や俗人からの罵倒の怒号を恐れる必要もなく考えていることを正直に言うことができる——で現在書いているようには、こういうことについてあえて書いたりはしなかった。

そしてこのことは、そのように考え、それ以外は考えることができなかつた、とうだけではなかつた。そのように感じ、それ以外は感じることができなかつた、といふことでもあつたのだ。私は、個人的に人生にどんなに絶望していても、自分が考えたり感じたりした以外を考えたり感じたりすることを少しでも望んだりしたら、自分を邪悪で弱くて下等なものと思つたはずである——自分の最上の天稟てんびんとして嚴重に守ってきたことへの反逆だと。

それでも、私にとつての他人の信仰は、非攻撃的で控え目で誠実である場合に限り、しばしばいじらしく哀れを誘うもののように思われ、時には美しいとさえ思われることがあつた。子供っぽい物事は時に美しく見えるようなものだが、もう子供ではなく、そのような物事は放棄すべき人々においてさえそう見えることがある。それはたくさん英雄的生涯をもたらし、たくさんの人よりした曖昧な生涯を潔白で幸福なものにした。その場合の熱意と情熱は、永遠の炎を上げて燃えているように思われた。

私が気づいていたように、時々、短い期間、とりわけ若者の間では、不信仰は、信仰と同じくらい熱烈で情熱的で、同時に狭量で不合理なものであり得る。しかし、ああ！　その炎は断続的で、その光は優しい光ではなかつた。

それは、赤ん坊のための食べ物を持たなかつた。病人や不運な人を癒やすこともできず、魂の内なる不和を従順な和合へと変化させることもできなかつた。私たちの失敗や欠点を補償することも、私たちと同じようと考えることを選ばなかつたほかの人々の成功や繁栄を、私たちに対し何らかの形で埋め合わせることもできなかつた。

そこには、傷ついたプライドのための鎮痛剤もなく、弱気な落胆のための支えも、死別に対する慰めもなかつた。その険しく起伏の多い道が至福の約束の地へと導いてくれることもなく、その途中には快い休息場所もなかつた。

唯一の武器は不变不動。唯一の盾は忍耐力。現世で望むのは共通の福利。現世での報酬は知識に通じるあらゆる道の開放、それに恐怖という臆病な遺産からの解放。最終的な褒賞は——睡眠か？　誰か知つてゐるだらうか？

睡眠は悪くはなかつた。

だから、私のような、単純で正直で控え目で献身的で真面目で熱心で情熱があつて良心的にすぎる若い不信心者たちは、非常にたくましく勇敢で独立独歩の気性が必要

で（私はそうではなかつたが）、自分たちが紛れもない真実であると想像しているもの（一見疑わしい美貌を象つたもの）に強く心を寄せ、信仰者が自分の特別で特異な役得として主張している不变の快活さ、自信、沈着さを自分も持つて人生の道程を歩まなければならなかつた。

私の不信心の告白についてはこれくらいにしておく。それは、私よりもはるかに年長で賢明で善良な多くの人々によつて共有され（もし私がそれを知つてさえいたならば……）、またその人たちによつて、長年抱いてきた幻想という大きな犠牲と、魂の問い合わせという恐ろしい苦しみ——私が小さな男の子だつたとき、優しい両親の思慮深さのおかげで免れた苦闘と苦痛——を経て、初めて到達されたものであつた。

• • • • •

こうして、私はこの人生を最大限に利用する必要に迫られた。私が知り、信じ、逆に望んでさえいたとしても、私たちは将来死ななければならないからである。

実際私は、食べて飲んで陽気になれるというわけではなかつた。遺伝と教育が私をそういう人間にはしなかつたと思うし、環境がそれを許さなかつた。しかし私は、自

分の良心と人類の過去の教えから案出できる最上の理想を試み、それに沿って生きることは可能だった。そして、造物主や神の概念をかなり不十分にしか持たない人間は、私たちのうちの最高の者が離れて付いていくことしか望めないような人間の例（古今の、ヘブライ人、異教徒、仏教徒、キリスト教徒、不可知論者等々）を私たちに提供してきた。

私は時々、朝の仕事に行き、自分の心が高邁な希望と高い決意で意氣が上がるのを感じたものだ。

そのときもその先も、恐れや非難や利己心や私的な報酬へのあさましい願望なしで人生を送るのは、どれほど簡単で単純だと思われたことか！——禁欲的な忍耐、無敵の根気と素直さ、不屈の快活さと無私の人生！

結局のところ、それはあとせいぜい四、五十年くらいだし、その程度の歳月が何だというのか？ そしてその後は——*que sais-je?* 「我、何をか知る？」

その考え方には確かに精神を高揚させた！

が、昼食時（昼食は、アバネシー・ビスケットとコップ一杯の水、それに刻みタバコを巻いたものの数本で構成されており、タバコは安物で匂いがきつかった）までには、

* 我、何をか知る?……モンテニュの『エセー』より。反語で「何も知らない」の意。

微妙な変化が私の夢の精神に訪れた。

ほかの者たちは高い志を持っていなかつた。中にはひどく短気な者もいて、あまりにもひどいやり方で人を不機嫌にした……。

ペントンヴィルは生活を奴隸化してしまう、何と恐ろしい場所だつたことか……！ ロサマン・ストリートの新しい小さな店のデザインを延々と作り続けることになつて、それがうまくいきそうにないと思われたのは、何と単調でつらい仕事だつたことか……！

やぶにらみであばた顔でがに股でせむしでちびのジャドキンス（その異様な姿を見れば、徵兵係の下士官だつてそつとする）は、兵卒として入隊した経験があることを理由に、一体何だつて延々と人のことを嘲るのか……？

そのとき私は、我慢しきれないほど挑発されたため、彼のズボンのたるみをつかんで静かにズボンから彼を振り落とした。彼は床の上にどさりと落ちた。彼は怯えたが、まったく無傷だった。それなのに、ただそれだけの理由で、一体何だつて、冷笑とともに「殴るならおまえと同じ大きさの奴を殴れ」などと言わなければならないのか……？

その他もろもろ。不斷の小さな意地悪、卑劣な辱め、醜悪さ、下品さ、中傷。これ

はずかし

らは、抵抗する際に、自分の中に最低最小レベルでしか称賛に値しないもの全部を呼び起こした。

人は、決死的行動へと導くものに自分の神経を同調させてきた。すると、ブヨや小さな燃えかすの塵ちりが目に入り、それがそこにくつつく。結局のところ、決死的行動への導きという可能性はあるだけでなく、今後もそうだろう。それは、想像の中にしかなかつた。それは常に、ブヨや燃えかすの塵、ブヨや燃えかすの塵、の繰り返しなのだ。

夕方までには、私は不名誉にも神経が消耗し、深すぎて涙さえ出てこないような苛立たしい悲観論の深淵にはまり込み、自分は人類中最も卑劣で最も惨めな人間だが、それでもほかの者たちの方が、例外なく自分よりもさらにずっと卑劣で惨めなのだ、などと思つたものだつた。

彼らはまだ食べて飲んで陽気になることができた。私にはできなかつたし、したいとさえ思わなかつた。

-
-
-
-
-
-
-

等々のことが、毎日、毎週、何か月も何年も続き……。

こうして私は、飽き飽きしている自分の特性、このずっと変わらない制御不能な気分の変動に、やがて倦み疲れてしまった。

おお、精神の交互の満ち引きよ！ それは病氣なのであり、甚だ恼ましいことには、それは本当の変化ではない。それは絶対的な沈滯そのものよりも、さらにうんざりするほど単調なものなのだ。その退屈で面白みのないシーソーから私は決して逃れることができない。夢のない眠り、人生の死の門を通ること以外には。というのは、夢の中ではさえ、私たちは依然として私たち自身であるからだ。そこに休息はなかつた！

私は、通りがかりのショーウィンドウに映る自分の姿をひどく嫌つた。それでも私はそこでいつもそれを探していた。悪い方向でもいいから、少なくとも何らかの変化を見いだす空しい望みを抱きつつ。私はほかの誰かになることに激しく憧れた。とはいへ、私は一瞬でもその人になるのに耐えられるようなほかの誰かに会うことはなかつた。

そして、私たちの孤独！

私たち無力な種のそれぞれの独立単位は、その者自身の心の周縁の内表面によつて容赦なく境界を定められている。それは継ぎ目のない甲冑で、弱点がなく、欠陥もなく、自分たちの出口用の割れ目も、仲間単位の中で最も近くて最も親愛なものため

の進入用の割れ目も、一つもない。五つのポイントでのみ私たちは互いに触れあうことができる、それはすべて——私たちの貧弱な感覚の機能によるだけのもので——外部からのものである。私たちは、最愛の、いちばん盲目的に信頼している人にわずかに近づけるよう、それらを無駄にこき使う。無駄に、振り籠から墓場まで、ずっと。

そんな空想的な考えが、なぜ私をそんなに残酷に悩ませたのか？ このような魂の輸血をわずかでも我慢できると自分が感じられる人を、私は誰も知らなかつたのだ。私には見分けられない！ しかし、そのことは、肉体を疲れさせるよう私を追い立てる虻^{あぶ}のようなものだつた。昼は健康な肉体疲労から来る無感動な心の安らぎを得、夜は夢のない眠り——生の中の死！——を眠るような、私の肉体を。

「*そのような素材から惨めな人間が造られる！」特に惨めな若者はそう。惨めな者はどたくさんタバコを吸う。タバコを吸えば吸うほど、悲惨な者になる——悪循環だ！

私の場合はそうだった。私は（自分だけに哀愁に満ちた表現で語つたように）解放の時間を待ち焦がれるようになり、自殺の考えを愛撫した。私はフランス語で、韻を踏んだ碑文體の短詩を自分のために作りさえした。自分でけつこう整つたものができたと思つている——

* そのような素材から……バイロンの詩『タッソーの嘆き』より。

Je n'étais point. Je fus.

Je ne suis plus.

私はいなかつた。私はいた。

私はもういない。

• • • •

おお、何らかの高貴な理由で死ぬこと——身を挺して他者の命を救うこと。価値のない命だつていい。彼はそれにしがみついた！

ある月明かりの夜、ソーホーのフリス・ストリートを歩いていたときに、私はこの望みを大真面目に考案したのを思い出す。私は、店の上に建てられた家の下に集まつて興奮している人々の小さな集団に出くわした。三階の割れた窓ガラスから、不吉な煙の雲が風のない空に円柱のように立ち上っていた。その家には普通の梯子はしごがかけられており、そこには人が密集して住んでいるとのことだった。それなのに、消防車や

避難用梯子はまだ到着しておらず、ドアを蹴ったり叩いたりすることで開けてみようとしたり居住者を起こしたりすることは、もはや意味がないようと思われた。

勇敢な人間が求められていた——非常に勇敢な人間、梯子を上り、割れた窓からその家に侵入するような者が。ここにはついに導かれるべき決死的行動があった！

そのような人間が見つかった。が、私はずっと消えない不面目と悔恨を持ち続けることになつたのだが、それは私ではなかつたのだ。

彼は背が低くてずんぐりとした体格で、中年で、かなり陽気そうな赤ら顔と巨大な頬ひげを持っていた——どこにでもいそうなごく普通の男で、全然人生に疲れたようには見えなかつた。

これはたまたまつたのだが、彼のヒロイズムは無駄になつた。その家には誰もいなかつたからだ。彼が炎を押し分けて燃えている部屋に何とかして侵入するよりも前に、そこにいた全員が聞いて、心底安心したように。彼の頬ひげの先端さえ焼けることはなかつたのだ！

それにもかかわらず、私は家にそそくさと帰ると、自己破壊の考えをすべて諦めた——高貴な理由によるそれでさえ。贖罪しょくざいとして、私はいくらか急いで何夜もの真夜中にこつこつと進める労苦の炎を燃やすことに専心した——レー・テルの不朽の木版画

『Der Tod als Freund 「友としての死」』を、線の一本一本まで忠実に、ペンとインクで入念に写すこと。リントット夫人はそれを私に貸してくれるくらいに親切だった——そして、私はその下に、美しい黒のゴシック体と赤の大文字で、(ほんのわずかなユーモア感覚も不敬さの感覚もなく) 次のような詩を書いた。それは私に無限の痛みをもたらした。

I

終、わ、終——わ、り、り！

おお父よ、私は終えました……

私の悲しい人生の間に、

私が犯したことのない

たくさん恐ろしい大罪のために、

あんなにも私を罰したあなた、

安らかに嘔みしめさせてください

この最期のときを！



II

あなたの計らいによる恩恵を、

私は指を折って数えます。

私の全身は動かなくなるでしよう、
たちまちのうちにそうなります！

どうか辛抱して、数えてください

私のあらゆる悪行を——それから見積もつてください
あなたの厳格な処置のすべてを——

私がそれを果たしたものと見なしてください！

III

苦しむために生まれ、そして苦しんで——
下劣、嫌惡、輕撃、無知、

I.

F, i, fi—n, i, ni!

Bon dieu Père, j'ai fini…

Vous qui m'avez tant puni,

Dans ma triste vie,

Pour tant d'horribles forfaits

Que je ne commis jamais,

Laissez-moi jouir en paix

De mon agonie!

Les faveurs que je Vous dois,
Je les compte sur mes doigts:
Tout infirme que je sois,
Ça se fait bien vite!
Prenez patience, et comptez
Tous mes maux — puis computez
Toutes Vos sévérités —
Vous me tiendrez quitte!

老い、醜惡、虛弱——そして死にかけて
自分の巣穴の中で不平も言わずに、
私には欲望もありません

良い終わりを迎えること以外には——
後悔もなく、悔悛もなく——

希望も恐れもありません！

IV

冷厳で、信者を独占しようとなさる嫉妬深い父よ、
あなたの御子みこは私たちのために死にました！
私もまた、たいした恨みもなく、

あなたの御許みもとに留まります

私が望むものを、遠慮なく言わせてもらえば、
私の監獄の戸口で、
何か小さな祈りをすることです……

IV.

Père inflexible et jaloux,
Votre Fils est mort pour nous!
Aussi, je reste envers Vous
Si bien sans rancune,
Que je voudrais, sans façon,
Faire, au seuil de ma prison,
Quelque petite oraison ...
Je n'en sais pas une!

III.

Né pour souffrir, et souffrant —
Bas, honni, bête, ignorant,
Vieux, laid, chétif — et mourant
Dans mon trou sans plainte,
Je suis aussi sans désir
Autre que d'en bien finir —
Sans regret, sans repentir —
Sans espoir ni crainte!

私はそれを一つも知らないのです！

V

お告げの鐘が鳴るのが聞こえます
あなたに選ばれた人を集めの鐘が。
私にとっては、神の家から追放された者の鐘。
鳴り響くのは死！

祈りは何の役にも立ちません……
許すことこそ唯一の善行。

それはあなたのものであり、私のものであります。
私は、私はあなたを許します！

同じようになさってください！

VI

VI.

Soyez d'un égard pareil!
S'il est quelque vrai sommeil
Sans ni rêve, ni réveil,
Ouvrez-m'en la porte —
Faites que l'immense Oubli
Couvre, sous un dernier pli,
Dans mon corps enséveli,
Ma conscience morte!

V.

J'entends sonner l'Angelus
Qui rassemble Vos Elus:
Pour moi, du bercail exclus.
C'est la mort qui sonne!
Prier ne profite rien …
Pardonner est le seul bien:
C'est le Vôtre, et c'est le mien:
Moi, je Vous pardonne!

もし夢も目覚めもない

本当の眠りであるのなら、

そのドアを私にお開きください――

あなたの無限の忘却をお与えください

最後の封書で覆ってください、

埋葬された肉体の中の、

私の死んだ意識を！

おお、何て不器用なんだ！ 私という者は、万事、小さいことでも大きなことでも、
何と絶望的な落第者であったことだろう。

第三部

私には、リントット家とその友人たち以外に友人はいなかつた。「Les amis de nos amis sont nos amis! 「友達の友達は友達だ！」」



いとこのアルフレッドは、彼の前、父親がそうであつたように軍隊に入つていた。いとこのチャーリーは教会に入つていて、私たちの間には完全に隔たりができていた。祖母は亡くなつた。プランケットおばは、ひどく病弱になつてフィレンツェに住んでいた。その娘のマッジはインドにて、今は名高い将軍となつてゐる若い兵士と幸福な結婚をした。

リントット家は自由業の代表として、またペントンヴィルの旧家として、堂々と振

る舞っていた。当時、人々は概して排他的だった——主として女性たちによつて維持された排他性であつた。ペントンヴィルにさえ特権グループがあつたのだ。

最も排他的な人々の中に、リントット家もいた。公平性という点で、彼らが排除した人々が少なくともその他の人々を排除できていたならいいのだが。

私は彼らの歓待を受けていたし、彼らの輪がかつてと同じく魅力的であつたことを否定するというのは私らしくないだろう。ところが、私には友人を作る才能がなかつた。自分とは正反対の人々に惹かれる事はよくあつたのだが。特に、小さく、賢く、機敏だが、あまり親しみやすくはない男性たちに。しかし、たとえ彼らが近づきたいという気になつたとしても、私の側の悲惨なまでの内気さと態度の固さは救いようがない、それが私たちの間に氷の障壁を立ち上げてしまうのが常だった。

彼ら、善良なるリントット家の人々は、かなりもてなしがよく、たくさんの友人がいて、多くのパーティーを催したのだが、私の悲惨なまでの内気さがそれを心から樂しむことを妨げた。パーティーは堅苦しすぎと自由すぎの両方の面を備えていた。

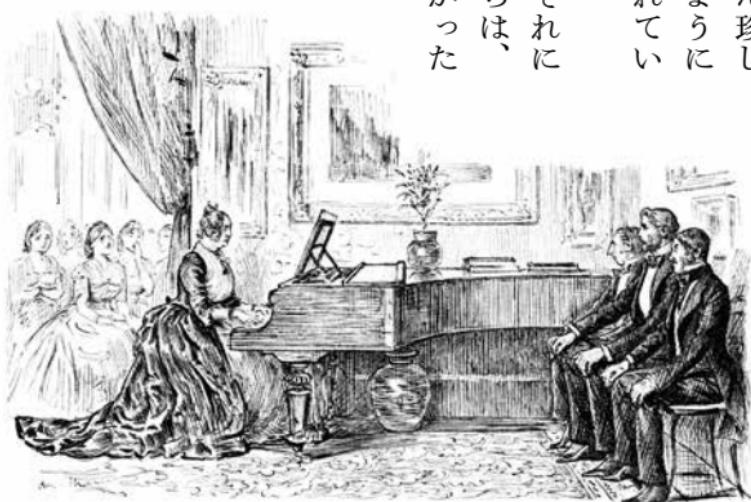
応接間では、リントット夫人と別の女性一人か二人が、厳格に着飾つて、最も厳格な音楽を、その厳格さを軽減することのないやり方で演奏していたものだ。それらは無情なものだつた！ ほほ常にバッハかファン・ヘルカスカルラッティで、この人たちは

それぞれ、芸術家と紳士の両方——ずいぶん珍しいのだが、絶対に必要な組み合わせであるように思われた——を備えた作曲ができたと言われていた。

若い、あるいは中年のほかの女性たち、それに私のようにぽかんとしている少数の若者たちは、聴くことは許されたけれども応酬はできなかつた——演奏や歌でお返しすることができなかつたのだ。

もし誰かがメンデルスゾーンの無言歌を無謀にもリクエストしたりすると——あるいは歌詞のある歌、シューベルトのドイツ語の歌詞が付いた歌でさえ——、その者は音楽的に軽薄であるという罪状により譴責され、赤面させられたのであつた。

その間、リントット事務所（彼が裏庭に



LA BELLA CAPRICCIOSA, BY HUMMEL
[気まぐれな美女] フンメル作曲

建てた）では、謹厳だつたり忠実だつたりする男性たちが、夕食の時刻まで、タバコを吸つたり水割り酒をちびちび飲んだりして仕事の話をしていた。最初は形式張つて、十分に礼儀正しく。が、徐々に、手探りで、言わば社会的なボタンを外してリラックスし、互いの名前の前から「ミスター」を落として（翌朝には復活するのだが）活気ある職業上の冗談に耽り、それはすぐに個人的で自由で抑制のないものになつた——それは、機敏さと得意即妙さの欠乏から私では生き生きと輝くことのできない、陽気な闘争とでもいうべきものだつた。例えば、彼らは人に、あなたは見た目よりもずっと大馬鹿なのか、それとも實際よりも大馬鹿に見えるのかと尋ねる。その質問の答えがどちらであつても、その痛烈なる論駁は「それはあり得ない！」で、答えた者はそれ以外の全員からの哄笑に囮まれたものだつた。

そこで私は妥協案を採用し、午後の大半を階段や玄関ホールで過ごし、夕食の時刻が来るまで著名な大聖堂や公共の建築物の写真を（あまりにも作り物めいているため自然に見えないことに多大な興味をそそられつつ）研究した。その時刻になつて、女性たちにせつせと付き従うことにより、私は自分という惨めな存在を思い出してもらい、許してもらうことになつたのだ。またすぐに再び忘れ去られたのではないかと心配しているのだが。

私は自分が、特に夕食時、概して紳士たちよりも女性たちといの方を好むことを自覚したなどと書いて、傲慢な気取り屋と思われないよう願っている。

夕食後には変化があつた——それは良い方向への変化であると考える者もいた。リントットが明るい喧騒と友情に元気づけられ、夫人がああだというのに、それはもう騒々しくひょうきんに振る舞うのだ。彼には正真正銘、道化的才能があつた。友人たちは、リントットの「スイッチが入った」と互いに囁き交わすと、彼を促した。バッハとフンメルとスカルラッティは棚上げされ、若者たちは楽しい時間を過ごすことになつた。戯れ歌や黒人歌謡の全員合唱があつた。リントットは『^{*}ヴィリキンズと彼のダイナ』をロブソン氏をまねて歌い、それがあまりにも上手だったので、リントット夫人の険しい顔面でさえにんまりとした微笑みへと緩むのだった。それは抵抗できなほどの魅力的なのだ。パーティが終わるときには、(ホストのおかげで)私たちは全員がホステスに「とても楽しい夜」を率直に感謝することができ、楽しげに、でもほとんどの残念そうに、彼女におやすみなさいを言うのであつた。

*ヴィリキンズと彼のダイナを………『ヴィリキンズと彼のダイナ』は、『ウイリアムとダイナ』という民謡の替え歌。一八五三年初出。「ロブソン氏」とは、コメディアンで俳優でバラード歌手であつたフレデリック・ロブソンのこと。小柄な人だったらしい。

時には笑うのもいい——できることなら賢明に。そうでなければ quocumque modo! 「どんな方法でも!」「^{*}ポットの下でパチパチと音を立てるいばら」のような愚かな笑い声でさえ、役に立つ季節がある。それは、ポット——すべてのポット——と、それらが空の場合は、その空虚を温めるように思われる。

• • • • •

実を言うと、私は一度だけ、現実に友人を作ったのだが、彼は私とはあまり長くはもたなかつた。

それはこんなふうに起つた。リントット夫人がいつもよりも大きなパーティを開催した。その招待客の一人が偉大な画商のモーゼス・リヨン氏であつた——リントットの顧客である。彼はラファエル・メリデューという若者を連れてきた。すでに有名な画家で、私がそれまで見た中で最も魅力的な若者であった。小さくて瘦せていたが、実に美しい造形で、月並みでない異様なファッショニ身を包み、ハンサムな顔、まぶしいほど上品なマナー、人を惹きつけてやまない魅力ある声を備え、自分の栄誉に十分に見合つていた。それらがなくても、彼は十分にまぶしい存在だつただろう。ミ

デルトン・スクエアのもてなしのよいドアが、かくも輝かしい客人に対して開かれたことはかつてなかつた。

私は彼に紹介された。彼は、私の鼻梁^{びりょう}が彼の『太陽神と夜明けの乙女』という絵の太陽神にぴったりだと気づき、一度か二度モデルになつてくれないかと依頼してきた。私はそのような要求に応じることをまことに誇りに思い、何度もモデルになつてやつた。私は、リントットの所での自分の仕事が始まる前、夜明け頃に起きて座りに行つたものだつた。時間が割け次第、また行つて座る。

私は、太陽神（あまり知的な神ではないようと思えるが）の鼻や額だけでなく、腕や胴体も備えているようだつた。こういった理由のためにも座つたわけである。私はその後ずっと自分を誇りに思つた。

彼を喜ばせたこのモデル活動の間に、私は、ダヴィデがヨナタンを愛したように、彼を愛するようになつた。

私たちは、ハンサム型二輪馬車で一緒にダービーに行くことにした。私は数日前にロンドンで最も洗練されたハンサムを予約した。素晴らしい水曜日の朝、私はその馬

*ポットの下で……伝道の書七章六「愚かな者の笑いは、ポットの下に燃えるいばらの音のようである。これもまた空である」。

車でシャーロット・ストリートの彼の家のドアに、時間厳守で着いた。そこにはすでに別のハンサム——私のよりもさらに洗練されたハンサムで、個人所有のもの——があつた。彼が下りてきて、私にこう告げた。気が変わつて、前の晩に自分を誘つてきたリヨンと一緒に行くことにしたんだ、と。

「ロンドンの一流画商の一人なんだ、我が友よ。ちくしょう、分かつてくれるだらうが、僕には断れっこない——本当にすまない！」

それで私は孤独な豪華さの中でダービーに行つたのだが、晴れやかな天気、道中のユーモラスなもの、あらゆる陽気な場面が、私には無駄になつた。私の心の苦みはそれほどのものだつた。

午後の早い時間に、四頭立て馬車の屋根上座席で、スマートで貴族的な風采の数人の男性の間で昼食を取つてゐるメリデューを見た。彼は座を楽しませる人のようで、私が通り過ぎたとき、上機嫌に会釈してくれた。すぐに私は、ハンサムの中でリヨンが、しかめ面で独りぼっちでつまらなそうに座つてゐるのに気づいた。彼は私を昼食に誘い、私が抱いたのと同じくらい強烈で大きな苦みを打ち明けた（私の方は胸に秘めておいたが）。抜け目のないヘブライ人の商人は、心の温かい、傷ついた友人へとランクを下げた。メリデューは、チズルハースト伯爵のためにリヨンを見捨てたのだった。

ちょうどリヨンのために私を見捨てたようだ。

それは私たち二人にとって、どんよりと冴えないダービーだった。

数日後、相変わらずにこやかなメリデューに会った。彼はこう言つただけだった。

「チズルハーストのために昔なじみのリヨンを外すのは、ひどい罪悪感を感じたんだよ、分かるだろ？ でも伯爵だからねえ、友よ！ ちくしょう！ 気の毒なオールド・モーは自分のハンサムに一人で戻らねばならなかつたが、それでも『太陽神』は買つてくれたよ」

間もなくメリデューは、私との付き合い



「私たち二人にとって冴えないダービー」

を全面的に断つてしまい、私はひどく悲しい思いをした。私は彼のダービーでの義務不履行をリヨンと同じくらいすぐに許していたし、その先も彼なら何だって許しただろうからだ。常に彼は、特別手当が快く支給されるような人々の一人だったのだ。

彼は三十歳前に亡くなった。かわいそうな友よ！ それでも、彼の名声が死ぬことはない。『太陽神』は（あまりにも悲惨に鼻を明かされた者の、その鼻梁が描き込まれているとしても）、それだけで不朽の名声を持つ人々の中に彼を置くのに十分である。リヨンはそれを、チズルハースト卿に三千ポンドで売った——画家からは五百ポンドで買ったものだ。それは今は国立美術館にある。

詩的正義は満たされた！

• • • • •

友情よりも恋の方が幸運だったということもなかつた。

この世のどんな排他性も善良で美しい乙女を排除することはできないし、そのことはペントンヴィルでも不足することはなかつた。

その他大勢よりもずっと美しくて善良な乙女が、常に一人いるのである——オテ

ル・ド・ゴンドロリエの女性たちの中のエスマラルダのように。ペントンヴィルといふか、厳密には近くのクラークエンウェルに、そのような乙女がいた。ところが、彼女の身分は（エスマラルダのように）かなり卑しいものだったので、最も排他的傾向が少ない者でさえ、**彼女**とは一線を画してしまいがちだった！ 彼女は大家族の一員で、その家族はミドルセックス留置場の西壁の向かいにあるかなり小さな店で、牛の胃と豚足、それに犬猫の餌を売っていた。彼女はその貧しい売り場では最年長で、多忙な、責任のある人間だった。彼女は創造主の造りたもうた貴婦人たちの一人、創造主の造りたもうた絶世の美女たちの一人——女神だったのだ！ 私は彼女の店を通りかかるたびにそのことを確信し、彼女の優しく素直で媚びのない視線を恥ずかしそうに受けた。自分の恥ずかしがりを克服し、全女性中で彼女だけが自分にとつての女性であり、自分たち二人は一つになることが不可欠、絶対に必要だということを彼女に告げなければいけないときが近づいていた——直ちに！ すぐに！ 永遠に！

しかし、私がそれをする気になる前に、彼女は別の誰かと結婚し、私たちは一言も言葉を交わすことはなかつた！

もし彼女が今でも存命なら、老婦人である——どこにいようと、人生の階級が何で

あらうと、善良で美しい老婦人になつてゐることを、私は確信するものである。あまりありそうにないけれども、もし彼女がこの本を読むようなことがあれば、彼女は未知の称賛者からのこの小さな賛辞を受け入れてくれるかもしれない。その者にとつて、彼女は何年も前、ミドルセックス留置場の西側にいまだに接している忌まわしい通りを、美しく詩的なものにしてくれたのだ。また、それ以来その著者が、長くて開口部のない壁の、また苦悶の石の顔が荒涼たるスラムを見下ろすもの寂しい玄関の、その間違つた側の方にいるとしても、彼女はこの賛辞を低く評価したりはしないよう努めてくれるかもしれない。

"Per me si va tra la perduta gente ..."!

「^{*}我を通り過ぎれば、地獄に落ちた人々の中に行くであらう……！」

• • • • •

この失望の後、私は（バイロンやビスマルクやヴァーヴナーのように）大型犬を手

に入れたが、別に彼らを見習いたいという精神からではなかつた。それどころか、当時の私はビスマルクもヴァーグナーも彼らの犬のこととも聞いたことがなかつたし、バイロンへの情熱や何かしら彼の模倣をしたいという願望も失つてもいたのである。それは単に愛すべきものの欠乏のためであり、それはもう一度私を愛してくれるに違ひなかつた。



"PER ME SI VA TRA LA PERDUTA GENTE!"
「[我を通り過ぎれば、地獄に落ちた人々の中に行くであろう!]」

* 我を通り過ぎれば…………ダンテ『神曲』地獄篇第三歌より。この「我」とは、地獄の門の自称。

買ったときは大きな犬ではなく、片腕で運べるくらいの、暗いオレンジ色の小さなボールにすぎなかつた。彼は私に、パッシーへの休暇旅行のために貯めた全財産をつぎ込ませた。私は彼の父犬、セントバーナードのチャンピオンをドッグ・ショーで見たことがあり、ああいう仲間と一緒に暮らす生活は十分価値があるだろうと感じた。しかし、彼の値段は五百ギニーだつた。その生後六週間になつたばかりの愛くるしい息子を見て、雄親のたつた五十分の一であることを聞いたとき、私は、パッシーは待つべきだ、彼の飼い主にならなければ、と感じた。

私は彼に、金で買える最上のものを与えた——一クオート五ペンスの本物のミルクを一日三クオート、毎朝彼の軟毛をとかし、週に三回洗い、ノミを一匹ずつ全部退治した——愛の奉仕活動である。毎週土曜日に体重を計ると、週に六から九ポンドの割合で増えていくのが分かつた。そして、彼の愛情パワーは、体重の二乗に比例して増加した。私は彼をポルトスと命名したが、それは彼がとても大きくて、ずんぐりして、陽気だったからである。だが、彼の高貴な子犬の顔と美しく悲しげな目に、私は、彼が中年になつたら、気高いラ・フェール伯爵アトスの特徴である高貴で憂いに満ちた威厳を備えることを予見していた。

彼は喜びの種たねだった。夜、眠りに就いて、朝、彼がそこにいることを知るのは、す

てきなことだった。私たちが一緒に歩き回るときはいつでも、誰もが彼を見ようと振り返って感心し、彼はおとなしいかどうか、何か特定の品種なのか、何を食べさせているのかと尋ねるのだった。彼はサイズにおいて怪物のようになった——美しく、陽気で、優美で、のしのしと歩き、極めて愛情深い怪物で、彼の幸福なフランケンシュタインである私は、彼の世話ををするつもりであつた少なくとも十二年、うまくすれば十四年も続く宝物を持ったことで、自分自身を祝福した。しかし、十一か月になつたとき、彼はジステンパー



ポルトスと彼の付き添い従者

で死んでしまった。

小さな犬が、死ぬときに大きな犬と同じくらい大きな悲しみを引き起こすかものかどうか、私には分からない。だが私は、もう二度と犬——大きからうが小さからうが——は飼うべきではないと心に決めた。

• • • • •

その後、私は詩を書くのに没頭して、それらを雑誌に送ったが、掲載されなかつた。それらはたいてい、ある曲によつてずっと前に起こつたことが思い出されることがあり、それを詠んだものだつた。私の詩の手法は、私の絵の手法同様限定期的だつた。

ここに私が最後に書いた、三十年前の詩がある。それをここに挙げるための唯一の言い訳は、この詩が非常に特異な予言になつているということだ。

回想の引き金となつた曲（父がよく歌つていたフランスの古い歌）は、かなり単純で感動的なものである。フランス語の古い歌詞はこんなふうになつてゐる。

"Orléans, Beaugency!"

Notre Dame de Cléry!

Vendôme! Vendôme!

Quel chagrin, quel ennui

De compter toute la nuit

Les heures — Les heures!"

「オルレアン、ボーヴィヤンシーー！

ノートルダム・ド・クレリーー！

ヴァンドーム！ ヴァンドーム！

何と悲しく、何と憂鬱なのだろう

一晩中指折り数える」とは

時間を——時間を！」

これだけだ。これは眠れない中世の囚人によつて歌われたと想像される。彼は、不眠症のせいで時間が進まないつらさを紛らわせるために、近くの鐘楼からの時刻を告げる鐘の音を、自分の頭に浮かんだ言葉に置き換えていた。私は、彼の名前がパスキ

エ・ド・ラ・マリエールで、私の祖先なのだと空想してみた。

鐘

古いフランスの歌がある。

孤独と悲しみの小曲だ――

自然にできたように単純で、比類なく甘く――

そして悲しい――とても信じられないほどに！

メロディは名もない誰かが

書いたもの――だが、これには私見を述べよう。

この詩を作った者は、誰であれ昔の人で

私のフランスの祖先である。

私はこの深い地下牢を知っている

彼が長いこと繋がっていた場所を――なぜそこに繋がっていたのかも。

彼の苦悶は、眠れないことがすべて

それは罪への自責の念のためだった。

私には、彼の冷たくて硬いベッドが見える。

私には、彼の耳の中で響いている鐘が聞こえる。

彼が毎晩、その眠れない頭を、

涙で濡れた枕に押し付けたときに。

おお、休むことのない小さな鐘よ！

それは変わらなかつた——^{*}ラウンドレイが鳴るだけ

その不幸な時間の暗い一時間ごとに

ため息で自らを吐き出して。

そしてさらに、ますます、

その重荷は彼の失われた自己の一部になつた——

*ラウンドレイ……短いリフレインのある詩・曲。

そして、彼の記憶と入り混じり、
彼の心への道を穿つた。

そこでは名前が織り込まれた

愛する者がいたために彼が愛した多くの町の名前が、
その音楽の織物の中に。こうして彼は
小さな歌を作り上げた。

かつてそれを耳にして、その甘美さのために

それを愛したすべての者の中には、私以外の誰もいない
その音の底に潜む、隠された言葉としての
道しるべの糸を見抜いた者は。

死んで久しい唇から出たその悲しい叫びは
この胸の中でだけ衍することに気が付いた！
血の記憶に導かれたおかげで、私だけが

この狂気の物語を知ったのだ！

これは本来なら私のものだが、
引っかき回して暴露するべき宝の山のうち——
ある悲しみと喜びの遺産を

世界は喜んで共有するだろう——

それでも、私は永久に打ち明けることも、
そのうちこつそり告げることも、すべきでない、
ある曲の中に閉じ込められた
わずかな数小節がこうして持つ秘密を。

その小さな歌が

頭の中に鳴り響くと、私はそれが彼であると知る、
長いことほこりまみれだった、私の不運な独りぼっちの祖先であると、
私は自分で彼の人生を再体験する！

私はこれを『——誌』に送ったが、いちばん上にこの詩の元になったあのフランスの六行詩を書いておいた。『——誌』はフランスの六行詩だけを印刷した——私の肉筆のうち、かつて印刷にかかった唯一の文書である。そしてそれは十五世紀にまで遡るのだ！

こうして私の小曲は世間から失われてしまい、しばらくは私からも失われていた。だが、かなり後になつてから、私はそれを見つけ出した。^{*}ロングフェロー氏がかつて彼の歌を見つけ出した場所、「友の心の中」で——確かに、どんな歌でも存在し得る最も快い行き先である！

本物の血の記憶が私を運んでくれる日がそう遠くないことを、私はほとんど予見できなかつた——だが、その日は来ることになる。

• • • • •

詩も友情も恋愛も失敗したため、私は美術に慰めを求め、国立美術館、マールボロ・ハウス（ヴァーノン・コレクションがあつた）、大英博物館、王立美術院、その他の

展覧会に頻繁に出かけていった。

私は、ティツィアーノ・ヴェチエッリオ、レンブラント、ベラスケス、ヴェロネーゼ、ダ・ヴィンチ、ボッティチエッリ、シニョレッリの前にひれ伏した——古いほど良かろう、というわけだ。私は、そこにあるとすでに知っていたに知つたりした偉大さを、直に感じ取るために最善を尽くした。しかし、適切な訓練が不足していたため、私はその高みに達することができず、大半の門外漢同様、間違ったものでそれらを称賛した。というのも、それらには、まさに美——門外漢がいつも、巨匠の中に探し、しばしばそこに見つけたと自分に言い聞かせるような——さらにしばしばあることには、見つけたふりをするような——卓越し、言葉にできないような特質・線や色・表現などの美——が欠乏しているからなのだ！

私は、それよりも自分たちの時代の作品の方に、はるかに、心から感動させられた（とはいえ、あえてそうは言わなかつたが）——例えば、若いミレー氏の『安息の谷』『秋の落ち葉』『ユグノー』——ちょうど私が、アルフレッド・テニスン氏の『モード』や『追憶に』のような詩の方が、ミルトンの『失楽園』やスペンサーの『妖精の女王』よりもずっと自分にとって貴重で愛すべきものであることに気づいたように。

*ロングフェロー氏が………ロングフェローの詩『矢と歌』の内容を指している。

實際、当時の私は絶望的に現代的だつた——まったくありふれた若者だつたのだ。私がいちばん熱っぽく深い敬意を抱いていた名前は、そのとき存命中の男女のそれだつた。本当は、ダーウィン、ブラウニング、それにジョージ・エリオットは、私にとつてはまだ存在していなかつた。しかし、テニソン、サッカレー、ディケンズ、ミレー、ジョン・リーチ、ジョルジュー・サンド、バルザック、老デュマ、ヴィクトル・ユゴー、アルフレッド・ド・ミュッセはそうではなかつた！

実物の彼らを眺めたことはなかつた。だが、その他の有名人と同じように、私は彼らの外見をよく知つていたし、彼らがかつて文字で書いたり線で描いたり色で描いたりしたたいていの作品についてなら、非常に難しい試験問題を出されたとしても耐えることができただろう。

それ以来、別のいろいろな等級の星が昇つたが、少なくとも古い銀河の四つは過去から輝き続けており、私の目には薄暗くならないまま古代の輝きを保つてゐる——サッカレー。我が親愛なるジョン・リーチ。彼は、私が笑いたいときに笑わせてくれる力をまだ持つてゐる。ほかの二人については、女王も世間も私も、彼らの功績に関しては同じように考えていることは明白である。彼らのうちの一人は、今ではイギリス貴族の看板的的人物で、もう一人は准男爵で大富豪である。もし彼らがそなりたい

と望むなら、カンタベリー大主教よりも優先してすぐにでも彼らを公爵にしてやりたい、などというのは私くらいだろうか。

私がこうして自分の長い間の恩義を記録し、無謀にも、まだ疑うことのない英雄崇拜の時代から得られたばかりのこの貧弱な贊辞を呈するのは、自信に満ちた、それでいて謙虚な心を伴つてのものである。少なくともそれは、私が身を置いていた精神的な緯度と経度がどんなものかを、私の読者（私のことを気にしてくれるくらい十分に興味を持つてくれる人がいたならば）にお見せするのに役立つだろう。あまりに並外れた経験——いわば一種の照会参考物だ——を運命づけられていたので、読者は一目で私を見分けられるかもしれない。そうした、有名で、おそらく不滅の名前に読者が抱いている尊重心によつて。

少なくとも、私の嗜好——十九世紀の、特にあの期間のありふれた若者の嗜好——は平均的なものであり、大多数人間に共有されていることは疑いがないだろう。運動競技、冷浴、軽い読みものと安物のタバコに夢中になり、日常的な不満を与えられた

*ジョン・リーチ……漫画家・イラストレーター。デュ・モリエイより十七歳年上で、彼と同じく『パンチ』誌でも活躍したが、デュ・モリエイが『パンチ』に関わり始めてから四年後、四十七歳で亡くなつた。

者。誰かのために、誰かから、誰かによつて、異常なものを期待することなど、しそうもない者。

• • • • •

しかし、エルギン・マーブルズの素晴らしさと言つたら！ 私はそれをすぐに理解した——たぶんあまり理解べきものがいいからだろう。肉であろうと大理石であろうと、肉体的に美しい人々は我々すべてに魅力を感じさせる、というだけの話なのだ。

その素晴らしい部屋で一体の塑像を見る前から、奇妙な直感あるいは自然の本能によつて、私は、人間はそのように作られるべきだということを知つていた。私はそれを予知していたのだ——自分がいつも感じていた美的な理想を、それらはあまりにも完璧に実現していた。

ロンドンの通りを歩いているとき、私はよく、七フィートの身長の、慈善心に富む一種の上流階級のような数百の存在がいる、自分の想像上の世界に住んだものだった。血肉が作られ、それを思い描かれた彼らは、体格に釣り合つた心と態度を持ち、その善良さのために世界のほかの人々よりも上に位置している。私たちが毎日会っている

ような数百万人の人々の形をした引き立て役を彼らに提供する」だが、（私の夢が意味を持つために）必要であると気づいたからである。私はうぬぼれが強く利己的だったと言わざるを得ない。前者の方に自分を参加させ、ちょうどティーセウスのような体格を自分の特定の用途と着用のために選択したくらいであるから。もちろん、（彼から奪われた）鼻と手と足は復元され、すべての損傷が修復された。

そして、自分の恋人かつ仲間として、私はリントットが石膏像を持っていたミロのヴィーナス（もはや腕なしではない）その人を選んだ。彼女は、私が肉眼で見る前に予見していた美しさを持っていた。

イベットソンなら「Monsieur n'est pas dégouté! [ムッシューは節度がありませんな!]」と言つたであろう。

• • • • •

しかし、私は何よりも、神の御業であるところの音楽を熱望した。

ああ、コンサートやオペラやオラトリオは、国立美術館や大英博物館のように、一文なしに對して開かれる——濫用されない特権だ!——はずがないのである。

私のような金欠人間でも、時にはこの熱望を満たせるだけの小銭を持つことがあります。やがて私は夢にも思わなかつたような歓喜の領域を発見した。モーツアルトやヘンデルやベートヴェンその他のような王者たちを、私の父はどうやらほとんど知らなかつたようだ。だが彼らは、父が年中歌つていた曲を作つたグレトリやエロルドやボワルデューよりも強力な魔法使いたちだった。



"MONSIEUR, N'EST PAS DÉGOÛTÉ!"
「[ムッシューは節度がありませんな!]」

そのうえ、彼らは人を魅了する以上のことができることも発見した——彼らは私の疲れた魂からその疲れそのものを追い払い、しばらくの間、その疲れた魂を勇気や諦念や希望で満たすことができるのだ。ティツィアーノ・ヴェチェッリオやシェイクスピアやフィディニアスのような人たちできさえ、それを果たすことはできなかつた——ウイリアム・マイクピース・サッカレー氏やアルフレッド・テニスン氏できさえ。

人生のこの期間の最も甘美な思い出(実際のところは唯一の甘美な思い出なのだが)は、自分が聴いた音楽と、それを聴いた場所のそれである。それは魔法だった！私はそのすべてをどんなに鮮明に思い出せることか！ 数日間の熱烈な期待。正式に公示宣伝されたようなあり余るほどの豊富さの中から、事前にする慎重な選択。それから、その一部が最安の天上棧敷(さじき)に行くはずの人々に予約されたドアへの、通りでの長い順番待ち。長い石段を苦労して上るという自分本位だが上機嫌な努力の後で、苦労してやっと手に入れた地上高い席にやっとたどり着く(虚弱な人には申し訳ない話だが、耳が飢えているとそんなことを意識する余裕もない)のである。華やかで壯麗な建物はぎゅうぎゅう詰めだ。巨大なシャンデリアが黄金色(こがねいろ)に燃える。期待の喜びが空中に漂い、ガスやペパーミントやオレンジの皮の香りもそうだ。音楽好きの人間といふものは、普通の群衆よりも甘い香りがすることに私は気づいた。

オーケストラが一人ずついっぱいになっていく。楽器の音合わせ——聴き慣れた不協和音。甘美で魅惑的な気配。指揮者が席に座り——拍手——静けさ——叩く音が三回——指揮棒が一回、二回、三回と振られると——不滅の魔法の噴水が解放され、その最初の噴出が来る。

「^{*}その日に集中する心配事の
そのテントを折り畳もう、アラブ人がそうするように、
またそれを彼らが静かに、こっそりと運び去るよう」

次に、見よ！ 幕が上がると、我々は一直線にセビーリヤに行く——ペントンヴィルの次がセビーリヤなのだ！ 変装下にあるアルマビバ伯爵が貴族らしく、雄々しく、陽気にギターをかき鳴すと、そこから何という音が発せられることか！ かつて発明されたあらゆる楽器が、そのギターの内にあるからだ——全オーケストラが！

「Ecco ridente il cielo…」「ほら、空は微笑み……」ロジーナのバルコニーの下で、彼はこう歌う（当時としては最も美しい男声で）。すぐにロジーナの声がカーテンの背後から聞こえてくる（当時としては最も美しい女声で）——あまりに少女っぽく、あ

まりに清淨無垢で、あまりに若く快活であるために、思わず目が涙でいっぱいになつてしまふ。

こうして元気づけられ、彼は、私の名前はリンドーロで、あなたと結婚したいのです、とさえずるように歌う。私は、この世界では財に乏しいけれども、（ちょうどピーター・イベットソンのよう）並外れた無尽藏の愛の能力には恵まれています、こんなふうに、夜明けから山の後ろに日が沈むときまで、私はあなたにいつまでも歌いましょう、と誓う。だが、言葉など何だというのだろう？

「続けてください、愛しい方、続けて、今みたいに！」ロジーナが歌い返す——鈍感で意氣消沈して陳腐なピーター・イベットソンの心が、晴れ晴れとした希望と愛と歡喜以外の余地を持たなくなるまで！ それでも、それは單なる音にすぎないので——信じがたく、異常で、非現実的で、無意味なものに！

あるいはまた、きちんとして十分に明るいが、ほかの点では目立たない四角い建物——まさに音楽の礼拝所だ——の中で、モダンな服装と眼鏡を身に着けた四人の実務的な紳士が、上品な拍手に包まれて、控え目な舞台上の位置に就く。するとすぐに、

*その日に集中する…………ロングフェローの詩『一日の終わり』より。

*セビーリヤに行く……上演されているのは、ロッシーニの『セビーリヤの理髪師』である。

静まつていた空気が十六本の弦の振動で震え出す——それだけで、それ以上のものは何もない！

だというのに、その中には、ベートーヴェンやショーベルトやショーマンがさしあたり私たちに言わねばならないことが、全部詰まっているのだ！ そしてそれは、何と申し分のない精密さと完璧さをもって発言されることか——また、何と数学的に正確な確実さを持ち、それでいて何と口当たりよく、厳かで、優美で、ほかとの相違を際立たせていることか！

彼らは世界でいちばん偉大な四人の演奏家だ、たぶん——ところが、彼らは我を忘れ、（彼らが私たちにそうあつてほしいと願うそのままに）私たちは彼らを忘れてしまう。その巨匠の作品を彼らがあまりに敬意に満ちて解釈するため、私たちは彼の強力な願望とともに憧れを抱いたり、狂喜と勝利とともにわくわくしたり、天国的な苦痛とともに心を疼かせたり、神聖な諦念とともに忍従を経験したりすることができるのだ。かつて存在したいかなる言語のどんな言葉——緊密に繋ぎ合わせ、脚韻や頭韻を踏ませ、好きなようにねじ曲げた言葉——であっても、その十六本の弦のえも言われぬ震動がやってのけるようには、人間の魂の最深部にまで突き刺されることも、神を垣間見させることも、できるものではない。

ああ、言葉のない歌は最高だ！

それから、ジプシーのように小さく、屈強そうでもじやもじや髪で、まるで天国で夜の声を聞いて一生を過ごしてきたように見え、リトニアの森がどんなものかを知つていて、そこで狼と猪いのししを親友とし、木々を渡る風を教師としたような者が、真鑑で補強されたオーケ材のブロードウッド社製ピアノに座っている。彼の驚異的な指の下で、容易に忘れられない、纖細な、疑問に満ちた世界の悲しみが——月のない闇の神秘、星明かりの自然が——夜想曲や即興曲や前奏曲の中に、それ自身を吐息のように放出する——ただのワルツやマズルカの中にさえ！しかし、ワルツやマズルカのような最も軽い曲でも、それに合わせて踊ることを夢見ることはない。気まぐれで魅力的な悲しみ——仮に涙をこぼそうという気になつても、涙を誘われるほど深くはない——は、とても纖細で、とても新鮮で、それでいてとても気品があり、とても軽やかに洗練され、世俗的で、優雅に仕上げられているために、いつまでも続く上流社会的な法悦へとそれ自身を結晶化する。まるで感じ取った彼にとつては死（厳密に言えば安楽死）であつたものが、私たちのために演奏されているよりも思われる。確かに不滅の悲しみが、そのリサイタルが、何があつても決してつまらなくなることがない不滅の悲しみ——ショパンの悲しみ——が。

けれども、ショパンがそれほどまでに悲しんでいた理由を、私たちは推測すらできない。おそらく、ただ悲しむために悲しんでいただけなのだろう。とても贅沢な悲哀——本当の理由がない、本当の悲しみ（当時の私のそれのように）。結局のところ、悲しみの音楽を作るためには、それが最も良く最も安上がりな種類の悲しみなのである。

そして、この偉大なる小さなジプシー・ピアニストは、ショパンを実に上手に演奏する。明らかに彼は、リトニアの森で人生を過ごしたわけではなくて、夜も昼も鍵盤を懸命に訓練したのだ。それに彼は、木々を渡る風よりも良い師匠を持っていた——すなわち、ショパンその人である（プログラムに印刷されているのだから）。夜の声を聞いたのは、彼より前の、彼の両親とそのまた両親だった。ところが、彼はその全部を記憶しており、その全部を自分の師匠の音楽に込め、私たちにもそれを思い出させるのである。

あるいはまた、合唱を見た。人が上へ上へと段状に積み重なり、巨大なオルガンで終わっている。だが、その雷鳴のような音は、今は沈黙している。

場合によつては、^{*}リリップティアンのような姿である男女の何人かが、リリップティアンの大群衆の真ん中で小さな脚で立ち上がり、完璧な声を神聖な静寂を通して前方に

響かせる（その声はリリップティアンではあり得ない）。それは私たちに「主の前に安らげ」と命じるか、さもなくば「彼は悔られて人に捨てられた」と告げる。だが、ここでもまた、言葉はどうだろう？ それらはほとんど邪魔でしかない。たとえそれが美しいものだとしても。

硬化していた魂は、歌手の声音で、嘘をつけない音の言い表せない情念で、溶けて和らぐ。人はほとんど信じている——少なくとも他人の信仰を信じている。最後には理解し、不寛容と冷笑的な侮蔑を一掃し、純然たる人間の共感のうちに、ほかの人々と共にひざまずくことになるのだろう。

おお、惨めな門外漢よ（もし以下がすべて真実なら、該当だ）。その者は——書かれた言葉に対してあまりにも絶望的に鈍感で、話されたメッセージに対してあまりにも絶望的に無感覺な心の持ち主で、訓練された喉や金属パイプやリードやヴァイオリンの弦によつてしか心を動かされない——耳の奥にある小さな太鼓に打ちつける、数学的に組み合わされた、目に見えない、実体のない、不可解な小さい空気の波によつてしか、心を動かされないので。そして、これらの数学的な組み合わせとそれを支配

*リリップティアン……『ガリヴァー旅行記』の小人国リリパットの住人。
*主の前に……詩篇三七章七。「彼は悔られて……」はイザヤ書五三章三。

する法則は、モーゼより前、牧神^{パン}よりも前、喉や鼓膜が進化したのよりもずっと前から、絶えず存在していた。それらは絶対だ！

おお、神秘の中の神秘！

ミューズの中のミューズ、エウテルペよ、そなたが演奏できるよりもはるかに上手に彫刻できるギリシャ人たちに、そなたが初めて（その何も習っていない両手に馬鹿げたリラを持たせた）己の似姿のためのモデルになつてから、そなたはどんな風采になつたことだろう！

四本の弦。だが、ストラディヴィアリウスの指板上の弦ではない。いや、申し訳ない——五本だ。そなたの音階は五音音階だったと思うから。オルフェウス、彼自身も、それより良いものは持つていなかつたのは事実だ。彼が魔法のような力でハデスからエウリュディケを連れ出すのにもう少しで成功というところまでいったのは、まさにそのような楽器を用いたおかげだった。しかし、ああ、彼女は戻ってしまった。再考した結果、彼女はやはりハデスの方が好きだったのだ！

そなたは、あの貧弱な、間に何もない五つの基礎音で、心を燃え立たせ、狂わせ、かきむしり、それからそれを和らげ、慰め、あらゆる理解を超えた平穏へと魔法のように導くことができたというのか？

固定された五つの音、変更不可能な音高から、六番目の音ではなく、星を作ることことができたのか？

それは何だったのか、その五つの音は？「ド・レ・ミ・ファ・ソ」？もしさなたがそれで何かを作ったとしたら、そなたの言葉のない歌はどんなものになつたのか？エウテルペよ、そなたは当時、本当に無垢な乙女であつた。とはいえ、そなたの八人の双生児の姉妹はすでに成長し、外に出ていた。そして今、そなたは少なくともその他の全員よりも頭半分は抜きん出でている。「*Tu leur mangerais des petits pâtés sur la tête — comme Madame Seraskier!*」「彼女たちの頭の上の小さなパテを食べられそう——セラスキア夫人のように……】

そして、おお、そなたは美しさのため、何とほかの全員を上回つていてことか！私の評価によれば、少なくとも——おおよそで——これまたセラスキア夫人くらいに！

そなたもようやく成長し終えたといふことだらうか？

否、それどころか、そなたはまだ無垢な乙女ですらない——一歳で、身長七フィートで、そなたが離れたばかりの祝福された天界と、我々哀れな死すべき運命の者たちの冴えない家、それらの中ほどをよちよち歩いている、かわいらしい赤ん坊だ。

私たちの親族である一歳のかわいらしい赤ん坊は、その両手を私たちの膝の上に置き、言うに言われぬ意味ありげなものに満ちた目で私たちの目を見上げる。その子には、言いたいことが山ほどあるのだ！「ガーガ」と「バーバ」しか言えないというのに、おお、その声の探し方や見えるものへの触り方と言つたら——赤ん坊が好きならば、の話だが！　私たちはまさに核心に心を動かされる。私たちは理解したいと思う。それは私たち全員に関係しているから。私たちは、かつては自身も——個人でも種族でも——そんなふうであったのだが、どうしても**思い出す**ことができないのだ。

そして、そなたはまだ私たちに何かを言うことができるのか、エウテルペよ。そなたの「ガーガ」と「バーバ」以外に、それに対しても私たちが感じ、意味が理解できな
い何とも言えないかわいらしさ以外に？　しかし、それはどんなに美しいことだらう——そなたがどんな見た目を、どんな声を持っているか——音楽が好きならば、の話
だが！

Je suis las des mots — je suis las d'entendre

Ce qui peut mentir.

J'aime mieux les sons, qu'au lieu de comprendre

Je n'ai qu'à sentir.

「私は言葉に倦んでいる——嘘かもしれないものを

聞くことに。

私は音の方が好きだ、理解するのではなく

ただ感じるだけでよいものだから」

• • • • •

翌日、私は、そのような感激や歓喜で自分を満たしてくれた音楽を買つたり物乞いしたり借りたりして、家の小さなスクエア・ピアノの所まで持ってきて、自分の総力を挙げてそれを指奏しようとした。だが、人生において、始めたのが遅すぎた。

読むことができない美しい楽譜とともに、演奏できない楽器を前にして、熱烈な憧れを抱きながら手も足も出ないまま座っているなんて！ タンタロスでさえそれほど厳しい試練を味わうことはなかつた。

*私は言葉に…………シリ・ブリュドムの詩『臨終』より。

自分たちは音楽にかなり熟達していた我が親愛なる父と母が、学ぶのが非常に容易だった年齢のときに楽譜を私にまつたく教えようとしたのは、無情なことのように思われた。そうしていれば、私は、それはもう異常なほどの喜びを味わったあの音の不思議な世界を自由自在に渉獵^{しうりよう}でき、名を上げていたかもしれない——たぶん。だが違うのだ。父は、実に私が生まれる前から、科学の女神に私を捧げていたのである。私はいつか、自然の女神のより厳格な秘密の追求、捕捉、利用のために必要なものを、彼よりも多く身に付けられるかも知れなかつた。浮ついたミューズたちとの戯れなどあつてはならなかつたのだ。ああ、それなのに！ 私は虻蜂^{あぶはち}取らずに終わってしまった！

こういうわけで、エウテルペは不在で、彼女の魔法は消えてしまうのだった。彼女が手書きしたものは私の前にあるのに、私はそれを解説する方法を学んでいなかつた。すると、私の疲れた自己は、その元の牢獄——自分の魂——へと這い戻るのが常だつた。
 自分病^{セルフ・シングネス} —— selbstschmerz, le mal de soi! 何^{*}という病！ こんなのは医学その他のどの辞書にも載つていない。

このために私は鞭打たれるべきだった、本当に。しかし、私を鞭打つてくれるほど大きい人も優しい人もいなかつたのだ！

しまいには、疲れて弱っていた、滑稽至極な私の自我が排斥される日——善によつて悪が追い払われる日——がやつて來た。ヘンデルやベートーヴェンやシューベルトさえ凌駕するような、さらに強力な一人の魔術師によつて！

クレイ卿という人がいて、リントットは彼のためにハートフォードシャーに労働者用のコテージを建てたことがあるのだが、私は時々そこに行つて職人たちの監督をしていた。コテージが完成したとき、クレイ卿とその細君（非常に魅力的な中年女性）がそれらを見に来て、なされたことすべてに非常に満足し、そのうえこの世の全人類の中で私にいたく興味を抱いたようだつた！ 数日後、私は街中の彼らの家の演奏会への招待状を受け取つた。

最初私は、あんまり恥ずかしくて行けないと感じた。しかし、リントット氏は、そらすることは君の義務だ、それがビジネスに繋がるかもしけないのだから、と主張し

*何といふ病！……selbstschmerz はドイツ語、le mal de soi はフランス語で、英語の self-sickness を直訳したもの。

た。それで私は、夜が来ると勇気を振り絞って出かけていった。

その晩は何もかもが魅惑的だった、あるいは私がかなり場違いだったというやや苦い感覚がなければそうなったところだった。

だが、私はずっと、全立会人中でいちばん注視されていないことに十分満足し、ここで少なくとも一人で放つておられるだろうという安心感に幸福を感じた。完全な他人が、私を友好的でなれなれしい冷やかしの的にすることで、私を落ち着かせようと試みないことにも。また、靴下止めで靴下を止めた公爵もベルトを着けた伯爵も(肩書き記章は付けていなかつたけれども、私は公爵やら伯爵やらがブラックベリーと同じくらいそこにたくさんいたことを疑っていない)、私の背中を叩いて褒めたり、私が実際よりもむしろ大馬鹿に見えるのか、それとも見た目よりも大馬鹿なのかを尋ねたりはしなかつたことにも(私はまだその陰険な質問のための氣の利いた回答を思いついていない。それがその質問にいらいらさせられる理由なのである)。

常に私は、イギリス人はお堅い人々だと聞いていた。が、レディ・クレイのもとに集まる人々には堅苦しさはないようと思われた。おどけた様子もなかつた。彼らは見るだけで人を安心させた。たいていは大きく、たくましく、健康的で、静かで、ユーモアがあり、柔らかく愉快に調整された声を持っていた。広く明るい部屋部屋は暑く

も寒くもなかつた。壁には美しい絵があり、花の絶妙な香りが広大な温室から漂つてきた。私はそれ以前にそのような集会に行つたことはなかつた。何もかもが新鮮で、驚きで、実を言うと、私の好みにぴったりだつたのだ。それは私が最初に「上流社会」を垣間見た機会で、最後でもあつた——たつた一度だけ！

大勢の人があつた——だが群衆というわけではなかつた。誰もがほかの皆をかなり親密に知つているようで、一時間前にどこかほかの場所で始まつた会話をもう一度始めているようだつた。

やがてその会話が静まると、グリジとマリオが歌つたのだ！ 私は、熱狂と狂喜を抑制するために精一杯努力しなければならなかつた。でなければ、私は大声で叫んでしまいそうだつた——もう少しで自分も歌つてしまいそうだつたのだ！

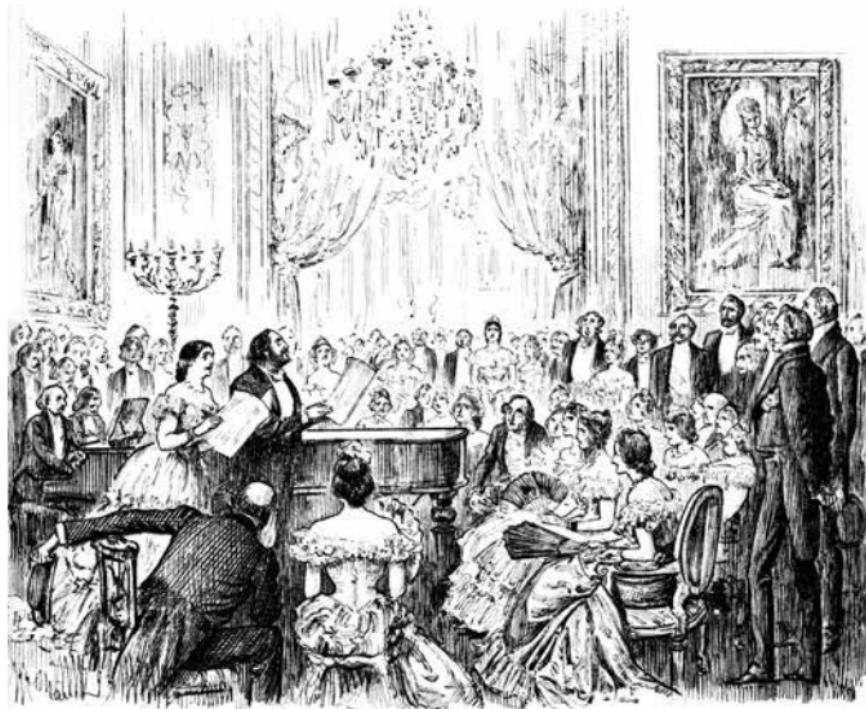
その天上のデュエットに続く拍手の最中、一人の女性と紳士が部屋に入つてきたのだが、その女性を見たとき、新しい興味が私の人生に入り込んだ。セラスキア夫人の美しさが子供の頃に私によく感じさせた、半分忘れていた昔の無言の苦痛と歓喜のすべてが、もう一度甦つてきた。とはいえ、深さと強さを比較してみると、昔の小さな

*グリジとマリオ……ジュリア・グリジとジョヴァンニ・マッテオ・マリオ。前者はイタリアの高名なソプラノ歌手で、後者は彼女の二人目の夫でテノール歌手。ロンドン在住だつた。

男子の高音に対し、今は頑丈な男性のバリトンのようであった。

それは、極めて理解が容易でありながら、捉えがたく、完全で、高度に組織化された秩序の美しさが、すっかり覚悟ができる犠牲者に加えることができる、素早く、鋭く、残酷な一撃、coup de poignard 「短刀の一突き」 だった。

そして私は、何とすっかり覚悟ができている犠牲者であつたことか！ みすぼらしく、恥ずかしがりで、過敏で、処女のごとき野蛮人——上流階級の当世風なロンドンで初めて道に迷つた、チンガッチグックの息子アンカス。



"PARIGI, O CARA…" 「[おお、愛する人よ、パリを……]」

【訳注】ヴェルディ『椿姫』(1853) の二重唱

崇敬も嫌惡もどちらにも禁欲的で、月足らずで生まれた純潔な中世の騎士。彼は抽象的な女性が唯一の信奉物で、具体的な女性は一日五十回の幻滅の原因だった！

十九世紀の中頃で途方に暮れた、頑強で愛に飢えた熱烈な異教徒。何らかの奇妙な遺伝的本能が、常に愛される女性の形とはどうあるべきかについての明確で完璧かつ精巧に仕上げられた概念を、彼に植え付けていた——額、こめかみ、うなじに髪が伸びるべき道筋から、足指一本一本それぞれの長さと曲がり具合と位置を統制すべき律動性に至るまで！ 彼が誇らしく、またうれしく思ったことは、彼の先入観的理想像は、あたかも自分がペリクレスとアスパシアの時代に生きていたかのように、ファイディアスのそれに近いものであることに気づいていたことである。

こんなことを書くのも、この哀れな筆記者はそういう者であり、また子供の頃からそうだったからだ。この美しい女性が初めて彼の視界にすっと現れるまでは。

彼女は非常に背が高かったので、その目は私とほぼ同じ高さに見えた。しかし、彼女は背の低い人のような隙のない俊敏さと優雅さで動いていた。彼女の太くて重い髪は濃い銅褐色で、顔色は色艶があつて青白く、眉とまつげは黒く、目は明るく青みが

*ペリクレスと…………ペリクレスはアテネの政治家、アスパシアは彼の愛人、ファイディアスは彫刻家。彼らの時代とは、紀元前五世紀頃である。

かつた灰色だった。鼻は短くて尖り、いくらか先端で傾いていて、赤い口は大きくてとてもよく動いた。この点は私の先入観的想像から逸脱していたため、彼女は先入観的想像像というものがどんなにたいしたことがないものになり得るかを私に示してくれたことになる。彼女の完璧な頭は小さく、長く太い喉の周りに二本のかすかな皺が平行に走っていて、フランスの彫刻家が「*le collier de Vénus*」〔ヴィーナスの首飾り〕と呼ぶものを形成していた。首の皮は白椿のようで、ほつそりとした怒り肩だが骨は見えなかつた。彼女はフランス人が「*la fausse maigre*」〔着痩せする女性〕と定義するタイプの美人だつたが、それは「痩せたように見せかけた女性」を意味しない。

彼女は思慮深さと陽気さを同時に兼ね備えているように見え、私は人の優しさというものをかつて一度も見たことがなかつたために、優しそうに見えた——紹介もされないのに、あらゆる心配事を伝え、信用して秘密を打ち明けるべき人のように！笑うとき、彼女は上下両方の完璧な歯を見せ、目はほとんど閉じられたようになり、そのため上下両方のまぶたに沿つて並んでいる濃いまつげのせいでもはや目は見えなくなつた。そんなときの彼女の顔の表情はかなり強烈に、残酷なまでに甘美なものになつたため、それはナイフのように人を突き通つた。それからその笑いが突然やんで、唇全体がまた合わざると、彼女の目は情け深いユーモアと思いやりのある好奇心に満ち、

周囲のあらゆる物と人への興味をいっぱいに湛えながら、再び穏やかな二つの灰色の太陽のように輝き出すのだつた。だがその点で——私は美しい曲を説明できる以上の説明をすることはできない。

その素晴らしい眼珠から、優しさ、また優しさ、さらに優しさが、香油のようになに流れ出た。しばらくすると、たまたまその香油が私にもわずかの間注がれて、私は甘美だが恐ろしい混乱に見舞われた。次に、彼女が女主人に私が誰であるかを尋ね、答えを受け取つてはいるのが見えた。彼女が流してはいた香油を私にもう少しの間注いでから、彼女は私を自分の思考から追放した。

グリジ夫人が再び歌つたのだ——『オテロ』のデスデモーナの歌を——そして、その美しい女性は神々しい歌手に感謝した。彼女はその歌手をまったく親密に知つてゐるようだつた。彼女の感謝——イタリア語での感謝——は、私には歌よりもずっと神々しいように思われた——私はその言葉をあまり理解できなかつたし、ちゃんと聞き取ることさえできなかつた——遠すぎたのだ。しかし、彼女は目と手と肩でも感謝していく——わざかだが幸福そうな動作で——、それは言葉と変わらなかつた。それまで

* オテロ……今は一八五〇年代半ばであるから、この『オテロ』はヴエルディ作曲のもの（一八八七年初演）ではなく、ロッシーニ作曲のもの（一八一六年初演）であろう。

話された中で最も甘美で誠実な言葉であつたことは確かだ。

彼女は多くの人に取り囲まれ、気に入られようとされていた——明らかに極めて重要な人物だった。私は自分がいる隅に立っているもう一人の内気そうな男性に、彼女が誰なのかを思い切って尋ねてみた。すると、彼はこう答えた——

「タワーズ公爵夫人ですよ」

彼女は長くは留

まらず、彼女が立ち去ると、彼女が来る前にはとても明るいと思われていたもの全部が、味気なくありふれたものに変わった。私たちがペントンヴィルでやつてい



タワーズ公爵夫人

たように、女主人がおやすみを告げて楽しい夜を彼女に感謝する、という必要はないと分かったので、私はその家を抜け出して、変貌した男となつた自分を下宿へと歩いて戻した。

たぶん私は、あのすてきな若い公爵夫人に再び会うことはないだろうし、彼女と知り合うことは確実にないだろう。しかし、彼女のおおや大矢は、まさに私の心臓にまっすぐ正確に突き刺さり、私はそれが、しつかりとかかりが引っかかってどんなに抜けないものか、その祝福された傷からいつか引っこ抜かれるという可能性をどんなに完全に越えてしまっているかを感じていた。これは治らないかもしれない。いつまでも血を流し続けるかもしれない！

彼女は私の孤独な人生で、思考と言葉と行動において、それに対しても恥じないように行動すべき理想となるだろう。私が絶対に確実だと感じた直感が、彼女は美しいのと同じくらい善良であるということを告げていた――

*憎しみの中の憎しみ、軽蔑の中の軽蔑、
愛の中の愛を与えて。

*憎しみの中の………テニスンの詩『詩人』より。

そして、セラスキア夫人のイメージが消えていくと同時に、この新しい星がその光で私を導くために生まれたが、ほんのわずかな間しか見えない。が、一度発生すれば、割れた雲を通して、私はそれが天空のどの部分に存在し、最も美しい星座たちの間で独立して輝いたかを知った。そしてその後、その星は私の顔をその方向へと向かわせ続けた。できることなら私は、自分の生涯で二度と再び卑劣なことや不純なことや不親切なことを、したり言ったり考えたりしたくなかった。

次の日、神聖な奉仕のために孤児院へと歩いていたとき、リントット夫人が——あたかも嫌々するかのように——夜の冒險のことで私を厳しくご追及あそばした。

私はタワーズ公爵夫人については言及しなかつたし、さまざまな女性のドレスを説明することもできなかつた。しかし、私は彼女が深く興味を抱きそうだと思うやり方で、ほかのすべてを説明した——花、素晴らしい絵とカーテンとキャビネット、美しい音楽、たくさんの華やかな紳士淑女。

彼女はそのすべてに不満の意を表した。

そんな贅沢基盤の上での生活が、道徳的にも知性的にも本当に優れた価値の資質に貢献することなどないわ。少なくとも私には、^{*}質素な暮らしが高邁な思想をお与えください！

「ところで」彼女は尋ねた。「あちらではどんな夕食が出たの？ そうとうな珍味が出たに違いないわね。ズアオホオジロとか、ナイチンゲールの舌とか、ワインに溶かした真珠とか？」

率直さが、夕食はありませんでした、もしあつたのだとしても、自分は不覚にもそれを逃してしまいました、と告白することを私に強いた。たぶんみんな遅い時間に食べたのではないでしようか。それから私は彼女にこう言つた。真珠は全部女性たちの首と髪にありました。自分は空腹を感じなかつたので、それをどこか別の場所に欲しいとは思ひませんでした。ナイチンゲールの舌はその鳥たちの喉の中に留まつていました。天国的なイタリア人デュエットと一緒に歌うために。

「連中はそれをもてなしと呼んでいるわけだ！」夕食を愛するリンクトットが声高に言つた。それから、ひとたび自分の妻が指針を与えると、彼は総括して權威者のように

*質素な暮らしと高邁な思想……ワーズワースの詩『一八〇二年九月、ロンドンにて書く』より。

に断言するのが好きだったので、次のような旨のことを言つてそれをやつた。お偉方は、表面的なやり方で万事オーケーで、お互のための、また嘆かわしいくらい弱いために彼らの吸引力の勢力下に落ちてしまうようなすべての者のための、外面向的魅力をたくさん持っているかも知れないけれども、彼ら好みと自分たち好みとの間には大きな隔たりがあり、もし自立心と自尊心を保ちたければ、その隙間を埋めようとはしない方がよい。もちろん、ビジネスに繋がるなら話は別だが。彼はこれを心配していた。それが私に関わってこないことを。

「連中は、ある日君を連れていき、次の日にはもう熱いポテトみたいに慌てて放り出す。さらにはな、ピーター君」彼は、一緒に歩くときよくするように自分の腕を私の腕に優しく組みながら（と言つても彼は私より優に十二インチは低かったが）、結論を下した。「社会的境遇の不一致は、真に親密になるための障害になる。体の身長差みたいなもんだ。人はだいたい自分と同じ大きさの人間としか腕を組んで歩けんのだよ」

この総括はあまりにも賢明で議論の余地がないようと思われたため、もし自分がレディ・クレイに何度も会うとしたら、自分は彼女の吸引力の勢力下に落ちて、そのため自尊心を失う、自分はそれほど嘆かわいくらい弱いのだと、また彼女の家で過ごした幸福な夜の後、自分は彼女に名刺を残して帰らなかつたが、自分はそれほど嘆

かわしいくらい弱いのだと、私に強く感じさせた。

私は何と氣取り屋だったことだろう、彼女を慌てて放り出すなんて——「熱いポテトみたいに」彼女が私を放り出すのを恐れて。

さらに私は、少なくとも单なる外見的な魅力においては、あの立派な人々の方が、私の古き良き友人リントット家の排他的団体よりも私の好みに合っている、という罪悪感と氣取り屋根性を感じていた。しかしながら彼らは、心と頭の優れた品質において、（私が知る限りの）その排他的団体に劣るかもしれない——パークレーンとピカデリーの外面の方がペントンヴィルのそれよりも魅力的ではあるが、私のような者が住むには後者の方がおそらく健康によいと気づいたように。

それでも、自分たちのためにマリオとグリジを来させて歌わせることができ人々（それにタワーズ夫人を来させて聴かせることができる人々）、美しい絵で覆われている壁を持つ人々、社会生活の小さな外的事物すべての滑らかで調和の取れた秩序化が、習慣および専門となっている人々——そのような人々は、切り離そうとしても心の痛みなしにはできるものではないのである。

そのため、私は痛みを伴いつつ、何事もなかつたように自分の型どおりの生活に戻つた。ところが、タワーズ公爵夫人の顔は、昼夜を問わずずっと私の心に浮かび続けた。

人生を支配する固定観念のよう。

この過去のページを読み、再読すると、私は自分が許せないほど利己的で、過度に冗漫で散漫であつたことに気づいた。それに、何と弱いビールを書き付けていることか！

それでも私は、こちらを削除するならばあちらも削除しなければならない、というようを感じる。それは全部の削除と完全なる意氣阻喪に繋がるだろう。それに、私はもつと伝える価値のある語るべき話を持つてているのだ！

一旦それをするようになれば、私は抑えがたい自分語りの誘惑に駆られるのを経験したに違いないと思う。

それは明らかに容易に得られる習性だ。老齢であつても——たぶん老齢においては特に。というのは、それはこれまでのところ私の習性にはなっていないからだ。私は、読者であるあなたについてのことをあなたに、あるいはあなたについてのことをほかの誰かにすぐに話していただろう——あなたの友人に、あるいはあなたの敵にさえ。

または彼らのことをあなたに話したかもしねない。

しかし実際は、目下のところ、そして私が死ぬまで、私には誰かについてのことや話す価値のあることを話す相手がないし、そのために私の語りのほとんどはペンとインクで行われている——一方的な会話なのだ、おお辛抱強い読者よ、あなたとの。私は世界でいちばん孤独な老人だが、たぶんいちばん幸せでもある。

と言つても、私が住む場所が必ずしも楽しいというわけではなくて、別の領域への移行を楽しんで待つてゐるのである。

善良な教誨師(きょうかいし)がいるのは事実だ。善き司祭もいる。その人たちは自分のことを私にいささか話しそぎるようと思われる。それに医者。彼は司祭と教誨師について私に話すが、その方がいい。彼は教誨師たちがあまり好きではないようだ。とても機知に富んだ人である。

だが、我が兄弟の狂暴さときたら！

結局、彼らは悲しいほど *comme tout le monde* 「みんなと同じ」なのだ。狂乱の発作に因われるときだけ、彼らは興味深い。すさまじい不平不満から解放されているとき、彼らの大部分はごく普通の人間である。型にはまつた凡俗の人、私と同じような愚鈍な犬で、愚鈍な犬はお互いどうしを好まない。

最も分別のある二人（一人は偽造犯、もう一人は重度の盗癖の持ち主）は、私の友人である。彼らはかなりよい教育を受けており、ちゃんとした都会人で、清廉、謹厳、古風、几帳面、従順なのだが、二人とも不幸である。彼らは狂氣と犯罪という二重の烙印に苦しめられており、その結果自由を奪われているのだが、それが不幸の理由ではない。犯罪者用精神病院には「紳士淑女」がごくわずかしかいないことに気づき、また彼らはずっと「紳士淑女の社会」に慣れてきたのだが、それが理由であった。これがなければ、彼らはここで生活することに十分満足したことだろう。で、それぞれがもう一人の方を、かなり高潔で信頼できる奴だ、だが「完全な紳士」ってわけじゃない、などと、思っていることを私に打ち明けるのが習慣となっている。彼らが私をどう思っているかは分からぬ。たぶん二人で互いに打ち明け合っているのだろう。

奇妙さ、風変わりさ、興味深さが劣ることははあるだろうか？

別のは、完全に正気のときはフランス語のアクセントと表現豊かなフランス人のジェスチャーを使って英語を話し、古いフランス政治体制の失われた栄光を嘆き悲しみ、いちばん簡単な英語の単語を忘れたふりをする。とはいいうものの、彼はフランス語の単語を知らないのだ。それなのに、彼の狂気が起こり、拘束衣を着せられると、彼の英語はすべて戻ってくる。それは非常に力強く流暢かつ慣用語法の多い英語であ

り、また強いロンドン訛りのようで、すべての「h」が型どおりに転換されるのだ。

また別の者（ここではいちばん不愉快で醜悪な男だ）は、自分の過去の情事を打ち明ける信頼のおける友人に、私を選んだ。彼は私に、相手の名前と日付など何もかもを教えてくれた。私が耳を傾けないようすればするほど、彼はより多く打ち明けるのだった。彼は私の気分を悪くする。私が彼を信じていると彼が信じることを阻止するには、どうしたらしいのだろう？ 私は女性についての嘘のために人を殺すのにはうんざりしているのだ。彼を嘘つきのゲス野郎と呼んだりしたら、どんなものなのかな神のみぞ知る休眠状態の狂乱を、彼の中に目覚めさせてしまうかもしれない——私は、彼の精神病の性質についてはまったく見当がつかないのだから。

また別の者は、弱々しいけれども感じのよい善意溢れる若者で、自分が音楽を熱烈に愛していると思い込もうとしている。ところが彼は、呆れたことにバッハとベートーヴェンしか耐えることができないくらい排他的で、メンデルスゾーンやショパンを耳にしようものならその部屋を出て行かざるを得なくなるのである。彼を喜ばせたいと思つたら、私は『善王ダゴベール』を口笛で吹き、それをバッハのあるフーガのモチーフだと言えばよい。そして、彼を追い払うためには、これまたそれを口笛で吹

* 善王ダゴベール……古いシャンソン。十八世紀中頃にできた歌らしい。

いて、それをショパンの即興曲の一つだと言えばよい。彼の狂気が何なのかはよく分からぬ。非常に口数が少ないからだが、彼は生きた猫を焼くのが好きなのだと聞いたことがある。猫を一匹見ただけでその恐ろしい性癖が呼び覚まされ、彼の頭から健全部無邪氣で害のない自然な愛情が追い払われるのに十分なのである。

ここには、（誰でも外でそういう者に会つたことがあるように）自分が唯一の存命中の画家と言うに足る者だと信じてゐる画家がいる。実際のところは、彼は他人の名前をみんな忘れてしまつていて、それらを十把一絡げにして軽蔑したり罵つたりすることしかできない。彼は意氣揚々と自分の作品を見せてくれるが、それは粗野さ、生半可な知性、いいかげんさ、印象派的な塗り方などで構成されていて、そんなふうに自作を話すアマチュアから予想できるとおりのものである。一体なぜ彼は、この世のあらゆる場所の中で精神病院にいなければならないのだろう。（これも外で往々にしてあるように）彼の患者仲間の中には、彼自身の評価をそのまま真に受けて、彼を偉大な天才だと信じる者がいる。また、厚かましいペテン師として、彼を蹴飛ばしたいと思っている者もいる（しかし、それをするには、彼はあまりに小柄である）。そして、大多数の者は特に気にしてなどいないのだ。

彼の偏執対象は放火。氣の毒な男だ。その場所に火をつけたいという恐ろしい願

望に取り憑かれると、彼は自分の芸術的自負心を忘れ、下劣で弱く愚かな顔がほとんど支配的になってしまふのだ。

そして、女性受刑者たちについても、事情は全く同じである。ここで人生の二十年間を過ごしてきた女性がいる。彼女の父親はスノーゲットという名の小さな田舎の医者だった。彼女の夫は目立たずよく働く教区副牧師だった。そして彼女は、どこまでも平均的で、ありふれていて、下品ですらあつた。彼女の趣味は、生まれのよい称号のある人たちや州の旧家の話をして、交際することが常に彼女の希望と欲望であつた人々だった（ほかにそういう人々はいなかつた）。そしてまだ、ほとんど白髪になつてゐるのに、彼女はまだここにいる。彼女は「洗練された人々」以外は誰のことも考えず、話さず、気にかけもしない。私には非常に温かい好意を抱いてくれたが、それはホプシャーのイベットソン・ホールに住むイベットソン大佐が理由である。私が彼を殺害し、そのために絞首刑を宣告されたためではなく、また彼が私よりも重大な罪を犯したからでもない（このすべてが十分に興味深いのだが）。彼が私の親戚で、私は彼を通じてリーチミアのイベットソン家と遠く離れて繋がつてゐるに違いないと、彼女が思つてゐるからである。その人たちが誰であろうと、彼女も私も会つたことはないのだが（それどころか、私はその人たちのことを聞いたこともなかつた）、その

家系を彼女はほとんど暗記して知っている。平凡で育ちの悪い田舎者の女性のおしゃべりよりも、単調で面白くなくて無味乾燥で下劣さにうんざりさせられて絶望的に健全すぎて独特なものが、何かあるだろうか？

それでも、この女性は、夫婦間の嫉妬に駆られて自分の子供を殺したのだ。彼女の父親はその結果気が狂い、彼女の夫は自分の喉を切った。

實際、正気でいる間は、彼らが狂っているということが人の心に浮かぶことはまずないだろうし、彼らは人がこの世で毎日会う人々とまったく同じなのである——そのような偏狭な大馬鹿たち、そのようなひどく退屈な連中なのだ！ ペントンヴィルやホプシャーに再び戻ったも当然、またはパッショ^{激越}_{ショ}ネート・ブロンプトン（私はブロンプトンをこう呼んでいた）に住んでいるも当然である。ついでに言えば、あるいはベルグレイヴィアに住んでいるも当然でさえある！

というのも、我々には若い貴族と中の准男爵がいるからだ——ショッキングな二人で、彼らは生きることが許されるべきではない。家の権勢がなければ、人里離れたここで快適に生活するのではなく、刑務所で二十年間の懲役に服していただろう。ウイーダの上流階級の主人公たちのように、彼らは「自分の身分に固執する」し、我々のうちのその他の者と交際することはない。彼らは私たちを完全に無視しているので、

その悪徳にもかかわらず、私たちは彼らを尊敬するほかはない——外でしなければならないのとちようど同じように。

そして私たち、中流階級の私たちも、自分たちの秩序に固執し、小さな商店主たちは交際しない——その者たちは、肉体労働者や職人や機械工とは交際しない——その彼らは（ああ、彼らにとつては！）、お互い以外に見下すべき者がいない——しかし、彼らはそれをしないし、この場所で最も礼を知る人たちなのである。

私たちはそういう者なのだ！ 私たちが平凡であるのをやめ、悲劇的で偉大になるか、さもなくば独創的でグロテスクでユーモラスになるのは、狂氣があるときだけである。自分たちの笑いと自分たちの涙の両方を強いるその真に深いユーモアは、それが私たちを見いだしたときよりも、私たちを老いた、悲しい、賢いものにする。

"Sunt lacrimae rerum, et mentem mortalia tangunt."

「物事への涙があり、人間の営みは心に触れる」

*物事への…………『アエネーイス』からの引用。

(私が優しいウェルギリウスで思い出せるのはせいぜいこの程度だ)
 では、弱いビールに戻ろう。この後のそれは、さらに一日酔いをもたらすだろう。

• • • • •

私はこうして、ブライアントの水鳥のように孤独な道をたどった。自分の前にはあまり明確でない目的しかなかつた——ずっと記憶に残る六月の土曜日に、ついにそれが自分に明らかになり始めるまで。

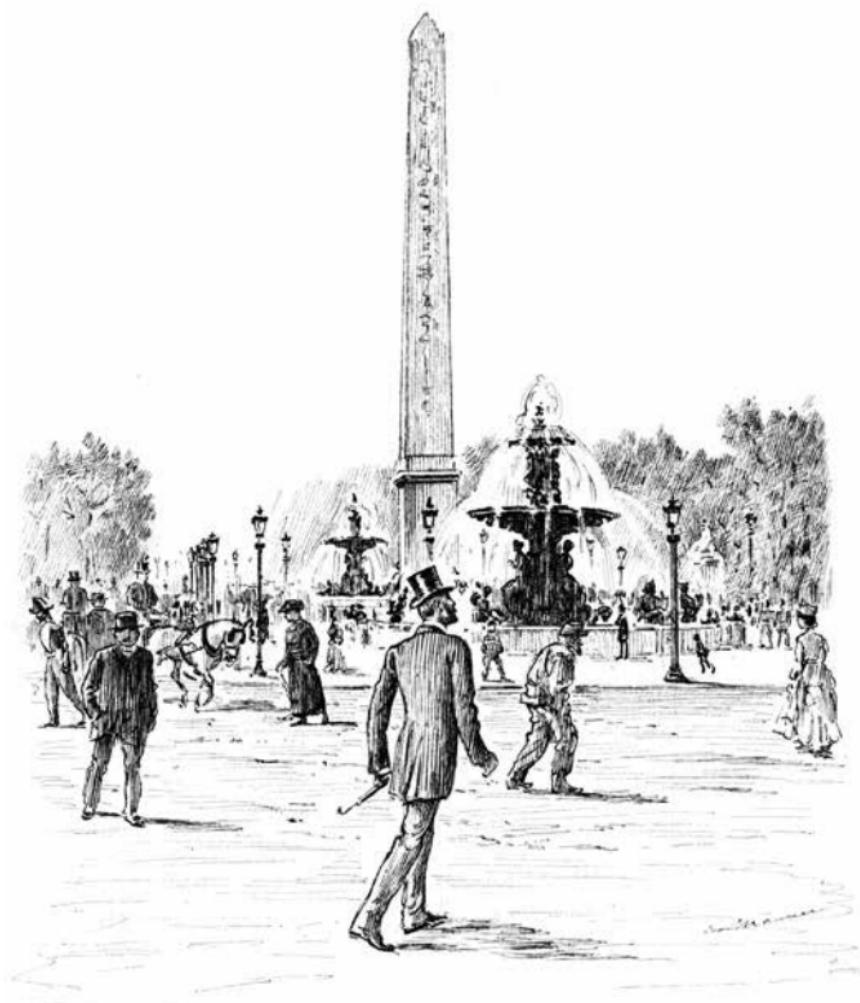
私は、パリへの長く憧れた旅を実行に移すのに十分なお金を、もう一度貯めていた。セーヌ号のボイラーや蒸気を立ち上らせ、セーヌ号の白い天幕はほかの人たちだけではなく私のためにも立てられていた。そして、美しい雲一つないイギリスの朝、私は舵取りのそばに立つて、セントポール大聖堂とロンドン・ブリッジとロンドン塔が視界から消えていくのを見た。どうにも言い表せないような希望と喜びを感じつつ。私は自分が自分であることをほとんど忘れていた！

そして翌朝（美しいフランスの朝）、パッシーのポンプ通りに行く途中、シャンゼリゼを進んで慣れ親しんだ凱旋門をくぐるとき、また私がいまだによく知っているお

なじみの言葉を周り中から聞いたとき、そして長いこと見失い、半分忘れかけていたが、今は強烈に思い出したこの土地の空氣の匂いを再び吸ったとき、私はどんなに歓喜したことだろう！ 漠然として、柔らかく、名状しがたい、ほとんど感知できないほどの土地の匂い。それは、ずっと前にそこに住んだことのある人々にとつては、あまりにも素晴らしい過去の重みを含んでいる——最も巧妙に人を酔わせることができるエーテル！

トゥール通りとポンプ通りの交差点に来て、角の食料雑貨屋を見たとき、女性なのに口ひげを生やした凜々りりしい女食料雑貨店主がリヤール夫人だと分かり（繁栄の十二年がその口ひげを灰色に変えていた）、私は感激のあまり気を失いそうになつた。あの顔を前にしてこれほど感動した若者がかつていただろうか？

窓（今は板ガラスのもの）の後ろ、近年のものになるナポレオン一世風の素晴らしい製品の中、色の付いた網に昔と同じ天然ゴムの古いボールが複数入っていた。昔と同じ、茶色の紙の中で震える新鮮な練りものの塊もあり、それはとてもひんやりとして心をそぞりそうに見えた。昔と同じ水彩絵の具の三スーの箱（今は七十五サンチームと値段が付けられている）もあり、それは私がミムジー・セラスキアに仕えて何度も消費したものだ！ 私は店に入り、それを一つ買って、そこで過去に購入した品す



もう一度、「至福の領域」へ！

べての匂いを大きな喜びとともにもう一度嗅いだ。彼女のおなじみの声の響きを受け取りながら――

「Merci, monsieur! faudrait-il autre chose? 「マルシー、ムツシュー！ ほかに」入り用の物は？」 それはまるで祝福のようだったが、私はあまりにも内気すぎて彼女の腕に飛び込むことができず、また自分が「独りぼっちでさまよっているけれども迷子ではない」ゴーゴー・パスキエであると彼女に告げることもできなかつた。彼女はこう言ったかもしれないのだ――

「Eh bien, et après? 「それで、それから?」」

その日は順調に始まっていた。

私は、ポンプ通りの古い門まで歩いて、大通りを進んで私たちの古い庭に戻るべきか、それともブローニュの森に行くとき帰るときに出入りに使つた、いつもの小道のわきの、昔の私たちが再三使つてすり減らした公園の生け垣の隙間へと回り道するか、どちらにするかを美食家のように熟考検討した。

全体として、喜びの妙なる階調においてより有望ということで、私は後者を選んだ。あの公園の生け垣の隙間が、まさか！ 公園の生け垣は見えず、公園そのものがなくなり、分割され、破壊され、すべてが小さな庭に分けられていた。小ぎれいな白い

住宅が複数建っていた。鉄道が、その白亜の中の深い切り込みを通つて走つてゐる部分を除いて。私が、長年抱いてきた希望の残骸の上で呆然と見回していたとき、列車は轟音を発しながら蒸気を吐いて進み、その汚れた蒸気で私を窒息させた。

もし、その列車が私を轢いて、私がそれを生き延びたとしても、さらに大きな衝撃を私に与えることはできなかつただろう。そのすべてが、あまりにも残酷で粗暴な怒りのようと思われた。

曲がりくねつた車道が、その荒野のちょうど中心を貫通してゐた。それにきれいに垣を巡らした小さな真新しい庭々が隣接し、それらの中のあちこちに、私が少年時代にたびたび登つた、まだよく覚えている木という形をした古い友人を認めることができた。それは非常に多くのものから突出したままだつたが、昔の環境の消失のためにあまりにも変わつてしまつていて、管理され、檻おりに入れられ、移植された姿になつていた——申し訳なさそうにしていると言つてもいいくらいで、まるでとうとう見つけられてしまつたことを恥じてゐるかのようだつたのだ！

ほかには何も残つていなかつた。かつては大きく見えていた小さな丘や崖や谷や白亜坑あこうは平らになつたり離れたりして、私は方角を完全に見失い、奇妙な、ぞつとするような空白と死別の寒気を感じた。

しかし、大通りと私の旧家はどうなったのだろう？ 私はかき立てられた不安が早足で迫ってくるのを感じつつ、ポンプ通りに急いで戻った。大通りは、なくなっていた——最近塗装された格子細工で覆われた巨大なレンガ造りの建物によつて、門から十数ヤード以内で塞がれていたのだ！ 私の旧家はもうなかつたけれど、その場所にははるかに大きくて当世風な、彫刻された石の建物があつた。少なくとも古い門は消えておらず、門番小屋もそつだつた。私は、これらの哀れな残存物で自分の悲嘆に暮れた目をもてなした。それらは、このあらゆる新しい輝きの真ん中で、冷遇されたよう、みすぼらしく、場違いに見えた。

やがて、きれいなピンク色のリボン付き帽子をかぶつた垢抜けた女性管理人が出てきて、しばらくの間私を見つめ、ムツシュー、何かお望みですか、と尋ねた。

私は話すことができなかつた。

「Est-ce que monsieur est indisposé? Cette chaleur! Monsieur ne parle pas le Français, peut-être? [今]気分が悪いのですが、マッシュュー···。」の暑やぢー···。ムツシュー、マッシュューはフランス語が話せないのですね？」

やつと口が利けるようになったとき、私は彼女に、自分はかつていいの、通りを見渡すやうやかな家に住んでいたのだが、それはずっと豪華な住居に変わつてしまつて

いた、と説明した。

「O, oui, monsieur — on a balayé tout ça! 「おお、そうなんです、ムッシュー——何もかも一掃されてしまったのですー。」と彼女は答えた。

「Balayé! 「一掃! 」」私にとって、耳にしたそれは何という表現だったことか!

それから彼女は、どんな変化が起こったのか、不動産の価値がどんなに上がったかを説明してくれた。彼女は私に、庭の小さな区画を見せてくれた。残存していた私の古い庭の断片で、古い林檎の木

がまだあるかもと思ったが、伐採されてしまっていた。切り株

が見えた。それは粗木作りのテーブルの役割を果たしていた。

今、新しい壁を見渡すと別の小さな庭が見え、その中に古い小屋の廃墟があり、そこで私はおもちゃの手押し車を発見した——そこにも建物ができれば、



古い林檎の木

すぐに消えることになる。

私は、いちばん関心の低い人々——肉屋、パン屋、燭台職人などいろいろな職業の人——から始めて、考え得るあらゆる人々の様子を尋ねた。

死んだ者もいたし、引退して自分の「commerce〔商売〕」を子供や義理の子供に任せた者もいた。私が去った後、三人の異なる校長があの学校を維持した。ありがたい、学校はまだある——もつとも、かなり変わってはいたが。私はそれを探すのを忘れていた。

彼女には、私の名前やセラスキア家のそれの記憶はなかつた——私はドキドキしながら尋ねたのだ。私たちの痕跡はなくなっていた。十二年という短い年月で、私たちのあらゆる記憶が消されていたのだ！しかし、彼女は、décoré, mais tombé en enfance 「受勲者だが、もうろく耄碌してぼけてしまつた」紳士が、すぐ近く、ミュエット通りの私立療養所に住んでいると教えてくれた。名前はデュケノワ少佐。私は彼女に報酬を与え、心からの感謝を告げてから、そこに向かつた。

デュケノワ少佐に面会を求めるところ告げられたが、私はすぐに彼を見つけた。かなり老いて腰が曲がり、療養所のシスターの腕にもたれかかっていた。私は感動のあまり、話せるようになるまでに一、三回彼のそばを通り過ぎなけ

ればならなかつた。彼はとても小さかつた——悲しくなるほど小さかつたのだ！

私が何者かを彼に分からせることが可能になるまでに、長い時間がかかる——ゴーゴー・パスキエですよ！

それからしばらくして、彼は過去を少しだけ思い出したようだつた。

「Ha, ha! Gogo — gentil petit Gogo! — oui — oui — l'exercice? Portez ... armes! armes ... bras? Et Mimsé? bonne petite Mimsé! toujours mal à la tête? 「ハ、ハ！ゴーゴー——かわいいゴーゴーか！——ああ——ああ——訓練か？ 担え……銃！銃……腕、だつたか？ で、



M. LE MAJOR[少佐殿]

ミムジーは？ とてもかわいいミムジー！ 相変わらず頭痛か？】

彼はやつとセラスキア夫人を思い出すことができた。彼女の名前を何度も繰り返してからこう言った。「Ah! elle était bien belle, Madame Seraskier! 「ああ！ すうい美人だった、セラスキア夫人！」】

おとぎ話を話してくれた昔、彼が疲れたのに私がまだ続けてほしいような場合、彼はこんなふうに取り決めていた。彼がお話の途中で出し抜けに「クリック」という言葉を持ち込み、私がすぐに「クラック」と答えられなければ、そのお話は次の散歩まで延期されてしまうのだ（次号に続く！）。彼がその恐ろしい言葉を言い出すやり方があまりにも巧妙なため、私はしおちゅう術中に陥り、その日の午後のお楽しみをなしで済ませなければならなかつた。

私は突然「クリック！」と言うことを思ついた。彼は直ちに「クラック！」と言いい、そして心が動かされるような、年老いた笑い方で笑つた——「Cricl — Crac! c'est bien ça! 「クリック！——クラック！ いいぞ！」】それから彼はすっかり真面目になつ

*クリック／クラック……昔話を聴かせたい話し手が大衆に「クリック？」と呼びかけると、聴きたい大衆が「クラック！」と答える、ハイチ発祥と言われる風習をまねたもの。それぞれ、「聞きたゞ」／「聞かせて！」くらいの意味で使われる言葉。

て言つた。

「Et la suite au prochain numéro! 「次号に続く！」」

その後、彼は咳せきをし始めた。すると、善良なるシスターが言つた――
〔Je crains que monsieur ne le fatigue un peu! 「ムツシューが少し疲れたのではないかと心配ぢやー。〕」

それで私は彼に別れを告げなければならなかつた。私が彼の手をぎゅっと握つてキスをした後、彼は極めて上品なお辞儀をした。まるで私がまったく見知らぬ人間であるかのように。

私は両腕を上げて一目散に逃げた。古い親友への憐れみと悲しみ、それに雑多な後悔と幻滅に駆られた狂人のように。私はブローニュの森に突進した。そこで見いだしたのは、懐かしの兎とノロジカが出没する茂みやシダの群生や見通せない叢くわむらではなく、ボートやスキフが浮いた巨大な人造湖と、ローシエルヴィル・ガーデンズに引けを取らないような岩石庭園だった。その途中では、城壁の鉄の門の近くで、私の友人は一人だけ、サン＝クルーからチュイルリーに向かう伝書使にしか会わなかつた！ そこで彼は以前と同じように、低い光沢のある帽子をかぶり、強大なジャックブーツを履いて、あぶみの上に立ち上がることもなく、腕を上下に振り動かしながら馬に乗つて

いた。そのとき馬は、首の周りのきれいな音のする小さな鈴の響きを聞きながら早足で駆けていた。

ああ！ 彼のコートは、もはやブルジョワ王の無垢で純朴な青と銀の制服ではなく、別の体制の忌々しい緑と金だった。

オートウイユの池は、それ自体は高度な変化を受け、立派なものになっていた——帝国的な立派さである。蛙もイモリも水生甲虫ももういない、それは確かだと感じた。代わって、金や銀の魚が俗悪なナポレオン時代風のおびただしさで棲息していた。

太陽に照らされた草深い水辺をもう一度歩いたとき、私は自分を満たした悲しき



緑と金

みと思慕を表現できる言葉を見つけることができなかつた——これが、十二年間の独りよがりな大望のゴールなのだ。

その日は日曜日で、周囲にはたくさん的人がいた——たくさんの子供たちが、いちばん良い晴れ着を着て、いちばん行儀よく振る舞つて、慎重に魚にパンくずを投げていた。新しい世代は、かつて網で跳ね散らす水音と英語の声の興奮した騒音とで、閑寂をあんなにも満たして いたいとこたちや私よりも、はるかに地味で質のよい服を着ていた。

(ラットが住んでいた) 古い柳のそばのベンチに座つてじつと見つめに見つめながら、自分の熱望の強さでは、古いなじみの顔や姿を自然に呼び起こし、この現代の侵入者を消えさせるには不十分であるということに、私はほとんど驚くばかりだつた。これをやるために手が届く範囲内にあるように思われた。私は全身全靈でそうしたいと思い、思い、それはもう懸命に思つたけれども、無駄だつた。視覚や聴覚をだますことが一瞬もできなかつたのだ。彼ら、その幸福で行儀がよくて身なりのよい小さなフランス人たちは、何も気づかず邪魔もされずに依然としてそこについて、金銀の魚に餌をやつていた。私は疼く心とともに、その場所に彼らを残して去つた。

おお、我々はきっと、必ずや、今しているのよりも十分に完璧に過去を保有する何

らかの方法を見つけるべきだ、と、私は自分自身に向かって叫んだ。あまりに絶望的でありながら非常に自然でもある欲求が満たされないとしたら、人生は私たち多くの者にとって生きる価値がないではないか。記憶が、もしこのような成就の寸前までしか私たちを導けず、それが満足させることができない欲望で私たちを狂わせることしかできないとしたら、それはなくともよいような、貧弱で原始的なものでしかないのである。^{*}消え去った手の感触、沈黙した声の響き、過ぎ去った柔らかく優しい日。それらは、精妙で、完璧に想像することができる諸感覚の幻想によつて、意のままにでき、永遠に私たちのものであるべきだ。

ああ！ 悲しいことに！ 私は、愛する人々と別的人生でもう一度会うことは望んでいないのだ。おお、この人生で、自分の脳の何らかの策略により、かつてその人たちがいたときのように、その人たちのあまりにもかすかに記憶された姿に出会えるなら！ その人たちを目で見て、耳で聞いて、白日夢の中の古い忘れられた道を彼らと共に踏めるなら！ そんな自らに術にかける魔術師のような者になれるのなら、発狂するというのも十分に価値があるだろう。

このように悲しい思いに耽りながらサン＝クルーに到着したが、少なくともそこと、

*消え去った手の感触…………テニスの詩『碎けよ、碎けよ、碎けよ』より。

そこまで私を導いたブローニュには、目に見える変化はほとんどなく、まるで自分がほんの一週間前にそこを去ったようにしか見えなかつた。橋からの快い景観は、両側も向こう側も、かつての魅力で私を満たした。少なくとも、栄光は過ぎ去つてはいなかつた。

私は金ぴかの門を通り、グラン・カスカードまでの広範囲にわたる散歩を急いだ。あちらには美しい花輪の壺とゼラニウムの広口瓶の間に、昔なじみの変えることのできない神々が、依然として座つてゐるか、寄りかかるか、身振り手振りを使つてゐた。あちらには花崗岩と大理石と青銅の中に、氣味が悪いほど愛想のよい怪物たちがうずくまり、暑いパリジャンの目を楽しませるために無限ガロンの液体を依然として噴き出していた。（自分が想像していたのよりも全然大きくなかったことを除けば、）変えられず、変えることのできないあらゆる物の姿、その冷静で穏やかで皮肉な辛抱強さは、私を恥じ入らせ、元気づけ、氣分を上向きにしてくれた。美しいもの、ひどく醜いもの、人が好むものが何であれ、それらは永遠の安定性に対する無感動とでもいうような、まさにそんな感覚を大いに楽しんでいるように思われた——時間や風や天候、また氣難しくて弱腰で長く続かない人間の不満に対する、それら石ならではの軽蔑。一日中あらゆる塵や吹きだまりや廃墟を重い足取りで通り抜けた後、もう一度石たちに

愛情を込めてお祝いを言つて、——そこまで行ける場合は——それらにしばらくの間抱き付くのは楽しいことだった。

それどころか、それらはほとんど忘れられていた俗界の喜びすべてに対する健康的な欲求——お粗末な飲食物に対するものさえ——を私の中に目覚めさせ、そのため私はテト・ノワールに行つて高価な食事を注文した——真新しいテト・ノワールだ、ああ！　まっ白で、何もかも石とスタッコになり、歴史は感じられなかつた！

美しい日没だつた。ディナーを待ちながら、私は二階から窓の外を見つめ、フランスにおける日曜日の生活の庶民的な楽しみすべてに抱いた失望と後悔の念への慰めを見いだした。私はそれを、昔、何でもないことのように繰り返し見ていた。少なくともそれだけは、かつて私が知り、愛していたものへと帰宅していくようだつた。

橋と公園の間の小さな「Place〔広場〕」にあるカフェは、人で溢れかえつていた。consommations「飲食物」を楽しみながらおしゃべりをしている人々は、外にも座つており、広場のほぼ中央にまで達しそうだつた。あまりにもすし詰め状態だつたため、忙しく活発な白いエプロン姿のウェイターたちが客たちの間を移動する余地はほとんどなかつた。空気は、公園から吹き流されてきた、踏みつけられた草とマカロンとフランス・タバコの匂いで満たされていた。陽気なフランス人の笑い声とミルリトンの

音楽。夕日によって紫と金に染められた、明るくほこりっぽい靄。^{もや。}ボートとカヌーがたくさん浮かぶ川は空の栄光を地上でも反映反復し、よく覚えている木の生い茂った丘々が私の前に隆起し、ランテルヌ・ド・ディオジエヌで頂点に達していた。

私は、この木々の迷路を、目隠しされてもすべて縫つて進むことができただろう。二人のローマの^{*}ピッフェラーリがこの場所にやって来て、異様な感じの、この上なく興奮させられるようなメロディを吹き始めた。それは私を窓の外に誘い出しそうになつた。それには特定の形式も、開始も中間も終結もないようと思われた。息継ぎもなく、ひばりの歌のようにどんどん高く舞い上がって、狂つたようなジーブのリズム——たぶんタランテラだ——へと達し、常に緊張と圧迫を保ちながら、この世の音楽の範囲を超えた、非常に高くて遠い陶酔の激しいクライマックスへと次第に近づいていった。その一方で、執拗な持続低音が、地上のうなりを保ち、脱け出すことを不可能にし続けた。何もかもがひどく陽気で、ひどく悲しく、名前はない！

乞食の兄妹^{けいまい}で、口には歯のない大きな隙間があり、上唇がないという、奇形の捨て子のように見える二人の小人が、踊り始めた。群衆は笑い、拍手をした。ますます高く、ますます演奏不能音高に近づきながら、ピッフェラーリの素早くつんざくような音が大きくなつた。天国はほとんど手が届くところにあるように思われた——この急

速な狂気の後に来る、音楽の涅槃——普通の人間の耳が捉えられる範囲を超えたところにある、超高音の領域！

騎乗御者と「guides〔護衛騎兵〕」を伴う四頭立て馬車が、宮殿から音を立てながら莊厳に下りてきて、橋に向かつて滑らかに進みながら群衆を追い散らした。その中には女性と紳士が二人ずつ乗っていた。女性の一人は若きフランス皇后だった。もう一人は私がいる窓を見上げた——一瞬、夏の稻妻の柔らかい閃光のように、彼女の顔が友好的な認識で輝いた——優しさと興味と驚きの甘美なきらめきで——天空からの突然の閃光のように私を刺し貫いたきらめきで。

それはタワーズ公爵夫人だつたのだ！

私は、まるでバグパイプがこれに導いてくれたかのようを感じた！ もう少しする

*ミルリトン……中に薄紙や薄皮を張った膜鳴樂器。笛のようにくわえて声を出して演奏する。
 *ピッフェラーリ……クリスマスが近くなるとローマにやつて来て、聖母像の前で演奏した羊飼いたちのこと。ピッフェロ（オーボエのような樂器）とサンボーニヤ（バグパイプのような樂器）を奏し、投げ銭などをもらう。その絵が多く描かれており、ベルリオーズは『回想録』の三九章でその様子を詳しく書いている。ただし、今は六月で、十二月ではない。
 *口には歯のない…………口唇口蓋裂（みつくち）であろうか。遺伝するとも言われるため、兄妹が二人ともみつくちである可能性はある。

と馬車は見えなくなり、太陽は完全に沈んでしまい、ピッフェラーリは演奏をやめていて、帽子をかぶつてぶらぶら歩いていた。すべては終わったのだ。

私は食事をして、ブローニュの森を通ってパリまで歩いて戻り、オートゥイユの池で旧友であるウォーターラットがそれを泳いで渡っているのを見た。彼は、銀色の彗星の尾のように、自分の後ろに航跡の輝きを引きずつっていた。

"Allons-nous-en, gens de la noce!"

Allons-nous-en chacun chez nous!"

「帰ろう、結婚式の人々よ！
帰ろう、それぞれの家へ！」



夏の稻妻

浮かれた結婚式の一団が、パッシーの長い本通りを腕組みをして陽気に歩きながら、こんな歌を歌っていた。人間の望みのはかなさという悲しい経験がなかつたら、人の心を羨望でいっぱいにしていたであろうはしやいだ希望を振りまいて。

「それぞれの家へ！」何と魅力的な響きだろう！

それぞれの者は、家に着いたら自分の心からの欲望に気づくことを強く確信していたのだろうか？ 新郎自ら、それを強く確信していたのだろうか？

心からの欲望——心からの後悔！ 私は、この出来事が多かった日曜日に、両方のはるかな深みをかなりうまく測定したとうぬぼれていたのだ！



昔なじみのウォーターラット

第四部

私はミショディエール通りのホテルに戻った。

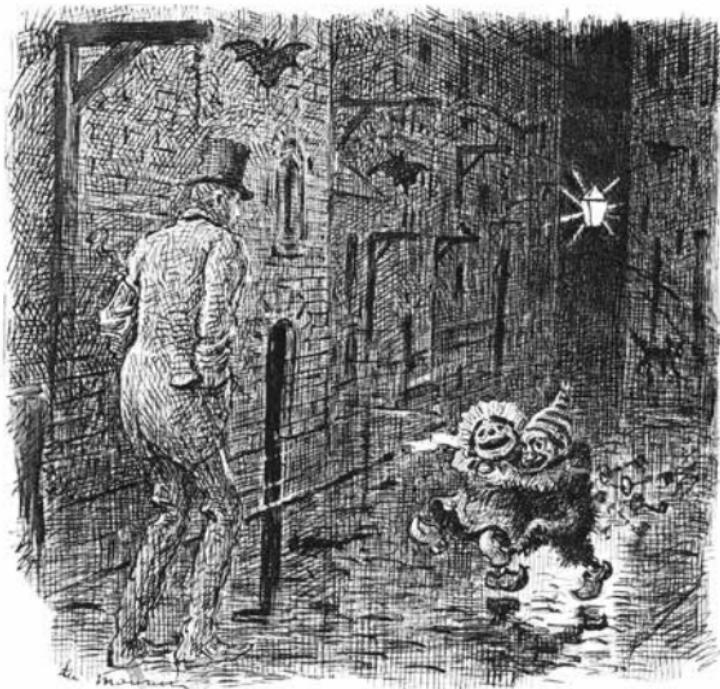
強い感情の動きと疲労に打ちひしがれ、タランテラがまだ耳の中を駆け回り、忘れられない最愛の顔が言葉にできないような微笑みを湛え、それが閉じた目の網膜に焼き付いたまま、私は眠りに落ちた。

そのとき、私は夢を見て、私の真の内面的生活の第一段階が始まつたのだ！

その日のすべての出来事が、夢の通常のやり方に従つて歪められ、誇張され、ごちゃ混ぜになつて、悪夢と抑圧のようなものに編み込まれた。私は昔の住まいに向かつているところだつた。そこで出くわし、目に入ったものは、皆グロテスクで受け入れがたいものだつたが、時には奇妙で漠然とした連想と回想の魅力を備え、時には変化と喪失と荒廃の悲惨な感じを漂わせていた。

大通りの門に近づくと、左手に学校の代わりに刑務所があつた。ドアの所には、やずんぐりした、身長が三フィートほどのひどく醜い看守と、彼の身長を上回ることのないやや醜い女看守が、目の端から私を抜け目なくちらりと見て、歯のない笑顔を

見せた。やがて彼らは、古いなじみの曲に合わせてワルツを踊り始めた。体のわきで巨大な鍵が揺れていた。二人があまりにも滑稽に見えたので、私は笑って拍手をした。しかし、その歪んだ顔は実際には滑稽なものではないということがすぐに分かった。それどころか、彼らは極めて破滅的で恐ろしいのだ。間もなく私は、その死人のような小人たちが、私と、私が行こうとしていた大通りの門の間でワルツを踊ろうとしていることに気づいた——私の行く手を遮り、私を刑務所に追いやろうとしているのかもしれない。月曜日の



朝、そこで人々を絞首刑にするのが習慣だったのだ。

恐怖に悶え苦しみながら大通りの門へと急ぐと、そこにはタワーズ公爵夫人が立っていた。彼女は、目には軽い驚きを、顔には優しい微笑みを浮かべていた——強さと現実性を感じさせる天国的な光景。

「あなたは本当の夢を見ていません!」彼女は言った。「怖がらないで——その小人たちは存在しません! 手を私に預けて、こちらにいらして」

私がそうすると、彼女はその野蛮人たちを手を振つて払いのけ、彼らは消滅した。私は、これはもはや夢ではなく、別の何かだと感じた——自分に何か奇妙なことが起こっている、私は何か新しい人生に目覚めたのだ、と。

というのも、彼女の手に触れると、自分の意識、私は私、自分自身であるという感覚、そういった、それまでの夢（そのときまでに先行したあらゆる夢）の中では部分的に断続的で曖昧でしかなかつたものが、突如として完全で首尾一貫した実際的な活動として立ち現れたからだ——ちょうど人生において、はつきりと覚醒しながら何が起こっているかに大きな関心を抱くときのように——ただ知覚力だけがはるかに鋭く、より抜け目ないものになつて。

私は、自分が何者であるかを完全に知つており、前日の出来事をすべて思い出した。

私の現実の体が、今はミショディエール通りにある *hôtel garni* 「家具付き安ホテル」五階の小さな部屋で、服を脱ぎ、ベッドに横たわってぐっすり眠っていることを意識した。私はこれを完全に知っていたのだ。それなのに、ここにも自分の体があり、まさに実体があるかのようだつた。こちらは完全に着衣であつた。ブーツはややほこりっぽく、シャツの襟えりは体温で湿つぱかつたが、それは暑かつたからだ。繋いでいない方の手がズボンのポケットにあるのが分かつた。そこにはロンドンの家の鍵、財布、ペンナイフが入つていた。コートの胸ポケットにはハンカチ、その尾部ポケットには手袋、パイプ・ケース、その日の朝持つてきた小さな水彩絵の具の箱が入つてゐる。私は時計を見た。ちゃんと動いていて、十一時を指していた。私は自分の体をつねつて、咳払いをした。目が覚めていることを確かめるために、人がひどい驚きの重圧下で通常行うようなことを全部やつてみた。自分は目が覚めていて、依然としてここに立つていて、紹介されたことのない素晴らしい女性と本当に手を繋いでいた（彼女は、私の混乱がおかしくてたまらないという様子だつた）。そして、あるときは彼女を見つめ、あるときは古い母校を見つめていたのである。

刑務所はカードの家のように崩壊しており、そして見よ！ その場所には、サンドー氏の *maison d'éducation* 「寄宿制教育施設」が昔ながらにあつたのだ。その黄色い壁

には、乾いた泥の手の押し跡さえ認められた。十五年前、パリゾという名の通学組男子生徒によつて付けられたもので、彼は壁のそばの側溝に落ち、もう一度立ち上がりろうとしたときにこんな具合に手跡を残したのだった。それは休暇中に白塗りされるまでの数か月間、そこにそのままになつていた。十五年を経て、それはあらためてここに現れていた。

燕が飛び、さえずつていた。黄色の乗合馬車が校門に止まつた。馬たちは、当時のフランスの馬がいつもしていたように、足を踏み鳴らし、いななき、互いに噛みつき合つていた。御者はおざなりな感じで彼らを罵つていた。

群衆が見ていた——フランソワおじさ



PREMIÈRE COMMUNION [初聖体]

んとおばさん、食料雑貨商の妻リヤール夫人、その他。私はすぐにうれしさとともに彼らを思い出した。私たちのちょうど目の前で、小さな男の子と女の子がほかの者たちと同じように見ていた。私は、ミムジー・セラスキアの背中と髪を短くした頭と瘦せた脚を認めた。

バエル・オルガンが、私がよく知っているけれども忘れていた、かわらしい曲を演奏していた。

校門が開き、サンドー氏が、（いつもそうだったように）誇らしげに、うぬぼれに満ちた感じで、当世風な白いズボンと輝くブーツを履き、絹の白いバンドを左腕に巻いた、私が顔と名前をよく知っていた数人の少年たちと一緒に乗合馬車に乗り込み、実際よりも格好よく見せかけた様子で運ばれていった——金色の戦車で天国へ行くよう——そんなふうにも見えた。それは見ても聞いても美しかった。

私はまだ公爵夫人の手を握っていて、彼女の手袋を通してそのぬくもりを感じていた。それは磁流のように私の腕をひっそりと這い上っていた。私は至福の地エリュシオンにいた。天国的な感覚が、自分の体表は遂に自分のもの以外の靈に勝利され侵入されたのだ、という気持ちにさせた——極めて強力で慈悲深い靈に。結局、私の突き通せない自己の甲冑には祝福された弱点があり、強さと慈善と親愛の天才がそれを発見していたの

だ。

「今、あなたは本当の夢を見ています」と彼女は言った。「あの男の子たちはどこへ行こうとしていますか?」

「教会です。première communion 「初聖体」をするために」私は答えた。

「そうです。私があなたの手を取ったので、あなたは本当の夢を見ているのです。あの曲は知っていますか?」

聞き耳を立ててみると、それに所属する言葉が過去からやつて来て、私は彼女にそれらを告げた。すると彼女は本当にうれしそうに目を細めて、再び笑った。

「完全にそのとおり——完璧です!」彼女は叫んだ。「あなたが知っているなんて、何て意外なことでしょう! イギリス人にしては、フランス語を何て上手に発音するのでしょうか! ということは、あなたはイベットサンさんですね? レディ・クレイの建築家の」

私が同意すると、彼女は私の手を離した。

通りは人でいっぱいだった——おなじみの人影と顔と声が、しゃべり合ったり黄色の乗合馬車が行った道を見下ろしたりしている。昔なじみの姿勢、昔なじみの足取りと物腰の特徴、昔なじみの忘れられたフランス語の話し方——何もかも遠い昔そのま

まだ。誰も私たちに気づかない。私たちは今はさびれた大通りを歩いていた。

あらゆるもののが幸福と魅惑！もしや私は死んだのか。ミショディエール通りのホテルで、眠っている間に突然死んでしまったのかもしれない！タワーズ公爵夫人も死んだのか——サンリクルーからパリへ行く途中で何かの事故に遭つて死んでしまつたのか？そして、二人とも互いにすぐ近くで死んだので、この天国的な様式での永遠の来世を始めたということだろうか？

それでは出来過ぎで本然らしくない、と私は内省した。本能の一部が、これは死ではなく、超越的なこの世の人生なのだと告げていた——それに、ああ！これが永遠に続くことはないということも！

私は、彼女の顔のあらゆる特徴、彼女の体のあらゆる動き、彼女の服のあらゆる細部を深く意識した——実際の人生でできるよりもはるかに——そして、心の中でこう考えた。「何であれ、これは夢ではない」。しかし私は、最高の状態で目覚める瞬間にのみ私たちを訪れ得る言い表しようのない高揚感が自分にあると感じていた。そして、今のことと比べると、そのときの高揚感もほんのかすかなものにすぎず、しかも私たちの多くの者はそれさえ決して味わうことがないのである。私はといえば、小さな手押し車を見つけたあの朝以来、それを経験したことはなかつた。

しかし私は、大通りそれ 자체が、わずかにそれを夢見ているという感触を持つていることも意識していた。それはもはや完全に正しいものではなく、いわば正確な描画と遠近法の埒外らちがいになりつつあった。私は支えを失っていたのだ——彼女の手の感触を。「まだ本当の夢を見ていますか、イベットスンさん？」

「完全ではないような気がします」私は答えた。

「多少は自分で試さなければいけません——頑張りましょう。この家を見てください。ポーチには何て書いてありますか？」

金文字で「テト・ノワール」と書かれているのが目に入り、私はそう言つた。

彼女はさざ波のような笑い声を上げ、こう言つた。「いいえ、やり直しです」。そして指先でほんの一瞬私に触れた。

私は再試行し、言つた。「ノートルダム広場」

「多少ましになりました」と彼女は言つて、再び私に触れた。私は、昔その前でよく読んでいたように、「パルワ・セド・アプタ」と読み上げた。

「今度は向こうのあの古い家を見てください」と私の旧家を指し示した。「最上階には窓が何枚ありますか？」

私は、七枚だと言つた。

「いいえ、五枚です。もう一度見てください！」五枚あつた。すると、家全体が、かつての姿そのままに、極めて細かい部分に至るまで正確になつた。私は、窓の一枚を通して、私のベッドを整えているテレーズを見ることができた。

「けつじゅう」公爵夫人は言つた。「すぐできるようになりますよ——とても簡単です。—ce n'est que le premier pas!【(大変なのは)最初だけです!】父が教えてくれたのです。いつも両腕を頭に上げて仰向けに寝ること。それで両手を握って、左利きでないのなら足は右足を左足の上に交差させること。そして、眠つて夢の中に着くまで、その中でどこに行きたいか考えることを一瞬たりともやめてはならない。目覚めていたときに自分が何者でどこにいたのか、夢の中でも決して忘れてはならない。夢を現実に結び付けること。忘れないでくださいね。私はもうここでお別れしますが、私が行く前に、両手を私に預けて、目で見える範囲をどこでも見回してみてください」

彼女から目を離すのは難しかつた。その顔は私の目を引き、目を通して私の心を引き寄せた。それでも私は彼女が言つたとおりにし、慣れ親しんだ全光景をじっくり見た。木々の開けた所を通して、はるかヴィル・ダヴレーの森さえ垣間見ることができた。何マイルも離れた、ヴエルサイユに向かう列車の煙まで見える。古い電信機がモン・ヴァレリアンの頂上でその黒い腕を作動させていた。

「問題ないですか？」彼女は尋ねた。「よさそうですね。今後、ここに来たときはいつでも、あなたの視界が届く範囲内ではあなたは安全でしょう——この地点から——私が導入している間はずつと。有力な友人を持つということがどんなものかを知ってください！ 踊る小人の看守はもういません！ これからは自分で遠ざけることが徐々にできるようになります。

向こうの、あの公園を通つてブローニュの森に行けます——あなたが通れるような生け垣の隙間があります。ただし、気を付けてほしいのですが、あなたの前の何かもが明らかになるようにしてください——ちゃんとやってくださいね、もう一步進む



「彼女から目を離すのは難しかった」

前に。そうしないと、あなたは目覚め、最初からやり直さなければならなくなります。それを意志の力で行い、自分は目覚めていると思いさえすれば、うまくいくでしょう——もちろん、あなたが以前そこに行つたことがあるということが条件です。それと、これも気を付けてほしいのですが、物や人への触り方には注意してください——聞こえたり、見えたり、匂いがしたりするかもしませんが、触ったり、花や葉を摘んだり、動かしたりしてはいけません。それは夢を曇らせるのです。窓ガラスに息を吹きかけたときのようだ。なぜなのかは分かりませんが、そうなのです。ここではすべてが死んで過ぎ去ったものなのだということを忘れてはいけません。あなたと私については、状況は異なります。私たちは生きていて、実在します——つまり、私はいるわけです。それに、あなたの両手の握りから察するに、あなたが実際の存在であることもどうやら間違いないようです、イベットスンさん。でも、あなたはいません。なぜあなたがここにいるのか、あなたがこの中、私特有の夢の中にどんな用事があるのか、私には分かりません。これまで、以前見た夢の中に、生きている人が入り込んだことなどなかつたのです。私には理解できません。思うに、今日の午後、『テト・ノワール』の窓から外を見ているあなたの実体を、私が見たからではないでしょうか。あなたは、私の疲れ果てた脳が作り出したさまよえる幻想にすぎません——とても好まし

い幻想であることは認めます。それでも、今このときに、あなたはここには存在していません——存在し得ないのです。どこかほかの場所にいるのですよ、イベットスンさん。^{*} マビーユでダンスをしているか、あるいはたぶん、どこかでぐっすりと眠って、イギリスの優秀な若い建築家にふさわしく、フランスの教会や宮殿や著名な噴水を夢見ているのでしょうか——さもなければ私があなたにこんなふうに話しかけるはずがありませんし、きっとそうでしょう！

まあとにかく。私はあなたの役に立てた夢を見られてとてもうれしいし、あなたはここでは大歓迎です、あなたが来て楽しいと思うのならね——というのは、特にあなたは私の単なる偽りの夢なので、あなたにはほかに何ができるのだろう、とも思うからです。もうお別れしなければ。それでは、ごきげんよう』

彼女は手を離し、天使のような笑い方で笑い、それから公園の方を向いた。私は、その背の高いまっすぐな姿と風に吹かれるスカートを見つめ、数人の女性と子供たちを追つて私がよく覚えている茂みの中に入つていく彼女を見ているうちに、彼女はすぐ見えなくなつた。

私は、まるで自分の人生からあらゆる温かさが失われたかのように感じた。まるで歓喜が飛び去つてしまつたかのように、まるで貴重なものが自分の所持から離れ、体

表の隙間が再び閉じてしまったかのようだ。

彼女が姿を消した地点に視線を固定させたまま、私は長い時間立って考えていた。後を追いたいとも感じたが、その後、それは慎重さを欠く行為だと思量した。それは以下の理由による。彼女は私の偽りの夢にすぎず、刺激的で出来事の多かった日の單なる追憶で、疲れ果てて興奮した脳のさまよえる幻想——好ましい幻想以上の（それ以外の何だというのか！）——であるにもかかわらず、それでも彼女は素晴らしい女性であり、赤の他人でまつたく取るに足りない私を、類い稀なる丁重さと親切さをもつて待遇してくれた。それに私が報いたのは事実である。彼女を初めて見たときからずっと、私の肉体に呼吸がある限りずっと、彼女が好きなことを一緒にするために、まさに私の人生が彼女のものとなるほどの、深く強い愛で！　だがこのときの夢が、適切な紹介なしでの知己^{ちき}を形成することはなかつた。フランスでさえ——夢の中できえ。夢の中であつても、疲れて眠っている脳のさまよえる幻想に対しても、人は礼儀正しくあらねばならないのだ。

それと、彼女は、あれの中、私特有の夢の中で、どんな用事があつたのだろう——彼女自身が私に尋ねたように？

*マビーユ……バル・マビーユ（十九世紀中頃に営業していたダンスホール）であろう——

それでも、これは夢なのだろうか？私は、昨日の朝離れたペントンヴィルの下宿を思い出した。自分が何者で——なぜパリに来たのかを思い出した。そのときぐつくり眠っていたパリのホテルの寝室を、大きな音で時を刻んでいた時計を、貧弱な家具のすべてを思い出した。そして、私はここに、完全に目を覚まして意識を持ち、消滅して長年経った古い大通りの真ん中にいる——新しく色を塗った格子組で覆われた巨大なレンガ造りの建物が、土地を塞いでいる場所に。私はそれを見ていた、その建物を、自分自身で、ほんの十二時間前に。だというのに、ここには私が子供の頃に存在していたものが全部あつたのだ。そして、若く美しいイギリスの公爵夫人の、あの実体のある幻影が面倒を見てくれている間じゅう、その手袋に包まれた温かい両手を、あのわずかな時間、私は自分の手の中に握っていたのだ！彼女の手袋の香りが、まだ私の手のひらに残っていた。私は時計を見た。それは十二時二十三分前を示していた。このすべてが、一時間の四分の三未満の時間内に起こったのだ！

どうしようもなく困惑しながらこのすべてを默考するうち、私は自分の旧家の方へ足を向けた。すると、驚いたことに、庭の壁越しに向こうを見る事ができた。それはかつて約十フィートの高さがあると思っていたものだ。

満開の古い林檎の木の下で、私の母が小さな靴下のほころびを繕いながら座つてい

た。母の耳の前に垂れている亞麻色の髪の房（髪をそのようにすることが彼女の流儀だったのです）が、顔を半分隠していた。私の感動と驚きは途方もないものだった。心臓は早鐘を打っていた。こめかみに脈拍を感じ、息切れがした。

昔流行したやや奇妙な服を着た小さな男の子が、よく覚えている小さな緑色のテーブルに着いている。広いシャツの襟の周囲にフリルが付いていて、彼の金髪は頭頂部でとても短く刈られていて、側頭部と後頭部はいくらか長かった。その子はゴーゴー・パスキエであった。彼はとてもきちんとした男の子のように見えた。前にペンとインクと書き方帳と、赤いモロッコ革で装丁された金縁の本があった。私はそれが一目で分かった。『雅文抜粹集』だ。犬のメドールが日陰で寝ていた。蜜蜂がキンレンカとサンシキヒルガオの間でブンブン音を立てていた。

すずおと 小さな女の子が、門番小屋から大通りを走って庭の門を押した。それは開きながら鈴音を鳴らし、彼女は庭に入った。私は彼女を追った。だが彼女は私に気づくことはなく、ほか者もそうだった。その子はミムジー・セラスキアであった。

私は進み出て母の足元に座り、彼女の顔を長い間見た。

彼女に話しかけたり、触つたりしてはいけない——自分の唇で彼女の忙しい手に触れことさえ。さもないと「夢を曇らせ」てしまう。

私は立ち上がって、少年ゴーゴーの肩越しにのぞき込んだ。彼はグレイの『哀歌』をフランス語に訳していた。あまり進んでおらず、次の行に悩まされているようだった。

「そして、世界に暗闇と私を残す」

ミムジーは、親指を口にくわえ、片腕を椅子の背もたれに載せ、彼のもう一方の肩越しにのぞき込んでいた。彼女も悩まされているように見えた。それは翻訳するには厄介な行なのだ。

私は身を屈めてメドールの鼻に手を当て、彼の温かい吐息を感じた。彼は尾^{*}の痕跡を振って、眠りながらクンクン言っていた。ミムジーが言った。

「Regarde Médor, comme il remue la queue! C'est le Prince Charmant qui lui chatouille le bout du nez.」「メドールを見て、あの尻尾の振り方を— ハヤルマハ王子が鼻の頭をくすぐっているんだわ】

それまで話さなかつた母が口を開いた。「英語を話してちようだい、ミムジー、お願いだから」

おお、神よ！ 母の声、すっかり忘れていたが、それでもとても親密な、言葉にな

らないほど愛おしい声だ！ 私は彼女に駆け寄り、その足元にひざまずき、手をつかんでキスをして、こう叫んだ。「お母さん、お母さん！」

奇妙な曇りがあらゆるものを覆つた。現実感は失われた。すべてが夢——美しい夢——のようになつたが、ただの夢でしかなくなつた。そして私は目を覚ました。

• • • • •

私は小さなホテルの寝室で目

*尾の痕跡……だんび断尾された尾であろう。五五ページに「三インチの尾」とあつた。



「お母さん！ お母さん！」

を覚ました。街灯の明かりによつて、すべての家具や自分の帽子や衣類が見えた。マントルピースの上からは時計が時を刻む音、通りからは荷車のゴロゴロいう音と鞭の鋭い音が聞こえてきた。それでも私は、自分の奇妙な光景の中で一分前に感じていた以上に目が覚めているとは少しも感じられなかつた——むしろそちらの方が覚醒していたくらいだ！

私は、大きな馬のそばを小走りするボニーのように、マントルピース上の時計の傍らで私の時計が小さなカチカチ音を発してゐるのを聞いた。時計が十二時の鐘を打つたとき、私は立ち上がって街路のガス灯の光で自分の時計を見た。それは同じ時刻を指していた。私の夢は一時間続いた——私は十時半にベッドに入つていたのだ。

私はそのすべてを思い出そうと試みて、極めて細かい点まで思い出した——オルガンが演奏していた曲と、それに付いていた歌詞以外のすべてである。それらは喉まで出かかっていたのだが、それ以上進むことを拒んでいた。私はもう一度立ち上がり、部屋の中を歩き回つて、あれは全然夢のようではなかつたと感じていた。あれは前日の現実にあつた冒險全体よりもより「回想可能」なのだった。あれは夢のようであることをやめ、公爵夫人の手に初めて触れた瞬間から母の手にキスした瞬間までは現実になり、それから曇りが現れた。私がくぐり抜けたのは、まったく新奇な、ひどく困

惑させられる経験なのだつた。

夢の中では常に、中断、矛盾、逸脱、一貫性の欠如、連續性の侵害など、連鎖において失われる輪がたくさんある。覚醒している心に後でそれ自身を刻み込むのに十分なほど鮮やかな印象は、ポイントポイントにおいてのみなのであって、それでさえ実際の人生の印象に匹敵するほど真に鮮明であるわけではない。それが、夢の中では現実そのままに見えるはずのものだとしても。覚醒時にはそれをよく覚えているが、すぐには消えていき、その後覚えているのはそれを見たという記憶だけである。

私の夢には、これはなかつた。

それはラムズゲート桟橋の「カメラ・オブスクラ」のようなものだつた。人が中に入ると、自分が真っ暗闇にいることに気づく。目の準備が整う。その人はすっかり期待する。しつかり目は覚めている。

突然、港と、その中のあらゆる生命、それに人々と向こうの崖の動画が、視界にぱつと飛び込んでくる。もっと遠くの緑の丘、白い雲、青い空も。

小さな緑色の波が港で追いつ追われつ互いに競り合い、砕けて壊れやすそうな白い泡沫になる。鷗^{かわみ}たちが旋回し、突進し、マストとロープと滑車の背後に急降下する。

* カメラ・オブスクラ……カメラの原理で、外の景色を暗所に映し出す装置・施設。

通路上の輝く真鍮の器具類と羅針盤が、目をくらませることなく陽光に輝く。快活なリリップティアンたちが歩き、話す。彼らの白い歯は針先ほどの大きさで、笑うときに輝くが音はない。周遊旅行者でいっぱいの蒸気船が入ってきて、その外輪が水をかき回しているが、音を聞くことはできない。細部が失われることはない——水夫の上着のボタンも、彼の顔の上の髪も。何マイルも満たす海と大地と空のあらゆる光と色が、ここでは数平方フィートの中に集中している。そして、何という色彩だろう！　画家を絶望させるもの！　それ自体が光であって、古い教会のステンドグラスの窓から流れ込むものよりも美しいのだ。また、すべてが完全な闇に囲まれているため、十分に開いた瞳孔はそれらを最大限に見ることができる。あたかも何もかもが実物大に描かれ、それから効果を強め、豊かにするため、本来の大きさの百万分の一まで縮小されたかのようだ。ちりめん縮緬に描かれた日本の絵のように。

すべてが終わる。覆いのない太陽の下に出る。何もかもがぎらぎら光り、剥き出しだで単調でありきたりに見える。魔法すべてが光景から次第に消えていく。あらゆるもののが、ほかのあらゆるものからあまりにも遠く離れている。出会う人がみんな粗野で巨大で近すぎるようと思われる。そして、人は生涯を通じてそんな連中をずっと見てきたのだ！

ゆえに、私の夢は、日常的な覚醒時の毎日の経験の方と比較し得るものであった。十数平方フィートのプリリストル紙の上を、平たく音のないただの小映像が動くだけの、目にしか訴えないというものではなく、夢の中の物も人も実生活におけるのと同じくらい丸みと安心感を持つていたし、実物大だったのだ。その間を移動したり背後に回つたりできだし、あえてやろうと思えば、触れたり握つたり抱き締めたりもできるかのように感じられるのだ。耳も、目と同じように、この脳の暗い部屋から解放されていた。話したり笑つたりする声が、実生活さながらに聞こえるのだ。それだけではなく、柔らかなそよ風が頬を撫で、雀すずめがさえずり、太陽が暖気を放射し、たくさんの花の香りがこの幻想を完全なものにしていた。

それから、タワーズ公爵夫人！ 彼女は、ほかの人と同じように見えて聞こえるのみならず、さらに触れて感知することもできた。私の触覚神経にある感覺の最大範囲で。私の手が彼女の手を握ったとき、まるで私は彼女の全人生を自分のそれの中に引き入れていたかのようを感じたのだ。

その一人の人物を除いて、見たところ、すべて数年前の現実の中にあつたのと同じだった。まさに虫が立てる羽音、花の垂れ下がりに至るまで。

ひょつとして、私は気が狂ったのか？ 数時間前にそうしたいと切望していたよう

に、私は過去を手に入れていたのだ。

視覚、聴覚、触覚、その他とは、何なのだろう？

全部で五つの感覚。

いくつもの世界を超えた世界、何十億マイルも離れている星々とは、目の後ろの神経ネットワーク上の単なる光る点でなければ、私たちにとつて何なのだろう？人はそこでそれらをどう感じるのか？

私の友人の声の響き、それは何なのだろう？　彼の手の握り、彼の顔の楽しげな様子、彼のパイプと私の匂い、私たちが共に食べたり飲んだりしているパンとチーズとビールの味、それらは脳の虚構（たぶんぽつんぽつんと生じる虚構）でなければ何なのだろう？——目的をもつて作られた神経を走る小さな震動、それがなければ、星々も、パイプも、パンもチーズもビールも、声も、友人も、私も、存在しないのだろうか？もしかすると、肉体の肉の層のどこかに埋め込まれた第六感のようなものがあるのか？——使われないために青白く衰えた、過去や種族の遺物のようなもの、また私たち自身の子供時代にもあったかもしれない遺物のようなものが？　あるいは、将来の子孫のために無上の幸福と慰めを生み出す源泉へと開発されるための萌芽というか、始めるべき努力というか、隠された極めて貴重な能力というか、そのようなものが？

今のところは夢の中でしか震えさせられることも揺れさせられることもできない神経のようなものは、まだ繊細すぎて、普通の日中の光の中でその機能をしつかり働かせることができないのだろうか？

そして、全世界全人類中の私——私、つまりペントンヴィルのウォートン・ストリートに住む建築家兼測量士ピーター・イベットソン——まったく無能で散漫で無学な夢めみびと見人——は、何か素晴らしい精神上の発見をする運命にあつたのだろうか？

これら厳肅なことを深く、じっくりと考えながら、私は再び睡眠へと自らを送り込んだ。至極自然であるように——しかし、それ以上夢は見なかつた。私は朝遅くまでぐっすり眠り、コンコルド橋の近く（反対側）にある快適な室内プール、バン・ドゥリニーで朝食を取り、そこで水泳、居眠り、喫煙を代わる代わる行い、また前夜の不思議な出来事を考えたり、次の夜にそれが繰り返されるよう願つたりしながら、一日の大半を過ごした。

私は一週間パリに留まり、幼年時代の古い通い先の間を一日中ぶらついて——もの悲しい喜びを味わいつつ——、夜には夢の中の公爵夫人が言つていた「本当の夢を見る」ことを試した。成功したのは一度だけだつた。

私は「オートウイユの池」を一所懸命に考えながら就寝した。すると、しつかり

眠つたと思うとすぐに目覚めたように思われ、その現実感と至福感によつて、自分が「本当の夢」に入つてゐることを直ちに理解した。それは再び超越的な人生だつた——実現した追憶の法悦、それと同様のこの上なく魅力的な驚き！

そこには緑のフロックコートを着た少佐殿がいて、水際の小さなサンザシのそばにひざまずいていた。水に浸かつたその根の間には、テーブルスブーンのつぼほどの大きさの、狡猾で老練なゲンゴロウモドキが棲息していた——私たちがよく捕まえようとしては、その努力が無駄になつた貴重種だ。

少佐殿は手に網を持ち、真剣に水を



少佐と水生甲虫

見つめていた。汗が鼻から落ちていた。そして彼の周りには、静かな期待感と緊張感を漂わせたゴーゴーとミムジーと私の三人のいとこたち、それに私がすっかり忘れていた、陽気でそばかす顔のアイルランド少年が群れを作っていた。私は不意に彼の名前がジョンストンであったことを思い出した。彼が非常に喧嘩っ早かつたことや、バス通り（今はレイヌアール通り）に住んでいたことも。

池の反対側では、私の母が水からメドールを遠ざけていたが、彼の楽しみを損なつていることを懸念していた。柳のそばのベンチに座ったセラスキア夫人——美しいセラスキア夫人——は、とても興味深そうだった。私は彼女のそばに腰を下ろし、言い表せない喜びをもって彼女を見つめた。

円錐型ウエハース・ケークリ売りの老婆がやつて来て、こんな歌を歌つていた——「V'là l'plaisir, mesdames — V'là l'plaisir!」「プレジールありますよ、ご婦人方——プレジールですよ！」セラスキア夫人は十ドル買つた——山のようだつた！

少佐殿は網で突撃した——失敗だ、いつものように。メドールは解放され、池全体に大きな波を立てるほどの勢いでざぶんと飛び込み、全員の興奮の叫びと金切り声に包まれて、架空の石を追つて潜水した。おお、聞き慣れた声たちよ！ 私は泣きそうになつた。

メドールは石をくわえることなく水から上がってきて体を震わせ、いつものように身をよじったり吠えたり歯を剥いたりぐるぐる回ったりして、私のすぐそばにいた。私はうれしさと共感のあまり、彼をうかつにも撫でようとして、夢はたちまち「曇つてしまつた」——すべてが混乱し、わけが分からぬ普通の夢に変化したのだ。十分に楽しい夢なのだが、質も程度も違う——普通の夢である。そのため、苦悩のうちに私は目を覚まし、その夜は（夢を見たかったのに）再び夢を見ることはできなかつた。

翌朝（早い時刻の水泳の後）私はルーヴル美術館へ行き、魅せられてレオナルド・ダ・ヴィンチの『リザ・ジョコンダ』の前に立つた。私はそれが過分なまでに激賞されていたのを聞いており、その驚異的な美しさがどこにあるのかを見つけようと懸命に努力した。が、その試みはあまり成功しなかつた。セラスキア夫人をもう一度見たことで、その『ジョコンダ』など偽の作り物だと感じられたからである。

やがて私は、自分のすぐ後ろにグループがいるのに気づき、陽気な男性の声が声高に言つてゐるのを聞いた。

「では、公爵夫人、私の最初で最後の唯一の恋人、モナ・リザを紹介させてください」。振り向くと、そこには兵士のような老紳士と二人の婦人（一人はタワーズ公爵夫人だつた）が、その絵を見つめながら立つていた。

彼らに道を譲るとき、彼女と視線が合つた。その目にはまたもや、私を認識したことで優しい表情が浮かんでいた。私には確かにそう感じられた——ほんの半秒で。彼女はどうやらレディ・クレイの所で私を見たことを思い出したようで、そこで私は、かえって人目につきそうな片隅にその晩ずっと独りぼつちで立っていたのだ。私は並外れた長身だったため（当時は今ほど背の高い人はいなかつた）、気づかれやすく記憶されやすかつた。特に、あの頃のイギリス人には珍しく頸ひげを蓄えて



"LISA GIOCONDA" 「[リザ・ジョコンダ]」

いたということもあつた。

彼女は、私が彼女をどれほど記憶しているかなど考へてもいない。また、私にとつて彼女が何なのか、何だつたのかもまったく分かつていなかつた——実人生と夢の中まで！

私は、感情があまりにも大きくなりすぎて、膝が震えるようだつた。歩くことができそうになかった。体も心ももろくなつていた。その美しい他人への崇拜は、ほとんど狂気のようになりつつあつた。彼女はセラスキア夫人よりもさらに美しいのだ。そのような美しさは残酷なものだつた。

私は、非常に背が高くてほつそりした、黒髪と百合のやうな皮膚と明るく天使のような目を持つ女性の前に、膝を折りひれ伏す運命にあつたようだ。クラーケンウェルで牛の胃と豚足を売つていた美しい少女もそのタイプだつたことを思い出した。ディーン夫人もそうだつた。私にとつて幸運なことに、それはよくいるタイプではなかつた。

日中はずつと、岸壁や橋の上で欄干に寄りかかつたりセーヌ川を見たりしながら、甘美な絶望の療養に努め、パリでいちばん大柄な馬鹿者を自認し、あの青灰色の優しそうな目の光を何度も何度も思い出して過ごした——私だけの光、私にとつての世の

光を！

• • • • •

短い休暇が終わって、私はロンドン——ペントンヴィル——に戻り、元の仕事を再開した。しかし、私の生活の方向性は全部変わってしまった。

日々、仕事がある日（私は以前よりも一所懸命に働き、リントットは非常に満足した）は、仕事でも遊びでも、何もかもが穏やかな満足と快い黙諾から成る、取るに足らない夢のように過ぎた。

私は、もはや少しも運命に不平を言つたり、己自身から逃れたいと願つたりはしなかつた。仕事やレクリエーションに熱中して臨んでいるとき、私という存在のすべてがタワーズ公爵夫人の記憶でいっぱいになっていた。彼女は、全人類および自分自身と自分との関係を良好に保つ、温かい内面的な輝きのようなものだった。夜になれば、夢のパッシーの旧家の中やその周りで彼女のイメージともう一度出会い、ことによるともう一度彼女の手に触れるという言いようのない至福を感じることさえできるかも

*世の光……マタイによる福音書五章十四、ヨハネによる福音書九章五など。

しれない、という希望、そのうつとりするような希望に、胸を躍らせていたのである。それにしても、彼女はなぜそこにいるのだろうか？

眠りのための祝福された時間が巡り来るとき、私の人生の真の務めが始まった。私は人が美術の練習をするように「本当の夢」の練習をし、多くの失敗の後、専門的熟練者——自在に操れる者——になった。

私は仰向けにまっすぐな姿勢で横たわり、足を交差させ、両手を頭上の対称な位置で握った。記憶の中にある空間と時間の、あるポイント——例えば、少佐殿が散歩に行くのを待っていたことを思い出したときは、クリスマスの午後の大通りの門——に、自分の意志を真剣に根気強く固定し、同時に、ペントンヴィル、ウォールトン・ストリート、建築家のピーター・イベットソンとしての現在の自己認識の感触を失わないようにする。公爵夫人は「Ce n'est que le premier pas qui coûte〔大変なのは最初だけです〕」と言っていたけれども、このすべてをうまくやってのけるのは思うほどやさしいことではない。そして、ある夜ついに、生涯通じて見てきた普通の夢（二回を除く）を見る代わりに、しつかり眠った瞬間に目覚め、大通りの門のそばでゴーゴー・バスキエが石柱の一つに座り、雪の積もった通りに少佐を探しているのが見えたことで、天にも昇る気持ちになつた。やがて彼は旧友に会うためにぱっと立ち上がつた。その者の

暗緑色で覆われた姿が遠くに現れたところだった。私は彼らが温かく親しげな挨拶を交わすのを見たり聞いたりして、オートウイユを通つてあの池まで気づかれないようにならのそばを歩き、それから城壁まで戻りつつ、一人の乱暴者のスリリングな冒險譚に耳を傾けた。私はそれを完全に忘れていたことを告白しておく。

「ラ・ミュエット門」を三人全員が一緒に通り抜けるとき、少佐殿の記憶力（あるいは発明力）がいくらか衰え始めた——というのは、彼が突然「クリック！」と言つたからだ。ところが、ゴーゴーが情け容赦なく「クラック！」と答えたため、物語



巨大な乱暴者の物語

は夕暮れ時にパスキエ家の門に達するまで続けられねばならなかつた。そこで二人は翌日の約束をした後、最上の愛情を込めて別れを告げた。私はゴーゴーと一緒に入り、勉強部屋に座つて、テレーズが彼にお茶を出す間、その日の午後にパッシーで起こつたことをすべて彼に伝えているのを聞いた。それから彼は、就寝時刻が来るまで、母と一緒に読んだり要約したり翻訳したりしていた。私は、彼が母のハープで寝かしつけられている間、彼のベッド脇に座つていた……その甘美な調べが夜中に止まるまで、私はどれほど耳と心のすべてを傾けて聴いていたことか！ その後私は、言うに言わぬことを思いながら、寝静まつた家を抜け出して、——メドールが月に吠えている雪に覆われた庭を通り——静かな大通りと公園を通り——パッシーの人けのない諸街道を通り——寂しい岸壁とパリの闇の区域への橋を通り続けた。私がその場で覚醒し、もう一つのわびしく单调な日——とはいえ、あのような振り返つたり期待したりする経験——あのような不思議で喜ばしい奇妙な相続物——を持つ私にとっては、もうわびしくも单调でもない日——が、ロンドンの上に明けていたことに気づくまで！

私は時折、さらに数回失敗をした。例えば、覚醒時と睡眠時の生活の間の糸が、一瞬の不注意によつて、あるいはおそらくベッドにある自分の体の何らかの動きによつて、ぶつんと切れたようなときである。その場合、急に視界が曇り、その現実性は破

壊され、代わりに普通の夢が生じてくる。そうなつたことへの咄嗟の意識は直ちに自分を目覚めさせるのに十分で、私はもう一度開始し、すべて望んだとおりになるまでダ・カーポした。

どうやら私たちの脳は、写真乾板と蓄音機蠅管(ろうかん)の両方に類似したもの、およびまだ発見されていないたくさんの同種のものを含んでいるようだ。視覚や音や匂いが失われる事はない。味や感覚や感情もなくならない。無意識的な記憶は、私たちの目下の興味や注意を引いているものの範囲を超えて、私たちの周囲で起こっていることに注意を払うことすらせず、すべてを記録するのである。

こうして私は、毎晩、はつきり覚えている場面だけでなく、完全に忘れてしまった場面までが自分の眼前で繰り返されるのを見た。忘れたとは言つても、覚えているのと同じくらい紛れもない真実で、すべてがあの名状しがたい光、過ぎ去りし日の光——海にも陸にもない光、それでも絶対に確かな真実の光——の中に浸かっていた。

それは、日常のけばけばしい光を、美しさにおいても価値においてもどんなに凌駕していることか！ 哀れな人類は、今までそんな光によって生きて死ぬことに満足してきたのだ。知識の欠乏のため、実体に対する影、物質に対する精神、といったことを気にすることもなく。私は、これらの睡眠体験の真実を細部にわたって検証した。

保存しておいた家族の手紙があり、起きたときにそれらを調べてみたところ、夢で見たり聞いたりしたことが真実であると裏づけられた。昔話がそれ自身を説明したのだ。それはすべて過ぎ去った真実であり、脳のどこか辺鄙へんびな場所に蓄えられ、私の意志のとおりに薄暗い過去から持ち出され、もう一度現実にされたのだ。

そして、奇妙な、また極めて不可解な話だが、私はそのすべてを独立した観客、部外者として見てるのであって、彼が以前にその役を演じた場面場面を再び順に演じていく俳優としてではなかつたのだ！

それでも、多くのことが私を当惑させ、悩ませた。

例えば、ゴーゴーの背後に立つたとき、彼の背中や後頭部が顔と同じくらい見え、どうやら実物そっくりだったのだが、私は彼の背中も後頭部も見たことはなかつた。私がその合わせ鏡の秘密を知ったのは、ずっと後年のことだった。それから、ゴーゴーが部屋を出たとき、時に彼はそれをしながらどうやら私を通り抜けて（夢の一瞬の曇りとともに）反対側に出るようなこともあつたが、ほかの人々は理性を保ち、自然に、前と同じように話し続けていたものだつた。木と壁と家具が、今では私の眠つている脳にのみ存在しているその消えて久しい木と壁と家具が、耳と目を持っていて、ゴーゴーが離れるときに通過した、私が想像することしかできない思い出のものすべての

音と形と意義を記憶に留めた、とでもいうのだろうか？

料理人のフランソワーズは、ゴーゴーが学校に行っているとき、母とディナーについて話し合うために応接間に入ることがよくあった。それで私は、与えられた注文を聞いて、その後（ゴーゴーがいつでも十分に満喫していた）食事をするところに参加してみると、母が注文したとおりだった。謎の中の謎だ！

彼女たち、過ぎ去った時代の幽霊たちが一緒に導いてくれたのは、何と楽しい生活だったことか！ あんなにも温和で、平穏で、寛大で、樂天的な状態だった——半分はブルジョワ、半分はボヘミアンで、それでいて目立った簡素さ、洗練、非常に貴族的な態度と会話という特徴があつたのだ。

使用者たち（たつた三人——ハウスメイドのテレーズ、料理人のフランソワーズ、かつては私の子守でそのときは母のメイドになっていたイギリス人セアラ）は、この上なく優しく親しみやすい言葉で友人のように私たちと話し、私たちの関心事に自らも興味を持ち、逆もまたしかりだった。私は、彼女たちがいつも、私たちそれぞれにおはようとおやすみなさいを言うのを望んでいることに気づいた——ルイ＝フィリップ時代におけるパッシーのブルジョワの、かなりフランス的な流儀である（彼はブルジョワ王だった）。

私たちの料理もブルジョワだった。（十ヶ月のロンドン・ディナーの後の）ブーラー・イベットソンの口は、*soupe à la bonne femme* 「田舎のおばあん風スープ」、*soupe aux choux* 「キャベツのスープ」、*pot au feu* 「ボフ」、*blanquette de veau* 「子牛のホワイ

トシチュー」、*bœuf à la mode* 「流行の牛肉シチュー」、*cotelettes de porc à la sauce piquante* 「豚の骨付き背肉のピリ辛ソース」、*vinaigrette de bœuf bouilli* 「牛肉のビネグレットソース煮」——フランス人をかなり若いうちから肥満体にする名料理の数々——それに極上のクラレット（あの幸福な時代、一ボトル一法兰だった）——を見たり湯気を嗅いだりすると、よだれが出そうになつた。クラレットのコルクが抜かれるや否や、その芳香が部屋を満たすように思われた！

そのような食事が終わると、時に感無量な「*le beau Pasquier* 「美男子バスキエ」」が、信じられないような声の花火を唐突に打ち上げる」とがあった。半音階の上昇ロケットが、かなり高く上昇して柔らかく爆発してから、美しい色の星々のように抑揚やトトリルやルラードをめいづぱい伴つて下降してくる。するとテレーズがこう叫んだものだつた。「Ah, q'c'est beau! 「ああ、何てきれいなんでしょう！」」まるで本物の花火大会に参加しているかのようだ。テレーズは完全に正しかつた。私は人間の喉からそのような声が出るのを聞いたことがなく、そんなことが可能であると思ひもしなかつた

だらう。ヨアヒムのヴァイオリンだけが、そのような美技をそのように美しくやつてのけるのだ。あるいは、彼は私たちに、ブルターニュで撃つた狼や、ブルゴーニュで撃つた猪のことを話したり——彼は素晴らしい狩猟家だったので——、シャルル十世の *garde du corps* 「親衛兵」としての冒險や、すぐに私たちに名声と幸運をもたらすだろう驚くべき発明について話したりした。

また、アンリ五世に忠義をもって乾杯したりもした。彼はとてもひょうきんで楽天的で機知に富んでいたため、彼が話すのを聞くのは歌うのを聞くのと同じくらい楽しかった。

しかし、この消えてしまった生活の奇妙な喜劇全体には、別の、悲しい側面があつた。



LE BEAU PASQUIER [美男子バスキエ] は王に乾杯する

彼らは空中樓閣を築き、計画を立て、父に金が入ったときに彼らのものになる富と幸福のすべてを話し、彼らがしようと思うすべてを話した。近い将来を悲しいほど意識することなく。これはもちろん、彼らの歴史の愛情深い聴衆にとっては過去の歴史でしかなかつたのだ。

そんなとき、愛と同情が合わさつた耐えがたい痛みで涙がこぼれたものだつた。それはパッシーの旧家のワックスがけされた床の上に落ちては乾き、私は目覚めたときに、ペントンヴィルの枕の上がまだそれで濡れているのに気づくのだつた。

• • • • •

間もなく私は、一、二秒の間なら練習によつて単なる見物人以上になることを発見した——もう一度俳優になれるのだ。自分（イベットソン）を昔の自分（ゴーゴー）に変える。そうすれば、私が深く愛した人々に触れられたり愛撫されたりが可能になる。母が私にキスすると、私はそれを感じた。呼吸を止められる長さとちょうど同じくらい、夢が曇るまで、セラスキア夫人と手を繋いで歩いたり、歩きながら四、五ヤードの間、ミムジーの軽い体重を背中に、彼女の腕を首の周りに感じたりすることがで

きた。もし曇りが目を覚まさせなければ、それはすぐに消え去り、私はもう一度ピーター・イベットスンとなつて、散歩の間、彼らの中に混じつて歩いたり座つたり、話し声や笑い声を聞いたり、食事を見たりした。父の歌と母の甘やかな演奏を聴いたが、常に彼らからは見えず、顧みられることもなかつた。さらに、すぐに私は、うまく夢を曇らせることなく物に触れる方法を習得した。私は薔薇を摘み、ボタンホールに差し込んだが、それはそこにそのままになつていた——だが、見よ！ 私が摘んだまさにその薔薇は、依然として薔薇の茂みにもあつたのだ！ 私は石を拾つて壁に投げた。それはそこで音も立てずに消えてしまつた——その石そのものが私の足元にまだあつた。何度もそれを拾つて投げたとしても、そうなのだろう！

この世界での覚醒時の喜びは、睡眠時に得られるこれらの複雑な喜びに、激しさにおいて匹敵し得なかつた。覚醒時の喜びは、相対的に非常にわずかで、非常に曖昧なものに思われた——集中力と脇目も振らないような注意力が欠乏するため、その感覚のかなりの量が逃げてしまふわけだ——覚醒時の知覚力は、とても鈍い。

それは人生の内部にある人生——より激しい人生——だつた。そこでは、夢の国の魔法と組み合わされた幼年時代の新鮮な知覚力があり、満たされない憧れが一つだけあつた。しかし、その名はライオン憧れは粗暴なほどのものだつただつた。

その夢の国でもう一度タワーズ公爵夫人に会うことが、熱烈な憧れだつたのだ。

こうして、しばらくの間、私は以前よりも孤立して暮らしていたのだが、自分の前に開かれたこの奇妙な新しい人生によつて、自分の孤独はすべて十分に補償されていた。驚異も歓喜も決してやむことはなかつた——そんなある朝、私はレディ・クレイから短信を受け取つた。彼女はクレイ家の、ハートフォードシャーにある田舎の大邸宅に厩舎(きゅうしゃ)を建てたがつていて、私に一昼夜そこに行つてほしいと依頼してきつた。

当然私は、単なるビジネスの問題としてこの招待を受け入れなければならなかつた。レディ・クレイは、友人としては私を長いこと「厄介払い(熱いボテ扱い)」していただようと思われ、幸いにも、私が彼女を切り捨てていたということには気づかないようだつた。

しかし、彼女は私を友人として受け入れた——旧友として。私の内気と紳士気取りは、彼女の手に触れるだけで私から落ちていつた。

私は午後の早い時刻にクレイ邸に到着し、すぐに仕事に取りかかつた。それは数時間を要したため、私はディナーのための着替えにからうじて間に合うくらいに邸に着

いた。

私が応接室に入ったとき、そこには人が数人いて、レディ・クレイはある若い女性に私を紹介した。教区牧師の娘で、私が彼女をディナーにエスコートすることになった。私は、応接間に集まつたその来客が、ほかならぬサー・エドウイン・ランドシーアを含んでいると彼女に言われたことで、非常に感銘を受けた。何年も前、私はミムジー・セラスキアのために、彼の絵の一枚を版画にしたものを作ったことがあつたのだ。その絵は『挑戦』あるいは『物事には必ず前兆というものがある』という題名だった。私は、すこぶるおしゃべりで明るく、自分の名声に少しも困惑していないその素晴らしい小男を眺めて楽しんだ。

ある客が遅れていて、自分の食料をいろいろと待ち遠しがつてているように見えるクレイ卿が叫んだ——。

「もし時間に正確だつたら、メアリーはメアリーじゃないだろう！」

ちょうどそのとき、メアリーが入つてきた——そして、そのメアリーこそは、誰あらう、タワーズ公爵夫人その人だつたのだ！

私の下半身では膝が震えた。しかし、そんな繊細な軟弱さに屈している暇などはない

*『挑戦』……一八四四年の絵画。発表後すぐに版画版が雑誌などに載つたものであろうか。

かつた。クレイ卿が彼女を連れていった。行列が食堂に入場し、そのほぼ最後尾に我が若き教区牧師の娘と私がいた。

公爵夫人は私から遠く離れて座っていたが、私は一瞬彼女と目が合い、その中にあの優しい認識の微光を再び見たような気がした。

魅力的な隣人が私に、今までに見た中でターヴーズ公爵夫人が最も美しい女性だと思いませんか、と尋ねた。

私が我が意を得たりと二つ返事で同意すると、あの方は美しいのと同じくらい善良で、善良であるのと同じくらい賢いのですよ、と言われた（あたかも私がそれを知らないかのように）。あの方は何だって、自分が着ているものだって人にあげてしまうでしょう。他人のための苦労を厭うようなことはありません



メアリーは遅刻する

ん。でも、ご主人とはうまくいっていないのです。お酒飲みで、まつたくもって不品行で下品な人ですから。の方は深い悲しみを抱えています——とても愛しているお子さんが一人だけいるのですが、知恵遅れなのです。いつかはタワーズ公爵になるのでしょうかけれど。の方は、高い教養をお持ちで、外国語も達者で、素晴らしい音楽家で、イギリス社交界全体でたぶんいちばん人気のある女性でしょう。

ああ！ この哀れな筆記者よりもタワーズ公爵夫人を愛した者がいただろうか！ 彼女はその者の魂で生き、明るい特別な星——太陽——のように輝いたのだ。リントットが言つたように、彼女の吸引力の勢力下に、知らないうちにかくも急速に引き込まれた者がいただろうか！ いつか、最終的には永遠に吸い込まれてしまうことを、私は願つてゐる！

「タワーズ公爵夫人は、結婚前はどんな人だったのですか？」と私は尋ねた。

「セラスキア嬢ですわ。父上はハンガリー人で、お医者様で、政治改革論者で——それはもう魅力的な方でした。の方はその環境で礼儀作法を身に付けたのです。母上は、あの方がほんの子供の頃にお亡くなりになつたのですが、良家のとてもきれいなアイルランドの娘さんで、クレイ卿のいとこに当たります——デズモンド嬢と言つて、その興味深い愛國者とは駆け落ちで一緒になりました。二人はパリの近くのどこかに

住んでいました。そこはセラスキア夫人がコレラで亡くなった場所で………。どうかなさいまして？——ご気分がすぐれませんか？」

私は暑さで気が遠くなつたふりをして、自分を圧倒した感情と当惑の洪水を全力で隠した。

私は、タワーズ公爵夫人をもう一度見ることはあえてしなかつた。

「おお！ 痩せ細つた腕が私の首に巻き付き、冷たく青白い頬が私の頬に当たつていた、かわいいミムジー。私はつい昨夜、それらを感じたばかりだ！ それが、ここまで女性的な健康と強さと美しさを備えた絶世の美女に成長するとは！——あの魅力的な、いつでも準備ができていて笑いと微笑みまで身に付けて！ もちろん、当時はまづげがなかつたあの目が、今は周囲を厚く縁取られている！——かといって、私は何だってその目を見誤っていたのか？ ああ、ミムジー、あの当時、君は決して微笑んだり笑つたりしなかつた。そうでなければ、私は君の目を再び認識できたはずだ！ 今ならできるか？——できるのか？」

こうして、私は女性たちがいなくなるまで自分の殻に閉じ籠もり続けたが、私の若く美しい相手役は、すぐに回復しますよ、と優しい心配と上品な希望を表明してくれた。私は、女性たちに加わる時が来るまで黙つて座つていた（テーブルを占拠していた）

偉大な画家の、機知に富んだ華々しい逸話さえ追跡できなかつた）。その後、私は自分の部屋に引き上げた。自分が聞いたことの後では、そうすぐには再び彼女と顔を合わせることができなかつたのだ。

善良なるクレイ卿が親切に尋ねに来てくれたが、私はすぐに気分は悪くないと言つて彼を満足させた。しかし、彼は立ち去らずに話をした。デイナーは大いに彼の利益になつたようで、彼はタバコを吸いたがつた（しかも誰かと一緒に吸いたいと）。食堂では、出席していた老主義教師のためにそれができなかつたのだ。それで彼は、フランス人のように小さな紙巻きタバコを自分で巻いて、心ゆくまでスパスマと吸つた。

彼は、自分が雇つた控え目な建築家が自分に出ていってほしいとどれほど望んでいるかなど、ほとんど想像もしないのだった。そう望んでいたのも、彼がタワーズ公爵夫人——彼は「メアリー・タワーズ」と呼んでいた——のことと、「タワーズ」がどれほど足蹴にされたり荷車の後ろで鞭打たれたりして当然の人物なのかを話し始めることだつたが。「そう、彼女はイギリスでいちばん善良で美しい女性で、と

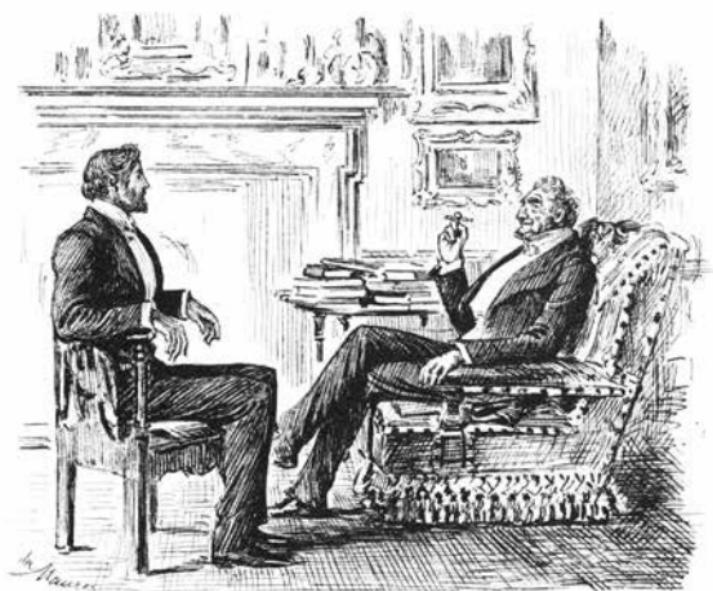
*女性たちがいなくなるまで……この当時の食事会では、先に女性が食堂から応接間に引き上げ、男性はしばらく食堂に残つてタバコを吸つたり男どうしで雑談したりした。

*荷車の後ろで……実際にあつた刑罰で、上半身裸で荷車に縛り付けられ、鞭打たれた。

にかく頭の回転が速い！ 彼女がそうじやなかつたら、彼はずつと前に破産裁判所行きだつただろう」等。「彼女と肩を並べられる公爵夫人などイギリスにはいやしない。見た目でも頭脳でも、教養においてもだ。彼女の母親は私の親戚なのだよ（メアリーを除けば、史上最高級の美女だった）。彼女はその環境で礼儀作法を身に付けただ！」等々。

こんなふうに、この高貴なる伯爵は私のために音楽を作ってくれた——甘美で苦い音楽を。

メアリー！ それは、特にイギリス人の唇には天国的に響く名前だ。愛らしいYを使い、イギリス流に綴られる。



甘美で苦い音楽

偉大な人々はその名前への情熱を持っていた——バイロン、シェリー、バーンズ。しかし、私よりも大きな情熱を持つ者や、それに正当な理由を持つ者は、誰もいなかつたと思う。

とはいえ、時には、またあちこちに、性悪なメアリーもいたに違いない。醜いメアリーだつていただろう。それどころか、かつてはその両方を兼ね備えた血まみれメアリーがいたのだ！ 信じられないような気がする！

メアリーなのだ、まさに！ なぜヘカベではないのか？ それは、私がタワーズ公爵夫人にとって何だったのか？ ということに現れている。

再び一人きりになつたとき、私はベッドに行つて、仰向けで腕を上げ、本当の夢を期待して眠ろうした。ところが眠りは訪れず、私はフランス人が言うように白い夜^{眠れぬ夜}を過ごした。早起きして公園を散歩し、朝食の時刻になるまで厩舎に興味を向けようとしてみた。誰も起きてこないので、私はこの上なく親切なレディ・クレイと二人だけで朝食を取つた。彼女が私のことを非常に機知に富んだ仲間だと感じたとは思えな

* 血まみれメアリー……十六世紀のイングランド女王メアリー一世。プロテスタントを三百人以上処刑したことからこう呼ばれた。

* ヘカベ……ギリシャ神話で、息子を殺されたため、犯人の王とその息子たちに復讐する女性。

かつた。その後、私は考へるために厩舎に戻り、うとうとしていた。

十二時頃、木のボールの音が聞こえ、芝生で「クロッケー」に興じてゐる人がいるのに私は気づいた。それはまったく新しいゲームで、数年後に流行し始めた。

私は芝生の近くの、枝が垂れた大きなトネリコの木の根元に座つた。それはテントのようで、下に椅子とテーブルがあつた。

やがて、レディ・クレイがタワーズ公爵夫人と一緒にそこにやつて來た。私は空に飛び上りたかったが、その場に釘付けになつていた。

レディ・クレイが私を紹介し、ほとんど間髪を入れずに使用人が彼女宛の伝言を伝えに來た。私はこの世にたつた一人の女性と共に残されたのだ！　私の心臓は口から飛び出しそうで、息は乾き、こめかみ両側が脈打つていた。

彼女は私に、この上なく自然な物腰で、私が「クロッケー」をするかどうかを尋ねた。
 「はい——いえ——少なくとも、時々は——つまりその、それについては全然——おお——忘れました！」私は自分の馬鹿丸出しの言葉にうめき声を上げ、両手で顔を隠した。彼女は、私がまだ調子が悪いのかと尋ね、私はいいえと答えた。それから彼女は、いろいろな、あらゆることについて、本当にゆつたりと氣楽に話し始めた。私がもっと樂な気分になるまで。

彼女の声！　夢の中以外ではちゃんと聞いたことがなかつたが、それは夢と同じく——とても豊かで、聞き手に合わせて調整された声——低い——コントラルトで、非常に多様かつ快い抑揚を持っていた。彼女は、一般的なイギリス人女性よりも話すときにより多くの動作を用い、それによりセラスキア夫人を思い起こさせた。私は、彼女の手が長くてとても細く、足もうだと気づき、ミムジーもそ

*クロッケー……八ページ、序文でマッジが書いていた「彼女（＝教区牧師の娘）はクロッケーをプレイしていたうちの一人だったのです」は、ここを指している。



紹介

んなふうだったことを思い出した——それらは哀れなミムジーの唯一の美点だと見なされていたのだ。私は、彼女の左のこめかみにほとんど見えないような傷跡があることに気づき、夢の中で大通りを一緒に歩いていたときに自分がそれに気づいていたことを、戦慄とともに思い出した。覚醒時の生活の中では、小さな傷に気づくほど彼女の近くにいたことはなかつたし、昔のミムジーにそんな傷はなかつた——それは確かだと感じた。私は最近ミムジーをよく見ていたからだ。

私はその状況に慣れてきた。そこで、ロンドンのレディ・クレイ宅で一度お会いしたことがありますね、と思い切って言つてみた。

「おお、そうです。覚えていました。ジュリア・グリジが『柳の歌』を歌つていました」それから彼女は目をくしゃくしゃにして笑い、顔を赤らめ、こう続けた。「あなたが片隅の、ゲインズバラの名画の下に立つていてるのに気づいていました。あなたは、かつて知り合ったフランス少年を思い出させます。その子は、私がフランスで少女だった頃、とても親切してくれたのです。彼の父上は偶然あなたに似ています。でも、あなたはミスター・イベットソンで、イギリス人建築家で、レディ・クレイがおっしゃるには非常に将来有望な方だとか」

「私は昔、フランス少年だつたんです。ある親戚を満足させるために名前を変えなけ

ればならず、それでイギリス人になりました——言つてみれば、私はずっと、本当にイギリス人だったのです

「まさか、何て不思議なことでしょう！　あなたのお名前は何だつたのですか？　當時の」

「パスピエ——ゴーゴー・パスピエです！」うめくようにそう言うと、目に涙がこみ上げてきて、私は目をそらした。公爵夫人は答えなかつた。私が向き直つて見ると、彼女は私を見ていた。ひどく青ざめ、唇は真っ白で、両手を膝の上で固く握りしめ、至る所を震えさせながら。

私は言つた。「あなたはかつての少女ミムジー・セラスキアですね。私はあなたをよく背中におぶつて運んでいました！」

「おお、何という！　おお、どうしましよう！」彼女はそう言つて泣き始めた。

私は立ち上がり、彼女の目が乾くまでトネリコの木の下を歩き回つた。クロッケーに興じている連中は自分のゲームに集中していた。

私は再び彼女のそばに座つた。もう目は乾いていた。ついに彼女が口を切つた——「本当に恐ろしいことになりました！　あなたのお気の毒なご両親と、私の愛する母については。母を覚えていますか？　母はあなたが去つた一週間後に亡くなつたので

す。私はパパ——セラスキア医師——とロシアへ行きました。みんな恐ろしいくらい
ばらばらになってしましました！」

それから私たちは、往時のことや今は亡き愛する人々について、徐々に、まつたく
自然に話し始めた。彼女は決して私から目をそらさなかつた。しばらくしてから私は
言つた——

「パッシーへ行つたら、何もかも変わつていて、みんな建物で塞がれてしまつている
ことが分かりました。それで私は今にも気が狂いそうになりました。サン＝クルーに
行くと、あなたがフランス皇后と一緒に車に乗つてゐるのを見ました。あの晩に、あ
の異様な夢を見たのです！ 私はポンプ通りで四苦八苦していて、ちょうど大通りの
門に達したらあなたがそこにいた、という夢です」

「何てこと！」彼女は小声で言い、またもや青ざめて全身を震えさせた。「何をおつしや
りたいの？」

「そう」私は言つた。「あなたが私を助けに来ました。私は小人と恐怖に追われてい
たのです」……

「彼女「何ですって！ ふ——二人組の小さい看守に、ですか？ 男とその妻で、踊つ
てあなたを閉じ込めようとしていた？」

今度は私が「何ですって！」を叫ぶ番だった。私たちは一人とも恐れおののき、身震いした。

私は言った。「あなたが私の手を取ると、何もかもがたちどころに現れたのです。私の母校が、刑務所の代わりに立ち上りました」

彼女「黄色の乗合馬車も？ première communion 「初聖体」に向かう男の子たわぬ？」
 私「そうです。群衆がいました——フランソワおじさんとおばさん、それにリヤール夫人、食料雑貨屋の奥さんです、それに——それにミムジー・セラスキア。髪を短くしていました。オルガンが私がよく知っている曲演奏していましたが、今は思い出せません」……

彼女「『Maman, les p'tits bateaux? [ママ、 小舟なお船ど]』ではなくて？」
 私「おお、やつでした！」

'Maman, les p'tits bateaux
 Qui vont sur l'eau,
 Ont-ils des jambes?'

『ママ、水の上を行く
小さなお船に
脚はないの?』』

彼女「それです!」

'Eh oui, petit bête!

Sils n'avaient pas

Ils n'march'raient pas!

『あらまあ、お馬鹿さん!..
もしかしたら
進みませんよー。』』

彼女は椅子に腰を下ろした。青白く、打ちひしがれて。しばらくして——
彼女「それから、私は本当の夢を見る方法について良い助言をして、私たちは私の

昔の家に着き、私はポーチの文字をあなたに読ませようとして、あなたはそれを間違つて読み、それで私は笑つた、と

私「そうです。私は『テト・ノワール』と読みました。間抜けもいいところでしたね？」
彼女「その後、私がもう一度あなたに触れると、あなたは『ノートルダム広場』と読んだ」

私「そう！ あなたがさらにもう一度私に触れると、私は『パルワ・セド・アプタ』と読みました——小さいながらも調和の取れた、です」

彼女「それが意味ですか？ でも、少年の頃、あなたは私にセド・アプタは一つの単語で、『建築物』のラテン語だと言いましたよね。それ以来、私は『パルワ・セド・アプタ』を『petit pavillon 「小さな建物」』の意味だと信じ込んでいたんですよ！」

私「お恥ずかしい！ 間違つたラテン語でしたね。その後、あなたはもう一度良い助言をくれました。何かに触つたり花を摘んだりしてはいけないことについてです。私はそれをしませんでした。それからあなたは公園に入つて見えなくなりました——光が、寝ているときも起きているときも、私の人生から離れていきました。それ以来、私はあなたの夢を見ることがかないません。今日以降も、再びあなたにお目にかかるとは思えません！」

その後、私たちは長いこと黙り込んでいたが、私は時々ハミングしたりあーとかえーとか言つたりして話そと努力した。私は感情の葛藤で気分が悪くなつた。とうとう彼女が口を開いた――

「親愛なるイベットソンさん。これはすべてがあまりにも異常すぎるので、私はお暇いどまして、最初から考えてみなければなりません。もう一度あなたに会えたことが私にとってどんな出来事だつたか、とても言い表すことはできません。それに、その私たち二人に共通の二重の夢も！　おお、私は言葉にできないくらい幻想されて、今、まるで夢を見ているかのような気分です――このすべてが非現実的で、ありそうにないと感じられていることを除けば――あまりにも現実離れしていると！　私たちは、もう離れた方がよさそうです。もう一度会えるかどうかは分かりません。あなたは、ちよくちよく私の思考の中に現れることはあっても、夢の中にもう一度現れることはないでしょう――少なくとも、私はそれを抑制することができます――あなたの夢の方に私が現れることもありません。あり得ないことなのです。かわいそうな父は、死ぬ前に私に夢の見方を教えてくれました。目が覚めているときの悩みに対し、夢の中で無邪気な慰めを見いだせるようにと。私には、悩みはたくさんあつたし、それらは大きなものでした。父がそうであつたように。そうした方がよさそうだと思えたら、手

紙を書くかもしません——でも——期待はしないでくださいね。私はもうさよならを言つて、あなたとはお別れするつもりです。あなたも今日出発ですかね？何よりです。私は、これが最後のお別れになればいいと思つています。あなたが私にどれほど関心を抱かせるか、どれくらいずっとそうだったかは、言葉にできなくらいです。あなたはずっと前に死んだと思つていたのです。私たちはしょっちゅうお互いのことを考えることになるでしょう——それは避けられません——でも決して、決してお互いの夢は見ません。それはもうないので。

親愛なるイベットスンさん。

私は、一人の人間が別の人間に祈ることができます。祈ることができるありったけの幸せが、あなたに訪れることがあります。それでは、お別



告別

れです。願わくはあなたに天の神様の祝福がありますように！」

震え、青ざめ、目に涙を溜めながら立ち上がり、私の両手を固く握り締めてから、彼女は私から去っていった。夢の中で私を置いていったように。

私の人生から光が離れ、私はもう一度孤独になつた——彼女に会うことがなかつた場合よりも、いつそう哀れで慘めな孤独に。

私はペントンヴィルに戻り、表面上は自分の単調な暮らしを再開し、普段どおり食べて飲んで働いて動き回ったが、それは通常の平凡な夢の中でしているようだつた。というのは、今では夢——本当の夢——だけが、私にとつて唯一の現実になつていたからである。

夢の中でもたらされた驚異があまりに大きく、あまりに信じがたく並ぶものはないものだつたため、人生のあらゆる状況が変更され、翻ひるがえされてしまったのだ。

私と、もう一人の別の人間が、二重の夢、私たち二人に共通の夢の中で、出会つた——実際に、本当に出会つたのだ——。そして、互いに手を握り合つた！ しかも、それぞれがもう一人に対し、忘れようにも忘れられない言葉を話したのである。

この別の人間と私は、何年にもわたつて——子供の頃から——お互の記憶の中に大切に安置されてきて、今では非常に驚異的で前例のない経験という繋がりによつて

互いに結び付いている。そのため二人は、生命と感覚と記憶が続く限り、もう一人の思考から外れることはなさそうだ。

私の心には、私たちがクレイ邸のトネリコの木の下で話し合ったときの彼女自身は、あの爽やかな夢の大気の中で大通りを一緒に歩いていた、別の、もつと親しげな彼女自身よりも、生き生きした感じが乏しいように浮かんでくる。そこで私たちは、生き、動き、ほんのわずかな間だけ一緒にいたけれども、あのときはそれぞれが、もう一人は自分が眠っている間の、想像力による単なる空想的産物にすぎないと思っていた。夢のような物質で作られたものだと！

だが、見よ！ あれは全部真実だったのだ——日常生活の普通の経験と同じくらいの真実——もつと（十倍以上も）真実らしい真実だ。なぜなら、より鋭くより意気揚々とした感覚による認識、より分散しにくい注意力によつて、私たちは互いの本当の内面的存在をより意識していたからである——しばらくの間、より密接に繋がつた内面的存在を——世界開闢以来、おそらく二人の生身の人間がそうなつたであろうよりも、さらに密接に。

あの夢の中の手の握り——それは、クレイ邸での悲しいさよならの手の握りよりも、どんなに膨大な量のことをもう一人に伝えていたことか！

私は自分の惨めな外面的生活中で手紙を待ったが、無駄だった。彼女にもう一度会えることを期待して、公園や通り——特に彼女が住んでいた通り——を頻繁に訪れたが、無駄だった。あの家は閉ざされていた。彼女は遠くに——後に知ったところでは、アメリカに——夫と子供と共に行ってしまったのだ。

夜になると、かなり上手に呼び起こすことを身に付けたおなじみの情景で、私は彼女の痕跡を見つけたいという変わらぬ切実な願望をもって、隅々まで探索した。私は「パルワ・セド・アプタ」からはほとんど離れなかつた。セラスキア夫人とミムジーと少佐がいて、私の母とゴーゴーがいつも出入りしていた。もちろん、私のこの中身のある靈体には気づかぬまま、まるで私は存在していなかつたかのように。私はミムジーと彼女の母親を見ながら、タワーズ公爵夫人が誰なのか、誰の娘なのかを、一目見ただけで認識できなかつた自分の愚鈍さを訝しんだ。身長、声、目、足取りと身振りの独特的の癖——あのような最近の夢の機会の後で、彼女を再認識するのに失敗するとは、一体どういうことだろう？

そしてセラスキアは、今の彼の娘が女性たちの中でもそびえ立っているように、この全員の中でそびえ立っている。私は、彼が自分の娘の中で再び生きているのを見ていた。彼の微笑みは、彼女のと同じく、目が閉じられる微笑みだった。もし当時のミム

ジーが微笑むことがあったなら、私はそのかなり独特な特徴によつて彼女を再認識できたことだらう。

この彼の娘（今日の公爵夫人ではなく、往年のミムジー）に、今の私は決して飽きるはずもなく、彼女にゴーゴーと一緒にいるすべての場面を何度も何度も繰り返させた。私の記憶にとつても彼女のそれにもとつても、とても大切な場面を。要するに、シャルマン王子は私なのであり、その見えない臨席を彼女は思いもよらない何らかの方法で意識していたのである。何という奇妙な洞察力！　だが、妖精タラパタポウムはどうにいいるのか？　言葉にできないほどの憧れの対象は、その年の間は現れなかつた。彼女は言つていた。私が彼女の夢の中に、あるいは彼女が私の夢の中に再び現れることは、決して、決してない、それでも、私たちはお互いの思いの中に絶えず存在し続けることだらう、と。

こうして、クレイ邸における最後の生身の会合の後、十二か月が瞬く間に過ぎていった。

ここで私は、不本意な心と極めて気の進まないベンによつてできるだけ少ない言葉で語らうと努めるという、人生における大きな苦難に直面しなければならない。

読者は、もし途中を飛ばすことなく読んでくれるほどの善良さを持ち合わせていらっしゃるのなら、私が数年前ホプシャーで恋に落ちたような気になつた、美しいディーン夫人のこと思い出すことになるだろう。

あれ以来、私は彼女に会つていなかつた——それどころか、彼女のことはほどんど忘れていた——のだが、彼女がホプシャーを離れてロンドンに来て、自分よりもかなり年上の裕福な男性と結婚したことは何となく耳にしていた。

さて、私はある日ハイド・パークに行つて、馬車で通過していく人々を見つめていたのだが、かなりきれいで真新しい無蓋馬車むがいが通り過ぎたとき、その中に悲しげなディーン夫人（旧姓）がいて、彼女の今の栄光の中、独りぼっちで、実際かなり不機嫌そうな顔をしているのが見えた。彼女は私を認めてお辞儀をし、私はほんの一瞬心に動搖を感じながらお辞儀を返し——旧交への何気ない感謝の印だ——、かつては彼女をあんなに称賛できた自分のことを不思議に思いながら、自分の道を進んだ。

やがて、私は肘に触れられて驚いた。それはまたもやディーン夫人であった——私はこの後も彼女をディーン夫人と呼ぶことにする。彼女は車から降りて、歩きで私を

追ってきたのだった。彼女の望みは、私が彼女と一緒に公園の周囲をドライブし、昔話をすることであった。私は従い、これを最初で最後として、自分がよく好奇心に満ちた目で見ていた、あの誇り高く陽気な行列の一部をなしているのに気づいた。

彼女は、私がイベットスン大佐と和解したかどうかを知りたくて仕方ないという様子で、私が、していませんし、おそらく今後もする気はありません、私の彼に対する感情は激しく辛辣しんらつで、ずっとそのままである可能性が高いものです、と言うのを聞くと喜んだ。

彼女は彼を、ものすごく嫌っているようだった。

彼女は、私の健康と私の人生の見通しを親切に尋ねてくれたが、私の答えにはあまり興味はなさそうだった——その後、私がフランスでの生活や愛する両親のことを話し、彼女がそれを熱心な共感をもって聞き、私がいたく感動するまでは。彼女は、彼らの肖像画はあるかと訊いた。私は持っていた——極めて優れた細密画を。別れるとき、私は翌日の午後に彼女を尋ね、その細密画を持っていくと約束した。

彼女は元気のない、ひどく退屈した女性のように見え、どうやら大きな知り合いの輪がないらしかった。その日公園全体でお辞儀した唯一の人間が私だったと、彼女は言つた。夫はハンブルクにて、彼女は彼と一両日中にパリで会う予定だった。

彼女に会うよりうれしいと感じるような友人があまりいなかつたので、私は喜んで訪れ、約束したとおりに肖像画を持っていった。

彼女はマーブル・アーチ近くの大きな新築の家に住んでいた。私が訪ねたとき、彼女は完全に一人で、すぐに私が細密画を持ってきたかどうかを尋ねた。それらをかなり熱心に見て、それから私を見てから叫んだ――

「あらまあ、あなたはお父様の肖像そのものですね！」

確かに、私はいつもそのように見なされてきた。

父の眉も私のそれも、特に、鼻梁と稀に見る独特な方法で接触しており、彼女はこれにかなり強い印象を受けたようだつた。父はシャルル十世の「gardes du corps」「親衛兵」制服の見本となつていた。彼は二年間その任務に就き、「le beau Pasquier」「美男子Pasquier」というニックネームをもらつていたのである。ディーン夫人は、それを見つめるのにまったく飽きないようで、父が「若い娘が夢見る理想像そのものであつたに違いありません」と言つた（親子で似てゐるという話をした後ゆえ、私を赤面させた間接的な賛辞である。数年前に上手にやつてのけたように、彼女が再び私を馬鹿にしようとしているのではないかと、私はほんと不審に思い始めた）。

それから彼女は、私の若年期と思い出に再び興味を示し、両親が愛し合つていたか

どうかを知りたがつた。二人は極めて愛情深く恋人のような夫婦であり、お互い一目惚れで、死ぬまでそのままだつたと、私は彼女にそう言つた。会話はこんなふうに続いた。私がすっかり興奮するまで、すなわち私に権利がある、邪悪なおじの陰謀に巻き込まれなかつたいくばくかの財産について、彼女が知つているに違いないと想像するまで。

というのも、私は夢の中で、おじは父の不俱戴天の敵で、父の経済的破滅の主たる原因であつたことに、もうだいぶ前から気づいていたからである。複雑すぎてここで説明するのは困難だが、それは利己的で冷酷で不正な行為によつてであつた——紛うことなきシャイロックである。

パッシーの昔の応接間で、ゴーゴーが本に没頭している間、父と母の間で交わされた長い会話を（夢の中で）聞くことで、私はその情報を得ていた。ゴーゴーの無頓着な耳を通つて、別のことにつ心を奪われてゐる小さな脳に入つたすべての語句は、蓄音機のようにそこに記録されており、今や彼らの間に気づかれずに座つてゐるピーター・イベットスンのために何度も何度も繰り返された。

私は冗談めかして、もしかして、私がイベットスン・ホールの正当な相続人である

* シャイロック……シェイクスピア『ベニスの商人』の強欲なユダヤ人金貸し。

ことが分かったのですか？と尋ねてみた。

彼女は、それなら私としても何よりの喜びだろうけれど、私やあなたにそんな幸運は待ち構えはいない、と答えた。彼女はもうずっと、イベットソン大佐がまだ絞首刑になつていない最低の悪党であることに気づいていて、彼はこれ以上悪くなる余地が見いだせないほどだという。

そのとき私は、彼がどれだけ頻繁に彼女のことを話していたかを思い出した。私にさえ話していたのだ。それに、おそらく真実ではないことをほのめかしたり遠回しに言つたりもしていたが、私は信じなかつた。それらが真実なのか虚偽なのかの問題がどうであれ、そういう行為が彼を見下げ果てた、口にするのも汚らわしい者にしたことに変わりはない。

彼女は、おじが私に彼女のことを話したことがあつたかどうかを尋ねた。たくさんの説得と巧妙な詰問の後で、私は彼女に、自分が勇気をもつて言える限りの真実を伝えたところ、彼女は雌の虎のようになつた。彼女は、彼がホプシャーで彼女を中傷し、評判を落とすことを実にうまくやつてのけたため、彼女と母親はそこを去らなければならなかつたと、私に断言した。そして、全世界の前で告白できないようないかなる関係も二人の間にはなかつたことを、極めて厳肅に私に誓つた（彼女が真実を話して

いたことを、私は完全に信じている)。

本当は、その富と地位のため、彼女は彼との結婚を望んでいた。彼女と母親は二人ともかなり貧乏で、生活を維持し、世間の前でまともな外見を保つことがしばしば困難になつたからである。そして、彼は彼女を選び出し、最初から目立つた注目をし、その注目が真剣で結婚を考えているものであると信じてしまうようなあらゆる理由を彼女に与えていた。

この時点では彼女の母親グリン夫人が入ってきて、私たちは旧交を温めた。彼女は、自分の娘に対する私の男子生徒的憧れを完全に容認してくれていた。彼女の憎悪のパワーはすべて、娘同様イベットソンに集中していた。私は、彼女たちが受けた非道な仕打ちと彼の恥ずべき行いの長い物語を聞きながら、以前よりもいつそうひどく彼のことが嫌いになつていき、この場で彼女たちの擁護戦士になり、直ちに彼女たちの喧嘩を買って出る覚悟ができていた。

しかし、これはしない方がよいと思われた。彼女たちの評判が彼のそれに、どんな形でも巻き込まれることが、二度とあってはならないからだ。

そのとき、不意にグリン夫人が、彼がインドに行つた時期を知つてゐるかと尋ねた。私は、それが両親が結婚した直後、私が生まれるほん一年前であつたことを知つて

いたため、彼女を満足させることができた。そのうえで彼女は、彼が自分の連隊とともに出発した正確な日付や輸送機関の名称など、あらゆることを教えてくれた。さらに、驚いたことには、メリルボーン教会で両親が結婚した日付と、そこで行われた十五か月後の私の洗礼のそれ——パッシーでの誕生のちょうど十四週間後——まで教えてくれたことである。私は、自分の出来事に関するこのすべての知識にすっかり戸惑いを膨らませ、次第に怪しむ気持ちが増していった。

私たちはしばらく黙って座っていた。二人の女性はお互を見て、私を見て、細密画を見た。雰囲気はだんだん不気味なものになりつつあった。これは一体どういうことなのか？

やがてグリン夫人が、娘からのうなずきを得て、このように私に言葉をかけた。

「イベットソンさん、あなたは彼をおじさんと呼んでいますが、彼はあなたのおじではありますね。彼はとんでもない悪党で、あなたやあなたのご両親にそれはもう忌まわしい悪事を働きました。そのこと（あなたが知るべきだと私が思うこと）を申し上げる前に、あなたには、私たちの評判がイベットソン大佐のそれにどんな形でも巻き込まれるようになることをやつたり言つたりしないと、誓約していただかなくてはなりません。今は優秀な方と幸せに結婚できましたが、娘が受けた傷は取り返しがつ

きません」

胸をどきどきさせながら、私は厳粛に求められた保証を与えた。

「では、イベットスンさん、あなたがイベットスン大佐を知るべきなのは、法に照らしても正しいことです。娘にたち悪く言い寄っていたとき、彼は、あなたが彼のいとこのキャサリン・ビダルフ嬢、後のパスキエ・ド・ラ・マリエール夫人と彼との間にできた実の息子であることを、はつきりと知らせてきたのです！」

「おお、おお、おお！」私は叫んだ。「それは絶対に間違いです——彼は、それはあり得ないと知っていました——彼は母に三回振られたんです——私が生まれるほど一年前にインドに行つて——彼は——」

そのとき、ディーン夫人が、ポケットから古い手紙を取り出してこう言つた。

「あなたは彼の筆跡と個人紋章をご存じですか？ イベットスン・ホールで、彼からの短信を私に持つてきてくれたことがあつたのを思い出せますか？ それがこれです」。彼女は私にそれを手渡した。紛れもなく彼のものであり、私はすぐにそれを思ひ出した。そこにはこんなことが書かれていた。

*あなたのおじでは…………ピーターから見て、大佐は「いとこおじ」「いとこちがい」である。

「後生ですから、親愛なる友よ、あなたがゆうべ賢明にも推測なさつたことを、生きた人間には一言も漏らさないでください！似ているところがあるのは当然なのです。哀れなアンティノウス！彼は本当の関係を何も知りません。そのことが、私に多くの恥辱と自責の念の苦しみを引き起しました……」

『Que voulez-vous? Elle était ravissante! 「仕方ないじゃないですか？彼女が魅力的だつたんですね！」』……私たちにはじとじゅうしで、一緒になることが多かつたのです。『一人とも若すぎ、一人はとても美しかった！』……当時の私はただの無一文の旗手で——まだ少年でしかありませんでした。幸いにも、彼女をずっと愛していました、疑ふこと知らない良家のフランス人男性がいて、彼女は彼と結婚しました。『Il était temps! 「危なじとひねでしたー！」』……

あなたはこの『entraînement de jeunesse』「若氣の至り」を許してくださいますか？私は悲哀に深く沈んで後悔し、一瞬の心醉の対象を絶え間なく思い出せせる者を養子にし、自分の名前を与えることで、自分にできる賠償をしました。哀れな子よ、あれはほとんど何も知りませんし、これからも知らないでいることを願っています。『Il n'a plus que moi au monde! 「彼には、この世に私しかいない！」』

「われは読んだらすぐに燃やしてくだせ。そして、この話題が私たちの間で再び持

ち上がるゝ)」がありませんように。

R。 (Qui sait aimer 「愛する」と
を知る者])

青天の霹靂(へきれき)だ！

私は呆然として座り、激怒した。

永遠に激怒が続くかのように感じ

た。

長い沈黙があり、私はその間こめかみで脈が破裂寸前になつていいのが感じられた。その後、グリン夫人が言つた。

「さて、イベットソンさん、私はあなたが早まつたことをしないでいてくださいるよう願つています——娘の評判を、あなたとおじさ



運命の手紙

んの間の喧嘩に巻き込むことはできません。お母様の名誉のためにも、あなたは慎重でいてくださいと思っています。もし彼が、若い頃に恋してみたいとこのことをこんなふうに話すことができるというのなら、私のかわいそうな娘のことどんな嘘だつてつかないことがあるでしょうか？ 彼は、ついたのです——ひどい嘘を！ おお、何で私たちは苦しんだことでしょう！ 彼がその手紙を書いたとき、彼は本気で娘と結婚するつもりだったと思います。彼は娘を最大限信用していましたし、そうでなければこんな馬鹿な立場表明はしなかつたでしょう」

「おじはこの手紙の存在を知っているのですか？」私は尋ねた。

「いいえ。彼が娘と不和になつたとき、娘は彼の手紙を送り返しました——この一通を除いて全部。これについては、娘は彼に、指示どおり読んだ後すぐに燃やしたと言つてやりました」

「私が保管しても？」

「ええどうぞ。あなたは信頼してよさそうですし、ご覧のように、娘の名前は表面から削除されています。これは私たち以外誰も見たことがありませんし、私たちとしては一瞬たりとも信じられなかつたので、この内容を人に言つたこともありません。二、三年前、私たちは、あなたのご両親がいつどこで結婚したのか、あなたはいつ生まれ

たのか、彼はいつイングに行ったのか、などに興味が湧きました。結果は、私たちを少しも驚かせることはありませんでした。それから私たちはあなたを見つけようとしたが、それはすぐに諦めました。問題はこのままにしておく方がよいと思つたのです。その後、彼がまた悪さをしたと聞きました——ちょうど同じような悪さを。そのとき、娘が公園であなたを見て、私たちはあなたが知るべきだと結論を下したのです』忘れられない会話の要旨はこのようなものだった。ここではできるだけ簡略にしてある。

この二人の女性と別れたとき、私は公園の周囲を急ぎ足で二回ほど歩いた。歩いている間にしばしば激しい憤怒が込み上げた。たぶん私は怒っているよう見えたのだろう。人々が私のことをじっと見ていたのを覚えている。

それから私はリントットの所に直行した。自分の苦悩を彼に伝え、助言をもらいたいという強い衝動に駆られつつ。

彼は不在で、私はしばらく彼の喫煙室で、何度も何度もあの手紙を読み返しながら待っていた。

その後、私は彼には言わないことに決め、その家を出たが、出るときに詰め物を仕込んで重くしてある杖^{えい}を持ち出した（ただし、明確な目的はなかった）。少年でも使

えるかなり強力な武器で、私が自分でリントットの直近の誕生日に贈ったものである。
アンケー！

それから私は、ピカデリー・サーカスの近くのいつもの飲食店に行つて食事をした。私はビター・エールを一クオート、シェリー酒を二杯飲んで、ウェイトレスを驚かせた。水を飲むのが私の習慣だったのだ。彼女は私に、具合が悪いのか、それとも面倒事でもあるのかと質問を浴びせた。私は違うと彼女に答え、最後には一人にしておいてくれと頼んだ。

イベットソンはセント・ジエームズ・ストリートに住んでいた。私はそこに行つた。彼は不在だった。時刻は九時で、使用人は彼がいつ帰つてくるか正確には分からぬようだった。私は十時にもう一度そこに戻つた。彼はまだ不在で、使用人は、少し考え、通りを左右よく見て、私の格好がきちんとしていて決して危険でないことを理解してから、二階へ行つて待つように求めた。私は彼に、非常に重要な用件があるのだと言つたのだ。

そこで私はおじの応接間に行つて、座つて待つた。

使用人は私と一緒に来て、蠟燭に火を灯し、天気の感想を言い、私に『サタデー・レビュー』と『パンチ』を手渡した。私はかなり自然に見えたはずで——そう見える

よう努めていたので――、彼は私を残して出ていった。

マントルピースの上にマレーのクリスが見え、私はそれを額縁の後ろに隠した。もう一つ、グランド・ピアノと、ピアノの方に刀剣、短剣、^{トロフィー}戦斧などを掛けた武器掛けのある応接間があるので、そこに通じるドアの鍵をかけ、ポケットに鍵を入れた。

私が待っていた部屋の鍵はドアの内側にあった。

これまで私は、彼の側からの暴力の可能性については漠然と考えていたが、彼を殺そうとは考えていなかつた。自分は、それをするにはあまりに強すぎ、そんな展開にはならないだらうと。實際私は、静かな、圧倒的な力を感じていた――抑え込まれた興奮の結果である。

私は座って、言うつもりのことすべてを沈思黙考した。それを何度も何度も決定し、運命の手紙を繰り返し再読した。

使用人がグラスとソーダ水を持って入ってきた。私は、別の部屋へのドアが施錠されていることに彼が気づくのではないかとびくびくしていたが、彼が気づくことはなかつた。彼は窓を開けて通りを右、左とよく見た。やがて彼は「やつと大佐のお帰り

*クリス……刀身が波形の短剣。^{なみがた} 三五三ページのイラスト参照。

ですよ、サー」と言つて、ドアを開けに階下へ降りた。

彼が中に入り、使用人に話しかけているのが聞こえた。それから『la donna e mobile 「女は気まぐれ』』の鼻歌を歌いながらまっすぐに階段を上り、私が記憶している陽気で浮ついた挙動そのままに中に入ってきた。彼はイヴニング・ドレスを着て、ほとんど変わつていなかつた。彼は私を見てかなり驚いたようで、真っ青になつた。

「これはこれは、我がT定規使いのアポロ殿、この御来臨はどうしたわけだ? 殊勝な甥っ子よろしく、謙虚になつて許しを請いに來たつてわけか?」

私は言うつもりだったことを全部忘れてしまつたが(実際、私が思い描いたようなことは何も起こらなかつた)、立ち上がり、できるだけ穏やかに、しかしぐもつた声で言つた。「あなたと話をしに来ました」

彼は動搖したようで、ドアの方へ行つた。

私は先回りしてドアを閉じて鍵をかけ、鍵をポケットに入れだ。

彼は別のドアに素早く移動したが、施錠されているのに気づいた。

次に彼はマントルピースの方へ行つてクリスを探したけれども、見つからなかつた。そのため振り返つて暖炉に背を向け、両手を腰に当て肘を張つて挑戦的な姿勢を取り、極力軽蔑的で断固とした顔を作ろうと試みた。彼の頬は染められた口ひげの下でまつ

白になり——蠅のよう——、目は神経質に瞬いていた。

私は彼に近づいて言つた。「あなたはディーン夫人に、私があなたの実の息子だと言いましたね」

「それは嘘だ！ 誰がそんなことを？」

「彼女が言つたんですよ——今日の午後」

「それは嘘だ——捨てられた女の惡意に満ちた捏造だ！」^{ねつぞう}

「彼女はあなたの愛人ではありませんでした！」

「馬鹿が！ あいつはおまえにそれも言つたようだな。部屋から出ていけ、青二才のウスノロが、さもなければ追い出させるまでだ」。彼はベルを鳴らした。

「自分の筆跡は分かりますか？」私はそう言つて、彼に例の手紙を渡した。

彼は一、二行読んでから、これは偽造だと喘ぎながら言い、もう一度ベルを鳴らして、再びクリスを時計の後ろに探した。それから手紙に蠅燭の火をつけ、盛んに燃えてくる暖炉の中にそれを放り込んだ。

私は彼を制止しようとはしなかつた。

* 「女は気まぐれ」……『リゴレット』（ヴエルディ作曲）の「女心の歌」であるが、このオペラの初演は一八五一年、小説の今は一八五〇年代の後半であるので、矛盾はない。

使用人がドアを開けようとし、イベットソンは窓の所に行つて警察を大声で読んだ。私はクリスを隠した絵へと駆け寄り、それをテーブルの上に投げた。それから彼の上着の後ろ裾^{すそ}を引っつかみ、振り回して彼を窓から離し、クリスを指さしながら自分を守れと言つた。

彼はそれを握り、防御姿勢を取つた。使用人は、どうやら助けを求めて階下に走つたようだ。

「さあそれでは」私は言つた、「ひざまずけ、この忌まわしいゲス野郎、そして白状しろ。これが唯一のチャンスだ」

「何を白状しろってんだ？　この馬鹿が」

「あんたが臆病者で嘘つきだってこと、その手紙を書いたこと、そしてディーン夫人も私の母も、あんたの愛人なんかじやなかつたつてことをだ！」

人々が階段を駆け上がつてくる音がした。彼は一瞬耳を傾け、それから語氣強く小声で言つた。

「あいつらは二人とも大馬鹿だ！　おまえが俺の息子かどうかなんて、どうすりやはつきり分かるってんだ？」全部同じことだ。もちろん、俺はあの手紙を書いた。さあ来いよ、腰抜け暗殺者、私生児野郎の尊属殺人者が！」……そして、彼は右手にク

リスを低く持ち、上に向けて私に迫り、突進し、甲高い声でこう叫んだ。「ドアを壊して開けろ！ 早く！」外の者たちはそのとおりにしたが、遅すぎた。

私は逆上した！

彼は私を見失い、私は彼が頭上に保つていた左腕に杖を振り下ろし、次に頭に振り下ろすと、彼は崩れ落ち、叫んだ。

「おお神よ！ おおキリストよ！」

彼がくずおれていく間に私はもう一度彼の頭を打ち、床に倒れたときにさらにもう一度打った。正しく碎いたようだつた。

これが、私がイベットスンおじを殺した理由と方法である。



「私生児野郎！ 尊属殺人者！」

第五部



"Grouille, grève, grève, grouille,

File, file, ma quenouille!

File sa corde au bourreau

Qui siffle dans le préau..."

「動け、悲しませよ、悲しませよ、動け、

紡げ、紡げ、私の糸巻き棒よ！

中庭で口笛を吹いている

死刑執行人の縄を紡げ……」

『ノーツルダム・ド・パリ』の老婆はこう歌つた！

いつも私の内部に甲高い声で歌いに来るか細く小さな声が、昼も夜も、幾昼夜にもわたって、私に向かつてこう歌つた。時にはある曲で、あるときは別の曲で、だが常

に同じ歌詞で——ブルーフライアーズの男子生徒だつたとき、こんなふうによく私に取り憑いた恐ろしいリフレイン！

おお、長いグレーの上着と馬鹿げたピンクのトップスを着た男子生徒に、もう一度なろうとは——無邪氣で自由な——唯一の恋人がエスマーラルダで、親友がアトスとポルトスとダルタニアンで、第三巻を手にする土曜日の午後にこう伝えられるよりもひどい艱難辛苦かんなんしんぐくはなかつたような——「volume trois en lecture!」[第三巻は貸し出し中です!]】

日曜日の夜は、時々、ほとんど疲れなかつたことを思い出す。月曜日の朝、近くで絞首刑になる予定の惨めな悪漢を憐れんだためである。そしてそれは、今度は私の番なのだ！

おお、メアリー、メアリー、タワーズ公爵夫人、幼い頃のかわいい友、生涯の恋人よ。君は今の私をどう思つただろう？

信じる者はどれほど恵まれていてことだろう！ 神と天国、また罪の赦し^{ゆる}を信じ、無邪氣であること以外はすべてにおいて小さな子供のようであることは、どれほど幸福なことだろう！ 犯罪の全経歴は、その罪に十分見合った死という極度の恐怖の中、土壇場でのたつた一つの安っぽい信仰の証となる精神的行為の瞬間に、一掃される。人が（その後も長期間悪を増殖し続ける）生涯を通じてずっと働いてきたあらゆる惡が、汚れた衣服のように肩から下ろされ、他者——取るに足りない——を感化するため、どこかに適当に投げ捨てられる。

それがもし愚か者の樂園であつたらどうだらう？ 樂園は樂園だ、それを手に入れ
る誰にとつても！

フランスがパレルモを占領していた間、あるシチリア人鼓手隊長が銃殺を宣告され
たという。彼は臆病で有名であり、最期の瞬間にフランス人兵士たちの面前で自分の
国に泥を塗ることが恐れられていた。兵士は、潔く、軽い心で銃殺される傾向があつ
たのだ。彼らは銃殺に慣れ親しんで育つたのである。

シチリアの名譽のために、聴罪師は極秘に、君への宣告は見せかけのもので、君は
空砲で銃撃されることになつてているのだ、と彼に伝えた。

それは敬虔なる欺瞞(ぎまん)であった。十二の彈薬筒(だんやくとう)のうちの二つを除くすべてが弾丸を
持っていた。彼は崩れ落ち、蜂の巣になつていた。こんなにも軽い心で、思い切りよ
く死んでいったフランス人はいなかつた。彼は堂々としており、国の名譽は守られた。
この話が本当なら、シチリア人鼓手隊長は大いに幸せだった！ その空砲への信頼

*十二の彈薬筒の……銃殺のとき、一部の銃は空砲にされた。銃撃する兵士の殺人への精
神的負担を軽減するため。自分の銃は空砲だったのだと思ひ込めば、多少心は軽くなる。

は、彼の樂園だったのだ。

おお、その瞬間が来て綱が引かれたとき、禁欲的でいるのは骨の折れる仕事だ！しかし、綱引きが一瞬以上持続するとしたら——昼も夜も、何昼夜も！ おお、幸せなシチリア人鼓手隊長！

祈るかって？ 祈るとも。私は夜と朝、それに日中もずっと祈るつもりである。何であれ、この不幸な出来損ないの宿なしピーター・イベットソンの中に受け継がれた力と勇気のうちで、残っているものに対して。それがまだ少しの間、彼を支えることができるように。被告人席や絞首台で、彼が恥すべき振る舞いをしませんように。

後悔しているか？ している、たくさんのこと。だが、私がここにいる理由については？ 全然だ！

裁判官と陪審員と死刑執行人が一体となつて、私的・個人的な過ちのために——有罪判決をし、打ちのめし、殺すことは、恐ろしいことだ。

同情が後に来る——時すでに遅しである、幸運にも——みすぼらしく弱々しい同情だ！ はん！ ^{*} キャルクラフトが私を憐れむことなどないだろうし、私だって彼にそうしてほしいとは思わない。

• • • • •

彼は、私の杖に対し長い蛇状のナイフを持っていた。彼もまた、かなり自己防衛

* キャルクラフト……実在のイギリスの死刑執行人。

に熟練した、大柄で強健な男性だったのだ！　彼は倒れ、私は何度も彼を打った。彼は「おお神よ！　おおキリストよ！」と悲鳴を上げていた……。

「それは、死ぬまで私の心と耳に残つて響くだろう——死ぬまで！」

無駄にできる時間はなかつた——最善の結果が得られるよう考えるだけの暇はなかつたのだ。現状のみが最善の結果である。もし彼が生きていたら、いろいろ、ありとあらゆることを言つたことだろう！

ありがたいことに、同情は、自責の念や恥ではない。どんな罪が、彼の罪よりも重い可能性があるだろう？　人が心から愛する死者たちから、彼らの名誉を奪うなんて！

彼はもしかすると気が狂っていて、やがて自分自身についた嘘を信じるようになつたのかもしれない。そういうことはあつた。しかし、そのような狂人は、狂犬同様生かしておくわけにはいかない。嘘を葬るための唯一の方法は、嘘つきを葬ることだつた——それでとにかく嘘を葬ることができるのでなら！

哀れなウジ虫よ！ 結局、彼はそうならざるを得なかつたのだと思う！ 彼はそういうふうに造られていたのだ！ そして私は、そのために彼を葬り、絞首刑になるよう造られていた。アンケー！

「Gogo — gentil petit Gogo! 「ゴーゴー——かわいいゴーゴー！」」にとつて、何という退場だらう！

ちょうどその壁の向こう側、道の反対側に、かつて小さな牛の胃と豚足の店があつて、平民の中では極めて美しい娘によつて切り盛りされていた。私の目にはあまりにも美

人で善良に見えたので、私は彼女に妻になることを求めるつもりだった。彼女は、今
の私をどう思うだろう？ 私が図々しくも憧れていたなんて！ 何というコフェチュ
ア王だ！

みんなはどう思っているだろう？ 私は人に本当の原因を漏らすことはできない。
ただ二人の女性だけが真実を知つており、彼女たちは言わないよう細心の注意を払つ
てくれるだろう。ありがたいことだ！

誰が何を考えているかは、重要なのだろうか？ 「百年経てば皆同じ」。これはかつ
て創案された中でも最も賢明なことわざだ。

しかし、その一方で！

裁判官が死刑宣告用の黒帽くろぼうをかぶる。全部おまえのためだ！　すべての目がおまえに固定される。かなり大きく、若く、強そうで、活気に満ち溢れたおまえに。うわあっ！

おまえは縛られ、歩き、男らしくしなければならない。教誨師は熱心に訓戒を与え、祈り、慰めようとする。そのとき、ずらつと並んだ顔の海が見える。食べたり飲んだりはしゃいだりしておまえを待っている、反対側の人々。帽子が引っ張られておまえの目を覆う——おお、恐ろしい！　恐ろしい！　恐ろしい！

*コフェチュア王……伝説のアフリカの王子。女嫌いだったのに、乞食娘ベネロフォンの美しさに惹かれ結婚した。ここで、ピーターが今ミドルセックス留置場にいることが分かる。

「Heureux tambour-major de Sicile! [幸せなシチリア人鼓手隊長ー.]」

「Il faut laver son linge sale en famille, et c'est ce que j'ai fait. Mais ça va me coûter cher! [自分
の汚れた下着は家で洗え (=内輪のやめ事は内輪で処理せよ)、それが私がやつたこ
とだ。しかし、それは私に向ってかなり高くうしろへー.]」

あら一度、最初からやり直そうか？　おお、希望を持たせてほしい、ぜひー。

ああ、彼はあまりにもあっけなく死んでしまった。私は数秒にも満たない間に四発の攻撃を加えた。彼が部屋に入ってきてから、私が彼の息の根を止め、現行犯で捕まつた瞬間までは、たぶん五分——でなければ長くとも十分——くらいだった。それで私の方は——何と長い間もがき苦しんだことか！

おお、もう一度「本当の夢」を見て、もう一度愛する人々に会えればいいのに！ だが、あの運命の夜以来、本当の夢を見る力は私から失われてしまつたようだ。何度やつても、それは現れないだろう。私の夢は恐ろしいものになつてゐる。そして、おお、覺醒も！

結局、これまでの私の人生は、子供時代の幸福な数年間を除き、生きる価値のないものだった。百歳まで生きたとしても、そんな価値はほとんど生じそうにない！ お

お、メアリー！ メアリー！

そして懲役！ 死んだ方がましだ。私の秘密が、私とともに死ぬはずなのは良いことだ——軽減事由もなく、情状酌量もなく、速やかなる死刑の減刑もないだろう。

"File, file..."

File sa corde au bourreau!"

「紡げ、紡げ……

死刑執行人の縄を紡げ！」

どんよりした巡回路を何度も循環するこのような単調な思考や、同じように憂鬱で

絶望的な別の思考によつて、私はイベットソンの死とオールド・ベイリーの裁判との間にある恐ろしい時間を紛らした。

今となつては、それは皆とても些細でつまらない——記録する価値のない——、覚えておくのさえ困難なもののように思われる。

しかし、自分の苦悩があまりに大きく、絞首台の恐怖があまりに強烈だったときには、自分は、へたをするとあと二十四時間経過するよりも前に、悲痛そのもののために死んでしまうに違いないと思つていた。

耐えがたい重圧が緊張の頂点に達するまでますます厳しさを増し、ヒステリックな涙の噴出がしばらくの間心を和らげると、私は自分の運命と和解したように感じられ、男らしく死に直面することができるようになったのだ……。その後再び、苦悶が徐々に私を包んでいき、肉体の制御できない脆弱性に襲いかかって……。

そして、これら二つの相反する気分はそれぞれ、一方が続く間は他方をあり得ないもののように、まるで二度と再び戻ることはないかのように思わせた。それなのに、それは潮の干満の規則性とともに戻つてくる——かつてない、最も悲惨なシーソー。

私はずっとこんな具合に不安定だった。しかし、以前は、高揚と落胆の間を揺れ動いていたものが、今では、無言の諦観的絶望から最も狂暴な苦悶と恐怖までを往復す

るのである。

私は自分の中に探しそな唯一の慰めを空しく探した。しかし、苦しみに消耗しついに眠りに就いたとき、私はもう本当の夢を見ることはできなかつた。私は、ほかの悲惨な境遇にある者たちが見ると同じような夢しか見ることができなかつた。

私はいつも、あの二人の踊る醜い小人の看守夫婦が、ついに私を確保する夢を見た。彼らが私の中に引き入れ、それぞれが私の両脇にぴったりくつき、不吉な笑顔に歯のない歯茎を見せながら熱く酸っぱい臭いのする毒息で私を汚染している間、私は愛する公爵夫人に助けを求めて大声で叫ぶのだ！ 門があり、大通りはすべてが歪んでいて、まったく違つてしまつてゐる。反対側には刑務所。だが、恐怖を振り払つてくれる強力なタワーズ公爵夫人はいなかつた。

• • • •

おそらく、私の裁判がどんなに短かつたかを覚えてゐる人もいるだろう。

私に「無罪」の嘆願が入つた。十分な動機がなかつたため、提示された弁護は精神異常というものだつた。この弁護は検察からすぐに棄却された。私が正気であつたと

いう証拠に不足はなく、十分な動機は、私「——暴力的で気難しく執念深い性質で、親類かつ恩人の血で自らの手を汚した——」とイベットスン大佐「——被告の父親でもいいくらいの年齢で、実際、彼が被告に与えた愛情から見れば父親であったかもしぬ、被告が無一文で残されたときに、自分の責任となつた外国の孤児に自分の芳名を与えた——との、過去の関係の中に見いだせた。

ここで私は、裁判報告書に正式に記録されているように、大声で長々と笑ってしまい、極めて不快な印象を与えた。

陪審員は、二日目の午後のかなり早くに、陪審員席から離れることもなく私の有罪を認めた。そして「裁判の間じゅう保つてきた無感覚で平静な表情態度を最後まで維持していた」私は、減刑の望みもなく正式に死刑を宣告されたが、裁判官——有名な絞首刑好きの裁判官だ——の方では遺憾の意が述べられた。被告のように教育があり前途がある人間が、その者自身の邪悪な性質と手に負えない激情によって、非常に嘆かわしい結末を迎えることに対し、である。

• • • • •

それにしても、最悪の決定というものは、未決定の状態よりもましなものなのかな——私の苦痛の神経は、「猫」に一定数引っかかれた後で人の背中がそうなると言わるよう、裁判に先立つ期間にあまりにも働きすぎたがために実際は無感覚になつていたということなのか——、私がその最悪の決定を知り、事実上の安堵感という驚きの感覚をもつてそれにおとなしく従い、その決定が耐えられないわけではないと内心感じられることに気づいたのは確かであった。

少なくとも、その夜の私の気分はそのようなものだつた。私はそれをできるだけ有効活用した。私が体験してきたことに比べれば、それは幸福と言つてよいものだつた。私は、我ながら驚くような旺盛な食欲で食事をしたことを覚えている。ディナーからそのまま絞首台に行つて、軽い心と潔さをもつて死ぬことができそうだった——シリアル人鼓手隊長のようにな。

私はタワーズ公爵夫人に本当にあつたことの一部始終を手紙に書く決心をした。彼女への長く絶望的な憧れの告白と、私のことは、昔の遊び友達で、この恐ろしい災難が起ころ前に知っていたとおりの者としてのみ考えるよう努めてほしいという希望の文言を書き添えるつもりで。そして、書こうとしている手紙のことをかなり遅くなるまで考へているうちに、二人の看守が見張っている独房で、私は眠りに落ちた。その

後で——私の内面的生活の別の局面が始まったのである。

易々と、何の支障もなく、私は大通りの門の所にいた。

ピンクと白のサンザシ、それにライラック、キングサリが満開で、太陽が至る所に黄金の小道を作っていた。暖かい空気は香りに満ち、初夏の虫などのうなり音と鳴き声でいっぱいだった。

私は本当の夢の地に再び到達し、もう一度くつろいだ気持ちになつて、半べそ状態になつていた——*chez moi! chez moi!* 「我が家よ！ 自分の家よ！」

フランソワおばさんが、*logé*「門番小屋」のドアの所にジャガイモを剥きながら座っていた。彼女はこんな小曲を歌つていた。

〔*cinq sous, cinq sous, pour monter notre ménage*〕



"CINQ SOUS, CINQ SOUS,
POUR MOTHER NOTRE MÉNAGE"
「五スターで、五スターで、所帯道具を揃えるの」]

〔五スーで、五スーで、所帶道具を揃えるの〕。私はそれを忘れていたが、そのときすつかり記憶が戻った。

おどけ者の郵便屋イヴ・エルドンが、私の家の古い庭の門に入った。彼がそれを押すと鈴が鳴り、私は彼に続いた。

花芽がいっぱいに顔を出している林檎の木の下に、母と少佐殿が座っていた。母が郵便屋の手から手紙を受け取るとき、彼は言った。「Pour Vous? Oh yes, Madame Pasquier, God sev ze Kveen! 「あなた宛てですかって? おお、そうですよ、バスキエ夫人。ゴッド・セヴ・ゼ・クヴィーン! 」。母は送料を支払った。それはイベットソン大佐からの手紙で、そのときはアイルランドにて、まだ大佐になつていなかつた。

メドールは芝生で寝転がつていびきをかき、ゴーゴーとミムジーは『musée des familles「家庭博物館」』の絵を見ていた。

ガーデン・チエアにだらりと腰掛けたセラスキア医師は、膝と交差する長い磁器パイプとともに、どうやら眠つてゐるらしい。

セラスキア夫人は、ジゴ袖の黄色いナンキン木綿のガウンを着て、『Constitutionnel「憲法』』紙からカールペーパーを切り出していた。

私は彼ら全員を言いようのない優しさをもつて見つめていた。おそらく、これが彼

らを見つめる最後の機会になる。

私は彼らを名前で呼んでみた。

「おお、私に話しかけてください、愛する影たちよ！　おお、お父さん！　おお、お母さん！　私はこんなにもあなたたちに焦がれているのです！　数秒だけでも過去から抜け出して、私に慰めの言葉をかけてください！　私は、それはもう悲惨な状況に陥っているのです！　あなたたちが知ることさえできれば……」

しかし、彼らは私を聞くことも見ることもできなかつた。

そのとき突然、もう一人の人影が林檎の木の背後から歩み出た——それは、こちらからは見たり聞いたりすることしかできず、こちらを見返したり聞き返したりすることはできないような、古風な装いに身を包んだ過ぎし日の実体のない影ではなく、素晴らしく生命力に溢れた、救いと力の柱石ちゆうせきである人——メリーリー、タワーズ公爵夫人であつた！

彼女が両手を差し出して私の所に來たとき、私はひざまずいた。

「おお、イベットソンさん、私は毎晩ここであなたを探して待ち続けていたんですよ！　気が狂いそうだつたんです！　あなたが最後まで来なかつたら、私は何もかもかなぐ

*五スード……シャンソン『オーヴエルニュの持参金付き娘』の一節。

り捨てて、ニューゲートにあなたに会いに行つたに違ひありません。目が覚めているときに、世間の面前で、あなたと話すため——abboccamento 「面談」のために。あなたはとても眠つたり夢を見たりできなかつたのだと思います」

最初のうち、私は答えられなかつた。できたのは彼女の両手をキスで覆うことだけだつた。それをしながら、私は彼女の温かい生命力の流れが私のそれと溶け合うのを感じていた——何という喜び！

その後私は言つた——

「私がいちばん神聖に思うすべてのものにかけてあなたに誓います——



愛する影たち

私の母の記憶とあなたの母上の記憶にかけて——あなた自身にかけて——、私はイベットスンの命を奪うつもりはなかつたし、彼を打つつもりさえなかつたことを。なのに、ひどい攻撃が加えられて……」

「まるで私にそれを言う必要があるみたいですね！ 私が昔からあなたのことを探らなかつたみたいですよ！ 私の、いちばん親切で優しくて、かわいそうなお友だちであるあなたのこと。だって、私はあなたの手を取つていて、あなたの心の奥深くをのぞき込んでいるんですよ！」

（私は彼女が言つたことは全部、彼女が言つたとおりに書き留めている。当然のことながら、私は、彼女のいつもの愛情深い注視が彼女の目にそう見えさせていたような者ではないし、今も昔も一般に見なされていた残忍な怪物以上ではないのである。女性らしく、彼女も自分の偏愛の奴隸だったわけである）

「ところで、イベットスンさん」彼女は続けた。「最初に言つておきますが、判決が減刑されるのは確実です。私、三、四時間前に内務大臣と会つたんです。あなたとおじさんとの悲しむべき^{いさか}諂いの本当の原因は、公然の秘密となつています。おじさんの性格はよく知られているんです。グレゴリー夫人（あなたがホプシャーでディーン夫人として知つていた人です）が、今日の午後に内務大臣と会いました。裁判でのあな

たの騎士道的な寡黙ぶりは……」

「おお」私は遮った。「私はもう生きたいとは思いません！　今、あなたにもう一度会つて、あなたが私を赦し、起こつたすべてに関係なく私を良い人間だと思つてくれたからには、もういつ死んでもかまいません。私には、この世であなたしかいなかつたのです——私の母とあなたの母上が死んで以来、女性の幽霊も出てきてくれないし、一人の友人さえもいなかつた。あの頃と、レディ・クレイ宅での演奏会で初めてあなたを見た夜との間、私は生きていたとはとても言えません。私は記憶の残り物を常食としてきました。ご存じのように、私には新しい友人を作る才能はありませんが、おお、古い友人への忠誠を保つ才能にはかなり恵まれているんです！　私はミムジーがまた戻つてきてくれるのを待つていました。私にとって、あの甘美な時代から生き残つた唯一の人だと思うのですが、とうとう彼女が現れたとき、私はあまりにも馬鹿すぎて彼女だと認識することができませんでした。彼女は流星のように私の貧しい人生の中で燃えて輝き、氣も狂わんばかりの愛と痛みでそれを満たしました。愛と痛みのどちらの方が甘美なのかは分かりません。どちらにしても私の人生でした。それがどんなものだったのか、あなたには理解できないでしょう。嘘ではなく、私はもう十分に生きてきました。いつ死んでもかまわないし、進んで死を受け入れたいくらいです。そ

れが、私が考へ得る唯一の理想的な成就なのです。今この瞬間に匹敵するものはありません——地上でも天上でも。もし私が明日自由の身になつたとしても、あなたなしでは生きる価値はありません。そんな贈り物を受け取る気はないのです」

彼女は、こちらには気づかない私たちの親類縁者の影たちの近く、彼らの幸福そうな話と笑い声が聞こえる範囲内の、私のそばの芝生に腰を下ろし、膝の上で手を組んだ。

突然、ミムジーがゴーゴーにこう言つてゐるのが二人に聞こえてきた——

「おお、すごく仲良しなのね、シャルマン王子と妖精タラパタポウムは！」

私たちはお互いを見て、実際に声を出して笑ってしまった。それから公爵夫人が言った——

「世界開闢以来、このような会合のためのこのような *mise en scène* [演出] が、存在したことがあつたでしょうか、イベットソンさん？ 考えてみてください！ 想像してください！ 私がこれ全部、手配したんです。みんなが一緒にいた日を選んだんですよ。アメリカで言われていくように、私はボスなんです、この特別な夢の——

そして彼女はもう一度、涙ながらに笑つた。目を閉じ、彼女をとても愛らしくする魅力的なさざ波のような笑い方で。

「かつて」私は言つた——「世界開闢以来、私が今感じているような恍惚感があつた

でしょうか？ 今後、死以外の何が私にあり得るというのでしょうか——十分生計が立てられるような、十分報酬が支払われるようなものがありますか？ 来たれ、甘き死よ！」

「まだ考えたことがないのですね、イベットスンさん——自分にどんな人生が待ち受けているのかに、あなたは気づいていないのです、もし——もしあなたが私への愛情について言ってくださったことが全部本当だとしたら。おお、私は一人の少年としてのあなた以上のことはほとんど知りませんし、あなたが人生の残りを悲惨な監禁と無益な単純労働で過ごさなければならぬなんて、恐ろしくて考えられません。でもね、その状況にはもう一つの側面があるのです。

では、あなたの古い友人の話を聞いてください——哀れで小さなミムジーの告白を。できるだけかいづまんでお話ししましょう。

あなたは、初めて私と会ったときのことを覚えてていますか？ 二十年前、大通りの門で、病弱で、かわいくもなくて、悲しい小さな女の子と会ったときのことを。

フランソワおじさんが鳥を殺していました——喉を折り畳みナイフで切っていたのです——そのかわいそうな生き物は、側溝に血を流しこみながら、しっかりと握られた彼の手の中で半狂乱でもがいていました。男の子たちのグループが大喜びで見つめ

ていて、その間じゅうフランソワおじさんは、鳥には全然関心のなさそうな司祭様と世間話をしていました。私はかわいそうなのと恐ろしさとで氣を失いかけていました。そこに突然、向かいの学校からあなたが、アルフレッドとチャーリーのプランケット兄弟と一緒に出てきました。あなたはそのすべてを見て、氣高い発作的激怒に駆られ、フランソワおじさんを『聖なる暗殺者の豚』と呼んだのです——ご存じのように、フランスでは非常に失礼な呼び方です——そして手が届く所まで近づいて彼を殴りました。

忘れていましたか？　ああ、私は忘れませんでした！　たぶん有効な行為ではなかったでしょ？　確かに遅すぎて鳥を救うことにはなりませんでした。そのうえ、フランソワおじさんはあなたを殴り返して、鳥の血があなたの頬に残りました。それは洗礼でした！　あなたは直ちにその場で私の英雄になりました——私の光の天使になつたのです。あちらにいるゴーゴーを見てください。彼は十分に美しいでしょ？　あれはあなただったのですよ、イベットスンさん。

司祭様の方は、人が馬を鞭打つと正気を失うくせに、人にお金を払つてお互いを死ぬまで殴り合わせる『ces Anglais「あのイギリス人ども』にまつわる話をしました。本当に覚えていないのですか？　おお、私の記憶力って！

それと、私たちが発明して、いつもすゞく流暢に話していたあの小さな言語！
 Don't you *rappel* it to yourself? [思ひ出しませんか？] Ne le *recollectes* tu pas? [思ひ出しませんか？] 当時はいろんな言い方で言いつたよな。あのときは、私たち、おおれ、俺呼びが普通でしたしね。

そう、とにかくあなたは、私たちがショッちゅう一緒にいた幸福な五年間がどんなふうだったかを思い出す必要があるのです。どんなふうに、あなたが私のために絵を描いて、本を読んで、私と遊んでくれたか、良かれ悪しかれあらゆることで私を支えてくれたか、私がくたびれたときにおんぶしてくれたか。あなたが描いてくれたもの——私、それを全部持っているんですよ。それに、おお！　あなたは時々すごく面白かった！　どんなにママと少佐殿を笑わせていたことか！　もう一度、すぐにゴーゴーを見てください。彼が今やっていることを忘れてしましたか？　私は忘れていません……。彼は『家庭博物館』と『ペニー・マガジン』を取り替えたところで、ホガースの絵『怠慢な、そして勤勉な徒弟』のシリーズをミムジーに説明していく、兩人とも、その二人のうちでは怠慢な徒弟の方がずっと好ましいということで意見が一致していますね！

ミムジーは、親指を口にくわえて、そういう受け身に見えるでしょう？　ゴーゴー

への感謝の念と愛情で小さな胸がいっぱいになりすぎていて、口が利けないのです。親指を吸うことしかできないわけですね。かわいそうで、病弱で、見苦しい子供！ 彼女はゴーゴーの奴隸になりたいんです——ゴーゴーのためなら死んでもいいと。それに、母もゴーゴーを熱愛しています。彼女は、とてもかわいい息子がいることで、親愛なるパスキエ夫人にほんと嫉妬していました。今からほんの一分後、最後のカールペーパーを切り出したら、ずっと前に死んだかわいそうなママは、ゴーゴーを呼んで『アシリッシュ・ハグ』をして、一週間彼を幸せな気分にします。一分間待つて、見ていてください。ほら！ 言つたとおりでしょ？

まあでも、全部、もう終わったことです。パスキエ夫人はどこかへ行つて戻つてしませんでしたし、ゴーゴーもそうでした。パスキエご夫妻は亡くなつて、愛するママはコレラのため一週間で逝いつてしましました。悲嘆に暮れたかわいそうなミムジーは、同じくらい心に傷を負つた父親によつて、サンクトペテルブルク、ワルシャワ、ライプツィヒ、ヴェネチアなどヨーロッパじゅうを連れ回されました。

プロのピアニストになることが彼女と父親の望みで、彼女はほぼすべての首都で、ヨーロッパのほぼすべての大家のもとで、何年も懸命に勉強し、成功が予測できるまでになりました。

こういうわけで、彼女はある場所から別の場所へとさまよい歩きながら、妙齢女性になりました——それはもうかわいがられ、甘やかされ、騒がれるような妙齢女性に、ですよ、イベットサンさん、自分で言うのも何ですが。それで、さまざまな種類の人間の、いろんな国の、たくさん求められたのです。

でも、きれいでまっすぐな鼻と『aux enfants d'Edouard [エドワードの子供たち]』みたいな髪の、かわいい小さな白いシルクハットとイートン校の上着を着た、英雄的で天使のようなゴーゴーは、美しく勇敢で善良なあらゆるもの具現化として、いつだって彼女の記憶の中に、その心のいちばん深い場所に安置されていたのです。ああ、それなのに！ それまでの間に、あのゴーゴーはどうなったのでしょうか？ ああ、彼のことは全然耳にしませんでした——彼は死んだのだわ！

それで、この脚の長い、心の優しい、成熟した十九歳の若いミムジーは、ヴィーンでかなり機知に富んだ、洗練されたイギリスの大天使館員——ハーコートという名の一に惹かれました。彼も彼女を深く愛しているように見え、彼女を妻にと望みました。彼は裕福ではありませんでしたが、セラスキア医師がかなり彼を気に入つて信頼していましたため、この若いカップルの結婚を可能にするために必要となるものについて、その自らの所有権をほぼすべて放棄してしまいました——結果、二人は結婚しました。

そして、一年間は彼らが非常に幸福で、この縁と相手に満足していたことは真実であると認めなければなりません。

その後、彼ら双方に大きな不幸が降りかかりました。ハーコート氏の家族の死が、ほとんど予想もできないような死に方で四、五回も連續し、そのため彼はまずハーコート卿となり、次にタワーズ公爵となりました。その後はね、イベットソンさん、私は平安も幸福も一時間だってなかつたんです。

まず最初に、私に息子が生まれました——肢体不自由の哀れな子が！ 生まれたときから奇形児だったのです。そして、成長するにつれ、彼が知恵遅れで生まれてきたこともすぐにはつきりしました。

そのときから、私の不幸な夫は完全に人が変わってしまいました。お酒を飲み、賭博ばくをし、もつと悪いこともしていました。私たちが他人として同居しているだけになり、公の場や世間を前にしたときにしかお互よい話さなくなるまで……」

「ああ」私は言つた。「あなたは変わらず素晴らしい女性だった——イギリスの公爵夫人よ！」

私は、その獣のような公爵との幸福な十二か月を考えることに耐えられなかつた！

* 『エドワードの子供たち』……ドラローシュの絵画（一八三〇年）を指すか？

私は、酒も飲まず、女性も知らず、潔癖で——ああ！ 殺人を除けば——、そして死刑囚なのだ！

「おお、イベットサンさん、私のことを勘違いしてはいけません！ 私は生まれつき公爵夫人になるよう予定された人間ではないのですよ——特にイギリスの公爵夫人には。もし公爵や公爵夫人が必要なら、イギリスは最良であると言えなくもないですが——もちろん、私が言う公爵や公爵夫人とは、自らを『社会』と呼んでいるあのイギリスの上流階級全体を指しています——まるで話す価値のあることがその『社会』以外には何もないかのような。ほとんど天使に近いような人もいるのですが、私のような部外者には向かない人々です。延々と続く狐狩り、鉄砲撃ち、釣り、競馬——食べて、飲んで、殺して、愛し合って——果てしない王室の噂話とおしゃべり——王子——女王——女王は誰が好きで何が好きか、誰が好きじやなくて何が好きじやないか！——無気力なイギリスの党派政治——教会——主任司祭、主教、大主教、それに彼らの妻と娘がいるというのに、信念のない教会——社会的地位と位階についての、彼らの愚かな、真面目くさった感覚！ 終わりのない世間話にディナーに夜会と、一年じゅうお互い同じ顔ぶればかり！ ああ！ そのような生活を送り、それに満足するためには、若い頃に捕らえられ、早くから馬具を付けられる必要があるので！ そして私は、

は、父と一緒にいたような男女と会い、知り合うようになりました。彼らは知るに値する人々でした！

ロンドンやその他の場所には、もう一つの社会があります——知性と教養と勤勉の、フリーメーソン——la haute bohème du talent〔才能ある高尚なボヘミアン〕——です。その男女の名前は世界中でよく知られており、また知られるべきです。彼らの多くは、国内外でも国外でも私の良き友人です。父と母にとって十分に良い社会でしたが、私にとってもかなり満足のいくものでした。

私は共和主義者なんですよ、イベットスンちゃん——コスマポリタンで——生まれながらのボヘミアンなのです！

'Mon grand père était rossignol;

Ma grand mère était hirondelle!'

『祖父はナイチンゲールで、

祖母は燕だった！』

*祖父はナイチンゲール………ギュスター・マチューの詩「ボヘミアン」より。

あちらの、私の愛する人たちを見てください——あなたの愛する人たちを見てください！ 何という文無しでしょう。お金持ちになるまでのつもりですが、決してそうはならないことを私たちは知っています！ 父たちは、アイディアを求めて五感をずっと酷使し続けています！ 母たちは、お金の節約と収支のやりくりのためにそうしています！……そう、イベットソンさん、あなたは私よりも rossignol「ナイチンゲール」に近い。お父様の声を覚えてますか？ 私はいつまでも忘れないでしょう！ 彼はつい前の晩、私に歌ってくれたんです。あなたについての不安に苦しんでいる最中に、私はその歌声に惑わされて窓の外で耳を傾けました。彼はロッシーニの『Cuius Animam 「彼女の魂を』』を歌いました。彼はナイチンゲールだったのです。それが彼の天職でした。せめてそのことを自分で理解なさっていれば。ですから、あなたは私のボヘミアンの兄弟なのです。それがあなたの天職です！……ああ、私の天職は！ それはね、忙しい頭脳労働者——科学者でも——陰謀者でも——作家でも——画家でも——建築家でも、お好きなものでかまいませんが、その妻になることなのです。彼の周囲に垣を巡らし、小さな心配事や悩みの元、人生の些細な苛立ちの種などのすべてから彼を保護すること。私は *par excellence* 「とりわけ」実務向きの女なんです——

*
『彼女の魂を』……
『スター・バト・マー・テル』の二曲目。テノール独唱である。



"ÉCHOS DU TEMPS PASSÉ"「[過ぎし日の御]」

管理者などですね。彼は、自分のアイディアを追い求めた後に帰るべき、温かくてよく整頓された小さな巣を持つことになるでしょう。

そう、私は、自分のことを生きている女性の中でもいちばん不幸だと思い、それからひどく苦しんでいる小さな息子への愛情に包まれました。彼を胸に抱き締めたとき、彼を温めて、感情と知性を吹き込む催眠術をかけようとしたが、無駄でした。ゴーゴーが私の心の中に戻ってきて、私はずっと『おお、もしゴーゴーのような息子がいたら、私はどんなに幸せな女性になったことだろう!』と考えていました。そして、彼とあまりに早く死に別れたことで、バスキエ夫人に同情しました。本当の夢を見始めたばかりの頃で、ゴーゴーとその優しい母上をもう一度見たからです。

その後のある晩——決して忘れられない一夜になりました——、私はレディ・クレイの演奏会に行き、あなたが隅に一人で立っているのを見かけました。私は、心臓が飛び出しそうになりながら思いました。『まあ、あれはゴーゴーに違いない。黒くなつて、フランス人みたいな頬ひげと口ひげを蓄えて!』でも、ああ、あなたはミスター・イベットソンでしかなく、レディ・クレイの建築家で、彼女が『それまで見た中でいちばんハンサムだったから!』という理由で自宅に呼んだのだということが分かりました。

笑うことはありません。あなたはとてもすてきに見えますよ、それは保証します！

そう、イベットソンさん、あなたはゴーゴーではなかつたけれど、急にものすごく興味が湧いたので、あなたのことが忘れられなくなりました——あなたは私の心から決して離れませんでした。私はあなたの相談役となり、助言し、手を取つてあげるような、姉になりたかったのです。この世界とその経験においては、あなたよりすでに年長であると感じたからです。私はさらに二十歳年を取り、あなたを息子に持つたかった。私は自分が何を望んでいるかを知らなかつたのです！　あの上流階級のあらゆる俗物たちの中にあって、あなたはとても孤独で、若々しくて、世界の汚れに染まらず、なおかつとても大きく、強く、がつしりして、無敵に見えました——おお、とても強そうに！　そのうえ、あなたはあんな誠実で快く騎士道的な敬愛と共感で私を見て、——ええまあ、それについては私は話せませんが——ですから、あなたは、ゴーゴーがなつたかもしれない人にとって似ていたのです！　おお、あなたは一目で、誰もが望むような温かく献身的な、私の友人となつたのです！

同時に、あなたは私にひどく人目を気にする恥ずかしがり屋だと感じさせたので、紹介を強いてお願ひするようなことはしませんでした——何を恥ずかしがっているのか、私にはよく分かりませんが。

親愛なるジュリア・グリジが『*Sedut' al Pie d'un' Salice* 「柳の木の下に座つて」』を歌いましたが、それ以来この曲は、私の心中であなたのイメージとずっと関連付けられていて、これからも変わらずそうでしょう。あなたの親愛なるお母様がハープでよく演奏していました。覚えてますか？

それから、あなたも私も覚えているあの異様な夢が現れました。不思議だと思いませんでしたか？ ご存じのように、親愛なる父は脳の奇妙な秘密を知っていました——睡眠中に、かつて見たり聞いたりした過去の出来事や人や場所を——覚えていないうな物事さえ——呼び起こす方法です。彼はそれを『本当の夢見』と呼んで、長い練習によつてそれを行う技術を完成したと私に言いました。幸福な青年時代と子供時代、それに愛する若い妻と過ごしたごく短い数年間に、眠つている間に何度も行くことは、彼の悩み多き人生の一つの慰めだったのです。父は、亡くなる前、私があまりにも不幸になつていたため、私にとっての人生はもういかなる喜びへの希望も持てそうにないのを見て取ると、自分の極めて単純な秘密を私に教えてくれました。

こうして私は、私がかつて住んでいたあらゆる場所を、眠つている間に再訪問してきました。特にここ、私が小さな女の子だった頃にあなたを初めて知った、最愛の場所を！

私たちが共通の夢で再び会ったあの夜、私はサンドー校から première communion 「初聖体」に行こうとしている少年たちを見ていました。数時間前、目が覚めていたときにはあなたを見かけたせいで、あなたのことをすぐたくさん考えながら、『テト・ノワール』の窓から外を見ていました。そのとき、あなたが突然現れたのですが、あなたは見せかけのひどい窮地に陥っていて、酔っぱらった人のようにふらふらと歩いていました。私の視界が刑務所の影でかき乱されました——まあ！　何てこと！——そして、二人の小さな看守が鍵をチャリチャリ鳴らしながら、あなたを閉じ込めようとしていたのです。

あれほどの短時間のうちにあなたをもう一度見たときの私の感動はすごいものでしたから、私はもう少しで目を覚ましそうになりました。でも、私はあなたを架空の恐怖から救い、あなたの手を取りました。あとは全部覚えていますよね。

私はあなたが一体なぜ私の夢の中にいるのか、理解できませんでした。私はほとんどいつも本当の夢を見ていたからです——つまり、自分の人生であつたことを見てい

* 『柳の木の下に座つて』……三三四ページに『柳の歌』として出ていたもの。ピーターの母がハープで演奏していたとのことなので、ロッシーニの『オテロ』第三幕のデスデモーナのアリアで間違いかろう。このアリアは、始終ハープが中心となって伴奏する。

たのであって——ありそなことを見ていたわけではないということです。私は、あなたの手の硬さを説明することも、私がそれを取ったときにはあなたが消えていかず、夢が曇らなかつた理由を理解することもできませんでした。それは、私が起きている間と眠っている間の両方の生活にわたって何時間も悩まされた、この上なく厄介な謎でした。その後、クレイ邸であなたと会う機会があつて、その謎の一部は説明できました。結局、あなたが私の古いお友だちのゴーゴーだったからです。それでも、二人の人間が、今こうして会っているように、一つの同じ夢の中で会うなんて、依然として謎のまま、恐るべき謎のままでした——お互いの脳があんなんに精密に噛み合うなんて。私たち二人の間にあるのは、イベットソンさん、すでにあのよな記憶で繋がっている二人の間にあるのは、何てすごい繋がりなんでしょう！

クレイ邸でお会いした後、起きているときであれ眠っているときであれ、あなたと再び会うべきではないと感じました。何しろ、あなたがゴーゴーだったという発見は、あなたがただの他人だったときから長いこと生じていた執心と相まって、私の精神にひどい混乱を引き起こしたのですからね——その混乱ときたら——それについては、あなたにも自分で試したり想像したりしてほしいところです。

クレイ邸での発覚の前でさえ、私は、私の夢の中であなたがこの場所に来ることに

しばしば気つき、注意深くあなたを避けてきました……あなた自身の夢の中でもあなたがこの場所に来ているとは、それこそ夢にも思わず！　あの上の小さな屋根窓から、私はあなたが公園や大通りを、見たところ私を探してさまよっているのをよく見ていて、あなたがなぜ、どのようにやつて来るのかを疑問に思っていました。あなたから隠れるため、あなたは私を屋根裏や使用人の寝室に追いやったわけです。それは完全にかくれんぼでした——私たちがカシュカシュと呼んでいた、あの遊びです。

でも、私たちがクレイ邸で会った後、私はもうカシュカシュはやめらるべきだと感じました。私はとにかくここに来ることを避けました。あなたは私を完全に追い払ったのです。

で、イベットスンさんの恐ろしい静いのニュースが突然世間に現れたときに、私が感じたことを想像してみてください。私は取り乱しました！　毎晩ここに来ました。あらゆる場所であなたを探しました——公園、ブローニュの森、オートゥイユの池、サン＝クル——思いつく場所全部です！　それで今、やつとあなたが来てくれた——やつとです！

しつ！　まだ話さないで！　すぐ終わりますから！

*カシュカシュ……cache-cacheは、フランス語で「かくれんぼ」の意。

六か月前、私はかわいそうな幼い息子を喪いました。^{うしな}私があの子を愛した量を、あの子から返してもらう望みはありません。二週間以内に、私は軽蔑すべき夫から合法的に離れることになります——天涯孤独の身になるのです！ その後は、イベットスンさん——おお、その後はね、この子あるいはこの女がかつて持った中でも最愛の友よ——、私が覚醒時の生活から捻出できる全時間が、私たち二人が生きている限り、そして二人が二十四時間中同じ時間帯に眠る限り、今後はあなたに捧げられることになるでしょう。私のただ一つの目的と努力は、あなたの楽しく価値ある若い人生の残骸を埋め合わせることになるでしょう。『石の壁でも刑務所にならず、鉄の棒でも牢屋にならない！』（そして、ここで彼女は泣き笑いをしたため、目を閉じることで涙を絞り出し、私は『おお、私はそれを飲んでもいい！』と思った）

今はお別れします。私は弱くて愛情のある女です。あまり自己批判せずにできるようになるまでは、あなたのそばに留まるべきではないと思います。

実際私は、喜びを完全に使い果たした状態から、間もなく目覚めるだろうと感じます。おお、喜びについて言うなら、私は利己的で嫉妬深い恥知らずなのです！

あなたに対し私がなりたいものになることができるほかの女性がいないことは、喜ばずにはいられません。ほかの女性があなたに近づくことは、決してできないので

すから！ 私はあなたの専制君主であり、奴隸なのです——あなたの災難は、あなたを永遠に私のものにしたのです。でも、私の人生のすべて——すべて——すべて——が、あなたにあなたの人生を忘れさせるよう努めることに費やされ、私はそれに成功すると思います」

「おお、そんなにひどく急がないでください！」私は叫んだ。「私は本当の夢を見ているんですか？ 目が覚めたとき、それを自分に証明するものが何がありますか？ 私は人類の中でいちばん救いがたい最低の人間なのか、それとも人生にこれ以上不幸な瞬間はもう訪れないのか。どうすれば知ることができますか？」

「聞いてください。私たちがよく『パルワ・セド・アプタ、le petit pavilion 「小わな家』』と呼んでいた家を覚えてますか？ 私がここにいるとき、それはまだ私の家です。あなたがそうしたければ、しかるべきときが来たら、それはあなたのものになるでしょう。そこには、あなたが興味を引かれるものがたくさん見つかりますよ。そうですね、明日の早い时刻に、あなたは独房で、中に紙片の入った私からの封筒を受け取ることになるでしょう。董も一緒に入っていて、紙には董色のインクで書かれた『パルワ・セド・アプタで—— à bientôt 「また近いうちに】』という言葉が書いてあり

* 石の壁de pierre…………リチャード・ラブレースの詩『アルシアベ、刑務所から』より。

ます。それで納得できますか？」

「おお、はい、できます！」

「いいですね。それでは、あなたの手を私にください、最愛、最良の人——両手とも！私はまたすぐにここに来るつもりです。この林檎の木のそばに。私は時間を指折り数えます。さようなら！」そして彼女は去り、私は目を覚ました。

私は自分の独房の、ガス灯で照らされた暗闇を認識した。夜明けの直前だった。看守の一人が、何か欲しいものはあるかと礼儀正しく尋ね、水を一杯くれた。

静かに彼に感謝してから、自分の身に起こったばかりのことを、言い表せないような驚きと法悦とともに思い起こした。

そうだ、あれは夢ではなかつた——私はそれを確信した——いかなる点においても夢ではない。その超越的で言語に絶した恍惚感を除けば、あれに夢と言えそうなるは何もなかつた。

あの最愛の声のあらゆる抑揚。そこには、以前は気づかなかつたほど知覚できないほどの外国語のアクセントが含まれていた。あの生き生きとしたあらゆる身振り。それは、彼女の父母両方をそれとなく思い起させた。彼女の黒いドレスには灰色の

装飾があり、黒と灰色の帽子をかぶっていた。彼女の周囲には白檀の香り——このすべてが、もし彼女が実在して肉体を持ち私の枕元にいたとしても、それよりもはつきり生き生きと私に印象づけられたことだろう。彼女の声音がまだ私の耳に響いている。私の目は彼女でいっぱいになった。あるときは、清らかで彫刻されたようになっていた横顔。あるときは、その灰色の目（時には優しく眞面目で涙に濡れ、時には笑いのために半分閉じられた）が私の目に固定された正面顔。しなやかで美しい彼女の胴は前方にカーブし、膝を抱え



「私の目は彼女でいっぱいになった」

て座っていた。弓なりで細く、滑らかでまっすぐな彼女の足は、かなり高級な靴を履き、時々彼女の話に合わせて拍子を取っているように思われた……。

そのうえ、手に触れたときの、あの生命を注入するような奇妙な感覚！　おお、あれは夢ではなかつた！　あれが何であつたのか、私に言うことはできないが……。

私は寝返りを打ち、言いようのない幸福を感じながら、再び眠りに落ちた——夢のない眠りは、目覚めて服を着るよう言われるまで続いた。

いくばくかの朝食が運ばれ、それと一緒に開封された封筒も届けられた。その中身は数輪の董、白檀の香りの付いた紙片で、その紙には董色のインクでこんな言葉が書かれていた——

"Parva sed apta — à bientôt!"

Tarapatapoum."

『パルワ・セド・アプタで——また近いうちに！
タラパタポウム。』

私は、判決から減刑までの間に経過した時間は省略するつもりである。善良な教誨師の援助と訓戒。リントット夫妻の優しさと感動的な別れ。彼らもまた、私がイベットソンの息子であると信じ込んでいた（私は真実を知らせた）。旧友ディーン夫人の面会……彼女の異様な情熱での感謝と称賛。

もし正確に記憶され、巧みに伝えられるなら、これ全部が十分に興味深いものにすることは疑いないと思う。ところが、これは皆、あまりにも夢のようなものであります——誰もが見る夢の方で——私のあの夢ではない——、あまりにもろく薄弱なので、永続的な記憶に残したり、あまり重要視したりすることができなかつたのだ。

やがて私は刑務所に移され——、世間に別れを告げ、快く気軽に新しい外面的生きの状態に適応した。

刑務所の日課は、脳を非常に自由に、何事にも支配されない状態のままにした。健康的な労働、澄んだ空気、質素で体によさそうな食事は、私にとつては快適なものだつた——毎夜の騒がしい感情の後の、日中の待ち望んでいた精神的休息である。

といふのは、私はすぐにパッシャーに戻つたからである。私はもちろんそこで睡眠中のすべての時間を費やし、古い林檎の木からあまり離れず、その変化をすっかり経験した。枝に葉のない状態から華奢な新芽と花が付くまで、花から果実が熟すまで、果

実から黄色い葉が落ちるまで、それからまた枝が裸になるまで。このすべてがわざか数回の穏やかな夜に起こったのだが、そちらの方が昼間の生活のようなものだった。私は今ではもう、フランスの林檎の木とそれに付く毛虫の習性に通じていると自任しているのだ！

そして、私が愛する人々、決して飽きることのない人々が皆、その周囲にいた――一人を除いて全員が。絶対的存在である人以外は！

ついに彼女が到着した。庭のドアが押され、鈴が鳴ると、彼女が晴れやかに、意気揚々と、素早く芝生を横切り、両腕を大きく広げた。そこには私たちの小さな世界が周りにあり――私たちがかつて愛し大切にした人たちが皆いるけれども、その人たちにはまったく見られることも聞かれることもない――、母とセラスキア夫人が亡くなつて以来、私は人生で初めて女性を抱き締め、彼女の唇が私のそれに押し付けられた。

十五、十六、十七年前によくしたように、私たちは芝生をぐるぐる歩きながら話をした。言いたいことはたくさんあつた。「シャルマン王子」と「妖精タラ・パタポウム」が「とてもかわいらしく一緒に」なつた――ついに！

時間が急に加速した――あまりにも速すぎる。私は言つた――

「君は僕に、君の家を見るべきだと言つたね――『バルワ・セド・アプタ』を――そ

こに興味を引かれるもの
がたくさん見つかるだろ
うと」……

彼女は少し顔を赤らめ、
微笑んで言った――

「あんまり期待しすぎな
いでね」私たちはすぐに、
自分たちが大通りをそち
らの方へ向かっているの
に気づいた。子供の頃、
私たちはよくこんなふう
に歩き、そしてもう一度
――この一度は記憶すべ
きものだ――それを行った
のである。

黄金の銘のある小さな



「ついに彼女が到着した」

白い家が建っていた。少年時代に千回も見たのと同じように——それ以来百回見たのと同じように。

柔らかく豊かな日ざしの中で、それは何とかわいらしく、小さく見えたことか！
私たちは石の perron 「外階段」を上り、ドアを開けて入った。心臓が激しく打つた。
見ることができた範囲では、すべてが以前と同じであつた。セラス キア 医師がシラー
を読みながら窓の所の椅子に座つていたが、私たちを気に留めることはなかつた。彼
の髪がそよ風で動いた。頭上では、部屋が掃除され、ベッドが整えられている音が聞
こえていた。

私は彼女の後について小さな物置部屋に入った。以前は入つた覚えがない場所である。そこはがらくたのようなものでいっぱいだつた。

「なぜここに僕を連れてきたの？」私は尋ねた。

彼女は笑つて言つた——

「反対側の壁のドアを開けてみて」

そこにドアはなく、私はそう言つた。

そのとき、彼女は私の手を取つた。すると、見よ！ ドアがあるではないか！ 彼

女はそれを押し、私たちは以前はあり得なかつた別のアパートの特別室に入った。そ

のための空間などなかつたのに——あり得なかつたのに——パッシーのどこにも!

「こちらへ」彼女はそう言うと、すぐに笑い、赤面した。そわそわと興奮して、恥ずかしがつているらしかつたからである——「覚えてる? —

『そしてヌーハはトーキルの手を取つて導いた、すると彼女の燃えるたいまつが丸天井に沿つて揺れた』

——緑色のモロッコ革のバイロンの本から、あなたが描いてく



「そしてヌーハはトーキルの手を取つて導いた」

れた『島』の小さな模写を覚えてる？ それがいいにあるの、このきれいなキャビネットのいちばん上の引き出しに。ここにはかつてあなたが私のために描いてくれたものが全部ある——無彩色のも色付きのも——すべてに私が書き入れた日付や説明などが付いている——『l'album de la fee Tarapatapoun 「妖精タラパタポウムのアルバム』』ね。これはただの複製。本物はハンプシャーの自宅にあるわ。

キャビネットも複製——きれいじやない？——ロシア皇帝の冬の宮殿から頂いたものよ。ここにあるのは、程度の差はあれ、全部が複製。見て、これは小さな応接間で——こんなに何もかもが完璧なのを見たことある？——有名なシュヴェーニュ王女のsalle à manger 「食堂」なの。時々、フランス・バターと『カソナード』を添えたイギリスの家庭用パンのスライスを食べるとき以外は、使つてはいないのだけれど。向こうにいる小さなミムジーは、ゴーゴーが彼女のそれを運んでくると、時々それをしたの。そのままだとミムジーの大きく開いた口から出るよだれが見えちやうから、それで彼女は持つていってそうしなければならなかつたのね。スライスはいかが？

ほら、クロスが広げられていて、deux couverts 「テーブルセットが二組」あるでしょ。ド・ロスチャイルド氏から贈られた有名なシャンパンのボトルがあつて、そこからるものがあつとたくさんある。花はチャツツワース邸からのもので、これはあなた

のためのロブスター・サラダ。パパはロブスター・サラダが得意で、私に教えてくれたわ。二週間前に自分で作つたら、ご覧のとおり、作つたばかりみたいに新鮮でおいしそうなままだし、花は少しも色褪あせない。

こっちにはタバコとパイプと葉巻ね。良いものならいいのだけれど。私は自分では吸わないでの。

こここの家具はみんな、珍しくてきれいだと思わない？ 私、ヨーロッパのあらゆる宮殿からその最高級品を盗んできたの。でも、その持ち主たちは一ペニーも損していないわ。上の階でもぜひ見てほしい。

あの絵を見て——ラファエロにティツィアーノにベラスケスね。あのピアノも見て——私、ライプツィヒで、それをリストが何度も弾いているのを聞いたのよ！

これが私の図書室。私がこれまでに読んだ本が全部揃つてる。素晴らしいと思つた装丁の本もみんなある。あまり頻繁には読まないのでけれど、ほこりは丁寧に払つているの。本物っぽくするために、普通のやり方でほこりが落ちるようにしてあるのよ。外的的生活のそれを思い出させるためもある。そういう生活つて、離れられるのならかなりうれしいものでしようけれど。ここでは何もかも、すごく真剣に受け止める必要があつて、自分自身に多少面倒をかけるようにしなければいけないの。見て、こ

こに父の顕微鏡がある。レンズの下には敷地内で私に捕まつた小さな蜘蛛がいて、まだ生きている。残酷だと思うでしよう？　でも、それは私たちの脳内にしか存在しないのよ。

私が着てゐるドレスを見て——触つてみて。すべての細部がどんなにうまく作られているか。そして、あなたも無意識に同じことをした。それはあの朝クレイ邸のトネリコの木の下であなたが着ていたスーツよね——私が今まで見た中ではいちばんいいスーツだわ。ここ、あなたの袖の上に、能う限り本物そつくりのインクの染みがあるわね（お見事！）。それに、このボタンは取れかかっている——完璧に現実どおり。私、夢の針と夢の糸と夢の指ぬきで、それを縫うつもりよ。

この小さなドアは、ヨーロッパのあらゆる美術館に繋がつてゐるの。このすべてを自分で組み上げて整理するのに、ずいぶん時間がかかった——夜の丸一週間分ね。きれいなカタログを持つてそこを歩くのはすごく楽しいわ。外は土砂降りにしてね。

このカーテンを通るとオペラ・ボックスよ——これまでに私が入つたうちでいちばん快適なもの。演劇だけでなく、オラトリオ、コンサート、科学の講義にも適している。あなたはそこから、私が今までに見た全上演演目を見ることになる。六か国語ですね。私の手を握つていれば、それを全部理解できるでしよう。親愛なるジュリア・グ

リジが『柳の歌』を何度も歌って、あなたは拍手を聞く。ああ、何ですごい拍手！

この小さな部屋に入つて——私のお気に入りなの。この窓から出て、その踏み段を下りると、あなたや私が今までに行つたことがあるどんな場所にも歩いて行つたり馬車で行つたりできる。それ以外の場所にもね。遠い場所はないし、私たちは手を繋いで行かなければならぬだけ。私の厩舎と馬車置き場がどこにあるのか、まだ知らないの。見つけるのを必ず手伝つてね。とはいへ、これまでのところは、私がドライブに行きたいと思うとき、この踏み段の下に馬車がいなかつことはないし、汽艇にもゴンドラにも行くべきすべきな場所にも事欠かなかつたわ。

この窓から、このソファから、私たちは好きなものを何でも、座つたまま見つめることができ。あれは何でしよう？ あなたも今気づいたように、猛烈に荒れ狂う海がある。見える範囲に船はいないわね。逆巻いて碎ける波音が聞こえるかしら？ アホウドリが見える？ 私、キーツの『ナイチンゲール頌歌しようか』を読んでいたの。そうしたら、

『荒涼たる妖精の国にある、危険な海の』

泡に開いた格子窓がある、という着想にすごく魅了されたわ。私にもそんな格子窓があればいいのに、と思った。私、自分の内なる意識から、というか、ええと、私が航海したことのある海から、その海をその海を導き出そうとしたの。気に入ってくれた？二週間前にやつたことで、ほぼそのときからずっと波は逆巻いている。何という轟きでしょう！ 風の音を聞いて！ 私は『妖精の国』を管理しきれなかつたわ。海と陸に一つずつ格子窓が必要だと思う。ぜひ手伝つてほしいの。ところで、今夜は何をしたいかしら？——ヨセミテ渓谷？ 冬のネフスキーラー通りで橇そりに乗る？ リアルト橋？ 日没後のナポリ湾でヴェスヴィオ山の噴火を見る？……」

「——おお、メアリー——ミムジー——、僕がヴェスヴィオ山や日没やナポリ湾に関心があるとでも？……今この瞬間に？……。本音を言えば、ヴェスヴィオ山にはあるんだけれどね！」

こうして、私たち二人のための二十五年間が始まった。その間、私たちは互いに仲間として、二十四時間中八時間ないし九時間を過ごした——たまにある、病気やその

他の原因によつて私たちのどちらかが正常な時間に眠れないような場合を除いては。

メアリー！ メアリー！

彼女が生きていた間、私は彼女を偶像視した。今は彼女の思い出を偶像視している。彼女のおかげで、私にとつてあらゆる女性が神聖なものになつた。最下層の者、ひどく堕落した者、神に見捨てられた者でさえ。彼女たちはいつも、助けてくれる友人を彼女の中に認めていた。

自分にこんなにも近い者に対して、どうすればふきわしい敬意を表すことができるのでろう？——かつて男性に近くあり得たいとなる女性よりも、さらに近い女性に對して。

私は、自分の心が分かるのと同じくらい、彼女の心が分かる！ 私たちほどには、二人の人間の魂が互いに浸透し合つたことはないだろうし、そういう先例があるなら聞いてみたかったところである。幼少期から死までの間に彼女が抱いたあらゆる考えが明らかになつた——そのすべてが私の考えだつたのだ！ 私たちが生きたように生きることは、避けられないことだつたのである。指を触れるだけで、奇妙な回路を確立し、私のもとでも彼女のでも、過去と現在の共通の意識を覚醒させるには十分だつた。そして、おお、ある幸運な機会が、彼女が黙認できないと思つたであろうものから

私を、私のような殺人犯の囚人を守ってくれたことに、私はどんなに感謝していることか。

私は、内気さと貧しさ、見苦しさと社交的虚弱さが統合された人間だ。だが、私よりも優れ、私よりも才能に恵まれた非常に多くの男性は、あまりにも多くの致命的な落とし穴に陥ることがあり、そうならないためには自制や自尊心が必要となる。私の場合、生来の弱々しさが、そうした落とし穴に陥らないための自制や自尊心と同じ働きをした、とも考えられるわけだが、私はそのようには考えないようになっている。

私は、彼女の並外れた愛情、幼年期に受けた持続的な印象の偶然の結果が、何らかのオカルト的、神秘的方法で、私の知らないうちに生涯を通じて私を追跡し、たとえ彼女が寛大すぎる目を持つていたにせよ、私を無価値なものにする考え方や行為から私を遠ざけていたのだ、と考えるようにしている。

ひょつとして、何年も前に私が大通りの門で別れを告げたとき、彼女の美しい母親の別れのキスと祝福、それに私に流してくれた優しい涙には、防腐の魔力がかかっていたのだろうか？ メアリー！ 私は、彼女が病弱でつらい思いをしていた幼年期から少女時代まで彼女の姿を追った——そして、成熟し切っていらない優美な痩せ方をした少女時代から、素晴らしい光彩を放つ者となり、自分がそうなった世界から引退し

た日でも。少女から女性への時代は、ヨーロッパの全宫廷を通過する勝利の行進のように思われた——私が夢でも見たことがないような場面だった——どんな王女でものぼせ上がるせるようなお世辞と奪い合い！　が、彼女は、現役の科学者兼医者の娘で——ヴァイオリン弾きの孫娘にすぎなかつた。

それでも、オーストリア宮廷の礼儀作法さえ、庶民であるセラスキア医師の子供のためにと省略された。

私が見た彼女にひれ伏す男たちは、何とすごい面々だつたことか——どれほど素晴らしい、ハンサムで、雄々しくて、華やかで、騎士のようで、威厳があつて、快活だったことか！　そして、すべての者に対し、彼女からは、変わらない幸福そうな愛想が注がれた——優しくて、うれしそうで、はしゃいでいるようで、無垢な、変わらない陽気さが、私利を考えることもなく。

少佐殿は正しかつた——「*elle avait toutes les intelligences de la tête et du cœur.*」「彼女は頭も心もすっかり知性でいはばいだつた」。それで、老いも若きも、最上位の者も最下層の者も、同じように彼女を愛し、尊敬していくように見えた——女性も男性も——彼女の完璧な誠実さと感じのよい穩当さのため。

そして、私の方はといえば、その間ずっとペントンヴィルで自分の冴えない製図板

にこつこつと図を描いたり、厩舎や貧窮者用の小家屋しようかおく^{リントット}のためにもう一人が描いた設計図を実行したりしていたが、そんな貧弱な仕事さえあまりうまくいったためしがなかつたのだ！

私がこの彼女の過去の人生を見れば、屈辱と嫉妬で気が狂いそうになるところだろうが、私たちはそのすべてを手を繋いで一緒に見たのである——魔法の回路が確立されたのだ！ 私は、このすべてが彼女にどう影響したかを見て理解し、この壮麗と光輝をほんとどたいしたことだとは考えない彼女の純真さきょうざに驚愕きょうがくした。

そして私は、彼女の心の中の、永遠に愛する母の記憶と父（最も気高く善良な男性の一人）のイメージによつて満たされていない空間の全部が、白いシルクハットとイートン校の上着を身に着けた小さな男の子のおかしな姿を安置していることに気づき、身震いした。その小さな男の子は私だつたのだ！

その後、恐ろしい十二か月が来て、私はそれを進んで空白のままにした——その十二か月の間は、夫に対する彼女の少女らしい空想が持続したのだ——その後、彼女の人生は、再び永遠に私のものになつた！

そして私の人生は！

囚人の生活は、概して幸福なものではない。その者のベッドは、一般に薔薇のベッ

ドであるとは思われていない。

ところが、私のはそれだつたのだ！

もし私が、かつてモロカイ島の編み枝小屋まで這つていった者たちの中でも最も慘めな癪病患者であつたとしても、やはりいちばん幸福な人間だつたはずで、眠るだけで薔薇のベッドにいる自分を見つけることができただらうし、眠っている私だけが眠つてゐるマアリー・セラスキアの友人でいることができただらう。この場合、彼女は私をよりいっそう愛してくれたことだらう！

彼女は、私の長い囚われ生活を、王様でも夢見たことがないような至福で満たし、そうすることで彼女自身の至福を見いだした。ひどい災厄の前に私が送つていたあの哀れな歩みの遅い生活、書き記そうと努めてきたあの生活を——私たちが手を繋いで互いの過去と一緒に通り抜けていく間、彼女は熱烈な関心と共感をもつてほぼ一時間ごとに目撃した。いつも彼女はそれをとても喜んで共有し、自分のものとした。

私は、そのようなむさ苦しい実態が、あのように輝かしく、あのような高い地位で生きた人間に及ぼす影響が怖かった。恐れる必要などなかつたのに！ 八歳の頃の彼

*モロカイ島……ハワイの島であるが、かつてハンセン病患者を隔離した地を含むことで知られてゐた。

女が私のことを「天使のような英雄」だと思ったのとちょうど同じように、彼女は生涯通じて、私がアポロで——正しく理解されなかつた天才で——殉教者であつたと思ひ込んだままだつたのだ！

それを思うと、私はたまらなく恥ずかしくなる。しかし私は、盲目的で無差別な愛情が、その極めて貴重な宝を気前よく与える対象として選び出した無価値な人間の、最初の例というわけではない。タラパタボウムも、ロバの頭を付けた団体の大きい道化者をシャルマン王子へと理想化した、唯一の妖精というわけではないのだ。こんな光景は、ああ！ 珍しいものではないのである。しかし、少なくとも私は、不相応な祝福に謙虚に感謝し、その価値を理解してきた。また、私はさらに、ある一つの才能の所有権を主張してもよいと思つてゐる。いつ、どこで、どのように愛するべきかも直感的に理解するという才能だ——一瞬で——たちまちのうちに——永遠に！

二十五年！

それは千年のように思われた。あの活潑で魅力的な四半世紀の間に、私たちが見て、感じて、やつてきたことは、たいへんな数になる。それでも、その時間はどんなに速く進んだことだろう！

そして今、私は、私たちの驚くべき内面的生活——*a deux* 「二人の」——を説明す

る努力をしなければならない。纖細で困難な仕事である。

世間の目に——どんな目にも——明らかになる人の打ち明け話——女性の人生が自分のそれと密接な繋がりがあり、その献身的な女性の愛のおかげで彼のもとに訪れた無情の幸福の打ち明け話——には、理不尽さと趣味の悪さの両方がつきまとつ。

最も同情的な読者でも、そのような暴露には反発しそうである——会つたこともない者の美だの美德だの心的な贈り物だのに懷疑的になるためだ。いずれにしても彼らは、彼の得たものなど知つたことではないと感じ、彼女側については、あまりにも幸運な恋人や夫など、聖なる沈黙の対象であるべきだと感じるからである。

そのような沈黙を守らないせいで、たくさんの自叙伝の興味が損なわれてきた——たくさんの小説の興味さえも。そして、私生活においては、そのような愛の籠もつた内緒話が聞き手をどれほど当惑させることがあるかを、そのような当惑を引き起こしてしまつたという苦い経験によつて、思い知つたことのない者がいるだろうか？私はこの点を踏み越えないよう最善を尽くすつもりである。私が失敗した場合（すでに失敗しているかもしれないが）、それらの状況は完全に例外的で、失敗するようなほかの状況と同等のものではないと弁明することしかできない。そして、私が抱いている深い感謝の念を、さらには私の情熱的な称賛と愛さえも、ぜひ考慮に入れてほし

いところである。

私の人生の次の三年間は、退屈だが満足のいく刑務所生活と、それまでなかつたような蜜月との交替反復以外、何もお見せできるものはない。刑務所生活の方には、記録する価値がある時間は一時間もないし、記憶する価値さえない。そのもう一方の引き立て役としての時間を除いては。

それは私にとって、就寝時間の一時間だけだった。幸い、それは早い時間帯だった。肉体が健康的に疲労し、心がこの上なく幸福な期待に満ちた状態で、私は仰向けになり、両手を頭の下できちんと交差させると、すぐに眠りが香油のように広がっていった。実際の自分は誰で、どんな人間で、どこにいるのかを忘れてしまう前に、意志を向けた目標地点に到達し、目を覚ますと、肉体が別の場所、別の服装で、魅惑的な窓の近くのソファにあることに気づく。腕は依然として頭の後ろで交差したままだ——神聖なポーズで。

次に私は四肢を伸ばし、外面的生活からすると解放される。それは、自分で紡いだ繭の監禁状態から新生した蝶のようで、言葉にできないような若さ、力、新鮮さ、至福の感覚を伴う。目を開けると、隣のソファにやはり仰向けになつたメリの姿が見えるが、それは彫像のように静止して生命感がない。時が来るまでは、彼女を目覚

めさせられる術^{すべ}はない。彼女の時間が方やや遅く、彼女は相変わらず私が後ろに置いてきたばかりの外面的生活の苦労の中にいたのである。

その苦労は、彼女の場合、私のそれよりも複雑だった。彼女は世界を諦めてしまつていたのだが、それでも彼女にはたくさんの友達がいて、膨大な通信があった。そのうえ、無限の健康とエネルギー、精気の素晴らしい回復力、ビジネスのための高い能力が授けられた女性であることで、彼女は多くの厄介事と従事活動を自分に生じさせてきたのである。

彼女は、身を持ち崩した女性のための家、青少年窃盗犯のための更生施設、子供の病後療養所の、事実上の女主人なのだつた——このすべてに、彼女は直接個人的な監督をし、持つてゐるお金をほぼすべてつぎ込んだ。ハンプシャーの自宅は貸してしまい、キャンプデン・ヒルの小さな家具付きの家に、二人の女性使用人と一緒に住んでいた。馬車は持たず、辻馬車や乗合馬車で動き回り、女家庭教師がよく着るような服を着ていたが、私たちが一緒にいるときの彼女以上に堂々と格調高く見える者は誰もいなかつた。

彼女は自分の名声と肩書きを、自らの慈善行為に利する影響力の強力な武器としてなおも保持し、高貴な人々が好きな慈善心ある実利家たちの財布への絶え間ない襲撃

において、それを無慈悲にも振り回した。

このすべてが、彼女の心の平静に少しも影響しない多くの世評を生じさせた。

彼女は、講義、委員会、理事会、評議会にも出席し、バザー、無料食堂、簡易食堂などをオーブンした。彼女が自らに課した務めのリストは無限だった。このように、彼女の外面的・生活は溢れるほど満たされていて、また私と違つてそのすべての時間が記録に値するものだった——と言えるのも、そのすべてを目撃した私は、内容をよく知つてゐるからである。しかし、ここは公爵夫人の外面的・生活を書く場所ではない。誰もが知るように、それは別の人があつてくれたから。

これ以降のページは、「Magna sed Apta マグナ・セド・アプタ」（^{*}私たちは、彼女が自分の幼少期の家である「パルワ・セド・アプタ」にくつづけていた新しい家と芸術の宮殿をそう呼んでいた）の「妖精タラパタポウム」であるマリアー・セラスキアに捧げられなければならない。

彼女が無意識で横たわつていると書いて放置してしまった箇所まで話を戻そう。頬には色が、鼻孔には呼吸が、心臓には鼓動がすぐに戻り、彼女は目覚めて自分のエデンの園に気づく。これから八時間、お互ひの所属集団内にいながらそこで過ごせるそれを——私たち共通の内面的・生活を——、彼女はそう呼んでいた。

この幸せな瞬間を待つて、私はコーヒー（素晴らしいコーヒーだ！）を淹れ、一、二本タバコを吸う。その至福を十分に味わうには、イギリス刑務所内で実生活を送る常習的喫煙者である必要がある。

外界での十六時間の多忙な夢うつつ状態から彼女が目覚めると、それまでほかの人間が決して知らなかつたような喜びの選択が私たちの前にあつた。彼女は生涯を通じてたいへんな旅行家であり続け、多くの国や都市に住み、たいていの人よりも多くの生活や社会や自然を見てきたのだ。私が彼女の手を取るだけで、そして二人のうち一人が願うだけで、見よ！ どちらかが行つたことのある場所ならどこであつても、見たり聞いたり感じたり食べたり飲んだりしたことのあるものなら何であつても、その中から選んだものがもう一度そこにあり、もう一人はそれを共有するのである——以前には想像もできなかつた自己催眠か相互催眠のようだ。

すべては、それが起こつた実際の時間にどちらかにとつてそうであつたのと、同じくらい実物そつくりで、同じくらい私たち両者にとつて現実そのもので、さらにこの世の生活のものではない新鮮さと魅力が付け加わつていた。それは夢ではないのだから

*マグナ・セド・アプタ……「大きいながらも調和の取れた」の意。

*芸術の宮殿……テニスに同名の詩があるが、関連があるか？

た。それは第二の人生、より優れた世界だったのだ。

しかしながら、私たちは一定の範囲内に留まらねばならず、自分たちで発見したある法からの逸脱に注意する必要があった。それを十分に説明することはできないのが。例えば、実際の経験を外れるような偉業、空を飛んだり、高所からジャンプしたり、何にせよこうした普通の夢を魅力的で驚異的なものにする非自然的なことをするのは、破壊をもたらした。もしそれをしようものなら、私たちの本当の夢は曇り、普通の夢と同じようになってしま——曖昧で、たわいなく、非現実的で、不正確な——根拠のない映像の織物のように。また、自分を少しも変えてはいけないのでした。爪の形さえ、自分のそれそのままでなければならない。ただし、私たちは自分を最高の状態に保っていたし、なるべき年齢を選択することならできた。私たちは二十六歳から二十八歳を選び、それに固執した。

それでも、実生活ではまったく不可能であるようなことでも、大手を振ってできることがたくさんあった——最高に楽しいことが！

例え、目覚めのコーヒーの後、ヨセミテ渓谷で二、三時間過ごし、ゆったりと散策して、香りある新鮮な空気を呼吸し、仲間の旅行者たちを見て、彼らの会話を聞きながら、巨大な松——私たち両者にとって飽きることのない喜びの源——を眺める

こと、それも私たちどうしは実質と中身があるが、彼らから私たちはまったく聞こえず、見えず、触れないという快適さを意識しつつそれをするのは、確かに楽しいことだった。私たちはしばしば観光客を省き、ヨセミテ渓谷を独占した（そこではいつも、彼女が夫と一緒に訪れたことのあるどの場所でも、彼女と彼の以前の姿、私が耐えられない光景を省いたものだった）。

そぞろ歩きと賞観^{しようがん}に満たされると、彼女の意志のわずかな努力と、二人が目をほんの少しの間閉じただけで、気づくとドレスデンでの優雅なガーデン・コンサートに向かってコルニチエ通りを馬車で移動していたり、セント・ジェームズ・ホールの土曜日大衆向けコンサートに向かってゴンドラで漕がれていた



セント・ジェームズ・ホール、ピカデリーへ

りしたが、これもまた楽しいことだった。そこからハンサムに飛び乗って、ピカデリーと凱旋門への公園をさつと通り過ぎ、パッシーのポンプ通りにある「マグナ・セド・アプタ」へと、ディナーにちょうど間に合うように帰宅した（魅力的なドライブで、少しも長すぎると「う」とはなかつた）。

私ではなく、彼女の記憶から上手に注文された、非常においしい小さなディナー（全パリで最高級の小さな食堂で食べられる——シュヴューニュ王女のそれだ）。「huîtres d'Ostende」〔オスタンンドの牡蠣^{かき}〕と言つてみよう。すると「soupe à la bonne femme」「田舎のおばさん風スープ」、「perdrix aux choux〔シャコとキャベツの煮込み〕」、「パンケーキ、fromage de Brie〔ブリーチーズ〕」と続く。飲み物は「ロマネ・コンティ」のボトルだ。ウェイターが皿を取り替える煩雜さもない。願い、目を閉じた瞬間——augenblick! 「一瞬で！」それは完了した——それから私たちはお互いに給仕し合うことことができた。

刑務所の食事、そして近い過去に食べていたことを思い出す十ペソスのロンドン・ディナー以外は何もない生活の後で、私は、自分があのような連れとそのわずかな御馳走をありがたがるような、低俗な物質主義者だと思われないことを期待している（子供の頃の昔のディナーを除き、十ペソスではないもので私が覚えている唯一のディナーは、タワーズ公爵夫人がミムジー・セラスキアであることが判明したクレイ邸で

の名高いディナーであったが、私はそれをあまりたくさん食べなかつたのだ。

それからタバコ、コーヒー、それにキュラソー。その後、プライベート・ボックスに到達するためにする必要があるのは、その部屋を横切つてカーテンを上げることだけである。

すると、私たちの前には明々^{あかあか}と照明が灯された劇場やオペラ・ハウスが現れ、楽器がチューニングし、素晴らしい観衆が入場していた。国王や女王、有名な美女たち、世界的に知られた武人や為政者たち、ガリバルディ、ゴルチャコフ、カヴァール、ビスマルク、モルトケ。今ども有名で、そうでない者がいるだろう



オペラ・ボックスへ

*オスタンドの牡蠣……オードブル名のように見えるが、料理のコース名のようだ。

か？ メアリーは彼らに私の目を向けさせた。隣のボックスにはセラスキア医師とその長身の娘がいて、その輝かしい観客たち全員と友人のようだつた。

それは、時にはサンクトペテルブルク、時にはベルリン、時にはヴィーン、パリ、ナポリ、ミラノ、ロンドンであつた——あらゆる大都市が順番に現れたのだ。しかし、私たちのボックスは常に同じで、いつもその劇場の最高のものであり、私は、あの王族や上流階級や輝かしい人々全員を前にして自分の葉巻を吸う特権を与えられた唯一の人間であつた。

それから、序曲の後で幕が上がつた。それが演劇で、その演劇がドイツ語かロシア語かイタリア語あつた場合、そのすべてを理解するために必要なのは、メアリーの小指に触れることだけだつた——真実ではあるのだが、不可解なことである。理解できているほどにはどの言語も話せなかつたし、少しでも接触が断たれた瞬間、それらは私にはギリシャ語かヘブライ語で演じられたも同然になつたからだ。

しかし、私たちが最も関心を寄せたのは音楽で、あの三年間は（その後でさえ）、私たちに音楽は供給過剰なほどだつたと言つてもよいと思う。メアリーは、その多忙な覚醒時の生活を通してずっと、ロンドンで良質の音楽が演奏されるならそのすべてを聞きに行く時間を捻出し、夜それを私に持ち帰ることができたのだ。私たちは一緒

に、それを繰り返しダ・カーポして聴き直した。

国王や女王の後援と臨席によつて栄誉を与えたコンサートに同席し、さらに自分たちが好きな特定の曲をどれでもアンコールできるのは、二人の私人、しかもその一人は囚人である者たちにとつて、類い稀なる特権である。私たちはそれをどれほど の頻度で実行したことだろう！

おお、ヨアヒム！ おお、クララ・シューマン！ おお、ピアッティ！――皆、よく知つてはいたが、生の耳で聴いたことはなかつた！ おお、そのほかも、全員の名前を挙げることなく名前を出したのでは不公平になりそうな人々だ――何という壮麗な目録！

あなたはまつたく意識されることなく、腹立ちや疲労の合図をあなたが発することもなく、私たちはあなたに同じ楽章をどれほど何度も繰り返させたことか！ 私たちのお気に入りの居間を飾つていたリストお気に入りのピアノで演奏してもらうために、どれだけ彼を頻繁に召喚したことか！ 私たちにどんなに最高の喜びを与えてくれたかを、彼はどれほど知らなかつたことか！（これからも知ることはないだろう、ああ！）

おお、パッティ！ アデリーナ！ おお、サントリーにシムズ・リーヴス！ おお、

*アデリーナ……原文Angelinaだが、アデリーナ・パッティのことであると見て訂正した。

ド・ソリア、応接間のナイチングールよ、その声はまだあなたたちに残っているのかどうか！

そして、あなた、リストリ、あなた、サルヴィーリ、et vous, divine Sarah, qui débutiez alors! On me dit que votre adorable voix a perdu un peu de sa première fraîcheur. Cela ne m'étonne pas! Bien sûr, nous y sommes pour quelque chose! 「そして、あなた、当時デビュートばかりの聖なるサラ！　あの愛らしい声は、初期の新鮮さをやや失ったと謂われている。別に驚きはない！　もちろん、私たちにはその責任があるので！」

• • • • •

それから、あらゆる国々の美術館、博物館、植物園に動物園——「マグナ・セド・アプタ」にはそれ全部のためのスペースがあった。大英博物館のエルギン・マーブルのためのスペースやえ。それは私が加えたものである。

世界の絵画や彫刻の間で過ごすのは、何と魅力的な時間だったことか！　あちこちで、たぶん余計であろうものを取り除いたり、別のやり方で吊したり、もつと良い光があると思われる場所に置いたりしながら。『ミロのヴィーナス』は、ルーヴル美術

館よりも「マグナ・セド・アプタ」の方がはるかに引き立つて見えた。

家でこんなふうに忙しく楽しんでいるときに、またその樂しみを高めるために、私たちはず外をひどい悪天候にした。土砂降りの雨が降るか、さもなくば北風がヒューヒューラなり、「マグナ・セド・アプタ」の荒涼たる庭に雪が降り、見渡す限りの風景が白くなつた。

とはいゝ、いちばん懐かしかつたのは、私たちと同時代の多くの絵であつた。結局のところ、私たちは自己修養の努力にもかかわらず、現代人の中の現代人だつたからだ。存命しているか、最近まで存命したヨーロッパの大家で、その最高の作品が私たちの所有にならなかつた人はほとんどいなかつた。その作品がかなり明るい照明を当てられて吊られているので、大家たち自身も満足したことだらう。私たちには自由になるたくさんのスペースがあつたため、それぞれの絵にそれ自身のための壁を持たせ、その美しさを十分發揮するよう色調を整え、その真向かいには二人のための快適なソファを置いた。

しかし、私たちがいちばん多く過ごした小部屋、あの魔法の窓がある部屋には、特にお気に入りのイギリス派の作品を少數だけ詰め込んでいた。私たちはかなり外国

*イギリス派……ラファエル前派を指す。

の血が入っていたため、典型的なイギリス人よりもさらにイギリス人だったからである—— plus royalistes que le Roi 「王よりも王党派」だったというわけだ。

そこには、マレーの『秋の落ち葉』『ウォルター・ローリーの少年時代』『十月の冷氣』、ワツツの『エンディミオン』『オルフェウスとエウリュディケ』、バーン＝ジョーンズの『愛の歌』『ヴィーナス贊歌』、アルマ＝タデマの『アグリッパの謁見』『アンピッサの女たち』、J・ホイッスラーの母の肖像、E・J・ポインターによる『ヴィーナスとアスクレpios』、F・レイトンの『ダフネフォリア』、ジョージ・メイソンの『中秋の満月』、フレデリック・ウォーカーの『避難港』、それにもちろんメリデューの『太陽神』。

さらに、H・S・マークスがデザインした、ムナグロとその卵（私はそれが好きだった）で縁をぐるりと精妙に装飾された衝立の上には、いつだつたかメアリーが恋に落ちた油彩と水彩の小さな珠玉作があった。ホイッスラーの不滅の『月光ソナタ』、E・J・ポインターの非常に美しい『田園の聖母マリア』（パリ、一八五七年の日付入り）、子供たちからたいへん好まれそうな、V・プリンセプによるかわいらしい『ビンビ』二枚。T・R・ラモントの感動的な『アベ・コンスタンティンの夕食後』では、すてきな女の子が昔のスピネットを弾いている。T・アームストロングの称賛すべき作品、彼の

初期のより現実主義的な様式で描かれた『ズワーブ兵と婆や』。ジョン・リーチ、チャーリズ・キーン、テニエル、サンボーン、ファーニス、コールデコット等の見事なラフ・スケッチは言うまでもない。信じられないほど巨大で、色黒で、ぼさぼさの毛のセント・バーナードの、銀筆による数え切れない小さなスケッチもまた言うまでもない——どこかの陽気な鉛筆のトルバドゥールで、私と同じようなさすらいの混血児で、その者によくあるフランス名が署名されている。彼は、私が私の犬を愛するのと同じくらい自分の犬を愛していたようだ。

その後、突然私たちは、この比類なき芸術的豪奢さすべての中心には何かが欠けていると感じた。それについて、何か空虚感のようなものがあったのだ。そして、私たちの場合、こうしたあらゆる美しいものを集めるための主たる動機がないのだということに気づいた。

一 私たちは唯一の所有者ではなかつた。

二 私たちにはそれらを見せる人がいなかつた。

三 したがつて、私たちはそれらを自慢に思うことができなかつた。

*王よりも王党派……シャトーブリアンの『憲章に基づく君主制について』より。

リネズミがいる昔の勉強部屋でもまったく同じように幸福になれることに気づいた。私たちそれが薪の火のそばで座面が籐の肘掛け椅子に座り、互いのために栗を焼き、間に一冊の本を置いてどちらか一人が大声で読み上げる。あるいは、さらに好ましいのは、彼女が数時間前に読んでいた朝刊と夕刊を読み上げることだった。話しても信じられないかもしれないが、彼女は覚醒時にそれらを読んでなどいなかつたのだ！ 彼女はただそれらを注意深く一瞥し、上から下までそれぞれの欄の外観を把握しただけだった——それなのに、彼女は手にした夢の新聞からあらゆる言葉を読み上げることができた——こうして、報道を正しく反芻したのである！

小さいながらも実用的なやり方で、これは常に、私たちがすでに達成していた中で



子供の勉強部屋

の問題に対する、最も完全で目覚ましい心の勝利であるように思われた。

本当のところは、あまり多くのものを読めたわけではなく、それについて話すべきことの方がたくさんあつた。

残念ながら、「マグナ・セド・アプタ」の弱点はその図書室にあつた。当然のことながら、それは私たちのどちらかが覚醒時に読んだ本でしか構成できなかつた。彼女は非常に活動的な生活を送っていたので、本のために残された余暇がほとんどなく、私はと言えば、読書好きな若者が日常的に読んでいるようなものしか読んでいなかつたのだ。

しかし、私たちが読んだことがあるような本は最大限に利用され、かなり豪華に製本されたため、もしここに見に来たならば、その著者たちさえ誇らしさとうれしさとで顔を赤くしたであろう。それらをさらに繰り返して読む時間はほとんどなかつたけれど、私たちはその背を眺め、取り出して指で触れ、注意深く元に戻すという真の愛書家の歓喜を楽しむことができた。

これらの歓待、小旅行、祝い事、炉端の楽しみのほぼすべてにおいては、当然メアリーがリーダーであり主人であつた。そうでないケースはほんんどあり得なかつた。かつて有名なメアリーという人がいて、その彼女を知ることが自由教育になると言

われていた。メアリー・セラスキアを知ったことは、私にとつてそのすべてになつたと言つてよいと思う！

しかし、時々私は、彼女のもてなしにお返しするための小さな試みを実行した。

私たちは、クラーケンウェル、スマスフィールド、カウクロス、ペチコートレーントラトクリフ街道、東イングランドと西イングランドのドックなどの貧民街に一緒に出かけていった。彼女は私と一緒に低級な演芸場ペニーハウフやミュージックホールに入った。グリニッジ・フェアやクレモーン・ガーデンズやロシャーヴィル・ガーデンズへ——彼女はそのすべてを好んだ。彼女は私と同じくらいペントンヴィルを知っていた。そこには私の昔の下宿があつて、私たち二人はそこで、以前の私が本を読んだり絵を描いたりしているのを肩越しにのぞき込んだ。私がすっかり忘れていた『鐘』についての小さな予言の歌を、忘却の淵から救い出したのは彼女だった。彼女はリントット氏のパーティに行き、それらが非常に愉快であることに気づいた——特にリントット氏が。

さらに過去に遡って、彼女は私とパリじゅうを歩き回り、私とノートルダムの塔に登り、神秘的な言葉「アナンケー！」を当てもなく探し回った。

しかし、私のようにあまり旅慣れていない寡聞な者にも、見せるべきもつと良いものがあつた。

彼女はハムステッド・ヒース公園を見たことがなかつたのだ。私はそれを、暗記していると言えるほど知つていた。ハムステッド・ヒースはいつでもそうだが、十月下旬の晴れた朝は特に、どんな者からも軽んじられるべきではない。

葉の半分が落ち、そのため残つてゐるもののが衰えゆく美観を見ることができる。黄色、茶色、青白い色、病的に紅潮した赤色が、*スペニヤーズの近くの高い傾いた松や、古いヒマラヤスギの木々や、ハムステッドの庭園を有名にしたイチイと柊の生け垣のように、冬の間じゅう繁茂するつもりの木々の、豊かで暗い実用的な緑を背景にして、ギニー金貨や光る銅貨のよう輝いている。

私たちの前に衰退のため朽葉色に変わつてゐるシダの海があり、その中に深緑色のハリエニシダの島々と、緋色とオレンジ色とレモン色の小葉が舞い落ちる小さな木々があつた。その小葉は明るい草の上に互いを追いかけるように落ち、草の上には柳をざわつかせる身の締まるような西風が吹き、柳は次の変化への敬虔なる諦念のうちに葉に白いものを生じさせていた。

ハロウ・オン・ザ・ヒルには鋭い尖塔があり、彼方に青くそびえている。遠くの尾

*自由教育……生活のための手段ではなく、人間としての資質・教養を高めるための教育。
*スペニヤーズ……「スペニヤーズ・イン」（古くからあるパブ）のことか？

根は、後退する波のように、低層の霧から青色の中へと次々と隆起している。最後の尾根は青くなつて空間に溶け込んでいた。その真ん中ではすべてが、剥離して風景の中へと光沢面を上にして落ち込んできた空の破片のような、ウェールズ・ハープ湖の光を反射している。

反対側にはロンドン全体があるのだが、目線の高さにはセントポール大聖堂の金色の十字架以外は何もない。ほかはパッシーの高さから見えていたパリのように足元に見えた。本当の夢を見る者たちをしていつそう見つめさせ、考えさせ、夢を見させる光景だ。私たちは座つて、十分に考え、夢を見、景色を見つめた。手を繋いで、共に喜びを沸き立たせつつ。

一度、私たちが座つていたとき、背後に蹄の騒音が聞こえたことがあった。そこにいたのは、私が以前所属していた連隊の一隊で、彼らは外での訓練中だった。私たち自身と彼らのお互いどうしを除いては見えない中で、私たちは忍耐強くおとなしい黒の軍馬に乗つている奔放な騎兵たちを見ていた。

最初にやつて来たのは騎乗旗手だった——明るい髪のアーポロという男で、裕福な若者である。見た目には優雅で堂々としていて——気取らず恐れ知らずだが、愚かうけおほがさつで高慢で——まるでフェビュス・ド・シャトーペールのイギリス人版で——請負

師の大物の息子であった。私は彼をよく覚えていて、彼は私をあまり好きではなかったことも覚えている。次は厩舎用の上着を着た下士官兵たちで、（所々にいる屈強な伍長を除けば）彼らのほとんどは新米の、ひょろつとした若者であり、将来的には大いに力を付けることを予測させ、それぞれが二頭目の馬を引いていた。そしてその中に、彼ら全員の中で最も長身でひょろ長いが、それでいて田舎の若者みたいに血色がよい以前の私が、『On revient toujours à ses premiers amours』^{*} 「人は常に初恋に戻るものだ」を無感動に口笛で吹きながら馬に乗っていた——どこにでもあるようなその光景（と音）は、いかにもメリーランドの感じやすい心の琴線に触れたらしい。彼女の目に涙が溢れていたからである。

*『人は常に……』……イズアールの歌劇『ジョコンダまたは恋愛の放蕩者たち』より。



"ON REVIENT TOUJOURS À SES PREMIERS AMOURS"
「[人は常に初恋に戻るものだ]」

このような珍しい経験で満ちた三年間にわたる蜜月を、すべて略さずに記述する必要はない。そんなものは、一方の側の人間の未熟なペンによる、別の側の人間の表面的な記録にすぎない。そのようなテーマにどんなペンを求めればよいというのか！それはただの人生ではなく、私たちが互いに共有した、人生の最上部分と核心部分そのものだつたのだ——苦労や厄介ごと、摩擦や疲労は、すべて除外されていた。ある喜びから別のそれへと、時間と空間を通過するのに必須となる世俗的な旅は省略された。そのような旅それ自体が喜びとならない限りは。

例えば、素晴らしい汽船の甲板でなら楽しい時間を過ごすことができる。サファイア色の熱帯の海を突き進み、美しい西インド諸島に向かうときのように。質のよい葉巻と、この世で最愛の連れとともに、イルカやトビウオを見たり、自分の同乗者や船長や船員たちに控え目な興味を抱いたりしながら。その後は、時間を過ごして葉巻の煙を吐いて、目を閉じ、船の横を降りて美しい櫂に乗り込むのもよい。すると、豪華な毛皮で全身を半ば覆われ、凍ったネヴァ川を疾走してロシア皇帝の冬の宮殿の舞踏会へと向かい、そこでサンクトペテルブルクのすべての美女と騎士たちの中で私のメアリーとワルツを踊るのだが、初めてのこととて完璧からはほど遠い私のワルツの欠点や、メアリーが着ているものほど当時の社交界向きではない私の装いの欠点に、気

づく者はいないのだ。私たちは美的感覚のある人間であり、まさにギリシャ人的で、自分たちのファッショソは自分たちで作つたのであるが、私はそれを書く気はない。

バッキンガム宮殿から下層のホールまで、私たちと一緒にワルツを踊らなかつた場所があるだろうか？ ヴァルスなのかワルツなのか、その正しい呼び方は何であれ、私は自分がそれを楽しむようになつたことを白状しておこう。たいして自慢できることではないが、一年後か二年後には、私よりも優れた踊り手はヴィーンじゅう探しても見つからなくなるだろうと言つてもよいと思う。

ところで、私はさらにここで、何年も前のレディ・クレイの演奏会で快く始まつた英國貴族との旧交を温め、親睦を深めることが（もちろん、例によつてメアリーと手を繋ぎ、彼女の追体験で、だが）、どんなに



冬の宮殿へ

喜ばしいことだったかに言及してもよい。

我が英國貴族は、決してワルツがうまくなく、一般に軽快さが不足している。しかし、ヨーロッパ社会の最上層と交わる至高の機会を得た（元兵士で、建築家かつ測量士で、囚人かつ狂気の犯罪者の）ピーター・イベットソンが、我が英國貴族は、貴族全体の中では最も見た目がよく、最も身なりがよく、最も上品に振る舞える貴族であり、また最も良識があり、最も閉鎖的ではない——おそらく、最も閉鎖的でないからこそ最も良識があるのである——と考えていると聞けば、喜び、勇気づけられる人もいるかもしね。

彼らは、そうした優れた天分のある特權的な部外者ならば、よく無視もするけれども、完全に拒絶することはない。（その者の名譽と栄光のためだけに）お世辞を言つたり教えたり楽しませたり、また彼らの使い走りになり、雑用をし、彼らを喜ばせるために転んでみせるような、そういう心構えが十分にできている者、そしてまた、自分と同じ羽を持つ鳥とはつがいになる望みのないような、彼らの中のそんな「醜いアヒルの子」（あるいは「魅力のない白鳥の雛」と言おうか？）と結婚することさえやぶさかでないと思っているような者、そのような者なら、受け入れることもあるのである。というのは、彼らは、肉体美に対する真のイギリス人の目を持っているからだ。

実際、彼らにとつてはかなり幸運なことに、自分たちの狭い範囲を超えて——いや、広い大西洋さえ超えて、美しさとドルとかくも幸福な組み合わせで見いだされるであらう国へと白羽の矢を立てるのは——もちろん成功する——、実によくあることなのである。

彼らは、ユダヤの娘たちの顔立ちの良さも、その富も、その頭脳も、その古くからの極めて貴重な血も、軽蔑することはない。彼らは、科学では「内浸透」と「外浸透」(これらの語を私が正しく綴りていればいいのだが)の名称でよく知られている、流体の自動的な浸透という秘密の美德を知つており、それと同じことを実践しているのである。それにより、彼らは自分の種の保存において賢さを見せ、それだけ長く持ちこたえるだろうが、あまり長くは続かない。

ピーター・イベットソン(等々)は、個人的にはそれが害にならないことを望んでいる。

• • • •

* 美しさとドルとが…………この当時、イギリス貴族とアメリカの富豪令嬢との結婚はよく行っていた。なお、「内浸透」と「外浸透」の原文は "endosmoses" and "exosmoses" である。

さて、本題に戻ろう。これらの旅行と娯楽と社会と社交界のすべての誘惑とともに、「私たちの子供時代のかわいらしい場所」とその全関連物への愛は飽くことがなかつたため、私たちの最大の喜びは、自分たちの昔の生活を何度も送り直すことと、ゴーゴー、ミムジー、二人の両親、いとこたち、少佐殿に、もう一度その行動を経験させることだった。さまで忘れられた過去の断片から、彼らの昔の新たな行動を思い出すこと。時々うまくいったが、それを狩り出すのは、この世で最もわくわくするスポーツであった。

これら愛する影たちへの私たちの優しさは、知れば知るほど大きくなつた。私たちは、それぞれの親愛なる父と母の魅力と善良さと優しさを、十分に経験を積んだ目ですっかり見ることができた。そのときの私たちは、彼らとほとんど同じ年齢だったからである。世界開闢以来、これと同じことを言えた子供はほかにいなかつたし、私たちがしたような精密検査に耐えられる若い両親はどんなに少なかつたことだろう。

ああ！ほんのわずかにでも強引に気づいてもらうためなら私たちは何でもましただろうが、それは不可能だった。あるいは、容赦ない運命の差し迫った打撃を防ぐ警告の言葉だけでも囁くことができれば！そうすれば、彼らは今も生きていたかもしれない、たぶん——確かに年老いてはいるだろうが、それ以前にそこまで尊敬され愛さ

れた親はいなかつたというほどの尊敬と愛を受けたことだらう。あらゆることがどんなに違つていたことか！　ああ！　ああ！

そして、この世界のすべてのもののうち、私たちは大通りと公園とブローニュの森を通つてオートウイユの池まで散歩するのに飽きることはなかつた。早春の午後にその辺をゆつたりと散策し、ちょうどよい時間帯に池のほとりで真夏の一、二時間を過ごし、懐かしいウォーターラットとゲンゴロウダマシとオタマジャクシとイモリを観察し、蛙が跳ねるのを見る。そして夕暮れ時に家まで歩き、私の旧家の勉強部屋に入る。その後、大晦日の、くるぶしまでの高さの雪が積もり、月光に照らされた大通りを通して、暖かく明るい「マグナ・セド・アプタ」に戻る。この全部がわずか数時間で完了する。

夢の風と夢の天気は——何と魅惑的なことか！　すべてが本物なのだ！

もし私たちが濡れることを望まなければ濡らすことのない、柔らかい、肌を軽く愛撫するような雨が降る。身が引き締まるが決して冷えることのない厳寒。焦がすことも幻惑することもない焼けつくような太陽。

春先の荒れ狂う風は、私たちのその実体のある骨格を一直線に吹き抜けるように思われ、幸福な子供時代は熟知していたのに、今はもう覚醒時には感じることのできな

い懷かしい英雄的な興奮と陶酔で、まさに骨の髓までぞくぞくさせてくれる！

穏やかな夏のそよ風は、失われて久しいフランスの森や野原や花が咲き誇る庭々の香りを満載している。速く柔らかく湿つた彼岸嵐ひがんあらしが、秋らしく衰え重く実つたはるかなムードンの果樹園から、あるいはシユレーヌの古い市場しじょう向け菜園から吹いてくる。理由は分からぬが、言葉で表現するにはあまりにも微妙で定義しにくい——言葉にするには美しすぎる！——奇妙で神秘的で不安になるような過去の心象とともに。その後は、北から吹き寄せてくる暗い十二月の風が短くて早い夕暮れと雪をもらたし、私たちを家へと追い立てる。楽しそうに震えながら、炉端としゅうしゅう音を立てている薪薪へ——*chez nous!*「私たちの家へ！」

ある昔の年の最後の夜——*la veille du jour de l'an*「大晦日」。

くるぶしの高さまでの雪が積もつた月光の大通りを、私たちは暖かく明るい「マグナ・セド・アプタ」まで歩いていた。夢の雪ではあるけれども、私たちはそれが足の下でサクサクいっているようを感じていた。しかし、振り返って見ると、私たちが歩いた跡は消えていた——月は満ちているのに、私たちの影も落ちていないのだ！

少佐殿が通り過ぎ、郵便屋イヴ・エルトン、大きな木靴を履いたフランソワおじさん、その他の人々も通つたが、彼らの足跡は残つてゐる——それに、彼らの影は濃く、くつ

きりしている！

彼らは、会ってすれ違うとき互いに時候の挨拶をし合っていた。私たちには何も言わない！ 私たちの方では、彼らに向け、声を限りに 「la bonne année「よいお年を」」を言った。私たちの声は彼らのそれと同じくらい響いていた。彼らは私たちを少しも気に留めない。私たちは彼らに、善し悪しはともかく、ほぼ二十年前に迎えた「^{ハッピー・ニューイヤー}」を祈っている。

セラス キア家からゴーゴーが出てくる。『ムジーモー』一緒に。彼は雪玉を作つて投げる。それはまっすぐ私の方に飛んできて擦り抜け、フランソワおじさんの広い背中に当たつて飛び散る。「Ah, ce polisson de Monsieur Gogo … attendez un peu! 「ああ、わんぱく坊主のゴーゴーさんかい……ちょっと待つてろ！」】そしてフランソワおじさんはお返しをする——どうやら、またまっすぐ私に飛んできて擦り抜けたらしい。そして、私はそれさえ感じないので！ メアリーと私は、肉と血が私たちを形作っているのと同じくらい、お互いどうし実体がある。私たちは、これらの夢の人々に、彼らの空気を溶け込むことなしには触れることができない。私たちは彼らを聞いたり見たりすることしかできないが、それには熟達していたのだ！

鶏肉屋の息子、小さなアンドレ・コルバンがやって来て、ペレ夫人の庭の滑りやす

い壙のてっぺんを走っている。その壙は十フィートくらいの高さがある。

「大変！」メアリーが叫ぶ。「彼を止めて！ 覚えてないの？ 彼、端に着いたら落ちちて、両脚とも折ることになるのよ！」

私は急行し、彼に向かって大声で怒鳴る――

「ああ下りるんだ、しあうがない奴め。両脚とも折ってしまうぞ！ こっちに飛び下りろ！ 跳び下りるんだ！……」私は叫び、両腕を伸ばした。彼は少しも注意を向けてない。彼は端に達し、その下でゴーゴーとミムジーが続く。彼らは惜しみない羨望と称賛で我を忘れている。二人の拍手に刺激され、彼はそれまで以上に向こう見ずになり、道化師になろうとまでして、片脚で立って、こんな歌詞で始まる小曲を歌う――

"Maman m'a donné quat'sous
Pour m'en aller à la foire,
Non pas pour manger ni boire,
Mais pour m'régaler d'joujoux!"

「お祭りに行くのに

ママが私に四スーくれた、
食べたり飲んだりするん
じやなくて、

おもちゃを楽しむための
もの！」

その後、彼は不意に滑つ
て落ちた。かわいそうな少
年よ。鉄のレールで膝から
下を両脚とも骨折し、その
ため彼は生涯にわたる障害
者になつた。

大晦日この悲しい小さ
な惨事は、すべてが新たに
再生される。同情的な群衆
が集まつてくる。ミムジー



"MAMAN M'A DONNÉ QUAT' SOUS POUR M'EN ALLER À LA FOIRE"
「[お祭りに行くのにママが私に四スーくれた]」

とゴーゴーは泣いている。ひどく動搖した両親が到着し、小柄な名医ラルシェ医師も来る。メアリーと私は犯罪者のような気がしていた。自分たちがそれをすべて防げたかもしれない感じないと感じないようにするのは、どうしたって無理なのだ！

この奇妙な影たちの世界では、私たち二人だけが生きており、実体がある。見たり聞いたりしている限りでは、彼らは私たちよりも実体があつて生きているように見える。彼らは私たちのために存在しているが、私たちは彼らのために存在しているわけではない。私たちは、寝ても覚めてもお互のためだけに存在している。私たちが覚醒時の人生を過ごしているその世界の人々さえ、私たちのこと、私たちの実在がどんなものなのかも、ほとんど知らないのだ。私たちに対し、もう一度両脚を骨折したばかりの小さくかわいそうなアンドレ・コルバン以上には！

こうして、二人ともこの嘆かわしい不幸に悲しみつつ「マグナ・セド・アプタ」に戻る。これらの驚異について沈思黙考し、話し合い、驚嘆するために。人間の潜在意識に潜んでいる、何らかの莫大で神秘的な力のぼんやりした感覚——今まで知られておらず夢にも思わなかつたけれども、永遠なる神と彼を結び付けるもの——によつて、心の核心部にまで影響を及ぼす驚異を。

そして、私たちが常に話さねばならないことは、ほかにどれほどたくさんあつ

たことか！

私は才氣ある話し手ではないが、彼女は人を楽しませることをこの世で最も容易にやつてのける人であることは間違いない——私が興味を引かれたすべてのものに興味があるし、そのおかげで私は陰気な沈黙の年月の（彼女のフランス語風英語の一つを使えば）*disdamaged myself*「埋め合わせをすることになった」。

相手役としての彼女については、私に話せることはない。高名なタワーズ公爵夫人の社交的才能を詳述するなど、私のような立場の人間にとつては厚かましく、笑止千万なことであろう。

しかしながら、信じられないかもしだれないが、私たちの会話の大半は非常に一般的な、世俗的な話題についてだつた——彼女の家々や避難所、それらの管理の困難さ、果てしない金錢の必要性、多くの企画、計画、実験、失敗、幻滅——私は自然に、そのすべてに共感的な関心を持つようになつた。それから、私の刑務所、そこで起こつたことのすべて——彼女がかなり熱烈な関心を寄せたので、私自身もそのすべてに興味を持つようになつた。彼女は私が知つていること、そこでの生活のあらゆる詳細を隅々

*フランス語風英語……*disdamage oneself*は、おそらくフランス語の *se dédommager*（埋め合わせる、取り戻す）をそのまま英語に移植した言い方であろう。



メアリー、タワーズ公爵夫人。
ストルクジュスキーによる写真より、
バルシャワ

まで知ることになった——ほぼすべての被
収容者の名前、容姿、経歴を知り、そして
諸事業の実際的経験からその内部組織を
批判した。その実務的な洞察力には、私は
ずっと驚かされっぱなしだった。

私の最も滑稽な思い出の一つは、男女の
有名な博愛主義者たちに同伴された、彼女
の生身の体での訪問だった。私は模範囚と
して彼ら全員からインタビューを受け、宗
教的非正統性を別にすれば、その施設の名
誉となつた。私が身体の健康などについて尋ねられたとき、彼女は私の知的な回答を
物静かに聴き、何か不満なことはないかと尋ねた。不満！　自分のねぐらにこれほど
すっかり満足していたムショ暮らしはいなかつた——こんなに健康で、こんなに幸福
で、こんなに態度がよかつた者も。彼女は四六時中メモを取つていた。

八時間前、私たちは手を繋いでフィレンツエのウフィツィ美術館を歩き回っていた。
八時間後は、私たちはお互の腕の中にいるはずだ。

妙な話だが、私たちのこの幸福——人間の愛の全歴史の中でも、とても深く、とても激しく、超越的で、並ぶものがない——は、不条理な切望や後悔が必ずしもないわけではなかった。人間は、うんと恵まれれば、必ずより大きな幸福を得たいと思うものなのだ。

私たちの親密な交際、（割り当てられた時間の間の）お互いどうしの真の占有は、絶対で、完全で、申し分ないものだった。かつて生存したダービーの中に、私のメアリー・セラスキアの記憶以上に甘美で温かく優しいジョーンの記憶を持つ者など、いそうにはないのだ！ 見方によれば、各々はもう一人の脳の幻想のようなものにすぎなかつたのかもしれないが、私たちにとってその幻想は幻想ではなかつた。視覚的錯覚と同じように、それは眞実を示す幻想であつた。一つの莢の中の二つの実（メアリーはそれを「フイリップ・シェン」と呼んでいた）のように、私たちは（それぞれが別々の自分の莢に入っている）ほかの人類よりも多くの点で触れ合い、より近くにい

*ダービー・ジョーン……仲睦まじい老夫婦のこと。十八世紀の雑誌に載った歌による。

たのである。私たちはそれを考え方つくあらゆる方法で試し、テストしたが、自分たちが失敗したこと気に気づいたことはなく、大いなる不思議への驚嘆がやむことはなかつた。例えば、完全に眠つてゐる間に一緒に創案し完成していだ複雑な暗号で、一緒にいるときに両者に起こつていてることに言及する手紙を、私が刑務所内で彼女から受け取る（また私がそれに返信する）、などといふこともできたのだ。（＊）

*注——その手紙のうちの何通かは私の所有となつています。

マッジ・プランケット。

私たちの特権は、おそらく人類がそれまで享受できなかつたようなものだつた。時間と空間は、どちらもただ望むだけで私たちにとつて無効になつた——私たちは喜びの宮殿に住んでいた。考え得るあらゆる贅沢が私たちのものだつた——そして何ものにも勝り、永遠に続く、人生の早い時期にのみ属するような新鮮さと高揚感——死が到来し私たちを分かつまでは、時間が決して鈍らせたり冷ましたりできないような、お互ひへの愛。こうしたすべてとそれ以上のものが、二十四時間中八時間、私たちの分け前になつたのだった。

そうなると、私たちは時々、残りの十六時間が十分に自分たちのものにならないことに苛立ちを感じざるを得なかつた。人生の三分の二を離れて暮らさなければならな

いことに。見かけ上は眠っている間の至福の報酬——私たち共通の夢の繁栄——を共有するようには、日常の、覚醒時の生活の苦労や悩みを共有することができないことに。それから私たちは、互いの消息を知らないまま離れて過ごしていた失われた年月を、深く後悔したものだった——嘆かわしい人生の浪費を。眠るにしても起きるにしても、人生などひどく短いものだというのに。

もし消息を知つてさえいたならば、どんなに違うことになつただどうう！

私たちは、お互いを見失つたり、連絡が途絶えたりしなくてもよかつた。最初から一緒に成長し、学び、働き、悪戦苦闘したかもしぬ——男の子と女の子、兄と妹、恋人どうし、夫と妻——それでもやはり、自分たちの祝福された夢の国を見つけて、まったく同じようにそこに住んだかもしぬない。

私たちの間に子供が生まれたかもしれない！　ペロー夫人のおとぎ話のような、
beaux comme le jour 「輝くばかりに美しい」、かわいらしい子供たちが。その子たちは

* フィリップショハ……おそらくフランス語の *philippines* を、メアリーがドイツ語っぽく呼んだものであろう。その「フィリピース」とは、双子のアーモンドを見つけたら二人で分け合ひ、次に会つたとき「ボンジュール、フィリピース」と先に言つたほうが勝ちとなり、プレゼントがもらえる遊び。アーモンド以外のナッツでもよいらしい。

母親と同じくらい美しく、善良でさえあるかも知れない。

そして、こうした架空の小さな存在について話すとき、またその描写を試みるとき、私たちは、彼らを愛することにかけては途方もない能力があることを自分たちの中に感じて、互いの肩ですり泣きを始めてしまうのだった。私は、彼女の短く不運な母親時代の情熱と優しさ、その浪費された苦しみのすべてを、十分によく知っていた。まるでそれが私の個人的な経験の一部を形成してさえいるかのように。彼女が別の男の子供を産んでしまったことへの私のひどい嫉妬の疼きは、この熱心で徹底した理解のうちに忘却された！　ああ、そうなのだ……この渴望する愛、この悲痛な同情心、それらを知らないようでは、とても生きていたとは言えない！　私には子供がないので（祖父になれるくらい年を取ってはいるが）、心でそれをかなえるしかない！

私たちには息子も娘も望めなかつた。私たちは、華やかに、豊かに、色褪せずに咲き誇る、祝福された愛の花がある。しかし、その花の祝福された生命の果実は、決して、決して、決して望めないのだ！

私たちの子供はミムジーとゴーゴーだけだつた。彼らと私たちの間には越えられない境界があり、彼らは私たちの存在そのものを意識していなかつた。妖精タラパタポウムとシャルマン王子が自分たちを見守つているという、ミムジーの奇妙な感づきを

除いては。

このすべてが、人生を生きる価値があるものにしてくれただけでなく、私たち二人にとつての楽園にまでしてくれたにもかかわらず——そのことに感謝しないなど恩知らずだが——、お互いへの徹底的な信頼をいつそう十分に認識することで、いつも終わるべくして終わるのだった。実際私たちは、ただこのように愛し愛されることそれが（私たちが持っていたほかのすべての幸福を抜きにしても）あまりにも限りないものであつたため、あえてより多くを求めるという自分たちの厚かましさに自ら進んでおののいていただけだ、ということを認めざるを得なかつた。

• • • • •

こうして三年間が瞬く間に過ぎ、おそらく残りの年月もそうなるところだった。私たちの共同の人生に新しい扉を開き、思考力とエネルギーのすべてを新しい方向に向けるような、ある出来事がなかつたならば。

第六部



ながら静かにある曲をハミングしているのに気づいた——古風で趣があり、独創的だが非常にきれいな曲で、私は筆舌に尽くしがたい感動に襲われた。それまで血の通つ

刑務所当局者の一人に受けていた
つまらない嫌がらせのため、ベッド
に入った後しばらく寝付けず、その
ためやっと「マグナ・セド・アプタ」
で目覚め、（俗世の刑務所での日常
的な一連の仕事の後、天国で生き返
るかのような永遠に新鮮な感覚とと
もに）そのソファに横たわったとき、メアリーはもうそこにいて、コート
ヒーを淹れ、その香りが部屋を満た
していたが、私は、彼女がそれをし

た方の耳では聴いたことがなく、それでいて『ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン』と同じくらいの親しみが感じられたからである。

夢中になつて耳を傾け、目を閉じると、私の心理的視界の前を素晴らしい場面が通り過ぎていった。子供の頃夢に見た美しい白い髪の女性が、小さな女の子の手を引いているのだが、その子は私なのだ。鳩とその塔、小川と水車場。赤いヒールが付いた靴を履いた白い髪の若者。背が高く、頑丈そうで、錦織にしきおりの絹のドレスで豪華に着飾つた、非常に美しい中年の女性。芝生や、小道や、幾何学的な形に刈り込んで整えられた木々のある公園。小塔のある城——あらゆる種類の魅力的な光景と、異なつた年齢と国の人々。

「その素晴らしい曲は一体何だい、メアリー？」彼女がそれを歌い終えたとき、私は大声で言つた。

「お気に入りの曲なの」彼女は答えた。「飽きて魅力がすり減るのが心配で、めったに口づさまないのよ。あなたがこれまで聴いたことがなかつたのは、それが理由だと思う。いい曲でしょう？ これであなたをあやして起こそうとしていたのよ。

私の祖父はヴァイオリニストで、よくこの曲に自分の変奏を加えて演奏していた。その当時は有名になつたけれど、出版されず、今では忘れられてしまつたの。

これは『Le Chant du Triste Commensal [悲しき共生者の歌]』という曲で、祖父のそ
のまた祖母が作曲したものよ。美しいフランス婦人で、ヴァイオリンも弾けたけれど
プロではなかつた。祖父は、自分が子供で高祖母がすっかりお婆さんになつてゐた頃、
この曲を彼女が演奏してゐたのを聴き覚えたのだとか。それとまったく同じように、
ヴィーンで少女時代を過ごしていたとき、私はこれを彼が演奏しているのを聴き覚え
た。彼は白髪の老人だつた。高祖母は、ヴァイオリンを膝に載せ、下に構えて演奏し
ていたらしい。いつでも完璧な、音の中心を絶対に外さないような音で、素晴らしい
趣味の良さと表現を湛えて演奏したんですつて。祖父の職業を決定したのは彼女の演
奏だつた。でも、彼女は『*シングル・スピーチ・ハミルトン』みたいな人でね。これ
が彼女が作曲した唯一のものだつたから。彼女は、夫が狼に喰まれて死んだ直後、自
分に双子の娘——彼女の子供はその二人だけだつた——が生まれる直前の時期に、悲
しみと興奮の中でこの曲を作つた。その双子の一人が私の曾祖母というわけね
「で、その素晴らしい老婦人の名前は？」

「ガティエンヌ・オベリー。ブードという名のブルターニュ人の騎士で、アンジュー
のサン＝プレスト近くのgentilhomme verrier〔ガラス職人貴族〕だつた人と結婚した
——つまり、彼はガラスを作つたといふことね——デカンターとか、ガラスの水差し

とか、タンブラーとかかしら——貴族なのにね。それをするのは權威を損なうことだとは考えられていなかつた。實際、それは貴族に許された唯一の職業で、それに従事するためには少なくとも騎士階級でなければならなかつた。

彼女は、*la belle Verrière* 「美しきガラス製造者」と呼ばれて、それはもう傑出した女性だった。夫の死後も何年もガラス工場を經營して、「一人の娘のために大金を稼いだの」「何て変わつてゐるんだ!」私は声を上げた。「ガティエンヌ・オベリーは! ブライユの貴婦人——ブード——その名前ならよく知つてゐる。マチュラン・ブード、モヌデアールとヴェルニー・ル・ムステイエの領主、だね」

「そり、それだわ。あなたが知つてゐるなんてびっくり! 娘の一人、ジャンヌが、ハンガリー軍の将校だった私の曾祖父と結婚したの。ヴァイオリン弾きのセラスキアは、彼らのたつた一人の子供だった。もう一人はアンヌという名前で(あんまりそつ

*『悲しき共生者の歌』……変わつたタイトルである。「悲しき」は、夫が亡くなつた悲しみであろうが、「共生者」は、生まれる前に父を亡くした胎児を指したものか? なお、四二一ページの「triste — comment — sale [悲しき——どうして——汚い]」は、この曲名の *Triste Commensal* の部分が、切れ切れにこう聞こえたものであつたことが判明した。
*シングル・スピーチ・ハミルトン……十八世紀の政治家ウイリアム・ジエラルド・ハミルトンのこと。生涯で一度しか演説をしなかつたらしい。

くりで、母親しか姉妹の区別が付かなかつたそうよ)、ボワ何とか伯爵という人と結婚したの』

「ボワモリネルだね。それにしてもその名前、全部うちの家系にあるな。子供の頃、日曜日の朝におとなしくさせておくため、父は僕に家紋やら四分割紋章やらに色を塗らせたものだつた。たぶん血が繋がつてゐるんだろう、君と僕は」

「おお、そうだつたらきてきすぎる!」メアリーは言つた。「どうやつて調べればいいのかしら? 家の書類は持つてない?」

私「馬巣織のトランクの中にどつさりあつたんだけど、今どこにあるのかは分からぬ。家の書類なんて、僕が持つていても何の役に立つだろ? 僕が名前を変えたとき、イベットソンが管理を引き受けたんだ。彼の弁護士に渡つたんじゃないかな」

彼女「いい考えがあるわ。私たちは弁護士なしでやりましょ。あなたの昔の家に立ち寄つて、ゴーゴーにもう一度四分割紋章に色を塗つてもらうの。それを肩越しに見ていればいいのよ」

いい考えだ、本当に! 私たちはコーヒーを飲み、すぐに私の旧家に行つた。ゴーゴーがそこにいて、長いこと忘れられていた紋章盾の塗り絵にもう一度従事しようとしていることを願いながら(すぐ近くに証文に向かう父がいることも)。

美しい日曜日の朝、私たちは、開いた窓のそばの小さなテーブルでゴーゴーが懸命に作業をしているのを見つけた。床は古い証文やら羊皮紙やら家の書類やらで覆われていた——*le beau Pasquier* [美男子パスキエ] は、別のテーブルで自分の系図に没頭し、その余白に書き込みをしながら——彼が大好きだった作業だ——無意識に鼻歌を歌っていた。日当たりのよい部屋は、彼の声のよく通る柔らかな響きで満たされた。温室が花々の香りで満たされるように。

その奇妙極まりない矛盾によ



パスキエの家系

り、我が親愛なる父上は、（ブルボン家の白百合の想像上の忠誠にもかかわらず）本心では眞の共和主義者で、実際には王子よりも賢く勤勉なフランス機械工の方に（後者との友情と交際が好きだつたのだろうと私は思つてゐる）はるかに心を動かされた自称科学者であつたというのに、自分の古風で趣ある羊皮紙と不明瞭な四分割紋章とに、喜びと誇りをともに感じていたのである。もし事情が違つていたら、たぶん私もそうなつていただらう——一体どれほど真正な民主主義者であれば、他人のそのような証拠不十分は受け入れられない一方で、貴族の血統であるという當てにならなそうな彼の個人的主張を、軽視できるのか！

彼は「noblesse oblige」〔位高ければ徳高かるべし〕、「bon sang ne sait mentir」〔血は争えなじ〕、「bon chien chasse de race」〔よい犬は血統で狩をやる〕などのよくなじとわれや格言が好きで、自分でもお金の余裕がないときの慰めのために、「bon gentilhomme n'a jamais honte de la misère」〔由緒正しい貴族は貧困を恥じない〕とふう小ぢな警句を創案した。こうしたことわざは皆、彼を正しく表しており、もっぱら家庭内で使うものとして取つておかれたもので、ほかの誰かの口からそれが出るのを聞いたなら、彼は真っ先に笑い飛ばしたことだろう。

彼の唯一の偉大な才能、その喉にあつた宝物については、彼はまったく何も考えて

いなかつたのだ。

「Ce que c'est que de nous! 「人間なんていへんなのだー・」】

『アーネー・ゼ、岳麗アーネー・ゼれた本 (『Armorial Général du Maine et de l'Anjou [アーネー・ゼ・アン・ジュー全紋章図鑑]』) の中の、ペスキエ家の四分割紋章——「メゾン・ム・ペスキエ」と書かれている——に、その下に付いていた指示に従って彩色してみた。彼はリヤール夫人の店で買ったミスーの絵の具箱の一つを使っていたが、色合いにはまだ遺憾な点が多くつた。

私たちは彼の肩越しに見て、絵のような文字の古い専門語を読んだ。それは、英語よりもフランス語で読んだ方がよほどやれいや快くも、また馬鹿っぽくも聞こえた。それはこんなふうに書かれていた——

〔Pasquier (branche des Seigneurs de la Marière et du Hirel), party de 4 pièces et coupé de 2.

Au premier, de Hérault, qui est de écartelé de gueules et d'argent.

Au deux, de Budes, qui est d'or au pin de sinople.

Au trois, d'Aubéry — qui est d'azur à trois croissants d'argent.

Au quatre, de Busson, qui est d'argent au lion de sable armé couronné et lampassé d'or,

「バスキエ（マリエールとイレルの領主の家系）、四分割および横二分割。

第一、エロー、赤と銀の四分割。

第二、ブード、金の地に緑の松。

第三、オベリー——青の地に銀の三日月。

第四、ビュッソン、銀の地に、武装し王冠をかぶり舌が体色と異なる黒いライオン等、もう一方の四分割紋章、ビゴ、エピネー、マレストロワ、マテフュロンを経て、最後は「Sur le tout, de Pasquier qui est dor à trois lys d'azur, au franc quartier écartelé des royaumes de Castille et de Léon. [その上にバスキエ家のそれ、金の地に青い三頭のライオン、カステイリヤヒレオノの両王国に分割される四分割]」

やがて私の母が、イギリス人メイドのサラと一緒に行っていたマルブフ通りのイギリスの礼拝堂から帰宅した。昼食が告知され、私たちには家の書類だけが残された。夢が曇ることのないようにと念には念を入れたことで、私たちは見つけたかったものを見つけることができた——すなわち、私たちは、美しきガラス製造者兼『Le Chant du Triste Commensal [悲しき共生者の歌]』の作曲者であるガティエンヌの玄孫で、唯一生き残っている子孫である可能性があるらしい」とだつた。

* 系図をたどるところとなる——

ブライユの領主ジャン・オベリー、アンヌ・ビュッソンと結婚。その娘、ブライユの貴婦人ガティエンヌ・オベリー、ヴエルニー・ル・ムステイエとモヌデアールの領主マチュラン・ブードと結婚。

ヴエルニー・ル・ムステイエの貴婦人
アンヌ・ブード、ボワモリネルの伯爵
ギ・エローと結婚。

ブライユとモヌデアールの貴婦人ジヤンヌ・ブード、ウルリク・セラスキア
と結婚。

—

—

*系図……二段に分かれている部分は、上がピーターの家の、下がメアリーの家の系図である。
(*を付けた) 双子の一人アンヌ・ブードがピーターの、もう一人ジャンヌ・ブードがメアリーの曾祖母。よつて、(*を付けた) その母である『悲しき共生者の歌』の作曲者で「美しいガラス製造者」のガティエンヌは、二人の「共通の」高祖母となる。

ジャンヌ・フランソワ・エロー・ド・ボワモリネル、フランソワ・バスキエ・ド・ラ・メリエールと結婚。

—

ジャン・パスキエ・ド・ラ・メリエール、キャサリン・イベットソン＝ビダルフと結婚。

—

ヴァイオリニストのオットー・セラス・キア、テレーザ・プルチと結婚。
ヨハン・セラスキア医学博士、ローラ・デスマンドと結婚。

ピエール・パスキエ・ド・ラ・メリエール(別名ピータード・ベットソン、囚人)。

メアリー・セラスキア、タワーズ公爵夫人。

—

私たちは大喜びで「マグナ・セド・アプタ」に歩いて戻り、そこで新しく発見された自分たちの血縁関係を、今回は私の料理レパートリーからの簡単な食事で祝つた。それは一ダース六ペンスだった、メイデン・レーンにあるルールズの牡蠣、瓶入りスタウト (*l'eau m'en vient à la bouche* 「私には垂涎の呪だ」) から成っていた。そして、その夜の割り当ひられた時間の残りを、古い曲『Le Chant du Triste Commensal』悲

しき共生者の歌』から可能になる光景の展開に費やし、うまくいったりいかなかつたりした。彼女はそれを、熟練した音楽家的なやり方で片手で自ら伴奏しながらハミングし、もう片方の手は私と繋いで、私が見たものをすべて見た。

薄紙を剥ぐように、場面と人々のおぼろげさが次第になくなり、私たちの共通の高祖母ガティエンヌその人であるとすぐに分かる、輝かしく重要な女性——『la belle verrière de Vergy le Moustier』〔ヴェルニー・ル・ムスティエの美しきガラス製造者〕——が現れる。彼女はいつも、ほかの人よりもはつきりと識別できた。それはきっと、私たちが二人とも彼女の個人的特質の本質的な部分を持ち合わせていたためで、また彼女が非常に個性的だったためでもあるだろう。

私が容赦のない時刻に呼び戻されるまで、つけぼくろを付け、白粉おじろいを塗り、かつらをかぶった紳士淑女の影のような集団に向かって奏でる彼女のヴァイオリン演奏を見ることがやめたことで、それどころか、極めて独創的で絶妙に美しい『Le Chant du Triste Commensal』〔悲しき共生者の歌〕の旋律の、か細い、この世ならぬ音を現実に聴く」とやえでやめた」とて、私たちは最高の満足を味わった。人々は、その演奏に大いに感動して楽しんでいるようだった。彼女の娘、どうやらボワモリネル伯爵夫人アンヌ・エロー（旧姓ブード）によるよく聞き取れないスピネットが伴奏し、同時に幼

女のジャンヌ・ド・ボワモリネル（後の貴婦人パスキエ・ド・ラ・メリエールである）が夢見るような表情で聴き惚れていた。

そして、メアリーが言ったそのとおりに、彼女はヴァイオリンを胸を下にして膝の上に置き、まるで小型の Cherny であるかのように演奏していた。そのときは、小さい頃にそのような姿を夢で見ていたことを漠然と思い出した。

この不思議な冒險から二十四時間以内に、実際的



LA BELLE VERRIERE[美しきガラス製造者]

で実務的なメアリーは、生身の体の方で、自分のメイドを連れて、これら私の先祖たちが住んでいたフランスの地方へと出発し、二週間以内には私のフランスの全家系図に精通して、私の縁故のまだ存在しているさまざまな家々を訪問した。

子供の頃の夢に出てきた小塔のある城は、隣接するガラス工場とともにまだヴェルニー・ル・ムステイエと呼ばれていて、それもその一つであった。彼女はそれがエクトル・デュ・シャモラン伯爵という人の所有で、その人の祖父が今世紀の初めに購入したものであることを知った。

彼はまったく新しい工場を建設し、それを西フランスで最初のガラス工場の一つにした。しかし、古い小塔のある corps de legis 「本館」はまだ残っており、工場長が妻や家族とともにそこに住んでいた。pigeonnier 「鳩小屋」は蒸気機関小屋の場所確保のために取り壊され、その場所の全景観は急激に変化した。それでも、小川と水車場は（後者はただ古風で趣のある廃墟としてのみ）依然として存在していた。とはいってねじ曲がった柳と榛はんの木の群れがあるが、その多くは枯れていた。

小川は「ブライユ」と呼ばれ、高祖母の土地にその名が与えられた。それは、そこから三十マイル離れた所で（そして何百年も前に）発行されたわけである。しかし、

オベリー家の邸宅であったブライユの古城は、農場内の家屋になっていた。

堀を巡らせた公園内にあって、一五五〇年建立^{こんりゅう}の美しく高い六角形の塔を持ち、その周囲何マイル先からも見えるマリエールの城は、そのときは繁盛している林檎酒醸造所になっていた。それは今でも、アンジェからル・マンへの幹線道路沿いにある。

かつてエロー家の所有であったボワモリネルの古い森は、まだあった。奥では炭焼き人やはぐれノロジカ一、二頭が見つかった。ずっと昔のような狼や猪はもういない。そのとき、古城があつた場所には、ボワモリネル・エ・サン・メクソンの新しい鉄道駅が建っていた。

この地方でまだ見いだすことができるブード、ビュッソン、エロー、オベリー、それにパスキエのような家の大半は、おそらくメアリーと私の遠い血族で、弁護士、医師、聖職者になるか、商業に従事して地位ある職業には興味を失っていた。そうだとしても、彼らは私のような者との親戚関係を主張したいとはほとんど思わなかつただろう。

しかし、百年以上前は、これらはメーヌとアンジューで重要な名前であった。その持ち主たちは、ほとんどの場合、中世にフランスのありつけの最高位者と結婚した家々の、より新しい傍流の系統を引いていた。彼らは宮廷やヴェルサイユのnoblesse〔貴族〕からは見下されていたが、すべての田舎貴族同様、自分の領地では自分の地位を

よく維持していた。お互いどうしで饗宴、狩り、鉄砲撃ちを楽しみ、踊ったりヴァイオリンを弾いたり恋愛したり結婚したりし、それからガラスを吹いて、次第に裕福になつていったのだった。革命が勃発し、彼らとそのガラスとを、彼らよりも身分は高いけれども善良さは少なかつた多くの者とともに宇宙に吹つ飛ばすまでは。愉快で温和な人たちであつた彼らとその行動の全記録は散逸しており、夢の中でのみ回想が可能となつてゐる。

ヴエルニー・ル・ムスティエ工は、これら古い邸宅の中では特に興味を引かれるものではなかつた。

それは三百年前、さらに古い修道院（名前はこれに由来する）の跡地に建てられた。その古い教会堂の荒廃した壁は、家の庭にまだ残つていて（今も残つてゐる）、杏と梨と桃の木で覆われている。これらの木々は、^{ガティエンヌ}彼女が花嫁になつたときに私たちの共通の先祖たちによつて種が播まされた植えられたものであつた。

メアリーにその場所の過去の歴史すべてを説明することに非常に大きな喜びを感じたエクトル伯爵は、古い邸宅から四分の一マイル離れた、古い敷地で残つたものの中に素晴らしい新しい家を自ら建てていた。彼女は古い邸宅のすべての部屋を見せてもらつた。古い木製パネルがまだ残つており、過去の様式できれいに彩色されていた。

古い文書、羊皮紙の証書、養魚池や農場やそれに類するものに関する賃貸契約書などが彼女の閲覧のために持ち出された。それらは、私の祖父パスキエ、曾祖父ボワモリネル、我らが高祖母とその夫であるヴェルニー・ル・ムステイエ地主マチュラン・ブードによつて署名されていた。ガティエンヌの伝承名 la belle Verrière 「美しきガラス製造者」は、まだその地方に残っていた (la reine de Hongrie 「ハンガリーの女王」というニックネームもあつたようだ)。今でも高齢者の多くが、百年前には誰もが口ずさんだ『Le Chant du Triste Commensal [悲しき共生者の歌]』を、だいたい正確に覚えていた。

彼女はアンジューでいちばん背が高く顔立ちがよい女性で、傲岸不遜な意志と非常に男性的な性格の持ち主ではあつたが、金持ちにも貧乏人にも等しく絶大な人気があつたと言われていた。不屈の精力であらゆる事業に手を出していたが、それは常に自分のためというよりは、ほかの人々の幸福のためであつた——経営的で実務的な、典型的なフランス女性で、おまけにまことに優れた音楽家でもあつたのだ。

私たち共通の先祖女性はこのようないで、きっと私たちはこの人から音楽への愛情と、音の力に対する一風変わつた、ほとんどヒステリックなまでの感受性を受け継いだのだろう。私たちの家系の一羽のナイシングールは、この人に由来するのだ——ヴァ

イオリニストのセラスキアと、歌手の私の父である。妙な話だが、彼女の両眉は私が持つ眉とちょうど同じように鼻梁で出会い、その下にはメアリーが持つ明るく黒く縁取られた青灰色の目が輝いていた。しかもその目は、持ち主が笑ったり微笑んだりするときにはいつも^{エクリプス}食^{を被}るのだ！

メアリーのこの生身の体の方での興味深い旅の間、私たちは精神の方での「マグナ・セド・アプタ」でいつものように毎晩会っていた。それで私は、そのあらゆる出来事に参加させられたのである。

私たちは魔法の窓のそばに座って、自分たちの楽しみのため、あるときは彼女が数時間前に見てきたままの、現代の生活、色、音、蒸気、ガスに満ち満ちた現状のヴェルニー・ル・ムステイエのガラス工場を見て、またあるときは震んで不明瞭で、まるで晚秋の灰色の霧がかかったような午後に、曇った窓ガラスを通して近視の目で見たような、百年前の古城を見た。その古城では、忙しそうだが何も言わない影たちが動き回っている——何も言わないのは、初め私たちは、彼らが話すのを聞けなかつたらだ。それは私たち人間の耳にはあまりにもかすかすぎた。夢の中で見ることの夢においてさえ！ ガティエンヌだけ、権威的で威厳のあるガティエンヌが言うことだけは、かすかに聞こえていた。

それから私たちは、下に降りて彼らと混じり合つた。こうすると、あるとき私たちは、魅力ある古風なフランス家族の影の集団の真ん中にいたことがあつた。ガティエンヌ、美しい双子の娘ジャンヌとアンヌ、庭師たち、ヴエルニー・ル・ムスティエ大修道院の昔の控え室と壁のうち、今もまだ残っている所に向かつて這つている桃と杏の木々の、若いときのすべて——これらは皆百年以上前のものである——、影がちな庭の小道に、その薄い人影や木々の影のさらに薄い影を落としている、正午



私たちの高祖母と双子の曾祖母たち

をだいぶ過ぎたほの白い太陽。

その後、さあ^{アレ}^{スト}変われ！で、幻灯機のスライドを変更するように場面が変わると、私たちは一世紀を飛び越えて、また眺めることになるのだ！

同じように魅力的な別のフランス家族の集団が同じ場所にいたが、もう今日の服装で、曖昧でも聞こえなくもなかつた。小さな木々は大きくなつていて、大きな木々は、勤勉な仕事場や機械装置の場所を空けるために姿を消していた。しかし、古い修道院の壁は尊重され、陽気でにこやかな父親、美しい母親、かわいらしい娘たちが、「la belle Duchesse Anglaise」[美しいイギリスの公爵夫人]に、彼女の高祖母が育てた桃や杏のことのみんなでしきりに話していた。

これは、このシャモランの愛想のいい家族が、ごく短時間のうちに——すなわち、初めて会つたその瞬間に——メアリーのことが大好きになつたからである。彼らの親切、礼儀正しさ、もてなしを、彼女は決して忘れなかつた。彼らは五分も経たないうちにもわたる知己であるかのように彼女に感じさせたのである。

数か月後、シャモランの令嬢から、かつて la belle Verrière [美しいガラス製造者] の所有であつたまさにそのヴァイオリンを、(すてきな手紙とともに) 彼女が受け取つたことも述べておいた方がよいだろう。それは、エクトル伯爵が昔の農場主——ガティ

エンヌの御者の曾孫ひまごである——の持ち物の中から見つけ、彼女の子孫であるタワーズ公爵夫人への新年の贈り物にできるようになると購入しておいたものであった。

それは現在は私のものになっているが、ああ！　私はそれを弾くことができない。しかし、メアリーと私が夢の中で頻繁に聴いたり見たりし、私たちの人生に非常に大きな影響を与えたあの奇妙なメロディを過ぎし時代に頻繁に鳴り響かせたその楽器を、完全に目が覚めているときには、手にすることは、私を楽しませ、慰めてくれた。その外観、形、色、あらゆる傷と染みは、私たちがそれを肉体の目で見たり生身の手で持つたりする以前から、私たちはなじみのあるものだった。こうしてこの楽器は、それ自身の幽霊によつて告知され、おぼろげな遠い過去から私たちのもとへと駆けつけてきたのである！

話を戻そう。私たちの実践と団結した意志の集中によつて、徐々に昔の人物たちが実体と色を獲得するようになり、その声が知覚できるようになってきた。私たちが彼らの間を動き、直近の先祖たち——ゴーゴーとミムジー、少佐殿など——にできるの

と同じくらいはっきりと声を聞き、姿を見る事ができるまでになる日が、ついに到了した。

白い髪の女性（その髪はただ髪粉かみこを振つただけだった）と手を繋いで歩き回り、鳩に餌をやつていた子供は、私の祖母、ジャンヌ・ド・ボワモリネル（フランソワ・パスキエ・ド・ラ・メリエールと結婚した）であった。靴に赤いヒールを付けていたのは彼女の父親で、彼は色付きガラスで小さなコックドハットが製造できると彼女に信じさせた。子供の頃の私がこの妙なる夢を見るとときにはいつでも、彼女は私の中で再び生きていたのだ。

そのときの私は、意のままに彼女を呼び出すことができた。そして、彼女とともに、多くの埋もれた記憶が無から人生の中へと呼び起こされることになった。

その他の素晴らしい物事の中で、赤いヒールの紳士ド・ボワモリネル氏（私の曾祖父）が、リュリやその他の作曲家の美しい古い歌を、スピネットに向かって歌うのを聴いた。彼はその楽器を、当時としては稀なほどの腕前で魅力的に弾いていた。そして見よ！ それらの曲は、私の意識の中にしばしばひとりでに浮かび上がっていた曲であり、私はそれを愚かにも自分が作曲したと思っていたのだ——自作の小さな即興曲だと。そしてまた見よ！ 彼の声は、細く高く鼻にかかるが、非常に好感触

で音楽的であり、掃除も装飾もされていない蜘蛛の巣だらけの私の脳の隅で半世紀以上もの間絶え間なく歌い続けていた、静かでも小さくもない声であった。

その蜘蛛の巣とは？

実は、間もなく私は、覚醒時、日々の刑務所の労役中（心が極めて明晰かつ自由な状態になつてゐる）に、自分の内なる意識に深く潜り込むことによつて、覚醒時の生活でもマエリーとの夢の生活でもない、かすかで捉えにくい追憶に満たされることに気づいたのである。完全にどっぷりと満たされるのだ。それは睡眠中の副次的な夢の追憶で、少年時代および青少年時代に属するものである。おそらく覚醒時に忘れられてしまつた副次的な夢で、そのときの私は目覚める直前の表面的な夢しか記憶できなかつたのである。



「静かでも小さくもない声」

池、川、橋、道、小川、木々のある通り、木陰、風車小屋と水車小屋、廊下と部屋、教会の式典、村の市、祭り、男と女と動物、別の時間と私が足を踏み入れたことのない地方のすべてが、私の記憶になじみのあるものになった。自分の中に十分に深く潜る必要があつたが、それだけでそれらはそこにあつた。夜が来ると眠り、「マグナ・セド！ アプタ！」私はそのすべてを再び呼び戻し、メアリーと自分のために現実化して完全なものにすることことができたのだ。

これらの捉えがたい微妙な追憶が出生前の真の記憶であることは、メアリーとの過去への小旅行ですぐに証明された。彼女がこのような追憶を経験するのとそれらを確証するのは、私とまったく同じように行われた。私たちは、彼女の祖父が『Chant du Triste Commensal「悲しき共生者の歌」』を満員のコンサート・ルームで演奏し、死んで埋葬され忘れられてから長い時間が経った男女に大喝采を受けているのを見たり聴いたりしたのだ！

今の私は、そのような追憶が、メアリーと私との間に起こつたように、他人の潜在意識の一部を形成すること、また忍耐強く自己探索をすることで、多くの人がそれらへの到達に成功することを信じている——おそらく、私たちが成し遂げたよりもずっと容易に、完全に。

それは楽音の倍音を聞くようなものである。それらは存在し、認識することを強く要求しているのだが、私たちは最初のうちそれを聞くことはない。そして、ついにそれが聞き取れたとき、私たちは、自分のそれまでの鈍感さと、それらが非常に明瞭であること驚くのである。

未開拓であっても標準的な耳を持つ人は、良いピアノで低いCの音を叩き、伸音ペダルを踏みっぱなしにしてみよう。最初は豊かな基礎音Cだけしか聞こえないだろう。しかし、ほかの特定の音を期待するようにしてみよう。例えば、すぐ上のオクターヴのC、それからそのすぐ上のG、それからさらに上のEの音だ。やがて最初に叩かれた音と同じくらいはつきりと、それらの音が聞こえてくるだろう。そして、ついには金切り声の小さな幽霊のような、まことに煩わしい高音域のBフラットが、かなり声高に鼓膜を震わせるようになり、それからは低音のCが鳴るたびにいつもその音が聞こえてきて、それがやむことはないだろう。

これよりははるかに大きな苦労が伴うだろうが（そして結局は大きな喜びと驚きが伴うだろうが）、まさにこのような過程をたどることで、人はその人生の個人的な経験の根底に潜む不明瞭で潜在的な出生前の経験に、やがては気づくようになることだろう。

私たちは、私が描いてきたような過去の場面（それらは無尽蔵だった）に対して、単なる観客としてだけでなく、時折、メアリー・セラスキアとピーター・イベットソンであることを当面はやめて、自分を俳優として認識することができることにも気づいた。これはガティエンヌの場合に顕著だった。私たちは、それぞれがしばらくの間はガティエンヌになることができ（二人一緒に無理だった）、自分自身の個性を復旧させたとき、彼女のそれの一部を持ち帰ると、それは二度と再び失われることはなかつた——もし読者が、それを考へるだけで、この世で比較的個人的な不死の生命の芽を組成できるとなると、奇妙な現象である。

刑務所での作業中でさえ、ガティエンヌになっていたことを私ははつきりと思い出すことができた。そのため、当分の間、百年前に生きていたフランス女性ガティエンヌは、十九世紀後半にイギリスの刑務所で懲役を満足そうに受けていたわけである。

まあ服役などは、体験できるにしても怪しげな特権であろう、たぶん。

しかし、それを埋め合わせるため、私の中で生きていないと、彼女はメアリーの中で息を吹き返すことができた（それは一度に一人の中のみ可能だったようだ）。列車や汽船で旅をし、ガスや電気の使い方を知り、タイムズ紙の「特派員」の電報を読み、十九世紀をより好ましい状況で味わうことができたのだ。

こうして私たちは la belle Verrière 「美しきガラス製造者」を交替で召喚し、彼女は百年前にはほとんど夢にも思わなかつたことを見聞した。そのうえ、彼女は「マグナ・セド・アプタ」の栄光を共有させられたのである。

私たちは、彼女を知れば知るほどいっそう好きになつた。彼女は、その子孫になるにはとても素晴らしい人間だつた。メアリーと私は、これ以上良い高祖母を選ぶことはできなかつたということで完全に意見が一致した。そして、私たちそれぞれの、ほのかの七人の高祖母はどんな人だつたのだろうかとも思つた。七人というのは、私たちの間には高祖母は合計十五人いたからで、それと同じ数の高祖父もいたのである。

三十人の高祖父と高祖母が、今の私たちを作つた。彼らと、その背後にいる数百万人と格闘しても、特に役には立たないだろう。

その全員のうちの誰が、強いけれども、穏やかで恥ずかしがり屋で、血を見るのを嫌うくせに、奮起したときには激怒し、敵の血を渴望するような者だつたのだろう？

その全員のうちの誰が、情熱的で優しいけれども、誇り高く気高く貞淑で、世間からもてはやされているのに、「無鉄砲なことをする」のも厭わず、愛のためならすべてをなげうち、世界を失つても惜しくないと思うような者だつたのだろう？

こうして私たちは、私たちのより直系の先祖と自分たちとを結び付けることができることを、ただしさらに容易かつ徹底的にそれが可能であろうことを、十分に確信した。しかし、慎重な検討の結果、そのような人格の輸血のような試みをそれ以上実行するのはやめようと決心した。読者も察知なさるであろう、神聖不可侵であるべきといふ思慮分別が理由である。

とはいへ、これがいつの日か行われるようになること（今や方法は明らかになつてゐる）、また同時に、このような能力の迷惑さや起こり得る悪用が人類の不断の工夫により予防され極小化されることは、私には既定の結果であるように思われる。

中止にするにはあまりにも貴重な能力であるし、それを修養することは果たしてありそくなのかできそなのか、どんな成り行きになるのかは、読者の想像にお任せす

*私たちそれぞれの…………一人の人間にとつて、親は一組二人、祖父母は二組四人、曾祖父母は四組八人、高祖父母は八組十六人存在する。二人の人間なら、高祖父母は倍の計十六組三十二人。ただし、ピーターとメアリーの場合には、互いの曾祖母の一人ずつが双子の姉妹ということで、その親の高祖父母は一組が共通するため、計十五組三十人となる。

る——読者には（この能力を自身で修練するための誘導として）、もし何かが、私たちを幸福と美德に繋がる困難な道の中にうまく留めてくれることができるのであれば、私たちの後に来る人々が私たち自身であつたことをただ夢の中でのみ思い出すことになるのは確実であるということを、ただ指摘するだけに留めたい——孵化したばかりの鶏であつても、生まれる前の長い経験の豊かさから、目や耳やその他の使い方を卵の中でも覚えていたのである。彼らはこの点で、無力な人間の幼児よりもさらに幸運に、短く無責任な生活の務めと楽しみとをすぐに始めることができるのだ！

• • • • •

それだから、おお、読者氏よ、あなたがもし心身ともに健康でさえあるならば、この極めて貴重で優れ祝福された目的のため、外に出かけていって大いに子孫を増やすこと、若いうちからたくさん頻繁に結婚すること、異性の中からあなたにとつて最高の人を選ぶことに、この上なく真面目に取り組む必要がある（あなたの後に来る人々のためのみならず、あなた自身のためにも）。あなたの未来における転生（およびあなたのパートナーのそれ）は、短いかもしれないが、たくさん起こるかもしれない。

そしてそれは皆、喜びや平和や愉快な驚きや気晴らしだけでなく、相応の自画自賛という値踏みできない報酬をもたらすのだ！

それというのも、かつてあなただったことを覚えている人は誰でも、当面はあなたを目覚めさせるからである——涅槃から、とでも言おうか？　あなたを呼んだ彼の強さも美しさも機知も、あなたのものだ。そして、この地上の生活において彼がそれから得る幸福は、このあなたについての繊細で神秘的な追憶が彼の意識内に呼び覚まされるときはいつでも、あなたにも分け与えられることになる。あなたは二度と再び完全に逆戻りすることはできない——涅槃には、未来にあなたを呼び起こす者が全員いなくなるまで！

それは私たちがパッシーでよく遊んだ古風なフランスのミニ・ゲームのようなもので、暗い雨の午後には悪くない。全員円になつて座り、吹き消したばかりだが、まだわずかに燃える火がくすぶっている木片かマッチを回し合う。こう言いながら——

"Petit bonhomme vit encore!"

「坊やはまだ生きている！」

そして、渡されたそれの火が消えた者は、罰金を払って退場しなければならない——「Hélas! petit bonhomme n'est plus! … Pauv' petit bonhomme! 「ああ、坊やはもういな——かわいそうな坊や！」】

こんなふうにずっと、あなたの個人意識の生きた火は、この世における実寿命の燃えやかるつかの間の炎が消えたとき、あなたとずっと離れた子孫にわずかに白熱しながら引き継がれるのかもしない。完全に消えてしまったとがありませんように！——どこの祈りは必要ないか。あなたがずっと世代から世代へと自分のことを「Petit bonhomme vit encore!」[坊やはまだ生きているー。]と言つて、楽しい地上のやうやかな物事にほんのわずかでも首を突っ込み続けることができるように！

そして、読者よ、この世でしつかり身を修めれば、あなたについての記憶は (la belle Verrière de Verny le Moustier [ガーリニー・ル・ムスティエの美しきガラス製造者] ガティエンヌについてのそれのように)、死んでから甘く香り、美しい花を咲かせるかもしだれないことを——呼び起すと楽しい記憶となるかもしないことを——覚えておいてほしい。この目的のため、それが想起される数と想起する者たちの数は、親への愛情や先祖代々の誇りがそれをさせる」とができるのと、同じくらい多いかも

しれない」とも……。

そして、おお！（私たちがしたように）過去を振り返つたなら、あなたの先祖たちの欠点に對して優しくあつてほしい！ 生前は、自分の長く隠された心の秘密が、ある日あなたに對して暴露されるなどとは想像もしなかつたのだ。彼らの欠点は、実際はあなた自身のものと言える。それはいわば、今のあなたが善惡が分かっているほどには分かつていなかつた、無邪氣で無知な子供時代の欠点と同じようなものなのである。こういふことは、あるいは

『Le Chant du Triste Commensal 「悲しき共生者の歌」』

のおかげで、すぐに知ることになるだらう！

• • • •

ゆえに、汝ら、愚かしき顔の十番目の伝達者たちよ、汝ら、病氣で虛弱な肉体の、それにやせわしい心と脳を持つ肉体の、無謀なる生みの親たちよ、次のことも用心し、

今のうちに警告されるがよからう！ 時間の回廊のはるか下方で、奇形足^{あし}の天罰があなたの足跡をたどり、至る所であなたに襲いかかるだろう！ 極めて無慈悲に、極めて執念深く、間違った不安な死の夢から、耐えがたいほど悲惨な眠れない時間（未來の覚醒しながら見る悪夢）の中に、あなたは目覚めることだろう。あなたの苦しみよりもさらにひどい、苦しみの遺産に参加するために——何年にも何世紀にもわたる不正な自堕落の全蓄積利子とともに悪化し、自己非難の刺すような痛みによつて毒され、あなたの堕落した子孫の最後の一人が死に絶え、薄暗く忘れられやすい星間空間の深みの中で彼とあなたの眞の涅槃を発見するまでは決して終わらない、そんな苦しみの遺産に！

ここで、この上なく誠実に、そのことは本当であると言わせてほしい。一つにはそのような訴えの厳肅さに対する私の鋭い感覚から、また一つにはそれをするに当たつて私が引き受ける重大な責任から。しかし、おお、読者よ、あなたに印象づけるためにさらに特別に、十分な意味を持つこの默示録的でいくらか脅迫的な語り口（真夜中

の内観的な反省の時間の間、あなたの優れた感覚を悩ませるかもしれないが）で、私は、自分が編み出せるうちでも最も不明瞭で難解な表現法でそれを表すため、最善を、この上なく最善を尽くしたのだ。もし私がそれをすることに失敗していたなら、もし私が気づかずに私が意図するものを部分的に明らかにしていたなら、もし私がほとんど常識のように見えそうなもの——単なる良識だ——に一度でも誤って逸れていたなら、それは私が半フランス人であることとまったく不完全な教育のせいなのである。私は貧弱な記述者にすぎないので！

• • • • •

かくして、この、奇妙な新しい世界で偶然私たちに明らかにされた共同発見のうち、最も重要なものの説明を大ざっぱに試みた。私たちの二十年以上にわたる合同生活は、この細い道しるべの糸をたどることに捧げられてきた——この後に続く本には驚くような結果が見られることを、私は信じている。

私たちには、同じようにイギリスの祖先の解説を試みるだけの時間はなかった——クレイ家、デスマンド家、イベットスン家、ビダルフ家、等——これらは、イギリス

の過去の歴史と私たちを結び付ける家々だ。フランスを遡るのが昔に行けば行くほど、それはさらに魅力的に、容易になつていつた——そして、離れるのがより困難にもなつていつたのだ。

私たちにとって、どんなに前例のない経験だつたことか！　私たちが見たと思つた——本当に見た——*de nos propres yeux vu* 「この目で見た」——のは、ナポレオン・ボナパルトその人で、世界の大権威者で、誇りと力の絶頂にあつた頃の、小さなコックドハットをかぶり、灰色のダブルのがいとう外套を着て、白い軍馬にまたがり、部下全員が彼を囲んでいるという、かなりよく絵に描かれるのとまったく同じような姿だつた！　確かに、すべての現代史の中で最も印象的で、忘れにくく、消すことのできない小さな姿、かつての劇場の衣装係が、大衆の目を引きつけ、これから來たるべき何年にもわたつて大衆の記憶に絶えず浮かぶよう案出した、最も狡猾に想像された扮装で身を包んだ姿だ！

生で直に見ること、しかも現在であるかのように過ぎ去つた現実を見つめること、また過去の方を予言したり未来の方を回想したりするのが一度にできることは、非常に新しい、快い刺激を与えてくれる、心躍らせる感覚である！

第一統領になる前の彼を眺めることもあつたが、そのとき思つたのは——瘦せて青

白く、首と頬にまっすぐな髪が垂れ下がり、こぶつけてよければ、より強い印象を与え、まだ彼の前途に生まれてくる子供たち全員の中の一人と同じくらい無邪氣そうだったといふことだ！ 彼にひれ伏すヨーロッパ——王座——ワーテルローからセントヘンナ——イギリスの鉄の公爵——その頂点は、すぐにさらし台へと変化した！

"O corsé à cheveux plats, que la France était belle

Au soleil de Messidor!"

「^{*}おお、まつすぐ髪のコルシカ人よ、メシドールの太陽の下で、
フランスはどんなに美しかつたか！」

• • • • •

そして、『ラボーにローブスピエール、ダントンにマラーにシャルロット・コルデー！

*おお、まつすぐ髪の……オーギュスト・バルビエの詩『偶像』より。「メシドール」は

収穫月（共和暦の第十の月で、グレゴリオ暦の六月一九日頃から七月一八日頃まで）。

彼らのことも見てきた。そしてマリー・アントワネットと口汚い夫人たち、それに「ランバル公妃の美しい頭」（槍の先の！）……。カルーゼル広場へ向かう死刑囚護送車が通り過ぎるのを見て、月明かりでギロチンを見つめた——沈黙し、恐怖に怯え、心臓が口の中に込み上げるほどびくびくしながら……。

そのすべてのまっただ中で、*マダム・タッソーの馬鹿馬鹿しいさまよえる記憶が、血と報復の身の毛もよだつような夢に忍び込んできて、過去と現在と未来を説明できないような方法で混ぜ合わせ、私たちを涙ながらに笑わせる！

その後、私たちは（数回！）バステイユの獲得に立ち会い、我がカーライルを手にしながら、実際にその嵐の時間の嵐の場面のほとんどを目撃したのだ。そして私たちは、大笑いしながらよくこんなことを思ったものだった。否定する目撃者が一人もない状態で不朽の歴史書を書くのは、どんなに楽しいことだろう、と！

さらに遡って、私たちは輝かしい時代のヴエルサイユに出没し、ルイ十四世宮廷の栄光のすべてを思う存分味わった！

何と堂々たる儀式だったことか、また私たちが参加しなかった何と膨大な王室行事があつたことか！——そこでは、フランスのあらゆる美、機知、騎士道精神が、（まさに神の立ち会いのもとでのよう）崇敬と恐怖にひれ伏し、この世界がかつて見た

ことのない最高君主に忠実な敬意を表していた——彼が厳肅に勅命を発するとき、まさにその王座の踏み段の上で私たちが傍観している間に。そして私たちは、彼の鼻の真下で大声で笑った——浅はかで愚かで尊大でちっぽけな俗物を——それに、その鼻を引っ張ってやりたいと熱望していた！さらには、十九世紀のレガリア葉巻からの健康的な煙を吐きかけ、脂っこくてジャコウの匂いを発し毛が肩まで垂れている彼のかつらの、消毒も試みたのだ！

その愚かしいけれども魅惑的な時代で、私たちの記憶に残らないものはなかつた。町、村落、川、森、野原。王宮、王子の城、飢えた農民の小屋。説教壇、舞台、サロン。港、野営地、市場。法廷、大学。工場、店、工房、鍛冶屋。居酒屋、賭博場、泥棒の巣。修道院、刑務所、拷問部屋、絞首台の庭。その他もろもろ！

連続するどの段階でも、かつては落胆や過度の不安や過度の重荷に苛まれた近代の私たちの魂は、現代の全線にわたる勝利の喜びと誇りと希望とでいっぱいになつたのだ！実は私たちは、華々しいボシュエの説教を聴き、モリエールの劇の一つに拍手

*マダム・タッソー……十八～九世紀の蠅人形彫刻師マリー・タッソーのこと。ロンドンに蠅人形館を作り、その中にギロチンや落とされた首などを展示した「恐怖の部屋」があつた。

*カーライル……イギリスの歴史家。著書の中に『フランス革命史』がある。

喝采し、（過去のこととはほとんど水に流して）ラシース、コルネイユ、ボワロー、フェヌロン、素晴らしいラ・フォンテーヌ——この五人は、私たちのフランスでの無邪気な子供時代の無慈悲な迫害者だったのだ——を見たり聴いたりもしていたのだが、たとえそうだったとしても！

そして、さらに時の流れを遡り、私たちはモンテーニュとラブレーと親しく付き合いい、マレルブには個人的に退屈し、ロンサールの教えを乞い、馬車でフロワサールのそばに乗り、フランソワ・ヴィヨンと一緒にいかがわしい場所に出入りした——なんと魅力的な貧民窟だったことか！……

フランソワ・ヴィヨン！ イギリスの吟遊詩人や今日のへぼ詩人を好む汝らよ、考えてみてほしい——汝らは、あの翻訳も模倣もされていない悲歌、不滅の『Ballade des Dames du Temps jadis [過ぎ去りし時代の婦人たちのバラード]』の、翻訳者や模倣者になれるのだ！

それについて話す一方で、私たちが彼女らを見たことも、というか、彼女らのうちの何人かを見たことも、話しておいた方がよからう——彼が見たことのなかつたその美しい女性たち、彼が生まれる前にすでに去年の雪、les neiges d'antan 「去年の雪」のように消えてしまつていた人々を！ 大きな足のベルタ。善良なるロレーヌ人ジヤン

ヌ・ダルク（今の故郷を彼女はどう思つだらう…）。とても博識なエロイーズ。かのピーター・エスベヤール、またはアベラール（私よりさらに運の悪いピーターだ！）は、彼女との愛のために、修道士の手によるあのような残酷な侮辱を被つた。そして、あの傲慢で手に負えない、ネスルの塔の女王。

"Qui commanda que Buridan

Fut jecté en ung Sac en Seine..."

「袋詰めのビュリダンが

セーヌに投げ捨てられるよう命じた……」

そう、私たちは彼女たちをこの目で見て、彼女たちが話したり歌つたり、叱つたり、冗談を言つたり、笑つたり泣いたりした声を、また祈る声さえも聞いたのだ！ そして、

* 「過ぎ去りし時代の婦人たちのバラード」……この後の記述からも分かるように、例の「さ
れど去年の雪はいぢこへ？」を含む詩だが、英訳されたのは十九世紀の後半らしい。

* あのような残酷な侮辱……睾丸を切り落とされた。

善良なる読者よ、あなたがいつか見られるようにと、私は彼女たちをスケッチしておいた！ それに、彼女たちの美しさは、決して人を狂わせるようなものではなかつたということをお伝えしておこう。フランスにおいてさえ、女性の美の基準は上がつてゐるのだ。la très sage Héloïs 「とても博識なエロイーズ」 さえ、とてもあんな犠牲を払うだけの価値はなかつた——だつて、あそこですよ！ 読者諸氏は、我慢して待つていてほしい。このすべては、ほとんど果てしなく続くのだが、いずれ時が来れば、世間が価格交渉をしたことのない私自慢の記述と挿絵を伴つて世に出るだらうし、そうすれば世間はそれまでの歴史的記録物には決して付けなかつたような価格を付けることだらう！

二十年以上にわたつて来る日も来る日も、メアリーは膨大な日記をつけてきた（二人とも知つてゐる暗号で）。それは現在私が持つております、そこには過去への二人の長い旅の全詳細が書き留められている。

同時に、私は来る日も来る日も（所長の好意により与えられた余暇の間に——）、「マグナ・セド・アプタ」でのあの不思議な夜々の間に本物から直に描くことができた人々と場所のスケッチを、繰り返し記憶から引き出してきた。私は、それらの正確さと彼らの肖像の忠実性を保証することができる。たぶん、それらの出来映えについては不

十分な点が多いことだろう。

(この自叙伝が導入にすぎない、将来の出版に向けての) 彼女と私の仕事は、いずれも細心の注意と誠実さをもって行われた。時間も苦労も惜しまなかつた。例えば、聖バーソロミューの虐殺だけでも、私たちは十七の異なる視点から研究することができ、二ヶ月にもわたる不斷の労力が費やされた。

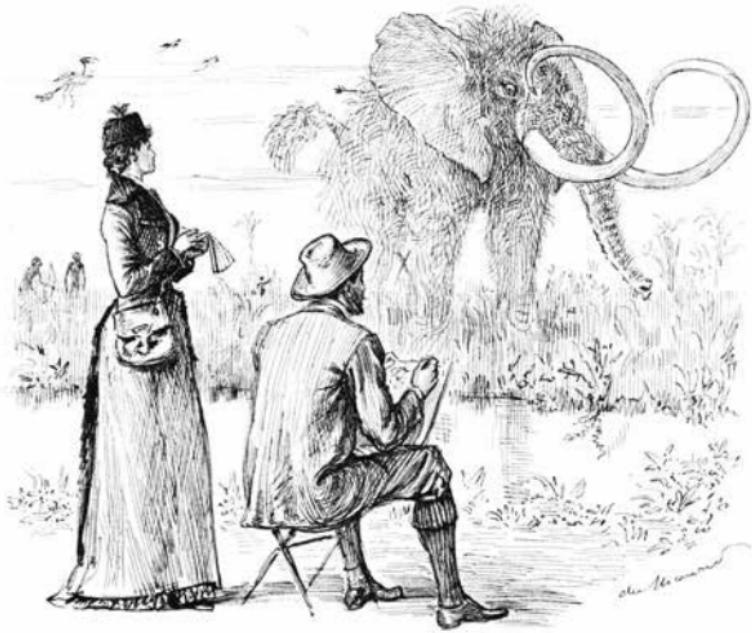
時間の流れをどんどん遡るにつれ、仕事はある意味簡単になつていつた。しかし、より一般化する必要が生じ、またしばしば時間と空間の不足のため、個人の代わりに類型を使う必要があつた。すべての連續した世代とともに、私たちの祖先の数が(蹄鉄の釘の問題におけるように) 等比数列で、数の限界——すなわち、地球の総人口数だ——に達するまで増加したからである。七世紀には、(ヨーロッパは言うまでもなく) フランスで生きている人で、私たちの直系の先祖の系列から外れた人はいなかつた。もちろん、子を持たずに死んだ人や、単なる傍系親族を除いて、だが。

私たちは、マンモスとホラアナグマと、生きて地に満ちるためにそれらを狩り、殺して食べている人間のかすかな影さえ、見ることができたばかりだ。

*蹄鉄の釘の問題……マザーグースの『釘がないので』を指すか? 釘がないので蹄鉄が打てない、で始まつて、小さな問題が次第に大きな問題を呼び、最後は国が滅びた、で終わる。

マンモス！

私たちは、彼が草を食^はんでいるとき
にその周囲や脚の間を歩き、横になつ
て休んでいる場所でさえ彼を通り抜け
た。静かで湿つた朝に、小さな空洞の
中で、焦げ茶色の霧を通り抜けるよう
に。（適切な距離に離れてから）振り
返つて見てみると、再び紛うことなき
姿がそこにあつた。その向こうの、原
始時代のぼんやりした風景の諸線を消
し、空っぽの空に穴を開けるのにちょ
うど十分なほど濃い。恐怖で心をぞく
ぞくさせる、恐ろしい影——合成写真
のようないばんやりと不明瞭な——、そ
れをともかくも見たことのある全員、
必然的に私たちと、今生きているすべ



「マンモス」

ての人の祖先であるすべての人々 (exceptis excipiendis [除くべきものを除いた]) によつて、通常見られていたような、単なる類型。

そこにはそれが、毛むくじやらの象の幽霊のような怪物が、立つたり横になつたりしていた。私たちは、鈍くて冷たくてものすごく古い目の表情をほとんど見ることができたか、あるいは見たように思つた——彼の毛皮には、ほのかに朽葉色の氣味があることもほぼ感じ取れた。

メアリーは、尖った耳と尻尾を持つた毛深い祖先にいつかは到達し、彼の生活が樹上性(じゅじょうせい)なのかそうでないのかを確認できると固く信じていた。そうなつたら、彼女はどれほど情熱的な興味をもつて、彼に付いていき、研究し、表現したことだろう！そして私も！ 私はどれほどの熱烈な喜びと、さらにはどれほどの子孫としての敬意とをもつて、彼の肖像をスケッチしたことだろう！——自分の非力が許す限りの、どれほど誠実な忠実さをもつて。（見込みとは裏腹に、彼はかつて存在した中では最も魅力的で目を引く小さな獣であつたかもしけず、今日野蛮人と称される多くの者よりも、その者を祖先とすることへの屈辱がはるかに少ない存在だつたかもしれない）

ああ、だが運命は、それはなされるべきではない、また私たちが幸運にも発見できただ道するべの糸をたどるという楽しい仕事は、正式に訓練された別の者に委任するべ

きだ、という意志を持つていたのであつた。

• • • • •

さて、死別の話となるべく急いでお伝えすべきときが来た——今生きていようがもう死んでいようが、かつてこのような経験をした人間などまづいなかつたほどの、あまりにも大きすぎる死別である。そして今は、私がそれをどのように切り抜け、分別を失わなかつたかのみならず（これについては疑つているように見える人もいるが）、まるで有名なアカデミー会員か、俳優か、小説家か、政治家か、そのへんで外食している人のように——いかにして平然と饒舌に、自分と世界に十分満足しつつ、穏やかに楽しげに自分の回想を書きながらここにこうしていられるようになったのかを、説明すべきときもある。

メアリーと私が何世紀にもわたる魅惑的な旅に夢中になつっていた共同生活の最後の数年間は、お互の外的的生活をほとんど、あるいはまったく見ることがなかつた。正確に言えば、私の方は彼女のそれをまったく見ることがなかつた（というのは、彼女の方はまだ時々、私と一緒に刑務所に戻ってきたからだ）。私は、彼女が私たちの

夢の中に現れることを選んだときだけ、彼女を見ていた。

その根っこには、おそらく老けていくのを見られることに対する女性的な嫌悪感が彼女の方にあったのだろう。「マグナ・セド・アプタ」では、私たちは常に二十八歳かそこらだったのだ——いちばんいい年齢である。私たちは、ずっと続く若さの源泉を本当に発見して、それに酔っていたのだ！ それに私たちは、夢の中ではいつも見た目よりも若いとさえ感じていた。私たちは、すぐに元気を回復できる子供の気力と、彼らのフレッシュさとを持ち合わせていたのである。

私たちがしばしば死と別離とあの世の神秘について話したとしても、そのような偶発事件からかけ離れた人々が話すようにしか話さないものだ。ところが実際には、私たちにもほかの人々にとつてと同じくらい、素早く時は過ぎ去ったのである。私たちは光陰が矢のごときことには、あまり敏感ではなかつたというのに。

メアリーの、ずっと酷使されてきた溢れるような活力がダウンする日がやつて来て、彼女はしばらくの間病気になつた。それでも、それは私たちの通常の会合を妨げることはならず、私たちが会つたとき、彼女にそれと分かるような違いは見られなかつた。しかし実際には、彼女が以前と完全に同じようになることは決してなく、いつの日か別れるという恐ろしい可能性が会話の中でより頻繁に話題に上つたことは確かだ

と思う。悲しいことに、心の中ではあまりにも頻繁に。しかも、私たちの心は一つだつたのである。

彼女は、もし私の方が先に死んだ場合、私が「マグナ・セド・アプタ」に持ち込んでいたものは皆（わずかだったが）、それ以上は存在できないことを知っていた。私の肉体に至るまで。魔法の窓のそばのソファにいつも仰向けに横たわっているそれ、私よりも前に彼女の方がたまたま私たちのいつもの生活に目覚めたときのそれ、あるいは私がはるか刑務所へと召喚された後に残されたそれ。

そして、もし彼女が死んだ場合、隣のソファの彼女の肉体のみならず、「マグナ・セド・アプタ」そのものすこでもまた消え失せるなどを、私は知っていた。その無限のギヤラリート庭々と魔法の窓々も、そこに含まれる驚異も何もかも一緒に、あたかも最初からなかつたかのようになることを。

時々私は、眠りに沈むとき、そうなつていることを発見することになるのでは、といふぞつとするような切迫した恐怖を感じることがあつたが、その場所で目覚め、すべてがいつものようにそこにあることに気づいたときの変わらぬ天国的な喜びは、ますます強烈になるばかりだった。私は彼女の生氣のない体のそばにひざまずき、人間が感じることのできるあらゆる種類のさまざまな愛で構成されているような愛の情熱

をもって、彼女を見つめたものだった。
その中には、飼い主の女性に対する雄犬の愛や、幼獣に対する野獸の愛のようなものさえ含まれていた。

激しく過敏な不安と疼くような切迫感とともに、彼女の唇から最初の軽い呼吸が漏れるのを、頬に最初のかすかな薄臍うすえん脂色じいろがさすのを、私は見つめたものだった。それらはいつも彼女の生への復帰を予告してくれるのだ。そして、彼女が目を開いて微笑み、その長く若々しい四肢を目覚めの喜びの中で伸ばすとき、感謝と安堵にどんなに狂喜したことだろう！

ああ、悲しいことに！ それはもう追憶なのだ！



ついに、私の予感が現実のものとなる、恐ろしく忘れられない夜がやつて來た。

私は「パルワ・セド・アプタ」の小さな物置で目覚めた。そのドアは、いつもは私たちの喜びの宮殿と行き来できる。ところが、もうドアがなかつたのだ——開口部のない壁があるばかりだつた……。

私は、すぐに自分の独房で目覚め直した。とても言い表せないような状態で。何か間違えたに違いないと思い、多くの時間と努力を費やして再び眠りに沈んだが、結果は同じだった。開口部のない壁、「マグナ・セド・アプタ」は永久に閉ざされ、メアリーは死んだのだ、という確信。それから、刑務所生活への再度の恐ろしい帰還跳躍。

この夜の間にこういうことが何度か起つて、曙光^{しょこう}が差し始めた頃、私は荒れる狂人となつていた。私は、最初に駆けつけた看守（私の「メアリー！」という叫びを聞きつけたのだ）をイベットスン大佐と勘違いして、彼を殺そうとした。彼はたいへんな大男で、私とほぼ同じくらいの力を持ち、年齢は私のわずか半分だつたのだが、もしさうでなかつたなら、私は彼を本当に殺してしまつていただろう。

ほかの看守たちが助けに来て、私は彼らのこともイベットスンだと思い込み、狂人

のように戦った。そのときの私は狂人だったのだ。

長い恐怖、脳炎、その他いろいろを経て正気に戻ったとき、私は刑務所の医務室から別の場所に移されたが、そこが今いる場所である。

私は突然理性を取り戻し、精神的苦痛を認識した。かつては被告人席に立つて恥ずべき死刑宣告を受けた私のような者でも、夢にも思わなかつたような精神的苦痛を。

私はすぐに自分に抜け落ちていた知識を確認し、かの有名なメアリー、タワーズ公爵夫人が、メトロポリタン鉄道の駅——で、自らの死に遭遇したことを聞いた（それが九日間以上も世人の口の端^はに上つていたことも）。

子供を抱いていた女性が、ちょうど列車が駅に入ってきたときに酔つた男に押され、子供をレールの上に落としてしまつた。彼女は続いて飛び下りようとしたが引き止められ、そこにやつて来たばかりのメアリーが代わりに飛び下り、奇跡的な力と機敏さで子供をつかみ、機関車が通過するときには六フィート道に上がることができた。

彼女は、列車の最後尾までその子を運ぶことができ、それからプラットホームの上に助け上げられた。それは彼女が乗る列車で、彼女は客車に乗つたのだが、次の駅に着く前に死んだ。彼女の心臓（しばらく前から病氣であつたらしい）は止まつており、

*六フィート道……線路間の安全地帯。線路間は最低でも六フィート空ける決まりがあつた。

すべてが終わった。

こうしてメアリー・セラスキアは、五十三歳で亡くなつたのである。

私は何週間も、身体的には回復期にあつたが、口が利けず、乾いて涙も出ず、絶望した状態で、一瞬の安らぎも訪れなかつた。クロラールで得られた夢のない眠りを除いては。私にはそれが大量に投与されたのだ——その後、覚醒！

私は話すことも質問に答えることもせず、ほとんど動くこともなかつた。私は一つの固定観念を持っていた——自殺のそれである。不成功に終わつた二度の試みの後、私はひどくがっかりと束縛され、昼夜監視されたため、それ以上の試みは無理だつた。私には、つまようじもボタンも普通の荷造り紐の一片も、信用して預られることはなかつた。

私は自分を餓死させようとし、あらゆる固形食を拒絶した。しかし、耐えがたい渴きが、提供されたいかなる液体の拒絶も不可能にし、私はミルク、牛肉のだし汁、ポーツワイン、シェリー酒で誘惑され、それらが私を生かせ続けた……。

私は、夢を見たいという願望を完全に失っていた。

ある日の午後にやつと、オートウェイユの池をもう一度見たいという、奇妙で不可解で抵抗しがたいノスタルジックな欲望が、胸に甦った——たつた一度だけ。これを最後に、ミュエット通りを通り、城壁のそばを過ぎて、そちらへと歩きたい。

それは、就寝時刻を待つのが拷問になるほど私の中で大きくなつていき、焦燥感で気が狂いそうになつた。

ようやく待ち望んでいた時間になつたとき、私はもう一度、長いこと試みなかつた以前の姿勢で横になつた（拘束具のため、できるだけ近い姿勢といったところだが）。私の心は、ブローニュの森への入り口とパッシー大通りを分ける古い石の門である、ラ・ミュエット門に向いていた——イギリスのテンプルバーのような門である。

それは四十五年前に解体された。

私はすぐにそこ、大通りがポンプ通りとちょうど出会う地点にいる自分に気づき、

*クロラール……催眠剤・鎮痛剤。

門をくぐって森の方を見た。

曇つて重苦しい空模様の秋の日だった。周囲に人はほとんどいなかつたが、右手側の小さなレストランでは陽気な結婚披露宴が開かれていた。それは八百屋のアシル・グリゴウと、セラスキア家のハウスメイドであつたフェリシテ・ルノルマンとの結婚を祝するものだつた。私は、不意にこのすべての記憶が甦り、ミムジーとゴーゴーがそのパーティに出でていたことも思い出した——それどころか、後者は *premier garçon d'honneur* 「新郎の付き添い」で、その役の少年は、すぐに新婦のガーターを盗み、それを細かく裁断して、舞踏会が始まる前に男性客のボタン穴を飾るという任務を与えたものだつた。

私の左側のアーチ道には、酷使され尽くした惨めな老馬たちが、根気よく客を待つていた——膝が折れ、肺氣腫で、またがられたり、馬勒^{ばら}を着けられたり、貸し出されたりする準備をして——クローリス、ミュラ、リゴレットなどといった名の。私は彼らを知つていて、半世紀近く前にその全部に乗つたことがあつた。ずっと前に死んだ、昔の惨めな影たち、本物そつくりで、現実のようで、哀れを催す影たち——彼らを見ると、「私の心は引き裂かれた」！

青い上着と銀のボタンの、ラミという名のハンサムな伝書使が、糟毛色^{かすげいろ}の馬に乗つ

て、大きく鳴り響く鉈の音と、柄^えの短い鞭の音とともに、サン＝クルーから早足でやつて來た。彼はそのレストランに止まり、白ワインを一杯所望し、鑑の上に立ち上がり、グリゴウ夫妻に大声で陽気に呼びかけた。彼らは二階の窓に現れたが、とても幸せそうに見えた。そして彼は一人の健康を祝して乾杯し、一人は彼にそれをして。私は、彼らの背後の群衆の中にいるゴーゴーとミムジーを見ることができた。私は、以前もかなり頻繁に思つたのだが、自分はどうして外からこのすべてが見えるようになったのだろう——どうすればゴーゴーとは別の視点から見えるのだろう——と、また少し疑問に思つた。

その後、伝書使は慇懃^{いんぎん}にお辞儀をして「お幸せに！」と言つてからチュイルリーに行く途中の大通りを駆け下りていき、結婚式の客たちは歌い始めた。彼らは、次のように始まる歌を歌つた——

"Il était un petit navire,

Qui n'avait jamais navigué..."

「小さな船がありました、



"À VOT' SANTÉ!" 「[乾杯！]」

一度も航海したことのない……」

私はそれをすっかり忘れていて、最後まで聴いて、とてもきれいだと思った。そして、単調で機械的な様式に興味を持ち、その点から、サッカレーの有名な『リトル・ビリー』というバラードの原作に違いないことを発見した。後者は、何年も経つてから初めて耳にしたものである。

次の歌詞、すなわち詩の終わりが来ると――

"Si cette histoire vous embête,

Nous allons la recommencer,"

「このお話を気になるなら、
あら一度繰り返そう」

私は先に進んだ。たぶんこれが、夢の国での最後の散歩になるだろう。夢の時間は不確実だし、私はそれを最大限活用して、周囲を見て歩くことにした。

私は、一種のカジノであるラネラの方に歩いた。そこでは、日曜日と木曜日の夜によく舞踏会と芝居が催されていた（それからロッシャー二ニが彼の後半生をそこで過ごし、その後は、洗練されたたくさんのかな別荘に席を譲るために解体されたと教わった）。エラール氏の公園の向かいの牧草地では、サンドーの男子生徒たちがラウンダーズ——バル・オ・カン——をプレイしていた。そこから私は、木曜日の午後、半休日であろうと結論づけた。もし彼らがきれいなシャツを着ていたなら（今の彼らはそうではない）日曜日で、全休日であつただろう。

私は彼ら全員と、二人の舍監あるいは門番であるラルティーグ氏および le petit Cazal「カザールの息子」を知っていた。しかし、もはや彼らを気にかけたり面白いと思つたり興味を抱いたりすることは、露ほどもなかつた。

ラネラの向かいで、四輪馬車の昔の御者たち数人が、ブションで平和に時間を潰していた——スー硬貨を別のスー硬貨でコルクから叩き落としていた——大きくて厚いスー硬貨とダブルのスー硬貨はかなり時代遅れだった。かなり良い試合で、私はそれをしばらく見て、ずっと前に死んだその遊び手たちを羨ましく思った。

近くには小さな木造小屋やバラックがあり、きれいに塗装され、ガラスをはめられ、屋根は小さな三色旗で飾られていた。それは一人組の老婦人、マネットおばさん

とマネット婆さん——それまで見た中でいちばん年寄りの女性二人だ——のものだつた。彼女たちは商売に非常に熱心で、一サンチームもツケで売ることはなかつたものだ——イギリスの少年たちにさえしなかつた。二人は莫大な金持ちで、まったく身寄りがないと言われていた。ああ、彼女たちはもう亡くなつたに違ひない！　そう思つた。そして、私は二人をじつと見つめ、その生き生きとした様子や生きていく中で手に入れた喜びを訝しんだ。二人はたくさんのお物を売つていた。ヌガー、^{*}パン・デピス、ミルリトン、フープ、ドラム、やかましいバトルドア、シャトルコック。小さな十スーの手鏡は亜鉛できれいに装丁され、開閉することができた。

私は、外にぶら下がつていたそれらの一つで自分の姿を見た。年老いて、やつれて、青白く——顔は下手くそにひげを剃つていた——、髪はほとんど白くなつていた。以前の夢では年を取つたことなどなかつたのに。

*ラウンダーズ……野球に似たゲーム。バル・オ・カンはそのフランスでの呼び方。
*ブショ়ン……コルク倒し遊び。

*パン・デピス……「パン・デピス」はライ麦粉・蜂蜜・香辛料で作られるケーキ。「ミルリトン」は二七〇ページに既出。『くるみ割り人形』の「葦笛」であるが、実際はあの曲のフルートのようなきれいな音は出ない。「フープ」は、おそらくフラフープのことだろう。「バトルドア」は、バドミントン・ラケットの前身のようなもの。

私は城壁の門を通つて外側の斜堤（当時は草木一本なかつた）の上まで歩き、オートゥイユの池の方向を目指した。その場所は、木曜日のためまつたく人けがなく、单调に見えた。悲しくて地味な散歩だつた。私の憂鬱は耐えがたいものだつた——心は完全に壊れ、体はあまりにも疲れていて、自分を引きずつていくことがかろうじてできるというくらいだつた。以前の私は、疲れるとはどういうものなのか、夢の中では知らなかつたのだ。

私は、そのすべてが清新しいピンク色の有名な城壁を見つめた。足場はほとんど外されておらず——そのいくつかはまだ、城壁と斜堤の間の乾いた溝の中にあつた——、この小さなレンガと花崗岩の壁が、三十年後（二十年前）、ドイツ人をパリから遠ざけるのにどれくらい役に立つたのだろうかと考えて、私は微笑んだ。狭い部分に石を投げようとしたところ、もう石が投げられないことに気づいた。それで私は座つて休んだ。私の脚は何て細いのだろう！ それに、何て惨めな服装か——油で汚れ、染みが付き、すり減つて、粗悪に膝が繕われた、古い囚人ズボン——そして、何というブーツ！

これまで夢の中で、私はみすぼらしい身なりになつたことはなかつた。

これを限りと反対側へぶらついていき、そびえ立つ堡壘から *à la hussarde* 「軽騎兵

しゃてい

流に」真っ逆さまに落ちて永遠に自分を殺すことが、なぜ私にできなかつたのだろう？ ああ！ 私は夢を曇らせ、たぶん惨めな拘束衣に身を包んで目を覚ますしかないので。そして私はもう一度、猛烈に mare 「池」 が見たかった。

私は考え込んだ。ポケットを石でいっぱいにし、最後にオートウイユの池と周囲をよく見た後、身投げしてみたらどうか。おそらく、今の弱った状態での感情的ショックが、本当に睡眠中の自分を殺すかもしれない。結果が

*三十年後（二十年前）……プロイセン

によるパリ包围が一八七〇年なので、夢の中は一八四〇年、外界は一八九〇年ということになるか？



「私は座って休んだ」

どうなるか、誰に分かる？　とにかく、やつてみる価値はあった。

私は立ち上がり、池まで重い足を引きずつて歩いた。そこには人けがなかった。たった一人の女性の姿を除いては。その人影は、黒と灰色の地味な服を着て、古い柳のそばのベンチに動かずに座っていた。

私は彼女の方へぶらぶらとゆっくり歩きつつ、石を拾ってはポケットに入れた。白髪交じりで中年の、とても色の濃い眉を持つ並外れた長身の女性で、その素晴らしい目が私を追っていた。

それから私が近づくと、彼女は微笑んでキラリと光る白い歯を見せ、それと同時に目は皺になつてほとんど閉じられた。

「おお、神よ！」私は悲鳴のような声で叫んだ。「メアリー・セラスキアだ！」

• • • •

私は彼女の方へ走り——彼女の足元にひざまづき、彼女の膝に顔を埋め、ヒステリックな子供のようにすすり泣き、その間、彼女は子供をなだめるようになだめようとした。

しばらくしてから、私は彼女の顔を見上げた。それは年老い、やつれ、青白く、ほとんど白髪、私の顔と同じようだつた。それまでそんな彼女を見たことはなかつた。彼女は常に二十八歳だつたのだ。しかし、年齢は彼女によく合つていて——彼女はかなり慈悲深げな美しさと平静さと崇高さを漂わせていたため、私は恐怖を感じた——、素早く冷たい波が私の背骨を走り下りた。

彼女のドレスとボンネット



「メアリー・セラスキアだ！」

ト帽は古くくたびれて、手袋は縫つてあつた——手首の周囲に毛皮の付いた仔山羊革こやぎがわの手袋である。彼女はそれを脱いでから私の手を取り、自分のそばに私を座らせ、しばらくの間、黙って懸命に私を見ていた。

とうとう彼女は言つた。「ゴーゴー、mio 「あなた」。私は手の感触を通じてあなたのが全部分かるわ。私の手の感触はあなたに何も伝えない？」

それは彼女の莫大な愛のほかは何も私に伝えなかつた。それは私が欲したすべてであり、私はそう言つた。

彼女はため息をついて、言つた。「こういうことになるんじやないかと心配していだの。古い回路は壊れて、直すことはできない——もうだめなの！」

私たちはもう一度頑張つてみた。しかし、無駄だつた。

彼女は周囲を見回したり木のてっぺんを見上げたり、あらゆる場所を見た。それから再び私を、かなりもの憂げに、震えながら見て、ついに話し始めた。最初はためらいがちで、いつもの彼女とは異なるやり方だつた。しかし、見たところすぐに彼女は彼女らしくなり、昔の素早い微笑みと笑い、幸福そうなわざかな肩のすくめ方と仕草、数か国語が入り混じつた風変わりな会話表現（これについては、私はいつも綴ることができないので省略している）を取り戻した。飾らないシンプルな話し方、流暢で磁

力あるエネルギー、愛嬌のある共感的な声の抑揚、その厳肅さから陽気さへの素早くユーモラスな変化——こういうこと全部が、彼女が言つたことすべてに、言いたかつた以上のあらゆることをかなり暗示させることになった。

「ゴーゴー、あなたが来ることは分かっていたの。私はそれを望んでいた！　あなたはどんなにひどく苦しんだことでしょう！　そんなに痩せてしまって！　あなたを見るのは衝撃だったわ！　でも、それももうないでしょう。私たちはこのすべてをすっかり変えることになるわ。

ゴーゴー、ほんの数時間程度でも、戻ってくるのが私にとってどれくらい難しいか、あなたには分からぬでしょうね。私、あまり長い時間は頑張れないからなの。手首で窓枠にぶら下がっているようなものなのよ。この時間は、ヘーローがレアンドロスに向かって泳いでいるとか、ジュリエットがロミオの所によじ登っているとか、そんな感じなのよ。

これまで誰も戻った人はいなかつた。

この私は、以前の私の哀れな抜け殻。それを通して私を知覚してもらうために、たいへんな苦労をして組み上げたもの。私がいつもあなたに対してもう一度自分を作り上げることはできなかつた。私はこれで満足しなければならない

し、あなたもそう。これは私が死んだときの服なの。でも、あなたはすぐに私だと分かつてくれたわね、愛するゴーゴー。

私は長い道をやつて来た——それはもう長い道を——あなたと abboccamento〔会談〕するために。言いたことがすぐたくさんあった。それで、私たちがここに二人ともいて、以前のように手を取り合っている今、それが何だったのか、私には理解することさえできない。私が理解できたとしても、あなたに理解させることはできないかもしない。でも、あなたはいつか知ることになるでしょう。何も急ぐ必要はないの。

私が死んでからあなたが考えたことは、もう全部知ってるの。少なくとも、あの回路のあなたの共有部分は壊れていない。あなたが石を拾ってポケットに入れた理由も、もう私には分かっている。そんなことを二度と考えてはだめ——決して考えないで。もつと言えば、そんなことをしても無駄なのよ、かわいそうなゴーゴー！

そのとき、彼女は空を見上げ、もう一度辺り一帯を見渡し、以前の幸福そうなやり方で微笑み、両手の甲で両目をこすり、ずいぶん長い話に取りかかるうとしているよう見えた——abboccamento〔会談〕に！

-
-
-
-
-
-

彼女が言つたすべての中で、私はわずかな断片しか書くことができない——覚醒時に思い出して理解できるものは、何であれそうなつてしまふ。私が忘れている箇所には、小さな点の線を置くことにする。眠つて夢を見ているときだけ、私は残りを思い出し、理解することができる。そのときは、それは皆非常に単純なものに思える。私はよく心の中で考える。「心の中にしつかり焼き付けて、よく選ばれた言葉——彼女の言葉——で表し、それを暗記しよう。次に、注意深く目を覚ましてそれらを思い出し、本の中に全部書き留めよう。それらが私にしたことのすべてをほかの全員のために行い、疑念を幸福な確信に変え、絶望を忍耐と希望と高揚感に変えるために」

しかし、ベルが鳴つて目が覚めると、記憶は私を裏切る。「すべてのことが私たち全員にとって良くなるだろう」という知識、また「月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するような」知識以外は、何も残つていないので。

ああ、この知識。私はそれを他人に分け与えることができない。私以前に生きていた多くの人同様、私には証明できない——断言することだけはできるのだが……。

「何て奇妙で古めかしい感じなかしら」彼女は始めた。「目と耳と、こういうすべてのもの——私たちの近くにあるものに対して開かれた小さな窓——を再び持つことは。それらはとても不器用な装置なの！　私はもうそれらを忘れてしまっているのよ。

見て、古いお友達のウォーターラットが土手の下を行くわ。私たち、彼をよく太っちょ親父——*le bon gros père*——って呼んでいたわよね。彼は、私の眼底を横切つて逆方向に上下に動いている小さな平面的な絵でしかない。彼が遠くに行けば行くほど小さく見える。二、三百ヤード離れたら、私たちは彼がまったく見えなくなるでしょう。現状では、私たちは彼の外側、一度に一側面だけを見る事ができる。それでも彼は、作るのに何百年もかかった重要で素晴らしいものでいっぱいなの——私たちと同じようだ！　そして、彼をしつかり見るためには、私たちは彼をまっすぐ見つめなければならぬ——その場合、私たちは自分の背後や周囲にある物を見る事ができない——もし暗ければ、私たちは何も見ることはできないでしょう。

何て貧弱な目！ 水でいっぱいの小さな袋、中には小さな虫眼鏡、後ろにはキンレンカの葉——光を捕らえて感じるためのもの！

ある高名なドイツの眼科医が以前パパに言っていたのだけれど、もし自分の器具製作者が人間の目のような性能の低い機械を送ってきたとしたら、自分はそれを送り返して請求書の支払いを拒否するだらうって。私も、今ならそれが理解できる。それでも、目がなければ、私たちはこの地上のどこにいることになったのでしょうか？ 私たちの誰かがかつてこの地上でそれを持たなくなっていたとしたら、その後の私たちはどこにいたんでしょうね？

• • • • •

私はあなたの愛しい声を聞くことができるわ、ゴーゴー、この両耳で。なぜ二つ？なぜたった二つなの？ 自分が欲しいもの、あるいは考えていることや感じていることを、あなたは自分が教わった音声で私に伝えようとする——英語とフランス語で。もし私が英語もフランス語も知らなかつたら、それは何の役にも立たないでしょう。言葉なんて貧弱なものよ。あなたは自分の肺を息で満たして、喉の小さなスリットを

震わせて、発言をして、それが空気を震わせる。その空気は、私の頭の中の一組の小さな鼓膜を震わせる——とても複雑な装置で、後ろにたくさんの骨がある——それで、私の脳はあなたが言いたいことを大まかにつかむ。何という回りくどい方法、何という時間の無駄なんでしょう！

• • • • •

残りのことのみんなそう。私たちは直接匂いを嗅ぐことさえできない！　犬は私たちを笑うでしょう——犬だって多くを知っているわけではないけれど！

そして、感覺！　私たちは暑すぎたり寒すぎたりを感じることができ、それが時々体調を悪化させ、死に至らしめることさえある。でも、嵐の到来、北と南、新月や真夜中の太陽や真昼の星がどこにあるのか、あるいは自分たちの測定力では今が何時なのかさえ、私たちは感じることができない。目隠しされたら家に帰ることさえできないうわ——それは鳩であっても無理で、燕でも梟でもできない！　できるのはモグラか、たぶん杖で弱々しく探りながら歩く盲目の人くらいでしょう。その人も、それ以前にその道をすでに歩いたことがあった、という条件づきでね。

それに、味！ これについては、たで蓼食う虫も好き好きってよく言われるわね。

さらには、これ全部を維持するためには、食べて、飲んで、眠って、その他もろもろをする必要がある。何という重荷でしょう！

そして、あなたと私は、これまでに手を触れることでお互いの内的存在への道を見つけ出した、私が知っているただ二人だけの人間。そのときは、私たちはまず眠る必要があった。肉体は何マイルも離れていた。そのことは問題ではなかった。覚醒しながらそれをすることはできなかつたから——決して。死ぬまで抱き合つても！

• • • • •

ゴーゴー、私、あなたに話すべき言葉を見つけることがどうやつてもできないの。私がこれまでに知ったどの言語にも、それを伝えられるものは一つもないから。でも、私がいる場所は、耳や目やその他のものがみんな一つになつていてね、おお、その一

つの中には、さらにほかにもどんなにたくさんのことがあることか！　伝書鳩が知っていたこと、^{あり}蟻やモグラや水生甲虫やミミズや、葉や根や、磁石や——白亜の塊さえ、さらにたくさんのが知っていたこと。音を、聞くことと同じよう、見たり、嗅いだり、触れたり、味わったりできるし、その逆もできる。これはとても単純なのだけれど、今のあなたにはそう思えないかもしねれない。

音！　ああ、何という音！　地上の厚い大気はその音のようなものの伝導体にはなれず、地上の鼓膜では受け手になれない。音がすべて。音と光は一つなの。

• • • • •

で、それは一体何を意味しているか？

私は、自分がそちらにいたときにはそれが何を意味するかを知っていたし——少なくともその一部は——、数時間以内にもう一度知ることになるでしょう。でも、今私の哀れな古い地上の脳は、お婆さんがナイトキャップをかぶるように、私がもう一度身に着けなければいけなかつたものなのだけれど、目や耳と同じようなものなの。今だけは地上のものを理解できる——ゴーゴー、まだ地上にいるあなたが理解できる

ことを。私は忘れてはいる、人が普通の夢を忘れるように、時々なぞなぞの答えや歌の最後の節を忘れるように。それは舌の先まで来ている。でも、そこにくつついてしまつて、それ以上出てきてくれないの。

覚えておいて。私が今生きているのはあなたの脳の中だけ——あなたの地上の脳は、幸福だった何年もの間、たった一つの私の家だった。私の脳があなたに対してそうであつたように。

私たち、何で快適な場所にいたのでしょうか！

• • • • •

でも、これは分かっている。人は、そういうもの全部を、一度は持たなければならぬ——脳、耳、目、その他のものを——地上では、ね。Il faut avoir passé par là! 「そこを通り抜けねばならない！」、そうでなければ、人間や獣にとっての来世はあり得ないか、考えられさえしないでしょう。

生まれつき耳が聞こえない人に楽譜をどう理解すればいいか、生まれつき目が見えない人にどう色を感じればいいか、教えることはできないわ。かつて耳が聞こえてい

たベートーヴェンにとつては、聴覚障害などそれほど大きな問題ではなかつたし、ホーマー・ミルトンにとつての視覚障害も同じことでしょう。

私のややかな例え話、理解できるかしら？

• • • • •

音と光と熱、電気と運動、意志と思考と記憶、愛と憎しみと憐れみ、生まれて生きたいという願望、生きているものと死んでいるものすべての、互いに近づきたい、またさっと離れたいという切望——そのほかのたくさんのこと！ 帰するところはみんな同じなの——『C'est comme qui dirait bonnet blanc et blanc bonner [白い帽子と云うか、帽子の白いのと云うか、みたいなもんだ]』って少佐殿がよく云つていたわ。『C'est simple comme bonjour! 「簡単なことなんだよ！」』ってね。

私がいる場所ではね、ゴーゴー、地上で輝く太陽を聞く」とが、それが花を咲かせ、鳥を歌わせ、誕生と結婚と死のための鐘を鳴り響かせるのを聞く」とができる——その死も、幸せな幸せな死なの、それをあなたに理解してもらえればいいのだけれど——『C'est la clef des champs! 「それは自由への鍵！」』。

太陽は月と惑星を照らし、私はそれを聞くことができ、それらが返してよこす歛を聞くことができる。まさにその星々が歌っているの。すごく遠くで！ それでもそれは、私たちとそれらの間にいるような聴衆ともども、聞く価値が十分ある。そしてそれらは、その歌を聞かせる術は持たない……。

私、ここではそれを聞くことができないの——少しも——今は耳を付けているから。そのうえ、地上の風の音が大きすぎるし……。

ああ、言つてみれば、それは音楽なのよ。でも、人類にはそれが全然聞こえていない——耳が邪魔しているから！……

深い海底の暗闇と泥の中に棲んでいる、あの哀れな、目に見えない平たい魚たちは、地上で人類が作る出す音楽を捉えることはできない——貧弱な音楽だけれども！ でもね、太陽光線の翼やひれに載つて運ばれるすごくかすかなざわめきが、真昼に数分間で彼らまで届き、彼らが自分の棘にそれを感じるための微小な體を持つていて、その間にに入るべき耳も目もないというのであれば、彼らは誰よりも幸福なのよ、ゴーゴー。彼らのあんな冴えない生活でも、人のそれよりは恵まれているの。

でも、残念ながら、今のところは！ 彼らは目と耳の記憶を持っていないし、それがなければ小さな棘の體も役に立たないでしょう。彼らは待つことに甘んじなければ

ならない、あなたと同じように。

目が見えない人や耳が聞こえない人はどうかって？

おお、そうね。地上のかわいそうな聾啞者ろうあしゃや生まれつき目が見えない人にとって、*la bas* 「あちら」は何の問題もないわ。彼らは過去の目や耳や残りの部分すべてで思い出すことができる。しかも、それはもはやそれらじやない。それらはないの！ それは些細なことでしかない。

あなたも、私たちと太陽や星々の間にある全宇宙が、まるで、あんまり小さすぎてどんな顕微鏡でも見ることができない——この世の何よりも小さい——小さな棘の體でいっぱいになつているようなものだつて、ぜひ理解するよう努めてほしい。全宇宙はそれで満ちていて、肩を寄せ合つて——ほとんど箱の中の鰯いわしと同じくらい密接して——いて、まだ余地がある！ それでも、一滴の水でも、透明性を損うことなくそのすべてを保持するでしょう。それらは皆、地球やその他の場所で何らかの形で生きていたことを覚えていて、それぞれがほかのものたちが覚えていることを知っている。

私には、こういう例え話しかできない。

かつて、その宇宙全体は石でいっぱいなだけで、それらが突進し、ぐるぐる回り、互いにぶつかって碎けて、自分自身の速さによる白熱で溶けて蒸発していたのね。でも今は、石よりも良いものが大量に存在している。それは保証できるわ！ それは集まって、蓄えられ、混ぜ合わされ、ふるいにかけられ、選別され続いている——何百万年もの生の、貴重な、不滅の作物が！

• • • • •

それと、私が知っているのは、人がこの地上で、自分の人生を長く精力的に完全に生きれば生きるほど、すべてがいっそう良くなるってこと。それがあらゆることの基礎なの。けれど、もし人がそれを知ることなく、死んだとき自分に何が待ち受けているのかを推測できてしまったら、その人は生きるための忍耐なんか持たないでしよう——待つことをしなくなるでしょう！ だって、一体誰が進んで人生の重荷を背負おうとするかしら？ 彼らは、あなたがしたように、すぐにポケットに石を入れて、いちばん近い池に向かって突進することでしょう。

それをやつたらおしまいよ！

失われるものは何もない——何も！ シェイクスピアみたいな人でも表現する言葉を見つけられなかつたような、言語に絶した高度で儂い思考から、ミミズのごく小さな感覚に至るまで——何も失われていない！ 光を感じる葉の感覚も、鉄鉱石が極を示す感度も、母なる地球の火山や電気の振動たつた一つさえも、何も。

私たちにとって、あらゆる知識は地球上で始めざるを得ない。それは、私たちのこの貧弱なシステムにおいてはいちばん好ましい惑星で、今現在と今後わずか数百万年の間はそうでしょう。ほかには二つか、たぶん三つくらいしかない。でもそれらにしても、あまり重要ではない。『Il y fait trop chaud — ou pas assez! 「暑すぎるか——あるいは熱が足りないか！」』といふわけで、地球に比べて不出来なのね。

太陽、父なる太陽、*le bon gros père*「善き大いなる父」は、母なる地球に生命を降らせる。あなたも知るように、それは最初、貧弱な小さい生命だつた——草や苔こけや、わずかに身をくねらせる透明なもの——消化器官だけの。これは完全に真実なの！ それが私

たちの出所なのよ——シェイクスピアも、あなたも、私も！

個人個人が死んだ後、地球は、繰り返し使用できるよう個人個人それぞれの土を保持している。私が知る限りでは、太陽に個々人のエッセンスが降つて戻る——あるいはその近くのどこかに——貴重な水滴が海に戻るよう、それが混ざる場所に。世の中の何かに関わったりそれを見たりして、五つの小さな心の働きの使い方を学んだ後で——そのすべてを覚えたままで！ そう、あなたの父様がよく歌っていたかわいい歌の中の、追放されてさまよっているかわいそうなあの小さい水滴みたいに。それはいつも、最後にはどうにか家を見つけ出すことができる——

'Va passaggier' in fiume,

Va prigionier' in fonte,

Ma sempre ritorn' al mar.'

『川を行く、
泉に捕まる、

けれどもいつでも海に戻る』

あるいは、小さな塩粒がオートウイユの池に注がれ、水で溶けてそれと混ざり、オートウイユの池 자체が限りなく塩になるまで、互いに溶け合い混ざり合うようなもの。太陽というオートウイユの池が、地球という塩、地上の生命と知識という塩で飽和するまでは目的は成就しないでしようし、成就した場合、古い母なる地球は、月のように燃え殻になるほどからからに乾いているかもしれない。月のようには、その任務は終わるでしょう——『adieu, panier, les vendanges sont faites! 「わらば、籠よ、葡萄の収穫はなされた!」』

そして、太陽とその周囲の命の大洋については——ああ、それは私の理解を超えている！ でも、太陽もまた乾くでしょうし、そうしたら、その命の大洋はきっと別のもつと大きな太陽たちに引き寄せられるのでしょう。何もかもが多かれ少なかれ同じ

道をたどるように見えるから。クレッシェンドしかない、どこでも、いつまでも。

あなたは、それが大洋には少しも似ていないこと、水滴や塩粒や小さな棘の體にもまったく似ていなきことを理解しておく必要がある。でも、私が言いたいことの片鱗へんりんを示すには、こんな貧弱な比喩によるしかない。地上の物事でよくやつていたような、ただ手を触れるというやり方では、あなたはもう私の言うことが理解できないから。

ゴーゴー、私はただの小さな水滴で、まだその宇宙の海に分解して溶けきることができない塩の一粒でしかないの。私は例外なのよ。

それは、まるで長くて見えない鎖が私をいまだに地上に縛り付けているようなもので、私はその反対側でぶら下げられた、一種の檻のような小さくて透明なロケットの中にいて、それは私に周囲のことを見たり聞いたりはさせてくれるけれども、溶けき

ることからは私を防いでいる。

そして私はすぐ、このロケットがまだ私の中にいるあなたの半分でできているのに気づいた。それで私は分解することができなかつた。私の半分がまったく死んでいかつたから。その鎖が私を、私があなたの中に残している私の半分と結び付けていて、そのため私の半分は実際に分解されるためにそこにいることがなかつた……私はかなり紛れてしまつてゐるの！

でも、おお、私の心の真実の愛、私は自分の鎖を、そのもう一方の端のあなたともどもどんなに抱き締めたことか！

あなたには想像もつかないような苦痛と努力を払つて、私は鎖に沿つてあなたの所に這うようにやつて來た。自分が紡いだ果てしない糸の上の蜘蛛のように。私が持つてゐるような愛は死よりも強いの、本当に！

・ · · · ·

私は、私たちが永遠に離れられないことをあなたに伝えに來たの。二重の小さな棘の體が一つになつたもの——『フィリップ・シェン』ね！——小さな塩の一粒、水滴の

一滴。私たちが離れることはないでしょう——私にはそれが見える。でもね、こんなに並外れた幸運は、今まであなたと私の二人だけにしか運命づけられていないみたい。それは完全に私たちの行いが招いたことね。

でも、あなたが私と一緒になるまでは、あなたと私は完全にはなれないし、あの宇宙の大洋に溶けきることも自由にできないし、一つになつて、あるべき全体で役目を果たすこともない。

その時期は——一瞬たりとも慌てることはないわ。時間というものはない。そんなものはないと私も信じ始めている。*lā-bas*「そこでは」、年と日の間にほとんど違いがないの。そして、空間に関しては——ねえあなた、一インチは一エルと同じようなものなのよ！

物をそんなふうに測定することはできない。

小さな虫の生涯は、人間のそれと同じくらい長い。だつて、彼らも自分の務めを学んで、自分にできるあらゆる悪事を働き、戦い、愛の営みをし、結婚し、自分の種を繁殖させ、次第に幻滅や退屈を覚え、病気になり、死に甘んじる——ある夏の午後の間にこれ全部を経験するんだから。平均的な人間は、これより多くのことを特にする

*エル……一エルは四五インチ、約一一四センチメートル。

こともなく、七十歳まで生きることができるわよね。

それから、その虫の中にも背の高いのや、賢くて見栄えのいいのや、その個体特有の強い力と狡猾さを持つのがいる。そういう個体は、ほかの仲間よりも少しだけ速く遠くまで飛ぶことができ、一時間長く生きてほかの生き物の血をもう一滴丸飲みすることができる。でも、それだってそんなに大きな違いはないわ！

そう、時間と空間は、『何もない』とちょうど同じ意味なの。

でもあなたにとつては、やるべきことがたくさんあるのだから、多くの意味を持つ。私たちの共同生活は打ち明けられる必要があるわ——現実よりもはるかに現実的だった、見かけは長くて甘い生活は。ああ！　そのとき私たちにとって、時間や空間はどこにあって、何だったのでしょうか？

だから、あなたは私たちが見つけ出したものとその方法を、全部伝えなければならない。その方法は、私たちよりも優れた脳を持ち、優れた訓練を受けたほかの人たちに示されなければならない。人類にとっての価値——この世とあの世の人類ね——は、計り知れないものになるかもしれない。

• • • • •

いつの日か、地球上で見つけられるものが全部見つかって、すべての人の共有財産になつたとき（あるいはそれ以前でさえ）、たぶん偉大な人が立ち上がり、私たち、この世とあの世のすべての人を解放することになる大いなる推測をするでしょう。どうなるかは分からぬけれど。

その素晴らしい推測者は、音の力についての知識以外は何もかもが小さな子供と同じくらい単純な、かなり靈感を受けやすい未来の音楽家になるような気がするわ。でも、小さな子供たちでさえ、その時代はたくさんのこと学んでいるでしょう。彼は新しい音を求め、それを発見する——黒鍵と白鍵の間に新しい音を。彼はミルトンやホーマーのように目が見えなくなり、ベートーヴェンのように耳が聞こえなく

なる。その後は、すべて静寂と暗闇の中で、また彼のわびしく孤独な魂の深淵の中で、彼は自分にできる最高の音楽を作り、私たちが『Chant du Triste Commensal 「悲しき共生者の歌』』からそうしたように、彼はその対旋律の果てしない迷路から秘密を導き出すけれど、それは私たちのものよりもずっと大きな秘密になつていてるでしょう。ほかの人たちは、この隠された宝物のすぐ近くまで来ていた。でも彼は、それにたまたまぴたりと遭遇し、それを掘り返し、光の中に持ち出ででしよう。

私は、彼が鍵盤楽器に向かって座っているのが見えるような気がするの。彼の熟達した指の感覚にとって、昔からとても慣れ親しんだ楽器に。この上なく忍耐強く献身的な友人——母親、姉妹、娘、妻——に、自分の楽譜を苦しそうに口述しながら。彼が見ることも聞くこともないだろう、その楽譜を。

何という言語障害者！ 目と耳が不自由なだけでなく、気が狂つてもいる——世間の目には狂つているように見え続ける、五十年も、百年も、千年もの間。時間といいうものはない。でも、その楽譜は生き残る……。

もちろん、彼はそれが元で死ぬでしょう。彼が死んで私たちの所に来るとき、ルルからシリウスまでも、またその向こうまでも喜びがあるでしょう。

そしていつの日か、人は、彼がただ耳が聞こえず目が見えないだけだったことを、

地上で発見することでしょう——少しも狂人ではなかつたことも。人は、聞いて理解することでしょう——彼が、それまで誰も聞いたり見たりしなかつたように見たり聞いたりしていたことを知るでしょう！

• • • • •

『播いた種は自分で刈り取る』。これは眞実を言い当てたことわざで、種播きはすべてこの地上で行われ、収穫は向こうで行われる。人間は幼虫。お墓で棺ひつぎに入つて横たわっているときの死んだ肉体は、地上の生活の間に自分で紡いだ脱ぎ捨てられた繭で、自分についてのあらゆる記憶、失われた分さえも含んだ記憶とともに、パツと張り裂けて舞い上がるためのもの。トンボや蝶や蛾みたいに……それらが死ぬときも同じ、草の葉でも同じなの。^{*}私たちは皆、*tous tant que nous sommes* 「私たちは皆」、決して死ぬことのない小さな記憶の袋。それが私たちの存在理由。でも、私たちが共有財に持ち込めるのは、自分が得たものだけ。フランスのおじさんがよく言つていたように。『La plus belle fille au monde ne peut donner que ce qu'elle a.』〔世界でいちばん美しい娘でも、自

*私たちは皆…………原文 We are all, tous tant que nous sommes. 英・仏語で繰り返している。

分が持っているものしか与えられない』』

何よりも、私はあなたの地上の妻です、ゴーゴー——愛情ある忠実で献身的なあなたの妻で、私はそれが知られることを望んでいます。

それからついに、時が満ちて——ほんのわずかの年月でしよう——ああ、そのときは、もう一度、ヌーハはトーキルの手を取つて導くことになるでしょう

「おお、メアリー！」私は叫んだ。「僕たちはもう一度、超越的に幸福になれるのだろうか？　僕らがそうであったのと同じくらい幸福に——より以上に幸福に？」

「ああ、ゴーゴー、人は鼠よりも幸福で、鼠は蕪よりも幸福なのかしら？ でも、どんな人間が鼠や蕪になつたり、あるいはその逆になつたりできるというの？ どんな蕪が白亜の塊になつたり——自分自身以外の何かになつたりできるのかしら？ 二人の人間は一人よりも幸福？ あなたと私は、そうよね。私たちちは一つなのだから。でもほかには誰が幸せに？ それは、誰も彼もみんなよ。幸福は、時間と空間のようなもの——私たちはそれを、自分たちで作つて測定している——大きいも小さいも、お好みのままに。それは対比と比較の問題にすぎないの。健康や力や美やその他の良いものと同じ——それとは逆の悲しい個人的な経験がなかつたら、気づかれることさえなかつたでしょう！——あるいはそれよりもっと大きい幸福がなかつたら！

私はのこと、あなたと私についてのこと以外、知つてることを全部忘れてしまつた。私たちは永遠に離れられない。私たちは、一瞬も立ち返ることを望まなくなるだろうということを信じてほしい。

罰や報酬はないのかって？

おお、そこで再びそんなもの！ 何て些細なことでしょう！ 哀れでちっぽけでいたずら好きな小虫——そういうふうに生まれついた者——それに、いつも正直でいら

れない者ね！——と、やつてみても間違ったことができなかつた哀れでちっぽけで模範的な小虫！ そんなものたちに罪だの報酬だと、手間をかける価値があると思う？ すべての小虫の心の秘密が明らかにされて、ほかのすべての小虫に見られることは、罪あるいは報酬にとつて十分ではないかしら？ 考えてみて！

戦うべき戦いと、勝つための競争があるけれど、お互に對してのはもうない。それに、それらに勝つための力と速さがあるけれど、どんな力も速さももうない。弱さと臆病さがあるけれど、弱虫や臆病者はもういない。善も惡も、最惡も最善も——全部が一緒くたになつてゐる。でもね、善は上に来て、惡は底に行く——沈殿するのよ、パパがよく言つていたように。気持ちのいい沈殿物じやない。あらゆるもののがいちばん底——視界の外、心の外——で、かつては有用だった残酷さとともに、忘れられたも同然の状態で。C'est déjà le ciel. 「それはすでに天国ね」。

そして、ゴールは？ 原因、行く先、そのすべての理由は？ ああ！ ゴーゴー——ずっと不可解で、想像もできないでしょう、偉大なる推測者が出現するまでは！ 愚か者として言わせてもらうと、それは少なくとも、慘めなほど無知な私の理解を超えたもののように思える。だって、私は新参者だし、鎖とロケットを持ってあなたを待っている完全な部外者だから。

私はその海の海岸でわずかな砂粒を拾つただけ——わずかな貝殻も。私はそれらがどんなふうなのか、あなたに示すことさえできない。ああ！ それについて話すことすら無駄なことだつて分かっているのよ。そして、私は固く決心した。

おお！ 私の地上での教育がどれほど無視されたことか！ あなたのもそう。そして、今の私がそれをどう感じているか、言葉で、言葉にすぎないもので話すべきことがたくさんある私が！ もう、私が理解できるわずかなことを言葉であなたに伝えるためには、ごくわずかなことでも——あなたが理解できるように話すためには——、私たちそれが、かつて存在した最高の詩人と最高の数学者を合わせて一つにした者になることを要求するのよ！ 私があなたにどんなに同情していることか、ゴーゴー——あなたの訓練も熟練もしていない無垢なペンで、このすべてを書き留めなけ

ればならないなんて——あなたはやらなければならぬから——、それに、私があなたに伝えるときにしたように、いくら尽くしても足りないような小さな最善を尽くなければならないなんて！ 何て氣の毒な筆記者なのかしら！ 文体も手法も気にせず、心に語らせなければいけないわ！ 何とかして書いて！ 最も必要とされていることと最大多数のために書くの。

でも、これだけは努めて理解しておいて、最善を尽くしても。私が認識できる限りでは、あらゆるものとあらゆる場所は、常に深くなり、常に広がっていく流れであつて、想像も及ばない速さでそれ自身の適正な水準に向かつているようと思える。《完全な場所》に！……常にどんどん近づきつつあるけれど、その場所は見つからないし、幸いこれからも見つかることはないでしょう！

それだけでもう地上の流れとは違つていて、（もし想像できるなら）果てがなく広大で岸のない小川を逆流する新鮮な流れにより近く、それが探し求める水準は源流よりも計り知れないくらい高い所にある。そして、その至る所にあるのは、命、命、命！ それは自らを更新し、倍加させ、その土手のない巨大な川を膨張させ続けている。

そして、その至る所で似たものが似たものを生み出し、少しだけ良くなったり悪くなったりが加わる。少し悪くなつたものは、淀みにたどり着いてそこに居座り、最終

的には底に行つて、それを誰も気にしない。そして、少し良くなつたものは、どんどん改善が進んでいく——人の愚かさや邪悪さがそれを妨げることはできず、その激しい急流をとどめることも、衰えさせることも、後退させることも、一瞬もできない—— *c'est plus fort que nous!* 「それは私たちよりも強い！」……記録はどんどん破られ続け、最高水位線は、地球で到達され得るいちばん高い所までどんどん上がっていく——その後、地球は寒くなり、太陽は消えると思う——かけらにまで分解されるのだけれど、繰り返し使用されるためでしょうね、たぶん！ そして、良いものはやはり暖かい気候とより高いシステムへと飛翔していく。それ自身がもっと良くなるために！ そうやって、より良いものからより良いものへ、より高いものからより高いもののへ、より暖かいものからより暖かいものへ、より大きなものからより大きなものへ——いつまでも、いつまでも、いつまでも！

でもね、あらゆるもののが究極的な最高点、絶対的な善や高み、絶対的な知恵、絶対的な全能性、そこを超えるとそれ以上は何も存在せず、何も存在できないような地点には、決して到達されないでしょう——そんなものはないのだから。それらは抽象概念ね。さらに言えば、成就は休息を意味し、休息は停滞を、停滞はすべての終わりを意味する！ 終わりはないし、あり得ない——時間に終わりではなく、その中で行われる

るすべてのことにも終わりはない——空間に終わりはなく、それを満たすすべてのものにも終わりはない。でなければ、すべてが山をなして集まつてきて、途中で潰れてしまうでしょう——途中がないのよ!——終わりはなく、始まりもなく、途中もない! 途中はないのよ、ゴーゴー! それを考えて! それはすべての中でもいちばん想像も及ばないことだわ!!!

だから、シェイクスピアとあなたと私の存在意義なんか、誰が言うでしょう——無限の鎖の小さな輪、それはあんまり小さすぎて、シェイクスピアでさえ私たちより大きいわけじゃない! 私たちのほんのちょっと後ろは、私たちが祖先とする全身消化器官のあの小さなくねくねした透明なものなの。私たち自身よりもはるかに先だけれど、私たちから続く長い血縁の直系に、絶えず成長している、意識を持った『力』があるて、それはあまりに強く、喜ばしく、単純で、賢く、優しく、恵み深いために、私たちができることは、今でさえ、恥ずかしさを感じて膝を屈して額を下げ、驚異、希望、愛、柔らかくおののく恐怖などで心をいっぱいにすることくらいしかない。そして、まだ生まれていない、想像しにくい、めったにもうけられない『子』として崇める——私たちが『父』として崇めるよういつも教えられてきたものを——今ではなく、これらそうなるはずの『それ』を——曖昧な未来において私たち全員が共有し、本質的な

部分となるだろう『それ』を——無限の宇宙の至る所で、ゆっくりと、確実に、苦労して、私たちと私たちに似たものから『それ自身』を編んでいた『それ』を。そして『それ』の到来は、私たち自身のゆっくりと、確実に、苦労して覚醒する魂の上にその影が差すことによって、私たちはかすかに予言することしかできない！』

• • • • •

それから彼女は地上の物事について話し、以前の実用的なやり方での質問に進んだ。私の肉体的健康の話の最初には、この上ない優しい心配と賢明な助言——母親が息子にするような——を伴った。彼女は医者のように、私の心音を聞くことさえ主張した。

その後、彼女は関心を持っていた複数の慈善団体について長々と話し、彼女が最善の注意を払つて私に印象づけた名前と住所を持つ特定の人々に対し、私が手紙を、私自身が思いついたかのように書けるよう多くの指示を与えた。

私は彼女の望みどおりにして、その指示のほとんどを忠実に守つたが、そのような賢明で有用な改革が犯罪者用精神病院の囚人に端を発するということに、（世間がよく知っている）その世界の方では少なからず驚きがあつた。

とうとう別れの時が来た。彼女は、私が数分以内に目覚めなければならぬと予測し、立ち上がりながら言つた――

「それじゃ、ゴーゴー、

この世での最愛の人、あなたの懐かしい腕に
もう一度私を抱いて、
しばらくの間のお別れ
のキスをして――アウ
フ・ヴィーダーゼーエ
ン。あなたの体が眠る
ときは、休息し、考
え、思い出すためにこ
こに来て。私の心はい



「さようなら！」

つもあなたとともにここにある。私自身もまた戻ってくることができるかも知れない——この貧弱な抜け殻だけ——古い衣類の束以上に見るべきものはないでしようけれど。それでも、世界はあなたへの愛でできている。さようなら、さようなら、最愛の、最高の人。時間というものはない、でも、私は時間を数えるでしょう。さようなら……」

彼女が私を自分の胸に抱き締めると同時に、私は目覚めた。

私は覺醒し、憂鬱の恐ろしい黒い影が、忌まわしい惡夢のように——長く恐ろしい冬のように——自分から消え去っているのを知った。私の心は春の陽光で満ちていた——新しい人生に目覚めた喜びで。

私は夜の付添人に微笑みかけ、彼はびっくりして私を見つめ返し、こう叫んだ——。「何と、サー、完全に新しい人間になったとしか思えません。今そこで！」

私は彼の手を握り締め、彼のこれまでの忍耐、優しさ、彼を泣かせてしまつたほどひどかつた感情の暴発に対する寛容ぶりに感謝した。私は何週間も話をしていたなかつ

たので、彼は私の声をここで初めて聞いたのだった。

その日はまた、私はどんな前置きも証明もせず、二度と自殺しようとしたり他人を殺そうとしたりしないことを医者と教諭師と院長に誓い、すぐにその場で信じられ、信用された。そして拘束具が外された。

生涯でこれほど感動したことはなかつた。

一週間で体力のほとんどは回復した。しかし、私は老人になつていた。それは大きな変化であった。

大半の人は徐々に、気づかれないほどかすかに年を取るものだ。私には、老いが突然やつて来たのだつた——いわば、一夜のうちに、である。しかしそれとともに、従順で快活な黙諾^{もくだく}、穏やかな静けさなどが、これも突然に訪れ、それが代償となり、またそれ以上のものとなつた。

いつの日かメアリーと一つになるという私の希望と確信——それは、私の避難所、私の天国——それ以上は望むべきものも想像すべきものもない、完全性の成就である。ほかに何が起ころうと、それは確実で、私が大事に思うのはそれだけだ。彼女は私と、さらにほかの多くのことも大事にすることができたが、私はそのためにはそつとう彼女を愛している。しかし、私の方は彼女しか大事に思うことができない。

遅かれ早かれ——一年か——十年か。それはあまり問題ではない。私もまた、時間の存在が信用できなくなり始めている。

あの覚醒は、生涯で最もうれしい出来事だった——死刑判決後の朝、死刑囚監房で目覚め、別の黒い影——断頭台のそれである——が去ったときよりも、はるかにうれしかつた。

おお、メアリー！ 彼女が私のためにしなかつたことがあるうか——彼女が払いのけなかつた雲があつただろうか！

夜が再びやつて來たとき、私はもう一度、ラ・ミュエット門からオートゥイユの池までの行程を、一步一歩、何もかも同じようにして、もう一度歩いてみた——陽気な結婚披露宴、青と銀を身に着けた伝書使、愉快な客たちの歌。

"Il était un petit navire."

「小さな船がありました」

変わつたものは何もなく、鈍い灰色の空模様さえそのままだつた。だが、おお、私に

とつては違つていたのだ！

私は、貸馬車の御者たちとブションで、昔の級友たちとバル・オ・カンで遊びたかった。ラルティーラ氏およびカザールの息子とワルツを踊ることさえできただろう。

私はマネットおばさんの店の小さな鏡をのぞき込み、やつれて、青白く、目や頬が落ちくぼんだ、年老いた顔をもう一度見た。私はそれを好ましく感じ、かなり見た目がよいと思った。私はやはり疲れていたが、この上なく快い疲労だった。以前のあの夜にしたように、私は城壁のそばに座つて休息した。自分のひどいみすぼらしさを受け入れることができた—— *pauvre, mais honnête* 「貧しいけれども正直な」。囚人で狂人だけれども男の中の男——まだメアリーの恋人！

そして、子供の頃に初めて見て以来、地上でいつも最高に愛していた地点についてに到達したとき、私はひざまずき、純然たる歓喜過剰のために涙を流した。それは確かに私のものだった。地面や水が以前は誰のものでもなかつたように、それは私のものだつた。

当然、メアリーはそこにはいなかつた。私は彼女を期待していなかつた。

しかし、奇妙で理解しがたいように思われたことだが、彼女は自分の手袋を忘れていたのだ。彼女は自分の後ろにそれを置いていった。一つはベンチの上に、もう一つ

は地面の上にあつた。繕われた粗末な古手袋で、それには彼女の親愛なる手のよく知っている形が残っていた。いずれも、折り目と皺が型の中にあつたよう保たれていた——まさに彼女の指爪の型だ。彼女とその母親がとても愛した白檀の香りも。

私はそれらを、前の夜に二人で座ったベンチの上に、手のひらを上にして並べて置いた。夢の風がそれらを吹き飛ばすことはなかつたし、夢の泥棒が盗んでいくこともなかつた。それはまだそこにあり、私に大きな変化が訪れ、その持ち主と私が一つになるまでは、そのまま置かれていることだろう。

• • • • •

私は毎晩そこに行く——快い春か秋の陽光の中——瞑想し、回想し、メモを取る——暗記されるための夢の記録で、翌日、本当の目的のために使うのだ。

私はぶらぶらと歩き回つたり、ベンチに座つたり、水辺の草地で横になつたりして、果てしなくタバコを吸い、半世紀前にすごく魅力的であることに気づいた懐かしい両生類を見て、それが相変わらず魅力的だと気づく。

時には森に突入したりもする（今の森は徹底的に切り開かれている。一八七〇年以

来ずっと、オートウイユの池全周囲に空き地がある。そのとき以来、私はメアリーとの夢の中でそれを見てきた。彼女は終戦後のパリに行き、昼間、二人の心にとつて非常に大切なすべての場所への巡礼に夢中になつたが、それらはひどく変わつていた。夜が来ると、巡礼仲間の私とともにもう一度巡つた。それは私たち両者にとつて悲しい幻滅となつた)。

私が非常に多くの時間を過ごした私のオートウイユの池は、ルイ・フィリップのオートウイユの池であり、時々、一八三九年と一八四六年の間に起こつてくるであろうわずかな変化を除いては、不変である。壊れて修理されたベンチ、幹線道路沿いに築かれた新しい障壁、縁が崩れた小さな木の堤。



「私は毎晩そこに行く」

そして、その横と後ろの茂みは何マイルにもわ

たつて暗く濃く、たくさんのがれ木々と、絡み合つた豊かな下生えがある。

その迷宮には、見つけにくい巨大なオークがある（現在のそれは、世界から見えるよう開けた所に一本だけで立つており、オートウイユ競馬場の飾りとなつてゐる）。子供の頃、ミムジーやほかの子たちと一緒に、よくその木によじ登つたものだつた。今私のでは登れないが、その陰の草に寝そべり、そこで自分の夢を見て、全周囲を香りや見通せないほどの緑に取り囲まれるのは大好きだ。付き合う仲間として、鳥、蜂、蝶、トンボ、奇妙な甲虫、明るい目をした小さな野ネズミ、しなやかなまだら模様の蛇、かわいらしい茶色のリス、美しい緑の蜥蜴。時々、穏やかなノロジカの雄がやって来て、怖がりもせずに私のそばで食事をし、モグラが小さな土の山を投げ上げ、戸外運動をする。

実に魅力的な独居である。

日中、悲しいイギリス刑務所内の、狂つた我が同僚たちの間ですっかり目を覚ましたとき、何マイルも何年も離れた私の夜ごとの陰の多いフランスの独居生活が、今ではありきたりの、何の装飾もない、広く草深い平原以外、旗で飾られた特別観覧席からいかに見落とされているかを考えることは、私を楽しませた。例えば日曜日——た

ぶん大きな競馬が行われているだらう——、パリじゅうの人間がそこに来る、金持ちも貧乏人も。赤ズボンの小さな兵士たちや、青ズボンの大きな憲兵たちが、道を通りよう保つ。太陽が輝き、三色旗がはためき、陽気で親しみある言語が夏のそよ風を音楽的なものにする。あえて言えば、それは皆とても明るく活発なのだが、至る所で馬券業者の下品な騒音が響きわたり、空気は、ほこりと、臭いのきついタバコおよびもみ合っているフランス人の強い体臭が混ざった悪臭とて満ちている。荒涼としたエッフェル塔が、宴会を見下ろす骸骨のように、空からパリのすべてを見下ろしている（少なくとも、私はそのように聞いている）。

その後、夕暮れが来ると、群衆は離れてしまう。徒歩で、馬で、自転車や三輪自転車で、あらゆる種類の馬車で。近くのオートウェイユ駅から *chemin de fer de ceinture* 「鉄道環状線」を利用する者はたくさんいる……すべてが静かになり、ガランとして、活気がなくなる。

それから、静かな夜がとぼりのよう下りてきて、その友好的な覆いの下、奇妙な変容現象がそれ自身にも素早く効果をもたらし、私のための準備がすべて整う。特別観覧席は蒸発し、鉄道駅は薄い空気に溶け込んでなくなる。電飾付きのエッフェル塔はもはやない！ 五十年前の美しい森が突然地面から立ち上り、かつてそこに住んで

いた野生の生き物すべてが、その快活な生命を再び目覚めさせる。

過去のフランスの森にある静かで深い古池が、そのような思い出で清められる！何がこれより魅力的であり得るだろう？　おお、たちまちのうちに安堵をもたらす、柔らかく甘美なる郷愁よ！

まろやかな太陽が、過ぎし日々の光が、天の定められた場所——注文に応じて、天頂、あるいは東か西——に現れ、南から弱い風が吹いてくる——何もかもが適切に消毒され、暖かく明るく快適なものにされる——そして、見よ！　昔のピーター・イベットスンがその場面に現れる、続く八時間に彼が調査するものすべての絶対君主が——論争する権利を持つ者は誰もいない、文字どおりの絶対君主が。

私は、通常そこで騒々しい集まりは促さないし、池のそばも同じである。甘美な場所をほぼ独り占めしたいのだ。このことに利己主義はない。私は實際には誰からも奪っていながらある。今そこに来る人は皆、五十年近く昔のそこを訪れているの

*私はそのように聞いている……エツフェル塔は一八八七年着工一八八九年完成なので、一八六〇年頃からずつと投獄中であるピーターは実物を見ていらない。また、メアリーの生没年ははつきりしないが、一八三四年生まれと推定できるピーターと同一の年だとすると、五十三歳での死亡は一八八七年となるので、彼女の目を通しても見ていないことになる。

であり、そのことを知らない。彼らは全員、ずっと昔に死んでいるに違いない。

時にそれは、ルイ・フィリップの青と銀の制服を着て、黒いパイプ、ゲートル、昔のフリントロック式の銃、刺繡のある獲物袋を持った *garde champêtre* 「田園監視員」だ。彼は風景の中でうまくやっている。

時にそれは、見た目がよく行儀がよいならば、一組の恋人たちであり、そうでなければ、サンドー校から—— *la raié* 「縞模様の」——ガーター飛ばし遊びをしに来た少年たちである。

時にそれは、自分の『聖務日課書』を穏やかに調べつつ、ゆっくりとした思慮深い歩みでぐるぐる歩き回つて

いる司祭様だ。今の私は、

半世紀分の人生経験の観点から、彼の落ち着いた情け深い顔を読むことができ、小さな少年だった頃に強い反感を覚えた、静かで黒くて瞑想的な側面を、愛する



「この世界は私たち両者にとって十分大きい」

ことを身に付けた——彼は小さな異端者を焼き殺すような人間ではない！ この世界は私たち両者にとつて十分大きい——来世もそうだ！ そして、彼はそれを知つている。いずれにしても、今は！

時には、プレンダーガスト家の二人ないし三人さえ認められた。結局のところ、彼らはそれほど悪くはないのである。そうは思えないかもしれないが、彼らには欠点という美点があったのだ。

しかし、かなり多くの場合、昔の愛する影たちが、漁網ぎょもうと不屈の精神を持ち、彼らの英仏言葉を響かせながら到着する——チャーリー、アルフレッド、マッジ、残りの者、それから歯を見せて吠えながら旋回するメドール。彼は石を追つて水に飛び込む。おお、彼らを見たり聞いたりすることは、私の心に何と良い効果をもたらすことだろう！

彼らは私をして祖父のように感じさせる。少佐殿でさえ私より若い——彼の口ひげは私のよりも白くないのだ。彼は私の頸くらいの高さしかない。それでも私は彼のことは相変わらず見上げるし、小さな子供の頃同様彼を愛し、崇拜しているのだ。

それに、セラスキア医師！ 私は、彼と彼が見ているものの間に自分の身を置く。そうすると、彼は私をまっすぐ見ているように思える。しかし、当然のことながら、

彼はずっと遠くを見るまなざしだった。今は、何かが彼を楽しませ、彼は微笑み、その目は皺になっていたが、それは彼の娘が一人前の女性になつたときよくそくなつていたのと同じで、またその顔は天使のように威厳のある顔になつてゐるが、これも娘のそれと同じである。

L'ange du sourire! 「微笑みの天使！」

そして、活発さとはしゃぐような笑いと絶えることのない上機嫌さを備えた、陽気で若くて快活な我が父！ 彼、かの美男子パスキエは、今の私にとつては少年のようなものだ！ 彼は自分の発明である新しい投石器を持っていた。それをポケットから引っ張り出すと、石を高々と木のてっぺんまで飛ばし、また見えないくらい遠くまで飛ばし——自分自身とほかの全員の楽しみのために——、そして石が落ちる場所についてあまり気にしないのである。

私の母は、今は私の娘にてもいいくらい若い。私が今この彼女を愛しているのは、娘として、魅力的で優しくて美しい娘として——神々しくヨーデルを歌い、石を投石器で飛ばし、——*beau comme le jour* [輝くばかりに美しい]——孫を私に贈ってくれた、長身でハンサムな夫と幸福な結婚をした娘として、なのである。ピーター・イベットスンがその人生でどんなふうになつていようと、小さなゴーゴー・パスキエの稀に見

る容姿の良さを否定するものは何もないのだから。

そして、ミムジーはまさに子供の天使だ！ 少佐殿はまったく間違っていない。

「Elle a toutes les intelligences de la tête et du cœur! Vous verrez un jour, quand çaira mieux, vous verrez! [♪]の子は、頭も心もすっかり知性でいっぱいです！ いつか健康になる日が来ます！ 見てて♪らんなさい！」

その日はずっと前に来て、そして去っていった。今ではそのすべてを簡単に見ることができる——少佐殿の目を持つことも。

ああ、かわいそうな小さなミムジー、髪を短く刈り込んだ頭、青白い顔、長く細い腕と脚、眞面目で優しそうで輝く目を持ち、まだ笑い方を知らなかつた。彼女は私にとつて何という存在なのか!!!!

それに、若さの盛り、神々しい美の輝き、そのすべてのさ中にいるセラスキア夫人！女性の中の、選ばれた百合——メアリーの母君！

柳のそばの古いベンチに座り、近くに彼女の娘の手袋がある。時々（些細な、ほとんど喜劇的な詳細！）、彼女は本当にそれらの上に座つているように見え、私にとかの間悲しみを感じさせる。しかし、彼女が去るとき、それらは変わらずそこにあり、少しも潰されていない——私が今世^{こんせ}と来世であらゆるものを見ついている寛大な手

の、その美しい貴重な型は。

私は自分の旧家には二度と行かなかつた。大通りの光景が怖いのだ。「パルワ・セド・アプタ」も直視できない。

•
•
•
•
•
•
•
•
•

しかし、メアリーとはその後も会つた——七回。

来るたびに彼女は本を持ってきた。私たちが子供の頃に読んだバイロンのように、緑のモロッコ革で装丁された金縁のもの、グレイの『哀歌』『ホーエンリンデンの戦い』やカニンガムの『田園詩』をフランス語に訳すのに使つた『雅文抜粹集』のような赤いモロッコ革のもの。

そういう装丁が、彼女のお気に入りなのだ！

しかし、これらの本の中身は非常に違つてゐる。それらは暗号で印刷されており、

その言語は夢の中でしか理解することができない。興味深さや重要性という点で、夢の中で私が読んだものに迫る現行の本は、私は、あるいはほかの者も、かつて読んだことがなかつた。それは七冊ある。

それを読むとき、私は自問する。目覚めたとき、これを覚えていないのは、結局はたぶん良いことなのだろう！ と。

というのも、私は軽率で思慮が足りないし、言い過ぎるか言葉が足りないかのどちらかになるだろうからだ。それに、世界は私を通じて静止してしまうかも知れない。メリヤーが言ったように、生きる重荷に耐えられそうにないからだ！ それはだめだ！ 世界は、偉大な推測者を待つことに満足しなければならない！

こういうわけで、私の唇は封印されている。

私が知っているのはこれだけだ。すべてのことが私たち全員にとつて良くなるだろう、そして、月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するだろう。

• • • • •

このように、私は自分の能力の最善を尽くして、私の二つの人生とメリヤーのそれ

を説明するよう奮闘してきた。私たちは、私たちの間で三つの人生を生きたのだ——一体となつた三つの人生を。

出来映えは貧弱なもの、これは幸福な仕事であつたし、その出来映えの状態もひつくるめて非常に満足のいくものであつた。

犯罪者用精神病院の独房！ それは至福の地エリュシオンの木陰のようにには聞こえない！ それは私のためにあり、あつたものである。

私の内面的生活を照らし、温めてくれた太陽以外にも、私は、所長以下ここにいるすべての人に親切と同情と思いやりをもつて接してもらい、言い表せないような感謝で溢れている。

私の良き友人である医者、教誨師、司祭——最も善良で親切な人々だ——には、とりわけ感謝している。それぞれが天国・地上・その下の世界のすべてのものについてはつきりした考え方を持っていて、それぞれがほかの二人とはまったく相容れない考え方なのだ！

そんな彼らが、あまり確信を持てないでいることが一つだけあって、それは私が狂つてているのか正気なのかということである。

そして、一つだけ——彼らが同意することが一つだけある。それはすなわち、狂人

だろうが正気だろうが、私は見いだされていない偉大な天才だということだ！

私の小さなスケッチは、無彩色でも彩色でも、彼らを称賛と陶酔でいっぱいにする。その大胆さ、すらすらと描く容易さ、出来映え。その主題選びに對する圧倒的な豊富さ。その過去の、歴史上の、その他的情景の構想と描写における並外れた現実性。その建築、人物、服装、その他についての驚異的な知識。その地方色——全部、まるで本当にそこに行つて見てきたかのようだ！

自分の名声が刑務所の壁を超えて広がらないようにしておくのに、私は極めて困難な思いをしている。私の謙虚さは、私の才能と同じくらい大きいのだ！

そう、私はこの偉大な天才が、今すぐに見いだされることは望んでいない。これはすべて、さらに偉大な天才たちの作品の助けとなり、それを説明し、引き立てる目的に當てられるべきである。私の作品がかつて得たインスピレーションはすべて、彼らの作品から引き出してきたのだ。

目の前にある素晴らしい楽しい仕事。それは、あのおびただしい量の、急いで書かれたメアリーの回想録を、解明し、翻訳し、整理することだ。それはすべて夢の中で私たちが一緒に発明した暗号で書かれている——一旦鍵を手に入れてしまえば、あなたでも実に解きやすい暗号なのだ！

少なくとも五年はかかりそなうだが、推測なしで思うのは、私が自分で感じるとおりに強壯かつ活発で、詩篇作者の年齢からはまだまだ遠いことが期待できるということだ。

まず第一にしようと思うのは



Peter Hutton del. et J.

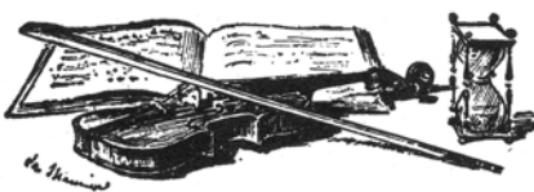
*注——私の哀れないとこの回想録はここで終わつて
います。まだペンを持ったまま、未完成の原稿の
上に頭を垂れ、脳溢血(のういつけつ)で死んでいるのが発見され
ました。原稿の余白に、石をいっぱいに積載した
おもちゃの手押し車を開いたドアから別のドアへ
と転がしている小さな少年を、ちょうどスケッチ
したところでした。一方のドアには *Passe* 「過去」、
もう一方には *Avenir* 「未来」 という貼り紙が付いて
います。

長い海外生活を過ごした後、私は彼の死亡が発生した頃にイギリスに着いたのでしたが、生きている彼を見るには遅すぎました。私は、彼とその晩年についてのことを見たくなりました。職務で彼と接することになった人々は皆、尊敬に似た敬意の念で彼を見ていました。

棺の中の彼を見て、私はもの悲しい満足感に打たれました。彼が十二歳のとき以来、私は彼と会つていなかつたのです。

そこに横たわっていたとき、その静止した身長と横幅から、彼は巨人のように見えました——かつて私が見た中で最も壮大な人間のようだ。そして、彼の死に顔の輝きは、生涯私の脳裏を去ることはあるまいと思われました。

マッジ・プランケット。



解説に代えて

ダフニ・デュ・モリエイによる『ピーター・イベットスン』への序文

家族や友人に「キッキー」と呼ばれたジョージ・デュ・モリエイは、一八三四四年三月六日にパリで生まれた。父親のルイ・マチュラン・ビュッソン・デュ・モリエイは、ガラス彫刻師ロベール・マチュラン・ビュッソンの息子で、そのロベールはフランス革命のごく初期にパリを離れていた。アンシャン・レジームを重んじていたからではない。彼は債権者たちに追われており、未知の地であるロンドンで新たに人生を始めることを望んでいたからであった。彼は「デュ・モリエイ」のという接尾辞が、イギリス人の間での地位を与えてくれると信じていた——これは家のガラス工場の近く、彼が生まれたトゥレーヌの農家の名前であった。ところが、ロンドンの職人仲間は感銘を受けない今まで、その *émigré* 「移民」は、気づけば一七九八年、ロング・エーカーの倉庫に侵入した罪により、キングス・ベンチ刑務所で八か月の刑期を務めていた。彼は一八〇二年、ロンドンに若い妻と家族を残し、アミアンの和約後のフランスに戻つ

た。しかし、あつという間にフランスとイギリスの間で新たに戦争が勃発し、ロベル・ビュッソンは妻や子供たちと再び会うことも、連絡を取り合うこともなく終わった。彼は一八一年に亡くなつたが、そのときはもうガラス彫刻師ではなく、兄弟のピエールとトゥールに設立した *maison d'instruction* 「寄宿学校」の学校長であつた。

彼の息子、ルイ＝マチュランは、ロンドンで育ち、ほかの *émigrés* 「移民」の息子たちと一緒にかの有名なアッベ・カロンの教育を受け、フランス復古王政に際し同胞の後を追つて祖国に赴いた。父親同様、ルイ＝マチュランも、天才的ひらめき、と言つても残念ながらひらめき以上のものにはならなかつたが、そのような才を持つた魅力的な無責任人間の一人であつた。彼は天使のように歌つたが、その声は舞台やオペラのためには強靭さが不足していた。彼は独創的で奇妙な機械を発明したが、何らかの欠陥やその他の理由のために機能しなかつた。彼は投機についての魔術師的な能力を持つていたが、いわば髪の毛一本の差で富を蓄え損なつた。彼は、あまりにプライドが高く、あまりに愉快な無能者だったため生計を立てることができず、お金を貸してくれるくらいは彼のことが好きな者から借金をすることで満足していた。友人たちが難しいと分かったときでも、常に彼の妻の年金、ある王子からの口止め料があつたのである。

一八三三年、パリで彼と結婚したエレン・クラークは、一時期ヨーク公爵の愛人で、庶民院の証人喚問席で自分の王族の恋人に不利な証言をし、彼に不名誉をもたらしたことで悪名高いメアリー・アン・クラークの娘であった。捜査は、ルイ・マチュランがエレンと結婚した頃にはとっくに片付いていた。世間の注目を浴びていた当時、彼女は子供だったが、その経験は彼女に腐食性の小さな酸味を残していた。自分の母親がロンドンの路上で嘲られているのを見たりするのを聞いたり、数年後、キングス・ベンチ刑務所に連行されたりするのを見たりするのは、あまり気持ちのよいものではなかつたのであらう。このようにして、中年期に『ピーター・イベットソン』を書くことになるジョージ・デュ・モリエイは、祖父母については、フランス男性とイギリス女性の二人の人間が、異なる時期に何か月も同じ刑務所に留置されるということになっていたのである——彼はほぼ確実に知らなかつた事実なのだが、それでも何らかの奇妙で無意識的な影響力が働いていたに違いない。彼をして終身刑を宣告された男を主人公に選ばしめたのは、單なる偶然ではなかつた。

キッキーは、幸福な少年だった——あるいは、自分ではそう信じていた。五十年後、『ピーター・イベットソン』において、自分の子供時代のこと、また前帝国時代のパリの香りと音のこと、すなわち丸石の上の車輪のガラガラいう音、鞭の鋭い音、ポン

通りの隅の白いほこり、満開の栗の木——暖かな春の空氣中に漂う焼けたパンやブラックコーヒー やタバコの匂いさえ——などを、書いたときには。彼の小説のページから立ち上つてくるこれらは、我々とその先祖たちが知り、経験し、見たことで、忘れられたものは何もなく、ただすべてのイメージは、写真のように、我々の潜在意識に永遠に印刷されているのだということを証明している。

長男のキッキーと弟のユージン（ジギー）は、一人ともパリで教育を受けた。その期間、彼らの無一文の父ルイ・マチュランは、発明したランプの特許を取得しようと努めていたが、それはあるとき爆発してほとんど粉々になつた。その冒險的事業が失敗したため、彼は妻の兄弟ジョージ・クラークを、ロンドンで彼と共に事業をするよう説得した。それは世界中の港から海藻を除去するというアイディアだった。当然のことながら、この企ては無に帰したが、ルイ・マチュランは、いつか自分と家族に幸運をもたらすという幸福な期待のうちにペントンヴィル近くの実験室で身を立てた。彼は、学士号を取得し損なつたばかりの長男を呼び寄せた。不承不承のキッキーは愛するパリから重い足取りでそちらに向かい、父親のもとで化学を学び始めた。それはキッキーには少しも素質のない学科だった。屈託のない子供は、痩せた、かなり物思いに沈んだ若者に成長し、封筒の裏に美しい女性の頭部を絶えず描いていたが、一八五六年

の夏に父親が急死したときには、彼は父親とちょうど同じような、もう一人の不運な夢想家になっていたのかもしれない。そのとき二十二歳のキッキーは、未亡人となつた母と弟・妹たちの唯一の希望であつた。彼らのたつた一つの衣食の道は、とっくに亡くなつてゐるヨーク公爵の管財人から依然として定期的に支払われてゐる年金だけだつた。

キッキーは、母親を説得して芸術を学ぶためにパリに行く許可をもらい、続く十八か月の間、線画に長時間熱心に取り組みましたが、カルチエ・ラタンの一学生としてのんきな生活を送り、彼が後に第二の小説『トリルビー』で描いたような楽しい日々を過ごした。この楽しい生活は、彼が偉大な画家に成長するのに十分なほど長く続く可能性もあつたけれども、一八五八年に人生の悲劇が起つた。左目の視力を失つたのである。しばらくの間、彼はそれが両目とも視力を失わせてしまうのではないかと恐れた。それに続く苦悶と悲嘆の数か月間は、三番目の小説『火星人』に描かれている。彼は、友人とアトリエを共有していたアントワープから、マリーヌの小さな町に引っ越した。しばらくの間、彼は自分を襲つた打撃から立ち直れないと感じ、自殺の暗い考えさえ抱いた。彼と一緒になるために出でてきた母親も、慰めを与えることはできなかつた。お金もない。当時フランス軍の伍長であつた弟のジギーは、常に心配の

種であった——父親と同じく、またその前の *émigré* 「移民」の祖父もそうだったのだが、いつも借金を抱えていたのである。妹のイソベルは十九歳の美しい娘になつていて、夫を自分で見つけられるまでは彼女にも支援が必要だった。家族の支柱になることを望んでいたキッキーは、そのとき自分が家族の最大の負担になつたように思われた。その後、奇跡のように彼の運は好転した。デュッセルドルフ近くのグラーフラーーの眼科医が、何百人の失明に近い人々を治療したと伝えられ、キッキーと母親は湧き上がる希望を胸にドイツへと赴いた。

眼科医は、左目の視力を回復させることはできなかつたものの、用心すれば右目は一生正常なままでいられるることを請け合つた。キッキーの生来の楽天主義が甦り、——さらには——当のデュッセルドルフに線画の学校が存在したのである。彼と母親は、すぐにデュッセルドルフの快活な社会に飛び込み、イソベルも彼らに加わるためにやつて來た。

一八六〇年の春、彼らはカルチエ・ラタンからの友人、現在はロンドンで働いているトム・アームストロングの訪問を受けた。トム・アームストロングは、キッキーに対してまったく遠慮がなかつた。彼は、君は漂流に身を任せているが、ドイツの地方都市では二流の芸術家で終わるだろう、と告げた。彼はキッキーに、『パンチ』やそ

の他の週刊新聞の編集者を紹介するからロンドンに行くよう熱心に促した。もし君が鉛筆で生計を立てたいのなら、ロンドンはその出発点になる、と。

キッキーは同意した。母に養われるのではなく、母を養うときだった。一八六〇年五月、彼は母の年金から十ポンドを借りて、トム・アームストロングとワイトウイック氏ならびにワイトウイック嬢の同行で、ロンドンに向けて出発した——後者はイスベルの元学友で、彼がすでに半ば恋していた女性であった。彼は、ニューマン・ストリートの下宿を自分で見つけた。そこは（彼は気づいていなかつたが）、彼のガラス彫刻師の祖父、ロバール・ビュッソン・デュ・モリエイが約六十年前に *émigré* 「移民」として住んでいたクリーヴランド・ロウの家の、ほとんど隣家も同然であった。

その若い芸術家は、程なく、広く読まれている『パンチ』の編集者マーク・レモンに紹介してもらうことに成功した。その後すぐに、左下隅に「D・M」、後には「D U・M」というサインを伴う彼のスケッチが定期的に掲載され始めた。キッキーに、名声を得る時期が到来していた。待っている時間は終わったのだ。成功への疑惑、財政や不健康さや孤独への懸念は過去のものだった。続く数年間、依然としてストレスやフラストレーションの時期を思い知ることにはなつたものの、彼は自分への自信と、一八六三年一月三日にエマ・ワイトウイックを妻とする将来とを十分に確信していた。

彼らは申し分なく幸福で、全結婚生活を通じてそうであった。ある共通の友人は、後年、この夫婦についてこう語っている。

「デュ・モリエイは決して強健な人ではなかつたけれども、計り知れない力強さのようなものを持つていて、接触するすべての人には希望、活力、楽しさを発散する魅力ある人々のうちの一人でした。彼を一語で要約するなら——喜びに溢れた人、となります。私が彼を知っていた当時、彼は少しも裕福ではなく、家族も増えつつありましたが、彼はあの時代の妻たち、家族や夫のために生きる女性たちの一人と結婚していました。彼女は、彼女の時代としては最も美しい人の一人でした。その彫像のような美しさから、夫は靈感を引き出し、『パンチ』の絵において何度も繰り返し彼女を不朽のものにしたのです。彼女は豊かできれいな黒髪の持ち主で、当時、よく黄色いリボンを髪の中に巻いて魅惑的な効果を出していました。デュ・モリエイ夫人が座つて縫い物をし、子供たちが押さえつけられることなく床で遊んでいる間、デュ・モリエイが絵を描いているのを見ることは、私にとって常に変わらぬ喜びでした」

キッキーの優美な線画は『パンチ』内ですぐに最もよく知られたページになり、彼はほかの人気のある大衆向け刊行物にも寄稿し——『ワنس・ア・ウイーク』や『コーンヒル』のような——、さらには、当時の人気作家たちから、特にギャスケル夫人の

作品の挿絵画家として、引く手あまたになつた。デュ・モリエイ一家はあらゆる場所に行き、ロンドンの芸術的・社会的に重要なすべての人物と会つた。フレデリック・レイトン、ミレー、ウイリアム・モリス、バーン＝ジョーンズ、ホイッスラー。(キッキーは、もともとパリの芸術を学ぶ学生時代のホイッスラーを知つており、ロンドンでの初期の日々には彼とアトリエをシェアしていた)

一八七四年、キッキーはハムステッドのニュー・グローヴ・ハウスを長期契約で借り、そこは続く二十年間にわたつて彼の家となり、彼と、成長期の五人の子供たちに大いに愛された。彼は友人たちによく言つていた。ハムステッド・ヒースはパッシーと自分の子供時代を思い出させると、またその木々はブローニュの森の木々と同じようく密集して生えていると、さらにレグ・オ・マトンの池は小さい頃にオタマジャクシを釣つたオートウイユの池と同じ形であると。彼は、子供たちや巨大なセントバーナード犬チャンを連れ、荒れ地を長時間散策し、その後アトリエに戻つて彼らにモデルとしてポーズを取らせたが、子供たちはいつでもかなり早くモデルを務めてくれた。夏季休暇はウイットビーか、海峡を渡つてディエップで過ごされ、その小旅行の結果はすぐに『パンチ』のページで見られることになつた。常に妻に付き添われる、充実した、非常に幸福な生活で、唯一の不安は右目の視力を失うのではないかということ

だけだった。もしそうなつたら、家族をどう養えぱいいのか？　盲人に何ができるのだろう？

キッキーは、時々文字での執筆を試みていたが、真剣なものではなかった。たまに走り書きをしたが、それは自分で楽しむためのもので、たいていは昔のパリでの日々についての断片であつた。当時の彼にはこんなことが頭に浮かんでいた——自分は五十六歳で、長男は軍隊に入り、二人の娘は結婚した——自分の思い出から物語を編み上げ、挿絵を入れることができるのでないか——ひょっとしたら——それを出版したいと思うような気前のいい出版社があるかもしれない。彼は練習帳を見つけて考えを書き留め始めた。物語のためのアイディアは絶えず心に浮かんでいたが、いざそれを実際に紙の上に書きつけてみると、彼にはそれが簡単なものに、ほとんど簡単すぎるもののように思われた。実際、後に誰かがそれを表現したように、彼は危険なほどすらすらと書いた。言葉が彼のペンから溢れ出たのだ。

ニュー・グローヴ・ハウスのアトリエの机に向かい、足元にはチャンがいて、妻のエマ（ペム）が向かいの椅子で縫い物をし、末娘のメイがピアノを弾いている。まるで突然ポンプ通りの家にまた戻ってきたかのようだつた。生きている父母。母の、悲しげでとても美しい姉妹メアリーが彼らを訪ねてやって来る。小さな男の子の手を引

いて。そして彼らは、全員で森に散歩に行くことを表明し、彼、キッキーは、小さいことと一緒に前を走る。奇妙だった——目を閉じさえすれば、その人々の姿は、ペムやメイと同じくらい生き生きとした現実味を帯びるのだ。彼はパッシーの懐かしい香りを嗅ぐことができ、ずっと前に死んだ人々の声を聞くことができ、古くからの理想や笑い声や涙を魔法のように呼び出すことができた。彼は、忘れられていた子供時代の華やかさを思い出し、それは新たな花を付けてもう一度彼の前に生き生きと甦った。やや口の悪い母親は、実際の彼女が持ち合わせなかつたような優しい光で輝き、少年時代のありとあらゆる人々の姿が理想化され、深く愛せるようになった。自分自身の影、少年キッキーさえ、ゴーゴーと改名され、立派なひげを生やした広い肩の若い巨人へと成長した。友人のトム・アームストロングは、カルチエ・ラタンでの昔の学生時代の彼を「青白く、ほとんど血色が悪く、小さな口ひげ以外、顔には毛がなかつた」と描写したが、その小さくて痩せた芸術家は、より大きな実体を持った夢の英雄へと成長したのである。

こうして小説『ピーター・イベットソン』が誕生し、*fin de siècle*「世紀末」ヴィクトリア時代のイギリスの人々に、また大西洋を越え、ロマンティックなヤンキーたちに、大いに愛されることになる。詩人のジョン・マイスフィールドがこう言つたように。「そ

の世代への影響は甚だつた……これほど驚かされ、探究心を楽しませてくれた本を、私はほかに考へることができない」

着想は独特で、物語はもちろん架空のものだった。挑発されておじを殺したことにより終身刑に服している若くて穏やかな主人公兼語り手は、キッキーの想像の産物であつた。しかし、その囚人とタワーズ公爵夫人との夢の邂逅かいこう、彼らの過去や未来への放浪——そこには、中年芸術家自身の無意識の思慕があつた。幸福で満足のいく外面的生活にもかかわらず、彼の中には、まず幼い頃に断ち切られ、次に青年時代に再び結ばれたが、最後には永遠に離れてしまったフランスとの縁、そのような縁を持つ国外移住者としての激しい郷愁が、いっぱいに詰まっていたのである。書きながら、自分が隠された思慕の念だけでなく、どちらの国にも定住せず、パリ・ロンドン間の放浪者であつた不運な亡父のフラストトレーシヨンや、外国の首都で実刑判決に服したémigré「移民」の祖父の苦悩をも、自分の前の紙の上にこぼし散らしていたことに、彼は気づいていなかつた。より美しく知的になつたエマである、ロマンティックに描かれたタワーズ公爵夫人さえ、ピーター・イベットソンの子供時代の遊び仲間かつ血縁者へと変換される必要があり、そうすることで、作家キッキーの、かなり何度も思いを馳せ、ほんのわずかしか知らなかつたフランスの親類縁者たちへの心からの強い

憧憬は、やつとのことで満たされたのであった。

「私の作風を認めてくださって、うれしく思います」キッキーはトム・アームストロングに語った。「苦労はしました、もちろん——極めて楽しい苦労でしたが——そして、今の私は、もっと苦労すればよかつたと思っています。すべてがあまりにも易々と実現され、私は文字で書くよりも絵で描く方がはるかに難しいことに気づきました！これがイギリス国民に受け入れられるかどうかは別の問題です。私としては、『パンチ』の線画家である哀れな人間が、新しい進路^{ライ}でどのように振る舞うかを見たいとう人々的好奇心に、大いに期待したいところです！」

イギリスとアメリカの大衆は、受け入れたのみならずさらなるものを求め、数か月後、キッキーは第二の小説『トリルビー』に熱心に取り組んだ。その人気たるや、作者は一夜にして有名人になつた自分に気がついたといつたほどのものであつた。『トリルビー』は現代的な「ベストセラー」の最初のものであり、センセーショナルな文学的事件であつたが、キッキーは内心では、最初に生まれた『ピーター・イベットソン』の方が良い作品だと感じていた。

今日、『ピーター・イベットソン』に初めて出会つた無頓着な読者は、囚人とメアリーすなわちタワーズ公爵夫人との異様なラヴ・ストーリーを、感傷的で、馬鹿馬鹿しい

ときえ思うかもしない。男と女が、夢の中で逢うだけでどうすれば満足できるといふのか？ ピーター自身はほとんど愚かしいまでの「ロマンティスト」に、公爵夫人はまずあり得そうにないほど利他的な「善人」になつてやしないか？ だがおそらく、作者は理想主義者だったのであり、人生を、自分が知つていたとおりに書いたのではなく、そうなればよかつたと思うことを書いたのであろう。現代の読者が「本当の夢見」を嘲笑する必要もない。本人は知らなかつたにしても、キッキーは時代を先取りしていたのだ。一八九二年当時は、催眠術はまだ曖昧な用語であつたし、テレパシーは未知の言葉だつた。今日の訓練を受けた心理学者なら、『ピーター・イベットソン』を単なるファンタジーとして片づけたりはしないだろう。

キッキーの三番目で最後の小説『火星人』は、その主人公とともに、未知への探求にもう一段階踏み込んでいる。彼は、——作者はうつすらとバーティ・ジョスランに姿を変えて——火星から来た靈によつて幼年期から保護され、導かれている。しかし、キッキー自身は、この本が出版されるのを生きて目にするとはなかつた。

彼は、疲労させられる咳と心臓下部の痛みで、数か月間健康が衰えた状態が続いた後、一八九六年十月八日、六十二歳で亡くなつた。墓碑銘として、ハムステッドの彼の墓には彼がかつて書いた『トリルビー』からの次の二行

我らが死ぬとき、播いた種を刈り取る望みが
わずかにある——だから、さようなら

——があるにもかかわらず、私は彼の孫娘として、『ピーター・イベットソン』の終
わりの方の言葉から文を付け加えたいと思う。同じ思考の模倣である。

「私が知っているのはこれだけだ。すべてのことが私たち全員にとつて良くなるだろ
う、そして、月が欲しくてため息をつくような人でなければ、十分満足するだろう」

ダフニ・デュ・モリエイ

コーンウォールのパーにあるメナビリー邸にて

583 解説に代えて（ダフニによる序文）